
絡まる血

国府神紫音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絡まる血

【Nコード】

N3384G

【作者名】

国府神紫音

【あらすじ】

“血”の力。それは人が思っている以上に強い。どこに居ても何をしても、その力から人は逃れられない。これは、“血”に雁字搦めにされながらも生きていく人々の哀しい物語です。

長すぎるプロローグ（前書き）

このお話でも可哀想な人続出させる予定です（・・・）そういうのが苦手な方はパスされたほうがいいかも。でも読んでいただけると嬉しいですよ（笑）

長すぎるプロローグ

草薙亮輔は、痛む頬を押さえて川を眺めていた。沈鬱な横顔が月光に映えて今にも消えてしまいそうなほどに儚く和音の目に映る。

「痛むの？」

囁くような和音の声にも怯え、亮輔はビクツと大きく肩を震わせた。

「和音、」

亮輔は和音を認めると、サツと顔を逸らした。だが和音は臆することなく彼に近付いて行く。自分から行かなければ亮輔が近付いては来ないことを和音は知っていたから。

「何しに来たの」

平坦な口調だが、細い声は震えていて。

和音の胸をギュツと締め付ける。和音は亮輔の赤く腫れた頬に手の甲を当てた。

亮輔が涙に滲んだ瞳を不思議そうに幼馴染みの少女に向ける。

「痛かったね」

「っ、」

亮輔が和音の手を振り払うが、和音は再び彼の頬に手をやる。

「痛かったね。哀しかったね」

慈愛に満ちた声音に、亮輔の涙腺はますます弛くなる。

「……どうして？」

「え？」

「どうして僕のこと、そんなに気にしてくれるの？こんな僕なんかの、こと……、」

「僕なんか、だなんて言わないで…… 亮輔は私のとても大切な人なんだから」

例え草薙本家から疎まれた忌み児だとしても。

亮輔は和音を何とも思っていないくとも。

「和、音ちゃん、」

亮輔の体から抵抗が消えたのを見計らい、和音は背後から彼を抱き締めた。

亮輔が戸惑う気配を敏感に感じ取りながらも、和音は彼を放さない。
（亮輔は誰にも壊させない……亮輔はずっと私のそばに居るの……）

華奢な体つきと亮輔の息遣いを身体中に感じながら、和音は決意を新たにしたのだった。

「あ、和田貫くんっ！月波知らない！？」

男子寮から出てきた顔見知りの少年に、詠倉月乃は声をかけた。少年、和田貫優は月乃に向けて首を傾げる。
わたぬきすぐる

「伊織？ああ、あいつなら桜庭を待ってるけど？」

得られた答えに、月乃は言葉にならない呻き声を上げた。

「もうちょいで出て来ると思うよ」

優はそう言つて、友人らしい男子生徒と学校に向かってしまった。

（もーう、月波の馬鹿っ！あたしというものがありながら何で桜庭の阿呆を待つものよ……！！）

酷い言いばかりだが、人畜無害な月波に人でなしの権化である桜庭
さくら
尚基を近づけたくないのだ。

（あたしの大事な月波が汚れるじゃないっ……）

それでもやきもきしつつ幼馴染みである伊織月波を待つ月乃。
いおりつきは

「あ、月乃ちゃんおはよう」

ひょっこり姿を見せた幼馴染みはいつも通り愛らしい。ぱっちりしたどんぐり眼に、少し癖はありながらも柔らかそうな栗色の髪。月乃と同じくらいだから身長は160前後。華奢な体つきと雪のように白い肌は昔から全く変わっていない。

「おはよう、月波！！」

思い切り不機嫌そうな顔で怒鳴る月乃を、月波はぱくりと目を見張って見返す。

「つ、月乃ちゃん？何か怒ってる、のかな、」

「別に！さっさと行くよ！」

混乱の浮いた顔をする月波の腕を遠慮会釈なく掴み、月乃はさすが歩き出す。

「つ、月乃ちゃん待つてよ、まだ桜庭君が、」

「あんなの放つとけば良いのよ！神聖な朝の空気が失われるわっ！
！」

「し、神聖……？」

とにかく尚基が姿を見せる前に少しでも遠くに行かなければ。そう思つて俄然早足になる月乃だが、

「こらこら、月波の意志を無碍にすんなつての」

嫌味に溢れた口調で言う男子生徒に、月乃はあからさまな舌打ちを送る。

「さ、桜庭君・・・あまり月乃ちゃんを触発するような言い方は、おずおずと尚基に意見する月波の肩に腕を回し、尚基は豪快にあはははと笑う。

「分かつた分かつた。月波の言うことなら喜んで聞いてやる」

「だ、だから、」

月波がちらりと黙つたままの月乃を見れば、月乃はふるふると握つた拳を震わせて尚基の横顔を睨み付けている。

「あ、あの月乃ちゃん、」

「もう良いっ！！二人で勝手にいちゃいちゃしてたらいいじゃないっ！！」

顔を怒りに歪ませて怒鳴りつけると、月乃は二人の横を物凄い勢いで擦り抜けて去って行く。

「い、いちゃいちゃ・・・？」

何故月乃が怒っているのか、またいちゃいちゃとはどういう意味な

のかが掴めず、月波は混乱した頭を抱えたまま、どんどん遠ざかっていく幼馴染の少女の後ろ姿を見送る。

「全く、詠倉はやっぱり癪癪持ちだよなあ。一緒に居て疲れんか？」

「そ、そんなことないよ。月乃ちゃんは大事な幼馴染だもの」

「ああ、月波は相変わらず犬みたいだなあ」

そんな良く分からない喻えを持ち出される。

「い、犬？」

「あ、学校行こうぜ。遅刻しちまう」

パツと月波の肩から腕を外し、尚基は意気揚揚と歩き出す。月波も慌てて彼の姿を追う。

やっぱり何処か掴めない人だなあ、と月波はそんなことを思った。

草薙亮輔は泣きはらした真っ赤な目をして、バスを待っていた。その彼の背中に掛かる声。

「おはよう、草薙い」

「っ、」

耳元で声を出され、気持ち悪さに亮輔は体を強張らせた。その彼の喉元に腕が後ろから絡み付いてくる。腕に力が込められ、首を圧迫されるのではないかという恐怖に亮輔の心は容易く萎む。

「倉沢君、放して、」

「倉沢君、なんて他人行儀な。昔は翼君、翼君、てウザったいくらいに俺の後を付いて回ってた癖に」

必要以上に亮輔にくつつく倉沢翼という不良じみた少年を、バス待ちをしている人々は誰も諫めない。そもそも殆んど毎朝繰り返される情景のため、今更誰も口を出したりしないのだ。

自分が標的ターゲットになるかも知れないから関わりたくない、というのも理由だろうが、大きな理由はまだ別にある。
それは……………、

「っ！」

翼の手が亮輔の前に伸びてきて、亮輔は持てる力を振り絞って翼を押し退けた。今までの中で一番卑劣な行為に、さすがの亮輔も耐えられなかった。

「なっ、何するんだっ……………！！」

「いやあ、お前のお袋さんて亭主以外の男とも平気で寝るらしいからさ、お前もその血を受け継いでどれだけ淫乱なのかな、ってさ」
ニヤニヤと締めりのない笑みを浮かべる翼に対し、亮輔は思わず後ずさる。その彼を押し止める第三者。

「あ、らいさん……………」

バツチリ化粧を施した顔を歪つに微笑ませた荒井蘭子あらいらんこである。

「淫乱淫乱」

舌足らずな口調。

「翼、はよっス」

彼女は数年前に都会から越してきてから、翼のガールフレンドになった。翼から色々聞き及んでいるのか、亮輔自身のことや草薙本家のことについてある程度の知識はあるようだ。

「よう、蘭子。今日も眠そうだなあ」

「う、余計なお世話だよ、」

翼はもう亮輔のことはどうでも良くなったのか、蘭子との会話に集中し始める。

「……………」

母さんは淫乱なんかじゃない、という言葉が発することができない自分が情けなくて、亮輔はただ一人俯いた。

「あゝ、つとにムカつくつ!!」

教室の自分の机に着くなりバンツと大きな音を立てて鞆を置いた月乃に、親友の鈴宮晶菜すずみやあきながどうしたどうした、と近付いて行く。

「また伊織君を桜庭君に盗られちゃったの？」

「まだ盗られてないっ!!」

「まだ……ってことはいつかは盗られちゃうのね」

ほんわかした笑顔でズバリと揚げ足をとられ、月乃は更にムカツと来る。

「晶菜あつ……!!」

「ふふっ、ごめんごめん。大丈夫よ、伊織君はもともと月乃のものじゃあないんだから盗られるも何もないでしょ？」

今度はズバリと真実を突かれ、ウツと詰まる。

「あ、晶菜こそ例の一年坊とはどうなのよ。あの奥手を2乗くらいした奥手な子は」

「ああ、晃輝君？どうも何もよろしくやってるわよ」

「よ、よろしくって？」

「あつ、月乃今スケベなこと考えてたでしょ？」

「な、そんなわけないでしょっ!？」

「月乃のスケベ」

「だから違うつて!というかあなたは小学生ですか!？」

「晶菜、一年の子が呼んでるよ？」

クラスメートの女子生徒が晶菜を呼ぶ。

「噂をすれば」

後ろの戸口に、小柄な男子生徒が顔を赤くしながら俯きがちに立っている。

晶菜の彼氏である一年生、風井晃輝だ。

(確かに月波みたく顔は可愛いわよ?でも少し……ねえ)

「月乃、ごめんね」

「ん。行つてらっしゃい」

手を合わせて月乃に微笑み、晶菜は嬉しげに晃輝に歩み寄っていく。晶菜が話しかけると、緊張に強張っていた晃輝の顔に微かな笑みが広がる。

（仲が良くて結構、）

いつのまにか尚基への怒りは薄れてしまい、月乃は大人しく椅子に座った。

（あたしだって、月波と、）

彼氏彼女の関係になりたい……のだと思う。

「月波はそんなことないんだろっな……」

悲しげに呟き、月乃は机に突っ伏した。

月波が尚基と下駄箱に着くと、ある一人の女子生徒に話しかけられた。

「君が伊織月波君？」

「え、あ、はい」

艶のある長いストレートの黒髪が整った顔を小さく見せる。

「直接口をきくのはこれが初めて、だね」

「あ、」

いつも生徒総会などで壇上に立ち、ハキハキと議事を進行させる人だ、と月波は思い当たった。

「せ、生徒会長さん？」

名前は確か、添山和音。

「そうだよ。三年D組、添山和音です……今時間良いかな？」

壇上の凛とした態度とは違い、目の前の和音は優しげに微笑んで親しみやすさを醸し出している。

だからその雰囲気吞まれ、言葉を交わしたことなどないのに月波

は素直に頷きそうになる。
が、

「悪いけど、忙しいんだよ。添山和音先輩？」

ずっと黙って月波の横にいた尚基が急に口を挟んで来た。

「あなたは？」

「桜庭尚基。こいつのダチ」

矢継ぎ早に自己紹介をした尚基は、いきなり月波の腕を掴んだ。

「え、えっ？」

戸惑いの声を上げる月波。「桜庭君、どうしたの？い、痛いよっ」

「さっさと教室行くぞ」

彼にしては珍しく苛立ったような口調に、月波は益々どうしたのかと怪訝に思う。

「・・・・・・・・・・」

月波が和音を伺うと、彼女は優しげに微笑んだまま月波と尚基を見送っていた。

亮輔はバスに乗っている間中、母親のことを考えていた。

（淫乱）

倉沢翼に言われた言葉がずっと脳裡を巡る。はっきりとそれを否定できなかった自分が齒痒くて仕方ない。

（母さんは淫乱なんかじゃない、）

だが口に出してしまえば、自分もそれを疑問視してしまうことは想像に難くなかった。

『亮輔、お前の母親は死んだんだ』

父親の言葉が蘇る。

その言葉を告げられたのは、亮輔がまだ中学一年生の頃でまだ家のことも自分のことも殆ど聞かされていない時分だった。父の居室に呼ばれ行つた矢先に告げられた言葉に、亮輔は虚を突かれた顔をしてしまった。何故なら母親は存命で、その日の朝も会話を交わしていたからだ。『と、父さんどういうこと？だつて母さんとは今朝も、』

『……あれはお前の本当の母親ではない』

『な、んで』

どうしてそんなことを言うのか亮輔には全く理解出来ない。だが父親は詳しい説明をしてはくれず言う事を聞けと厳しい口調で言い放つて亮輔を突き放した。

(……父さんはきつと母さんが色々な男の人と寝たと思つてゐるんだ。母さんはそんな人じゃないのに、)

父から母親は死んだと思えと言ひ聞かされた日から、母親は本家ではなく分家に幽閉される形となり、亮輔と彼女は離れて暮らすようになった。

そしてそれから数年後に父親が病で死に、亮輔はおじの家に世話になつてゐるのだが、

(……つ、)

昨日も酔つたおじに手を出され、頬を打たれた。哀しくて痛くて、そしておじが恐くて我武者羅になつて外へ飛び出してあの川の傍まで走つた。

遣る瀬無い気持ちで川を眺めていると、和音が声をかけてくれて、

(和音ちゃん、)

昨日の和音の思ひつめたような目が亮輔は気になっていた。今朝も早くから学校へ向かつたらしい。

(……なんだろう、凄く嫌な予感がする)

亮輔の耳に、自分が降りるバス停を告げるアナウンスが飛び込んで来た。

「さ、桜庭君痛いよ、どうしたの一体っ」

教室の前まで来てようやく尚基の足が止まる。

「あ、悪い。そんなに強く握ってたか？」

和音と会話をしていたときの不穏な気配は微塵もなくなり、いつもの尚基に戻っている。キョトン、としている月波を背に、尚基は意気揚揚とドアを開ける。

（なんだっただろう、さっきの桜庭君。凄く怒ってるように見えただけ、）

ただ単に虫の居所が悪かったのだろうか。月波は内心で首を傾げながらも尚基の後に続いて教室に入る。

このときの違和感を、月波はこの日の放課後まで持ち越していたが、尚基の様子は一日普段のままだったので、次の日にはすぐ忘れてしまった。

月波は知らなかった。

和音と尚基の関係が自分という存在にどれだけ大きく関わっているのかを。

そしてどれだけ関わっていくのかを。

このときのこの違和感を尚基に問い質していれば、もしくは和音に問うて居ればこの先にある“悲劇”は防げたのかも知れない。

だがそれを知るのはまだずっと先の話で。

月波はまだ、“日常”の中にいた。その“日常”がいとも容易く崩れ去ることも、知らずに。

「亮輔、おはよう」

「和音ちゃん……おはよう、」

依存すべきではないと分かっているのに。

いい加減一人で立たなければいけないのに。

幼馴染の少女の笑顔はとも心地よくて。

亮輔のこの“甘え”が目の前おの少女を墮おとすことになるなど想像もせず亮輔もまた“日常”に埋没していく。

“日常”はあまりにも心地よいから。

「頬つぺたの腫れ、引いたね」

自分のことのように嬉しそうに言ってくれるのが嬉しくて、でも少し哀しくて。

「うん。もう大丈夫みたい」

泣き出しそうになるのを堪えるので精一杯だった。

嵐の前

「月乃ちゃん、まだ怒ってるの？」

「怒ってない！」

翌日、月乃と月波は並んで登校している。尚基の姿がないのは、彼が氣を使ったからではなくただ寝坊したからである。さすがの月波もそんな理由で尚基に付き合っただけ遅刻したくはない。早足の月乃に一生懸命付いていく。

「月乃ちゃん、」

「だから怒ってないってば……っ!!」

月乃がいきなり月波を体ごと振り返り、足を止める。

「月波」

「な、何……？」

「一体何を言われるのか。」

「あ、あの、ね」

心なしか月乃の顔が赤いような気がして、

「うひゃいつ!？」

彼女の額に自分の額を当ててみたら頓狂な声が出された。びっくりして慌てて離れる。

「な、何してんのよ、いきなりっ!」

「だ、だって月乃ちゃん顔が赤いから熱でもあるのかなって、」

「だ、だからっついていきなり、」

月乃は更に顔を赤くすると、月波を置いて猛ダッシュで走り去る。

「ぼ、僕変なことしちゃったのかな、」

昔は普通にしてたことなのに、と不思議に思っていると後ろからクスクス、という軽やかな笑いが聞こえてきた。

「伊織君、ダメだよ？月乃だって立派な女の子なんだから」

クラスメートであり月乃の親友である鈴宮晶菜がいた。

「あ、鈴宮さん」

「もしかして伊織君で自覚なしなのかな？ねえ、晃輝君？」

晶菜が傍らにいた男子生徒に話を振る。

「えっ、あ、」

虚を突かれ、風井晃輝は顔を赤くしてどもる。

月波と同じくらいの体格で同年代の男の子に比したら小柄な方だろう。少し癖のある自分の髪とは違い、さらりとしたストレートの黒髪がちよつと羨ましい。

「な、なんでぼくに振るんですか、」

「あれ、そんなに難しい質問だった？」

「そ、そういう問題じゃなくて……、その、ぼくといつと、」

「あ、伊織月波と言います」

「い、伊織さんとは接点がないわけだし、伊織さんのこと全く知らないし、だからそんなぼくに振られても、」

「要するに分からないのね？」

しどろもどろながらも一生懸命に説明しようとする晃輝を、晶菜はあつさり一蹴する。晃輝はうう、と呻くが晶菜との掛け合いが楽しいのか口端は微かだが上向いている。

「ああ、月乃も苦労するなあ、」

「？」

よく分らない。疑問符を浮かべる月波に、また別の声が掛かる。

「伊織月波君、おはよう」

生徒会長の添山和音だった。

「うわっ、寝坊した、遅刻するっ……！」

あまり真面目とはいえない尚基だが、遅刻だけは絶対にすまいと心に誓っている。

（昔の夢を見たせいだ、くそっ）

齒痒さに頭をかきむしりながらも、尚基は支度をするためベッドから飛び出す。だがその拍子に、机に立て掛けていたものに足先が掠めてしまう。

「いけね、」

それは董色の袱紗ふくさに包まれた細長いものだった。

（兄貴の遺品だ……大切に扱わないと、）

だが手に取るたびに兄が自分を撫でてくれた時の優しい手付きが思い出されて、尚基は胸が痛む。

（くそっ）

尚基は指先でそれを取り、ゆっくりと机の上に置く。

『尚は良い子だね』

何故あんなに出来のいい兄が死んで、出来損ないの自分なんかが生きてるんだろ。尚基はそう思っていたし、今も思っている。ただ少しだけその想いは薄れ、生きる意味を見い出しつつある。転校先である此処で、月波と出逢ったから。

何処か兄の面影のある穏和な笑顔を見た瞬間、尚基は言い得ぬ感覚に捕らわれたものだ。

（感慨に耽ってる場合じゃねえな。急がねえと）

尚基は内心で自分を急かしながら、支度を始めた。

「あ、あの……お話って何ですか？」

添山和音に連れられて学校に来た月波は、彼女に促されるままに屋上に来ていた。

「此処なら良いわね」

和音は小さく呟くと、月波を振り返った。

「あなたにお願いがあるのよ。伊織月波君。昨日はお友達がいて言えなかったけど、」

「……はあ、」

お願いとは何だろう。和音のようにきちっ、とした人が昨日初めて言葉を交わした人間にするお願い、とは。

「君に、私のあとをついで欲しいの」

「ふえ？」

「君に生徒会長になってもらいたいのよ」

それは予想の範囲を遥かに越えたお願いだった。

それを立ち聞きする影が二つある。

「エライこと言い出したな、」

「だね」。あんななよった子に生徒会長なんて無理無理無理」
気の無い口調で相槌を打つのは荒井蘭子である。

「何を考えてるんだ、添山は、」

「ん、翼。誰か来るよ、」

蘭子が目敏く階段を上がって来る足音に気付いた。翼のシャツの裾をクイツと引っ張って来る。

「あ、」

「亮輔、」

いつものように鬱々とした亮輔が、自分の向かう先に翼と蘭子がいることに気付いたらしい。さっとその顔に怯えが走り、階下にとつてかえそうとする。

「待てよ！」

「な、何……？」

「お前のその態度、ホントどうにかなんないわけ？」
「……………」

目を逸らされ、言い様の無い苛立ちに襲われる。

気付けば亮輔を壁に押さえつけていた。

「い、痛いよ、」

「ム力つくんだよ、お前。その終始相手の反応を伺うような態度。びくびく怯えやがって、苛つくんだよ!!」

怒声に亮輔がビクツと身体中を震わせる。

「翼、何熱くなってるの?」

蘭子の眠たげな声も意識から締め出す。

「ごめ、ごめん……ごめ、」

「!」

亮輔の体から力が抜け、床に沈みそうになるのを慌てて支えようとする。だがその拍子にシャツの長袖が捲れた。そして、

「これは、」

「ん、こりゃあ、」

白く細い腕の処々に、小さな円形をした火傷の痕があり翼も蘭子も目を丸くする。

「ごめんなさい、ごめんなさい……おじさん、許して、許して、ください……」

ぼろぼろと涙を溢しながら此処にはいない人物に謝罪する亮輔を、翼は半ば呆然と見下ろす。

その時、

「亮輔に何してるの?……!!」

憤怒に満ちた声が階上から降ってきた。見上げれば、添山和音と見知らぬ男子生徒が翼たちを見下ろしている。

「亮輔、」

和音は早足で階段を降りてくると、ガタガタと小刻みに震えながら踞る少年にいきなり抱きついた。

「……………」

すると怯えていた亮輔の顔が一齐に安堵の表情にとって変わったのである。翼たちの視線は意に介さず、和音は亮輔の背中を優しく上下に擦る。

「亮輔、もう大丈夫よ？私が来たから、もう何も心配は要らないの」
「……ず、ね、和音ちゃん……、和音ちゃん、怖かったよ、怖かったよっ」

「ごめん、ごめんね。もう大丈夫だからね。だから泣かないの。ね？」

幼児退行、という用語が翼の脳裏を掠める。

「亮輔、歩ける？安全な場所に行こうね」

亮輔はこくりと素直に頷き、和音に支えられながら立ち上がる。

「伊織君も行きましょう」

状況についていけていなかった男子生徒が我に返って頷き、和音のあとに続く。翼の視線に気付き、小さく会釈する。

（……？）

一瞬その男子生徒が誰かの面影と重なり、翼は眉を潜めた。だが誰と重なったのか分かる前に彼の姿はいなくなってしまった。

「あれ、煙草を押し付けた痕、だよな」

返事が欲しかった訳ではない。ただ自分の中で認識したかっただけだ。それを分かっているのか、相槌を打つのが億劫なだけか、蘭子は何も言わず翼のそばに佇んでいた。

尚基が下駄箱に着いたのは、予鈴の鳴る五分前だった。

（うつ、気持ち悪……）

久しぶりに激走したせいかな、出掛けに慌てて摂った朝食のパンが戻りそうになっていた。

それでも上靴に履き替え、教室を目指す。

（こんな日に限って朝から体育なんだよな……最悪だ……、）

尚基はぶつぶつと悪態を吐きながら二階へ階段を上る。

「では先程の件、考えておいてね？」

（この、声っ、）

まさか、と思い尚基は上る足を駈け足に変えた。

「あ、桜庭君」

月波が笑みを浮かべて尚基を認めるが、尚基の目は遠ざかる背中を追っていた。顔を見なくても、和音が満足げに微笑んでいるのは分かる。それが腹立たしくて、尚基は眉を顰めた。

「桜庭君？先輩が、どうかしたの？」

月波の不思議そうな声に、尚基は我に返った。自分を見上げてくる純粹そうな瞳に初めて居心地の悪さを感じた。

「あいつ、何だって？」

「う、うん。僕に後を継いで欲しいって」

「は？」

考えていたものとは違ったから、少し気が抜ける。

「後？」

「生徒会長になって欲しい、んだって……」

月波には似つかわしくないポストだな、と尚基は素直にそう思った。

「なんでまた」

「ぼ、僕にもよく分からないんだ。どうしてですかって訊いても、あなたが適任だからとしか言ってくれないし、」

心底困惑しているのが分かるくらいに月波は垂れ眉になる。何だか自分が苛めているような気がして、落ち着かない。

「……………」

それになにより、和音の意図が読めないのが気にかかる。てっきり

“あの家”のことだと思ったのだが。

「で、なるわけ？」

尚基が問うと、月波は大慌てで首を左右に振る。

「ま、真逆。桜庭君も知ってる通り、僕は生徒会長だなんて器じゃないもの」

「……………」

「でも、どうして僕なんだろう。沢山相応しい人がいるのにね」
それは尚基にも不思議でしょうがない。そして何故“生徒会長”なのか。

（何だ、あの女は何をしようとしている………？）

添山和音が何らかの思惑を持って月波に近付いてきたのは感覚で理解しているのに、彼女が具体的に何をしたいのかが掴めない。

「桜庭君、顔色悪いよ？大丈夫？」

「……そういや食ったばかりなのに走ってきたから、」
気持ち悪くなっていたのを思い出した。

「桜庭君？桜庭君！！」

眩暈を感じて蹲ってしまった尚基を、月波の悲痛な声が呼んだ。

「ねえ亮輔、もう少しだからね」

校医が所用で校外に出て誰もいない保健室。

和音と亮輔は一時間目の授業を出ないことに決めて保健室にいた。
だが亮輔は眠りについており、和音はその様を静かに見つめている。
ドアには中から鍵をかけているから、誰も和音と亮輔の邪魔は出来ない。
違う、させないのだ。

「あなたを助けられるのは、私だけ……必ずあなたを助けるから。だから、もう泣かないで」

涙の跡が残る頬を、優しくそつと撫でる。そして亮輔に涙を流させた存在を憎む。

（あの大酒のみのろくでなし……いつか痛い目を見せてやる）
普段は使わない荒々しい調子で、和音は心に誓う。亮輔にたくさん痛い想いをさせてきたあの男を必ず潰してやると。

だがその前に、

（まず亮輔に代わる“器”を見つけないと、）

検討はつけている。ただ、“彼”は様々な存在に守られていることを和音は悟っている。その存在には人間もいれば、人間ではない“もの”も居る。それらを排除してからでないと、“彼”は和音の手中には入らない。

（でも私は決めたの。何を犠牲にしても、私は亮輔を守ると。私が、亮輔を守るのだと）

この世に存在する、亮輔を傷付けんとするもの全てから彼を守るのだ。だから、少しの犠牲はやむを得ない。ただ、

（・・・あの子の友人らしき、男子生徒が気がかりだな）

和音を見る目は厳しかった。あれは何かを知っている目だ。知っていて、和音を敵視している目だ。

一体何者なのだろう。亮輔のことも知っているのだろうか。

（調べておく必要があるわね）

自分と亮輔の未来を閉ざす可能性のある存在は、一つ残さず潰しておかなければならない。二人の、平穏な未来のためならば多少の犠牲は厭わない。

「亮輔、必ず私が、あなたを」

その先を口にすることはせず、和音は眠りつつける少年の唇に軽いキスをそつと落とした。

「添山の小娘が？」

私立浄命学院理事長、草薙緒爪は副理事長の言葉に読んでいた書類から目を上げた。鋭い目が自分を睨み、小心者の代田修二郎は自分が怒られたわけでもないのに震え上がってしまう。

「は、はい」

「ふうん。あの雌ギツネ、今度は一体何を考えているのやら……」

「さ、さあ」

緒爪の注意は完全に書類から別のことに移っているようだ。

「代田」

「は、はい」

「伊織月波という生徒を調べろ……雌ギツネが執着するくらいだ、何かある」

代田は何度も首を縦に振り、いそいそと理事長室を出ていく。

（さあ、どうやって亮輔を手中におさめるのかな……？ 添山和音）
これからやって来るであろう“荒波”を思いながら、緒爪は年老いた顔に不気味な笑みを浮かべたのだった。

揺れ始める日常

何だってこんなことになったのかしら、と添山和音は亮輔と伊織月波が親しげに話す光景をぼんやりと眺めていた。

ガチャガチャとドアを開けようとする音に、和音はパツと亮輔から唇を離れた。誰かが保健室を利用しようとして来て開かないドアに苛立っているのだろう。和音は鼻を鳴らす。

（校医不在の札が下がっているだろうに、）

鍵を開けるつもりは毛頭なかった。さっさと諦めてくれないだろうか、と和音が思い始めた瞬間、

「あ、あの、誰かいないですか？」

今にも泣き出しそうな声がすりガラスのドア越しに和音の耳に届いた。

（今の声は、）

「と、友達が倒れて、」

（伊織君……？）

そう認識した和音は知らず知らず立ち上がり、鍵を開けてしまっていた。

「あ、」

うつすら涙の浮いた大きな瞳が、和音を認めて安堵に歪む。

「伊織君、どうしたの？」

彼は引き摺るように、他人を連れていた。意識がないのか、その人物はぐったりしてぴくりとも動かない。

（この子、）

和音を敵視している少年ではないか。一体どうしたというのか。「顔色が悪いわね」

「ぼ、僕と話してたら急に倒れて、どうしていいか分からなくて、
兎に角此処まで、」

不安そうな瞳が和音を見上げる。亮輔と似通った瞳に、和音は居心地の悪さを感じた。

「……残念だけど、今日校医は外出よ。顔を出すのは早くてお昼を過ぎると思うわ」

だからといって保健室を和音が占領できるわけではなく、具合の悪い生徒を追い返す権限もない。

(……仕方ないわね、)

和音はぐったりしている少年を支えてやる。

「せ、先輩、」

「入って。ベッドで寝かせてあげましょう」

これは月波のためでも具合の悪い少年のためでもない。“後々”のために“恩”を売っておくだけだ。そう思い込ませる。

「あ、ありがとうございます」

「ただ静かにね。さっきの、草薙亮輔って言って私の幼馴染なんだけど亮輔も寝てるから」

月波は嬉しげに緩めた頬を引き締め、和音を見上げながら素直に頷く。

「……よし、」

二人で協力して少年をベッドに寝かせる。一瞬眉を不快げに歪めたが、目が開くことはなかった。

「桜庭君、大丈夫かな、」

不安げに月波が少年の名を呟く。

「この子、桜庭っていうの？」

その名字に、記憶の一部が刺激されたような感じがした。桜庭。つい最近にも聞いたような名字だが、何処で聞いたのだったか。

「あ、はい。桜庭尚基君です、」

真正直に下の名前まで教える月波。

「そう、桜庭尚基……」

何処だ？何処で耳にした？

それを思い出せば、少年が自分を敵視する理由が分かるかも知れない。

「あの、先輩」

「え、何？」

「えつと、草薙・・・さん？何処か具合悪いんですか・・・？」

戸惑いの浮かぶ瞳に、他人を労わる色加わる。

「・・・ちよつとね、疲れてるだけよ」

嘘ではない。父親を亡くし、母親を本家に“人質”に取られ、厄介にならざるを得ないおじの家ではいわれのない暴力を振るわれ。

そんな劣悪な環境で心が休まるわけがない。

「そつ、なんですか、」

月波が気遣わしげに亮輔を見つめていると、

「・・・んう？」

月波の視線にあてられた訳ではないだろうが、亮輔が薄つすらと目を開いた。

「あ、」

月波と起き抜けの亮輔の目がバチツと合う。

すると亮輔はいきなり上体を起こすと、掛け布団を胸に掻き抱いた。

「え、あ、あの、」

「だ、誰・・・？」

この怯えようは何なんだ、と流石の月波も啞然となる。

そして更に彼を啞然とさせる光景が目の前に広がることになる。

「・・・・・・亮輔、」

毅然とした態度が印象に残る和音が、慈愛に満ちた笑みを浮かべて、怯える亮輔の頭をそつと優しく包み込んだのである。

「大丈夫よ。この子は・・・伊織月波君はあなたを傷付けないから」

「・・・本当？和音ちゃん、」

迷子になった幼子のように、不安と怯えの入り混じったような口調で亮輔が和音に確認を取る。

「本当よ。亮輔、私を信じて」

こくり、と和音の腕の中で亮輔が小さく頷く。

「・・・・・・・・・・」

その光景を、月波は目をまん丸にして見守っていたのだった。

そして、

（まさか亮輔が初対面の人間にこんなに早く慣れるなんて、）

その事実には驚くと同時に、“都合が良い”と思っている自分もいる。

「あ、僕も好きですよ、その小説」

「本当？あまりそう言ってくれる人いなくて。・・・なんだか嬉しいな」

今二人は本の話をしている。

和音も読書は好きだが、敢えて会話には加わず、亮輔と月波の様子を観察していた。そして時々ベッドで眠ったままの桜庭尚基を見遣る。

（彼が起きる前には此处を出たい・・・もしくは伊織君に教室に戻ってもらうか）

しかし桜庭尚基が起きる気配は一切ない。

和音はもう少し近くで彼の様子を見ようと椅子から立ち上がった。

（・・・顔色の悪さは・・・、大分払拭されたみたいね。脈は、）
そつと脈を診ると、平常だ。遅くも早くもない。唇の色も良好。口呼吸も平常。起きるのは時間の問題か。そろそろ一時間目も終わるし、亮輔と此处から退散したほうが良いかも知れない。

そう結論を出して亮輔のそばに戻ろうとした瞬間、和音の耳が桜庭尚基の微かな寝言を捉えた。

「……にき、」

（にき？）

何だそれは、と和音が眉を寄せた瞬間、

「……行かないで、兄貴……」

今度はハッキリした寝言だった。その切羽詰った内容と声の調子に、和音の胸が跳ねた。

（和音ちゃん、助けて、）

亮輔が自分に助けを求める時とよく似た調子だったから。それに、

（兄貴……？）

桜庭尚基には兄がいるらしい。

桜庭……兄弟。

（……？）

また記憶の箱を何かが掠めた気がした。

記憶力は良い方だと自負しているだけに、この分かりそうで分からない状態というのが酷く歯痒い。

「亮輔」

「和音ちゃん？」

「そろそろ一時間目が終わるわ。教室へ行く準備して」

「で、でも、もう少し伊織君とお話してたい、」

「良いから早く言う通りにして!!」

思わず怒鳴ってから、しまったと臍を噛む。亮輔も月波も目を見開いて和音を見返している。

「ご、ごめん、」

先に目を逸らしたのは亮輔が先だった。哀しげに俯き、ゆっくりとベッドから出る。

（……余り伊織君と慣れ合わせない方が良い。きっと、後々後悔することになる）

二人の未来の安寧のためには、心を鬼にする必要もあるのだ。

和音はそう言い聞かせ、もう少しなら良いけど……と言いそうになる自分を押さえ込む。「伊織君」

「は、はいっ」

「私たちは先に出るから、鍵は預けるわ。悪いけど、あなたたちが退出する時に教務室に返しておいて。添山の代理と言えば分かってもらえるから」

「あ、はい」

和音はもたもたと制服を調える亮輔を最後まで待たず、一人で保健室を出て行く。兎に角早く此处を出たい。桜庭尚基が起きてしまう前に。

「じゃ、じゃあ伊織、君。またね」

「あ、は、はい」

亮輔が月波に弱々しい微笑を送って和音の後を追った。

今まで四人いた保健室には、半ば呆然としている月波と、ベッドで未だに眠ったままの尚基の二人が残された。

「か、和音ちゃん、何怒ってるのさ、」

「怒ってる？私が？」

和音は不気味すぎるほどにっこりと微笑んで、和音は亮輔を見遣った。

「私の何処を見たらそういう発想が出てくるのかしら？亮輔？」

「……やっぱり怒ってるじゃないか」

「……聞かなかったことにしてあげるわ」

「は、はい」

おじとは違う意味で和音のことが恐くて、亮輔は頷くしかなかった。

「伊織君、来なかったねえ」

鈴宮晶菜がのほほんとした口調で事実を指摘する。対して月乃はぶつすつと頬を膨らませて晶菜を睨み付ける。

「どうして私を睨んでるのか、納得の行くように五百字の文章にまとめてくれない？」

「……君はどうしてこんなのが好きなの？」

君、とは何故か二年生の晶菜たちの教室にいる風井晃輝のことである。相変わらず顔が赤く、自信なさげに俯きがち。

「え、ど、どうしてだなんて言われても、」

「私に敵わないからって、晃輝君にあたるのは止めてくれないかな？」

「ケチ」

「ケチ？私の何処がケチなのか納得の」

「ああ、もうごめんって！！あたしが悪う御座いましたよ……」

「分かれば良いのである」

「あ、晶菜さん……言葉遣いが変です、」

「晃輝君？何か仰って？」

晃輝は必死に首を左右に振る。どうやら晶菜が恐いのは月乃だけでなく晃輝も同じらしい。

「そう言えばさあ、二人が付き合うようになった経緯知らないんだけど、中学から付き合ってるんだっけ？」

何気なく振った話題のつもりだった。だがその瞬間、晃輝の赤かった顔が一気に蒼白になり、この話題が地雷であったことを知った。

「……晶菜さん、」

心細そうに呼ばれた当の本人は、そつと晃輝の震える手を握った。

手の震えはそれだけで収まった。

「月乃、ごめんけどそれは丸秘よ」

口調は軽やかだが、目は何処か泣きそうで。

「わ、分かった」

月乃は素直に引き下がるしかなかった。

「と、いうわけでもう二時間目が始まっちゃうわね！体育の後の数
学ってすつごく面倒だけど頑張ろう」

「ぼ、ぼく教室戻ります、」

「うん。またお昼ご飯でね」

晃輝ははい、と頷いたがその顔は哀しげだった。

桜庭君、起きないなあと月波は思った。

二時間目が三十分を過ぎても、尚基は目覚めなかった。自分は授業
に出れば良いのだろうが、尚基を放っておくことが出来ず結局保健
室でまんじりともせずに彼の様子を見守っていた。

（月乃ちゃん怒ってるだろうなあ・・・）

でもサボりたくてサボったんじゃないって、言えば分かってくれる
よね・と月波は思い込むことにする。

「桜庭君？」

トントン、と肩を叩いてみても尚基は一切反応を寄越さない。流石
に死んでいるわけではないだろうが、ぴくりとも動かないので急に
不安になってきた。

「桜庭君・・・疲れてるのかな、」

「ん、」

「！桜庭君？」

ようやく気付いたのか。月波が見守っていると、尚基が気だるそうに開眼した。

「……此处、何処？」

「保健室だよ？……桜庭君？僕が誰か、分かる？」

尚基がぼんやりとした目で月波を見上げる。焦点が自分に合って、月波はホツとしかけるが、

「兄貴、じゃないのか……？」

「え？」

「……あ、月、波か」

尚基はばつが悪そうに月波から目を逸らす。

「あ、あの、具合……どう？」

「……俺、どうしたんだっけ」

上体を起こし、尚基は頭をポリポリと掻く。覚えていないのか。

「朝、教室の前で急に倒れたんだよ。貧血？」

「……で月波がその小さい体で運んでくれたって訳？」

「かなり引き摺ったけどね……」

月波は苦笑いを浮かべ、

「でも此処には添山先輩がいて、ベッドに桜庭君を上げるのを手伝ってくれたけど」

「添山だと！？」

「え！？」

尚基が自分のほうに身を乗り出してきたので、月波はびっくりして仰け反る。

「さ、桜庭君……？」

「月波」

「な、何？」

「悪いことは言わねえ。あの生徒会長には近付くな。声を掛けられ
ても無視しろ」

いきなりそんなことを言われても訳が分からないし、納得も出来ない。
い。

「どうしてそういうこと言うの？ 添山先輩、いい人だよ？」

「良いから俺の言う通りにしろよ！ あいつは危険なんだ！！」

「そ、そんな言い方しなくなつて良いじゃないか。桜庭君どうしたの？ 添山先輩と知り合いなの？」

「！そ、それは、」

尚基は言い難そうに唇を噛む。月波は彼が何を言うのかをじつと待つ。

真摯なその瞳に、尚基はつい話してしまいそうになる。頑なな彼にそうさせてしまいそうな“何か”が月波にはあった。でも、

「………何でもない。俺が言いすぎた」

「嘘。何にもない、なんて顔してない。今、桜庭君は何かを呑みこんででしょう」

鋭い。尚基はウツと詰まる。

「ねえ、桜庭君。本当のこと言つてよ。添山先輩と知り合いなの？ 先輩が危険つてどういうこと？」

月波にしては珍しく矢継ぎ早に言葉を重ねてくる。

逃げられないのか、と尚基が観念しかけた矢先、

「あら、君たち急患？」

ドアが開いて白衣を引つ掛けた女性が入ってきた。保健医の遠山恭子である。

「先生、」

「もしかして怪我？」

「い、いえ。桜庭君が、倒れて、」

「まあまあ、そう言えば君顔色悪いものね」

遠山は目を丸くしながら近付いてきて、尚基の顔色の悪さを指摘してきた。それでも倒れた直後よりはマトモになったのではあるが。

「君は付き添い？」

月波に訊いて来る。

「はい」

「ならもう教室に戻りなさい。今日は一日外出予定だったけど、色

々あつてねえ。もう構内にいるから、此処は私に任せて」

「で、でも」

「良いから良いから。お友達が心配なのも分かるけど、授業も大事だからね！」

遠山に押されるようにして、月波は保健室を出て行かざるを得なくなる。尚基と目が合うが、尚基はふいと逸らしてまたベッドに横になってしまった。

月波は目を逸らされて胸の痛みを感じたが、言葉を交わすことなく遠山によつて保健室から追い出されてしまった。

「先生、助かった」

「？」

不思議そうな遠山に軽く微笑んで、尚基は燦っていたまどろみに身を任せた。

“過去”を忘れるかのように。

揺れ始める日常（後書き）

鈴宮晶菜と風井晃輝は別に考えている小説の主人公と準主人公です。この二人がカップルにいたるまでのお話も書けたらいいなあと思ってますが、構成が滅茶苦茶なのであくまで理想論です 笑 書く時は恋愛要素入りますが、普通の恋愛小説ではなくなるので、ご了承ください。私には恋愛だけのお話はかけません 笑

願いと過去と予兆と（前書き）

まだ平穏な日常は続いている……

願いと過去と予兆と

・・・憧れていた。

空を自由に飛ぶ、あの白い鳥に。

誰にも縛られることなく、誰に囚われることなく、軽やかに空を飛ぶあの白い鳥に。

自分にもあんな翼があれば良いのに。

そうしたら、自由に飛び立てるのに。

この、古い因習に囚われた狭い閉じた世界から。羽ばたけるのに。

「！！！」

草薙亮輔は、後頭部に軽い衝撃を受けて目を覚ました。慌てて顔を上げれば、日本史教諭の益田が厳つい顔を顰めて亮輔を見下ろしていた。

「俺の授業で居眠りとはいい度胸だな、草薙」

「ご、ごめんなさい、」

顔を真っ赤にしつつ俯きがちに謝る亮輔の耳に、クスクスクスという彼を嘲^{わら}うクラスメートたちの声が届く。

「・・・草薙、一時間目も授業をサボったと北郷先生から聞いたぞ」

北郷、とは亮輔のクラスで英語を教えている新任教諭だ。若いがハキハキした女性で、亮輔が苦手とする人である。

「そ、それは、」

上手い咄嗟の言い訳など出てこず、亮輔は項垂れる。

「理事の耳に入れても良いのか？」

亮輔の言い訳を待っていたが、それが無いことを知った益田は亮輔が一番忌避したいであろうことをさらりと言って退けた。瞬時に亮輔の顔が赤から蒼へ変化する。

ガタツと大きな音を立てて椅子から立ち上がり、

「先生、それだけは・・・！大叔母様にだけはっ、」

理事、草薙緒爪は亮輔の大叔母にあたる。毅然とした老齡の女性で、今もまだ草薙家に対して絶大な発言力を誇る一族の重鎮である。

高校生にして当主である亮輔に辛くあたるため、亮輔は彼女が恐かった。

亮輔が不甲斐なさ過ぎるのが原因だとは分かっている、緒爪の亮輔に対する態度や行為は見る人によっては既に折檻の部類に入りかねないほどに酷いと思う。

「分かった、理事には言わんからちゃんと起きて勉強してくれ、」

亮輔は何度も必死に首を縦に振り、慌てて板書の内容をノートに写し始めた。

その頃、保健室で再び眠りに落ちた桜庭尚基は夢を見ていた。

今もはつきりと思い出せる、“兄が純粋な人間ではない”と知ったときの出来事を。

兄の背中からいきなり生えてきた、二対の純白の翼。

陽光の中でヒラヒラと舞う羽は、酷く幻想的で。

でも、兄の背中に翼が生えたのは紛れもない現実で。

『ああ、尚。僕はついに化け物になってしまったよ。・・・それで

も、まだ僕のことを兄と呼んでくれるの？」

そんなの愚問だった。翼が生えようが額に第三の目が出現しようが、大好きな兄であることに変わりはないのだから。

兄貴と一緒に穏やかに過ごせれば、笑っていられたら、それだけで十分だった。

なのに、周りはそうさせてはくれなかった。

『尚、逃げて……』

苦痛に歪んだ顔。苦しげに吐き出された言葉は、尚基を逃がそうと
していて。

『居たぞ……！』

『お兄ちゃんっ……！』

『良いから早く逃げるんだっ……！』

尚基は兄の剣幕に圧され、逃げ出した。炎が尚基と兄の間を隔て、
荒れ狂う業火の中、兄はにつこりと微笑んで、

『さようなら。尚……しっかり、生きるんだよ』

それが、遺言になった。

兄の身柄は拘束され、体の中を弄られた。好き放題弄ばれ、茶毘に
付された。

『化け物には死を。その概念の、何が悪い』

兄の無惨な死に打ちひしがれる尚基に、ある男は言った。

兄の遺品である刀を無造作に尚基に押し付け、にやにやと締りのな
い笑みすら浮かべて。

『貴様の兄は化け物だった。この日の本にあつてはならぬ存在。だ
から、茶毘に付しただけだ。悪く思うなよ、ブラコンのアマちゃん』

どんな侮辱の言葉にも反応しない尚基に見切りをつけ、男は詰まら
なそうな顔になって去って行った。胸の悪くなるような陰鬱な含み
笑いをしながら。

白い羽。

綺麗だと思った。

どうして兄に生えて、自分にそういったことは起こらないのか不思議

議だった。

桜庭の家系にはそういった“変異”を顕現させる人間が多かったから、兄も遺伝だったのだろう。

どうして、兄だったのだろう。どうして、出来の悪い何の役にも立たない自分なんか普通に生きているのだろう。こうして普通に学校に行ったり勉強をしたりするのは兄の役目だったのではないだろうか。

頭がよくて、温厚で、人望のあった兄。

どうして、その兄に翼が生えたのだろう。それが全ての始まりであり、全ての終わりでもあったのに。（兄貴は、どうしてあんなに綺麗に笑えたんだろう……）

尚基は頬が濡れていることで目を覚ました。

（自分が今から死ぬと分かっていた筈なのに、どうして一人逃げていく俺を見てあんなに綺麗に笑えたんだろう、）

時に、何を考えているのか分からなくなるところが兄にはあった。透明な笑顔を浮かべ、誰にも見えていない“何か”を見ているかのように目を細めて。

（……最近兄貴のことばかり思い出す。此処へ来るまでは殆ど忘れてたのに）

忘れてたのではなく、必死に忘れようとしていたのに。

（月波……だな、）

初めてこの高校に編入して月波を見た瞬間、衝撃が走った。何故なら、月波と兄の面影がダブったからだ。優しい笑顔。控えめで温和な性格もよく似ていた。

普段の尚基なら余り仲良くするタイプの少年ではないが、兄に似ていることがあって知らぬ間に月波に惹かれていた。惹かれる、言っても色恋沙汰の方ではないと尚基は断言出来る。

恐らく兄へ向けていた“憧憬”のようなもので……。

「あら桜庭君、お目覚め？」

「あ、先生」

養護教諭に声を掛けられて、尚基は物思いから現実の世界へ戻った。

「……今、何時間目ですか？」

「三時間目に突入中だよ。半端な時間だけど、どうする？」

三時間目って何だっけ、と思う。

「桜庭君、ちゃんと食べてる？」

不意な質問に、尚基は目をぱちくりとさせる。間抜け顔に教諭がプツと吹き出す。

「一応保健室の先生だからねえ。君いつもひよろいし、ちゃんと食べてるのか気になってね」

尚基は一瞬考え、

「……正直、余り」

もともと食が細い上に、最近は兄のことを思い出す回数が増えたこともあってあまり食べる気になれない。

「やっぱり？ いかんねえ、いい若いもんが」

と年寄りくさいことを言われ、今度は尚基が吹き出した。

「せ、先生何歳？」

「人を馬鹿にする元気があるんだったらもう大丈夫ね……ほら、さっさとベッドから出る！」

「わ、分かった、分かりました」

尚基はクツクと笑いながらベッドから降りる。

「あと、あの子にもちゃんと謝るのよ」

「あの子？」

教諭が伸ばした指の先を、尚基は何だろうと思いつながら見遣る。指の先、保健室の戸口に。

「さ、桜庭君大丈夫？」

尚基を伺うような顔をした月波が立っていた。

「……だからって授業サボることないのに」

「だ、だって桜庭君があんなに辛そうなのとか初めて見たし、その、心配で、」

もどかしげに、しかし押し付けになるのが嫌なのか月波は口籠もる。

「また詠倉がぎゃあぎゃあ煩いな、」

月乃が口角泡を飛ばして自分に突っ掛かってくる絵を想像して、尚基は一人苦笑する。

「月乃ちゃん変なんだよね。他の人と話す分には問題ないみたいなのに、桜庭君と話すと凄く嫌な顔をするんだよ」

「……だよねあ」

とは言いつつも、尚基は気付いている。月乃は尚基の“本質”に恐らく気付いているのだろう。だから純真な月波を自分に近づけたくないのだ。

（“女の直感”ほど恐いものはない……、）

憂い溜息を吐く尚基を、月波の大きな目が心配げに見遣る。

「や、やっぱりまだ具合が、」

「兄貴、」

「……え？」

「俺、兄貴がいたんだ」

（俺は何を言い出してるんだ、止める、）

「そうお兄さんが……え？」

いた、という過去形に引っ掛かったのだろう、月波が不思議そうに小首を傾げる。詠倉あたりが見たら可愛さに卒倒したかもしれない、と尚基は本気で思った。

「いた、って」

「死んだんだ。何年か前に」

「そ、そう……だったんだ、」

月波が居心地悪そうに身じろぐ。嫌な思いをさせるために言ったわけじゃないのに、と尚基は後悔に襲われる。自分は一体何を言い出

してるんだ。

「……その兄貴と月波がさ、何か似てるんだよね」

「僕とお兄さんが……?」

「ああ。雰囲気っていうのかな、そういうもんが」

「……」

月波の戸惑いは最高潮に達しているようだ。尚基は苦笑する。

「悪い。いきなりこんなこと言われても困るよな」

「ご、ごめんね」

「?なんで月波が謝るんだよ」

「僕昔から口下手で……上手く話せないんだ」

尚基は目線の下にある月波の頭をわしゃわしゃとかき回す。いきなり行為に、月波はびっくりして彼を見上げる。

「さ、桜庭君?」

「月波は今のままで良いんじゃないかな。そのほうが詠倉も嬉しいだろうよ」

「そ、そうかな」

「単純」

ボソツと呟かれた尚基の言葉に、月波が顔を真っ赤にして怒る。

「か、からかわないでよっ……!!」

「ぶっ、悪い悪い。許せ」

「桜庭君の馬鹿っ!!」

授業中だというのに、月波は大声で怒鳴った。

あの家の厳しさ、異常さは知っていたがあれほど迄だったのか?
「ねえねえ、翼」

（あれは間違いなく煙草を押し付けられた跡だ。それにあの細い腕。ちゃんと喰ってるのか？）

「つーばーさー！」

「あ？……って、痛い痛い痛いっ！！！」

蘭子に遠慮会釈なく耳を強く引つ張られる。

「あたしの話、聞いてなかったよねえ？」

ひくひくと唇の端を小刻みに震わせ、蘭子が翼を問い詰める。

「……聞いてたさ。確とお前が引つ張ってる耳で」

「嘘つき。草薙のこと考えてたくせに。どうせあれは煙草を押し付けられた跡であゝとかつて思ってるんでしょ」

大正解だった。そんなに分かりやすい顔をしていただろうか。

「蘭子ってすごいよな」

「異端には異端を、ってね。これ、ばーさんの教え」

軽い口調で言い、蘭子は紫煙を天に向かって吐き出した。翼は気だるそうな蘭子の横顔をぼんやりと見詰める。「あのくそババア……」

「まああの緒爪の妹だからねえ。仕方ないよ」

蘭子は酸いも甘いも知り尽くしたような顔で言うつと、上手そうに煙草を吸った。

（………亮輔は、今の状況から抜け出す気はないのか………）

亮輔がどう思っているのかは分からないが、添山和音は恐らく亮輔を救い出そうとしているはずだ。

（その手段があの下級生か？だが、ただのほそっこい小柄な奴って印象しか残らなかったがな）

和音があの少年を使って何をしようとしているのか、翼には掴めない。

ただあまり誉められた方法ではないのだろうとは思っ。それほど亮輔のいる環境は暗く、閉じられているのだ。

（………そろそろ嵐が来そうだな、）

空に吸い込まれていく蘭子の吐き出す紫煙を見送りながら、翼はそんなことを思った。

願いと過去と予兆と（後書き）

そろそろ物語が大きく動き始める……予定です（笑）どうぞお付き
合い下さいねっ ♪

動き出す物語（前書き）

♪ ようやく物語が動き出しました。よろしくお付き合いくださいませ

動き出す物語

びっくり、と虚ろだった男の肩が小さく揺れるのを緒爪は見逃さなかった。

そつと耳元で更に甘言を囁く。

「お前の弟が私の学園に転校してきてね。お前にも早いうちに知らせたかったのだけど、かなり時が過ぎてしまったようだ。すまないね」

「・・・おと、・・・うと」

男が声を発したことに、緒爪はこれ以上ない喜びを見出す。勿論、加虐心かぎやくしんを満たしてくれるからだ。

「この何年も無言を貫き通してきた貴様が、久方ぶりに発した言葉が“弟”か。・・・笑えるな」

くつくく、と陰鬱な笑みを浮かべる緒爪に対し、男は微かに身動ぐ。そんな男に指を伸ばし、冷たく蒼白い唇に触れると、今度は傍目から見ても明らかなくらい男の体が震えた。

「やめ、て」

「何か言ったか？聞こえんよ」

ちゃんと聞こえていたが、緒爪は聞こえていないフリをする。唇に触れていた指を頬に這わせる。

「やめ、て……僕に、触らない、で、」

「やたら饒舌になつたな？桜庭悠基さくらば ゆうき」

緒爪の指から逃れようとする体を自分の方へ引き寄せ、痩せ細った男の体を抱きすくめる。

「や、め、」

背中から生える白い羽を鷲掴みにすると、ビクンツと男の体が仰け反った。

「体が痩せても、目の光がくすんでも、この羽だけは生えたときのままの純白だな……とても綺麗だ。美しい……汚れしか知らぬ桜庭に

は勿体のない白さだ」

「……………っ、」

「弟に……………会いたいか？」

「……………、」

「会いたいだろう？」

男―桜庭悠基は俯く。

光のない瞳に微かに光るものがある。

（涙、か）

ますます加虐心を刺激される。

「弟もお前に会えたら喜ぶんじゃないのかな？」

「い、嫌……………」

「ん？」

「し、んだ……………から。ぼ、く、」

必死に言葉を紡ごうとする悠基の口を緒爪の片手で塞ぐ。

「んっ、ぐ、……………っ」

「ほっ、貴様……………この私の温情を無下にする気なのか？ん？」

「ん、んっ……………！」

ぐっ、と羽を掴む方の手に力を込める。

悠基の顔に激しい苦痛の色が浮かぶ。

「この綺麗な羽を無理矢理奪り取られたいか？」

「……………！」

「ふっ、愉快だな。ずっと黙り続け無反応だった貴様が“弟”のことを考えただけでここまで乱れるとはねえ」

「……………緒爪様、何をなさっているのですかっ」

突如聞こえてきた自分を戒める声に、緒爪はあからさまな苛立ちの表情を浮かべた。

「！」

荒々しく悠基を突き放し、緒爪はスクツと立ち上がる。年齢を感じさせない、機敏な動作だ。

「その者は桜庭一の“変異種”。手荒な真似をして壊されては堪り

ません！」

「分かったからキイキイ叫ぶな。鼓膜が破れる」

「緒爪様——！」

緒爪はうるさい奴め、とぶつぶつと毒づきながらも悠基を入れている牢から出る。彼女に解放された悠基は、ガタガタと震えながら隅に縮こまる。光を映さない曇った瞳から、濁りのない透明な液体がはらはらと零れた。

背中の白い翼は、そんな彼を外敵から守ろうとするかのように羽を広げている。

「彼に何を言ったのです、」

緒爪を問い詰めているのは、まだ二十代半ばくらいの白衣姿の女性だった。意思の強さを示すかのように、きりっと上がった眉が印象的だ。

「何だと思う？小娘」

「……あなたに草薙緒爪という名があるように、私にも桜庭綾羽というれっきとした名があります。小娘、という呼称はご遠慮願いたいのですが？」

今や日の本全体を牛耳るほどの力を持った草薙家の裏の当主である緒爪にも、女性——桜庭綾羽は揺らがない。

「何処かのなまっちょろい男に似て、遠回しな台詞が好きだな。耳障りだ」

「……それは父のことを言っているのですか、」

「さて、な」

緒爪は意地悪げな笑みで応え、立ち去ろうとする。

「本当ですか」

「……………」

質問、というよりも確認。そんな口調。

「彼の、悠基様の弟があなたの運営される学園にいる……というのは」

「だとしたら貴様はどうする？」

「私は何もしません。ただ悠基様を讒言^{さんげん}で惑わされては困りますので」

あくまでも毅然とした態度を崩さない桜庭綾羽を、緒爪は細めた目で愉快気に眺めている。

「惑わす……か。それはどちらかといえば貴様らの家系のほうが得手なのではないか？」

「！」

綾羽の視線が揺らぎ、白い頬にさつと赤みが差す。

「くくつ、凶星か」

「……………」

「…本当だよ。桜庭尚基。間違いなくそいつの弟は私の学園に在籍している……大事な保険になりそうでラッキーだよ」

「！」

檻の中の悠基が自身を見たことに気づいたが、緒爪は敢えてそれを無視した。

「保険……？」

綾羽の怪訝そうな声に、緒爪は眉を上げて、

「ほほほほ、」

と楽しげに笑った。

「少しお喋りが過ぎたね……そろそろ地上に戻らんと副理事長が粟を喰うな」

「緒爪様！」

綾羽は緒爪を呼び止めたが、彼女は歩を止めることは勿論、綾羽の声に振り返ることすらしなかった。あとには顔を忌々しげに歪めた綾羽と、呆然と緒爪の背中を見送る悠基が残された。

「お兄さんて、その…… どういう人だったの？」

四時間目が終わった後の昼休憩。

ぷりぷりしてとりつく島のない月乃と、そんな彼女をニコニコしながら見守る晶菜から少し離れた場所で昼御飯を摂っていたら、月波がいきなりそんなことを訊いてきた。兄のことに突っ込まれるとは思っていなかっただけに、尚基は思わず箸で掴んでいた白米を取り落とした。

「…………… え？」

「僕と似てる、って聞いてから、何だか淒く気になって……。あの、やっぱり聞かない方が、良かった……。のかな、」

月波の視線が徐々に下がって行く。

「…………… つ、」

月波にそんな気持ちはないのだろうが、尚基は罪悪感に襲われる。

「あ、ごめん、やっぱり訊かないほうが良かった、んだね……」

ごめんね、と悲しげに笑う顔まで兄とダブってしまい、尚基は妙な感覚に陥る。

「何で、」

「え？」

焦燥、苛立ち、悲しみ。それらの感情がごちゃ混ぜになって、居ても立ってもいられなかった。

「さ、桜庭君？」

いきなり立ち上がった尚基を、月波の大きな瞳が見上げる。

「何で俺をそんな顔で見るんだ!!」

思わず怒鳴ってしまい、案の定月波はビクツと震えるし、昼休みの喧騒でざわついていた教室がしんと静まり返る。

「兄貴も、お前も何で…………… つ！」

…………… 助けたかった。炎に巻かれていく兄を助けたかった。でも反対に助けられる始末で。

自分の運命を儚んであんなに悲しげに微笑んだのか。兄はどうして自分の行く末を知りながらあんなに綺麗に笑えたのか。

……俺が殺したようなもののに。

どうして、どうして……っ!!

「さ、桜庭く」

「!!」

尚基は月波から顔を背け、教室を飛び出した。

「桜庭君……!!」

いきなり尚基が怒鳴り声を上げて教室を飛び出して行き、ぷりぷりしていた月乃も何事かと目を見張る。晶菜ですら目をぱちくりさせている。

「どうしたのかな、桜庭君」

「……」

尚基のことも気に掛かるが、心配なのは月波だ。怒鳴られてさぞやびつくりしたに違いない。

月乃は大丈夫かと席を立てて月波に近付こうとした。だが尚基を追いかけてようとしたのか、遅ればせながら月波が席を立つ。

「桜庭君、……」

月乃の、そして晶菜他クラスメートが注目する中、月波の小柄な体が床に沈んだ。

「……月波!!」

ギョツとしながらも月乃は月波に近付き、その体を支える。

「月波、月波!!」

月波は月乃の腕の中で苦しげな呼吸をしつつ、体をブルツと震わせた。

「つき……の、ちゃ、」

ぜえぜえと息を吐き、ゲホツと咳きを繰り返す。

「月波、大丈夫!？」

「だ、じょ……げほ、げほ……!!」

血でも吐いてしまうのではないかと危惧してしまうほどの激しい咳きに、月乃は背筋がぞつとするのを感じた。

また“出た”のかと思う。

喘息があるわけでもなく、器官に何らかの欠陥があるわけでもない。なのに急に起こる激しい咳きと寒気。

初めて月波がこれを発症したのは、まだ小学生の時だった。

何気ない放課後。月波と遊ぶ約束をしていた同級生がそれを忘れて（というより家庭の事情があつてすぐに帰宅した）約束を果たさなかつたとき。

月波にもその同級生にも何の落ち度もなかつたのだが、月波は悪い方へ考えすぎた。

月乃と帰る道すがら、

「僕、きつと嫌われるようなことしたんだ、」

といきなり小さく呟いたかと思うと、激しい咳きと眩暈を起こして蹲ってしまったのだ。

医者に診せても何の異常もないと言われ、でも月波の咳きは尋常ではなかつた。

「月波、落ち着いて……ゆっくり深呼吸して、」

月乃の腕の中、月波は必死に頷きながら何とか深呼吸を繰り返そうとする。

「さ、くらばっ……くん、は？」

苦しい息の下から発される問いに、月乃は著しく眉を顰めた。

「あんな奴放っておけばいいのよ。いきなり月波のこと怒鳴りつけたりして！」

「違う、違うんだ。……僕が、いけなくて、お兄さんのこと訊いたりしたから、」

「お兄さん？」

尚基に兄が居るのだろうか。わざわざ他人に吹聴して回ることはないが、初耳だ。

「無神経なこと、訊いて、」

「良いから黙ってて！酷くなるから！」

月波は弱々しく首を左右に振るが、その先は声にならなかった。

「月波、月波！？」

月波は桜庭君ごめん、と小さく呟くと意識を失った。

自分の腕の中で月波が意識を失い、月乃はパニックに陥りかけたが
晶菜の、

「月乃、保健室に運ぼう」

という落ち着いた声に自我を保つ事が出来た。

「晶菜、」

「その辺の男子、手伝って」

晶菜の言葉に、そばにいた大柄な男子が手を貸してくれることになった。

「月波、しっかりして」

今まで見たよりも一番蒼白な顔をする月波を、泣きそうにながらも
月乃は見守っていた。

「はっ、はっ・・・はっ、」

教室を飛び出して我武者羅に走ってたどり着いたのは屋上だった。

無意識に避難場所を選んだらしい。

「くそ、くそ……!!」

完全に八つ当たりだった。よりによって月波に、あの場所で怒鳴るなんて。尚基は唇を噛み締めて、ガツンと給水塔の壁を殴りつける。

「そんなことしたら、拳をいためるわよ？」

軽やかな声が、尚基の耳に飛び込んで来た。

「っ!!」

振り返った視線の先、目を細めてこちらを見詰める女子生徒の姿に、尚基ははつきりと嫌悪の色を示した。

「お前、添山和音……!!」

「あらあら真つ青な顔して。何か一大事？」

何もかもを見透かしたような顔で問い掛ける和音から尚基は顔を逸らした。

「……分かり易い子ね。伊織君絡みでしょう？」

分かりきったような口調で訊かれ、尚基はカッと頭に血を上らせた。和音を振り返り、彼女の制服の胸倉を掴み上げる。和音は笑みを崩さない。

「女に手を上げるの？」

「っ、」

「まだ自制は利くのね」

「……」

彼女から手を離し、

「……お前、月波をどうする気だ」

「どう、とは？」

「恍けるな!!お前、草薙の関係だろう!?月波に近付いて、生徒会長に勧誘して、一体どういつつもりだと訊いてるんだよ!!」

尚基の大声が響き渡る。

それでも和音は涼しい顔だ。

「ふうん。やっぱりあなた、草薙の内情に大分詳しいようね?草薙がどういう“裏”を隠し持っているのか、も」

「！！」

しまった、と尚基は臍を噛む。

感情に振り回され過ぎている。頭を冷やさなければ。

そう思う尚基を嘲笑うように、和音の言葉は続く。

「桜庭つてどこかで聞いたことのある名字だと思ってたのよ。授業中もずっと考えてた。必死に思い出そうとした。そして思い出した。

“哀れな異形の兄弟” 桜庭悠基と桜庭尚基」

その言葉に自制が外れた。一度は手放した彼女の胸倉を再び掴み、今度こそ彼女を殴ろうと腕を振り上げる。

が、

「！？」

振り上げた腕は誰かに止められる。誰だ、と歯噛みしながら振り返れば、そこにいたのは、

「手前は、草薙亮輔、」

草薙家“表”の若き当主、草薙亮輔。

気弱で“裏”の当主、草薙緒爪に怯えるだけの形ばかりの当主。

その彼に、どうしてこんな力が、

「放せつ……！！」

和音の胸倉を掴んでいた手で亮輔の頬を殴りつけると、ようやく拘束が解かれた。

亮輔は尻餅をついたが、痛みに呻くこともせず尻餅をついたまま俯く。長い前髪で隠されて、顔が見えなくなる。

「亮輔、大丈夫？」

恋人に甘えるような口調で、和音が無事を問う。亮輔に反応はなく、それでも和音は穏やかに微笑みながら彼に腕を回す。

「……亮輔、この人酷いわよね？女の私に暴力奮おうとしたのよ？」

「お前……そいつに一体何したんだ、」

亮輔の様子がどこかおかしい。一切反応しない。まさか、
「その顔、何かに気付いたみたいね」

「催眠に掛けたのか……?」

「正解。亮輔って暗示にかかり易いから、効くのよ」

こともなげに言い放つ和音の正気を、尚基は疑う。

恐らく和音は亮輔のことを想っているのだろう。草薙という“鎖”から解き放たれることを望んでいるのだろう。

ただ、その手段がどういうものかは問わないというだけの話。

「お前、」

「本当はこんなことしたくない。……でもね、亮輔と私の平穩のためには多少の犠牲はやむを得ないのよ」

一瞬過ぎる、哀しげな顔。

だがそれは本当に一瞬で。

「それにしても、君があ…… “哀れな異形の兄弟” の弟君だとはね」

すぐに形だけの笑みが和音の顔を覆う。

「……その呼称、止める。俺は、俺と兄貴は異形なんかじゃないし、哀れなんかでもない」

「冗談。羽の生える人間が異形でなくて何なの? 無理矢理引き離され、体を弄られて茶毘に付された兄と兄の死に負い目を感じて自堕落な生活を送ることになった弟が哀れでなくて何なの?」

「煩い、黙れっ! お前に俺や兄貴のことをとやかく言われる筋合いはないっ!」

「ふふ。兄のことになると仮面が剥がれるのね……おかしい」

「……っ!」

「そんな君に朗報です」

和音らしくない軽薄な口調で言い、彼女は細く長い人差し指を唇にそつと押し当てる。

嫌な予感が湧き上がる。彼女の言葉をこれ以上聞いてはいけない、と警鐘が鳴る。だがその警鐘が尚基に行動を起こさせる前に、和音の整った唇が次の言葉を象った。

「君のお兄さん……桜庭悠基、生きてるよ」

動き出す物語（後書き）

和音からもたらされた“情報”は、尚基にどんな変化を起こさせるのでしょうか。そして彼の兄である悠基の運命は。

月波が主人公な筈なのに、ちょっと尚基が主人公をのっとなって来てますね（笑）
ではまた〜。

天秤（前書き）

兄を取るか月波を取るかで尚基は揺れます。

主人公である月波はぶっ倒れましたが、大丈夫なんでしょうか？

天秤

尚基は、何を言われたのか咄嗟に理解出来なかった。真っ白になった頭が不協和音を奏でているような気すらする。

和音はそんな尚基の混乱を見透かしたかのように彼をじいつと見つめている。

「何………を言って、」

「桜庭悠基は………あなたのお兄さんは生きていうって言ったのよ」

「嘘だ、兄貴は死んだ………死んだんだ、」

足元がぐらついているような気がする。今までずっと信じてきたものに裏切られたような心持ちがする。

「本当は生きていたのよ………何も話さないけどね」

尚基は首を左右に振る。今すぐこの場から逃げ出したい。

「自由に外へ出ることもできないけど」

揶揄を感じさせる和音の口調と言葉の内容に、尚基は我に返る。

「何だと………?」

「彼は監禁されているわ。草薙家の手の者によって」

「!?!」

草薙だと? 尚基は地面に座り込んでいる草薙亮輔を見下ろした。こいつの一族が、兄貴を、

「………どういっつもりだ」

「………」

「兄貴の生存を俺に教えて、お前はどっいっつもりだ。何を企んでいる」

「あら、キミのことだからもう検討付いてると思ったけど。私の買いかぶりだったかな」

クスクスと口元に手を当てて微笑む姿すら腹が立ってくる。

「何だと、」

「簡単な話よ。伊織君とあなたのお兄さんを交換しましょうってこと」

「は？」

「草薙に監禁されているあなたのお兄さんを、私が解放してあげるわ。だからあなたは伊織君を諦めて頂戴。伊織君から距離を置いてくれば良いの……。そして私が彼に接触することを邪魔しないで」

和音の月波に対する執着は酷いらしい。一体そこまでして月波に何を求めているのだろう。

そして人の命を天秤にかけるような和音の依頼に、尚基は怒りを通り越して啞然とする。

「唯一の兄である悠基とまた一緒にいられるようになるのよ？悪い話ではないでしょう？」

尚基がどう応えるのか分かっていいるのか、和音は悠然とした態度で尚基を見詰めている。「俺は、」

兄が生きているなど、いまだに心から信じることなど出来ない。

紅蓮の炎に巻かれる兄の姿は、今も尚基の心から消えることはない。一生、消えることなどないだろう。

あれから兄の生きた姿を見たことはなく、桜庭の人間からも兄のことを聞いた記憶はない。

ずっと、死んだのだと思っていた。

二度と会うことなどないと、思っていた。

「……嘘ついてるんじゃないだろうな、」

「嘘？伊織君を手に入れるために、ということ？」

尚基が頷くと、和音が呆れたような溜息のつき方をした。思わずムツとする。

「確かに伊織君は必要だけど、そのためにそんな嘘つくわけないでしょう。すでにあなた疑ってるし……。で、どうするの？」

和音が結論を急がせる。どう応えるべきか、尚基は惑う。

兄には会いたい。昔のようにまた一緒に暮らせるなら、こんなに嬉

しいことはない。

でも、そのために初めて出来た“親友”と呼べる存在を失っても良いのか？

兄なら、なんと云うだろう。

「早くして。時間がないのよ」

和音の口調に苛立ちが籠もり始める。

「……俺は、」

そのときだった。

屋上と構内を隔てるドアが勢い良く開かれた。

尚基も和音も弾かれたようにそちらに目を遣る。

そこには肩で息をした一人の女子生徒が立っていた。和音の姿に驚いたように二人の視線を受けるがまだだったが、尚基と目が合うと柳眉を逆立てて彼に迫った。

「よ、詠倉？」

自分よりも月波のことを思っている少女の登場に、思わず声が上擦った。

詠倉月乃は尚基を睨んだまま彼に近付き、

「……っ！！」

バシッとして強く尚基の頬を叩いた。はた和音が目を見張り、ギョツとしたように月乃を見た。

「あんた、月波に何言ったのよ、」

「え？」

「あんたが怒鳴って教室を飛び出した後、月波、倒れたんだからっ！！」

月波が倒れた……？

尚基は呆然と月乃を見下ろす。頬を紅潮させ、涙の滲んだ瞳が尚基を睨み上げている。

「あんたのせいで、月波……起きない、先生は、ただの貧血だつて言ってる、けど。あんた月波に何言ったの、なに言ったのよ……！！！！」

尚基の襟首を掴み、上下に揺らす。

「ちょ、詠倉、待てって……！！一体どうしたんだよ」

「だからっ、月波が倒れたって言うてるでしょっ！！あんたが教室を飛び出した後で、あんたを追いかけようとした月波が発作を起こしたの、僕何かしたのかわなくて哀しそうに言ったの！！」

「……あれは月波が悪い訳じゃない。ただの尚基の八つ当たりで過ぎない。月波が気に病むことじゃない。なのに、どうして。」

「月波は、月波は恐がるの！人に嫌われることが凄く恐いの！！私たちなら気にしないようなことも。気にしちゃうの！！月波は、何にも悪いことしてないのに、何でも全部自分のせいにしちゃうの。優しいから、月波は優しいから、」

後は言葉にならず、月乃は地面に膝をつく。力なく下がった両肩を掴み、尚基は彼女に問う。

「い、今月波は！？」

「……ほけっ、保健室。晶菜と保健の先生が付き添ってくれてる、でも、全然起きないの、身動きもしなくて、顔色なんて真っ白で、」

尚基は立ち尽くしたままの和音を見る。

「……悪いけど話はまた今度だ」

和音は暫く返事もせずに黙っていたが、やがて諦めたかのように目を閉じた。

「良いわ。……早く行ってあげなさい」

「……言われなくても、」

尚基はしゃくりあげる月乃を支えながら屋上を後にする。その背中を、和音は一切の感情の浮いていない瞳で見送った。

桜庭綾羽は緒爪が去った後で塩をばら撒いてから、桜庭悠基のもとに戻って来た。

「悠基様」

物静かだが、綾羽の声にはちらほらと怒りの感情が見え隠れしている。それを敏感に感じ取っているのか、悠基の腰が俄かに引けている。

「緒爪の言葉は全て讒言です。決して心惑わされませんように」

分かった、とでもいうかのように純白の翼が一度だけぱりと羽ばたく。綾羽はホッとするものの、悠基の瞳を真正面から見て危惧を抱いた。

（……………会いたいね、）

たった一人の弟。会いたくない訳がない。

「悠基様、耐えて下さい。……………あなたには此処に居てもらわなければなりません。同じ桜庭の人間なのに、あなたを助けられない私を許してください」

亡羊とした瞳に、困惑の色が走ったような気がした。だが声を出してはくれない。

「でも、いつか、いつか必ず」

あなたがその綺麗な翼をはばたかせて自由に大空を飛べるような世界に、します。

その言葉は実際に口に出されることのない、けれども綾羽の心からの言葉。決して譲れない決意。

「それまでは、耐えて下さい」

もう一度、ぱりと翼が羽ばたいた。

月波は仰向きで眠っていた。蒼白い顔だが、呼気の乱れはなさそう
だ。そつと触れた額は驚くほど、

「ひやつ……!!」

冷たかった。体温を感じさせないほどの冷たさだ。

「冷たいでしょう。一応熱を測ったけど、普通に平熱なの。だから
異常はないと思うんだけど。貧血かしらね」

しかし、と養護教諭は肩を竦める。

「今日は桜庭君と伊織君ばかりと会ってる気がするわ。午前中はキ
ミが体調不良で午後は伊織君が体調不良だなんて。仲良しね」

どこかずれたような事を言いながら。尚基はですね、と形だけの笑
みを口端に浮かべた。月波のことを考えると、笑うことも出来ない。
「ここに運ばれて来たとき、それは大変だったのよ」

「大変だったって、」

「伊織君は真つ青な顔でぐったりしてるし、全く反応しないし。何
より付き添いの詠倉さん、だっけ……彼女が半狂乱だね。月波が死
んじゃう、月波が死んじゃうって凄く泣きじゃくって。お友達が
いてくれたから何とか自制できてたみたいなのとこあったけど」

お友達、とは鈴宮晶菜のことだろう。今彼女の姿はない。

尚基は椅子に座って、じつと月波を見守る少女を見た。恐らく我が
身より大事であろう幼馴染みの身を案じている少女を。

（添山の条件を呑めば、俺はまた兄貴と一緒にいられる。でもその
とき、詠倉は。月波は）

自分の願いと引き換えに、友人を悲しい目に遭わせても良いのか。
知ってしまった、居心地の良い居場所。それを今の自分は手放せる
のか。手放して、良いのか。

（俺は、それで良いのか。後悔、しないのか……）

兄の優しい笑顔が蘇る。

（尚、いつか大事な人が出来たらその人を大切にするんだよ。いつか、もしも僕とその人を天秤に掛けるような日が来たとしたら、僕のことには気にしないで良い。尚には、きっと僕より大切な人が出来ると思う。その時は、その人と幸せになるんだよ……生きて、幸せに……）

兄のそんな言葉が蘇る。

（俺は、）

はつきり意思表示出来ない自分がもどかしい。やはり兄に対する思慕の念をあつさりと捨てることが出来ないのだ。

「桜庭」

急に月乃が尚基を呼んだ。

「な、何」

月乃は顔を上げずに問いかける。

「月波に、何言ったの」

「……………」

「月波を傷付けたら、あたしが絶対に許さない」

感情を一切感じられない口調。月乃には滅多に見られないことに、彼女の精神状態が今どのような状況にあるか否応なしに考えさせられる。

「今度月波を悲しませたら、絶対にあんたを許さない」

「ん、」

不意に月波の唇が戦慄わなないて、か細い声がそこから漏れた。月乃が肩を震わせ、尚基は保健室から逃げ出したい気持ちになった。兄と天秤に掛けている今、月波と対面することが素直に出来そうにない。

「……………」

居たたまれない気持ちになって、尚基は本当に逃げ出そうとした。気付いた月乃も止めようとしなない。だが、

「桜庭、く……ん」

尚基の存在に気付いているのかいないのか、兎に角月波が彼を呼んだ。ただそれだけで呪縛にかかったかのように足が床に縫い付けられた。

「月波、大丈夫？あたしが分かる？」

「月乃、ちゃん…？」

動けない。

「具合はどう？気分、悪くない？頭痛いとか目眩がするとかない？矢継ぎ早に質問をする月乃を、養護教諭がたしなめる。

「こらこら、病人にそんなに詰め寄らないの……伊織月波君、此処が何処か分かる？」

ゆったりとした口調で月波に問いかける。

対して月波はしばらく自分の置かれた状況を掴めないでいるのか、無言だった。パチパチと何度か目を瞬く。やがて折り合いがついたのか、

「……教室で、倒れて、それで」

「クラスの子が保健室に運んでくれたのよ。後でお礼言わなきゃね」月波は小さく頷いて、養護教諭から月乃に視線を戻した。

「月乃ちゃん、心配掛けて……ごめんなさい」

涙腺が壊れてしまったかのように、月乃の目からぶわあつと涙が溢れ出した。素直な養護教諭が少し引いている。

「い、良いの。月波が何ともないなら、あたしのことは……気にしなくて、良いの」

「ありがとう……桜庭君、居るんでしょ？」

ずっと動けないでいた尚基は、月波の穏やかな声に呼ばれ硬直したままビクツと肩を震わせた。どんな顔で対面すれば良いのか分からず立ち尽くす尚基に、月波は言葉を続ける。

「ごめんね、僕のせいで」

「なっ、なんで月波が謝ってるの！？月波は何も悪くないじゃない！」

月乃の怒声が遠くに聞こえる。

「だって、僕がお兄さんのこと訊いちゃったから、桜庭君、困って、」

「だ、だけど悪気があって訊いたわけじゃないんでしょ!？」

「そう、だけど……でも、桜庭君、哀しそうな顔、したから、」
哀しそうな顔、と言われ、心拍数が上がった。

「訊いたらいけないことを、訊いちゃって、桜庭君を哀しませたから、だから、謝るの……」

誰が何を思い、何を感じるか。それは人それぞれ違い、他人が明確に汲み取することは難しい。だからそんなに思い詰めなくて、良いのに。

『間接的であれ兄の死に手を貸した腐った人間』である自分のことで、そんなに思い詰めることなどないのに。

「月波、あんたは本当に……もう」

何かを諦めたかのように呟き、月乃が椅子から立ち上がった。そして尚基の側に歩み寄り、

「こら、バカ桜庭」

ぐいつと彼の二の腕を掴む。

「月波、まあ……たく悪くないのに、あんたなんか謝罪してんのよ？すつごお……非のあるあんたが謝らないのって、おかしいわよねえ？」

「っ、」

尚基は

「分かったから放せっ」と月乃の手を振り払い、ようやく動くようになった体で月波がいるベッドまで移動する。

「桜庭君、」

潤んだ大きな瞳が尚基を認めて、ぎこちなく笑みを形作る。

「っ、月波、その……さつきはいきなり、」

「何照れてんのよ！告白する女子じゃないんだから!！」

「う、うるせえ！だ、だから、その……悪かった。泣かせて、苦しい思いまでさせて、悪かった」

言った瞬間、言えた……と安心する自分がいた。

「ううん……大丈夫だから」

月波も安心したのか、次の瞬間にまたフツと目を閉じた。

「気が抜けたのかしらね……少しそつとしておいてあげなさい」

養護教諭の言葉に、月乃と尚基は顔を見合わせて頷いた。

「……んまあ良かったわ。大事にならなくて」

保健室を出た二人は特に当てもなくぶらぶらと構内をうろつくことにした。腕時計を見れば、5時間目が始まって五分ほど経っており、構内は静まっている。

体育のクラスがあるのか、校庭の方から元気そうな声が聞こえてくる。

「……だな、」

「あ、あとさつきは悪かったわね。いきなり頼った、叩いたりして」

「いや、別に、」

痛くはあったが、仕方ないことだとは思った。月乃の大事な人間を傷付けたことにはわりはないのだから。

「そんなにお兄さん……だっけ、お兄さんのこと訊かれるの、嫌な訳？」

月乃が尚基を伺うように顔を見てくる。

「……別に兄貴のこと訊かれるのが嫌な訳じゃない、」

「じゃあ、どうして？」

「……ただ、月波が兄貴に似てて、」

「？」

「俺のこと、気にしすぎるから、何か、腹が立って……兄貴と、同じような目をするから、」

言っていて何を喋っているのか自分でも分からなくなる。月乃も怪訝そうな顔でこちらを見ているから、気恥ずかしさに居た堪れなくなる。

「要するにさあ、あんたってブラコンな訳？」

「……………そう思いたいなら思えば良いよ」

説明するには骨が折れるし、恐らく草薙家のことや尚基が属する桜庭家に関することまで話が及んでしまうだろう。それは避けたかった。

（俺はどうする。俺は、どうしたいんだ）

まだ怪訝そうな顔を崩さない月乃から顔を逸らし、また行く充てもなく歩き出す。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよっ……………!!」

月乃が追いかけてくる気配を背中に感じながら。

触れ合い、そして

「・・・・・・・・・・ん、」

次に月波が目覚めたのは、窓の外が暮れなずみ始めた頃だった。体が酷くだるい。

「あ、伊織君起きたわね」

外に出ていたのか、養護教諭が保健室に入ってきたながら声を掛けてきた。

「あの、すみません・・・・ずっと寝てたみたいで」

「気にしない気にしない。ほかにお客さんはいなかったしね」

養護教諭は朗らかに笑いながら、室内に設置されている小型冷蔵庫から冷えた麦茶を月波に手渡した。

「咽渴いてるでしょう？どうぞ」

「あ、す・・・・すみません」

月波は礼をすると、彼女からコップを受け取った。彼女の言う通り酷く咽が渴いていて、コップの半分をその一口で一気に飲んでしまった。

「・・・・・・・・・・はあ」

「ちよつとごめんねえ」

養護教諭は一言断ってから、月波の額に手をやった。ひんやりとしたままなのは変わらない。

「熱はなさそうね」

「あ、あの・・・・今何時間目ですか？」

「もう放課後よ？さっきチャイムが鳴ったから、そろそろ」
全てを言い切る前に、保健室のドアがガラツと勢い良く開いた。

「月波あゝっ！！」

尚基を伴った月乃が大声で月波を呼びながらやって来たのだ。

「あ、月乃ちゃ、って、うわあっ・・・・！」

いきなり抱き付かれ、月波は吃驚した。

（な、何か、月乃ちゃん・・・性格変わって、ない？）

尚基が背後で苦笑を浮かべている。

「詠倉、月波が困ってるだろ？」

だが月乃は彼の言葉など聞いていない。

「月波、心配したんだから、ホントに心配したんだからね？」

「ご、ごめん月乃ちゃん。ごめん、苦しいから放して、」

「え、あ、ご、ごめんっ・・・！！」

今になって我に返ったらしく、月乃はぼんつと顔を真っ赤にして月波から離れた。

クスクスクス、と養護教諭がその様を見て微笑んでいる。

「・・・月波、帰れそうか？」

尚基が訊いて来る。

「うん、もう大丈夫そう」

微笑んだ顔に、余り力はない。全快、というわけではなさそうだ。

「伊織君は寮生だっけ？」

「あ、はい。桜庭君もなので、一緒に帰ります」

「わ、私だって女子寮だけど一緒に帰るもん！！」

何故か手を挙げて張り合う月乃を見て、ついに養護教諭は大爆笑した。

授業終了後、すぐに下校しようとした亮輔だったが、廊下を出た瞬間に声を掛けられた。

「おい、亮輔」

亮輔はビクッと体を震わせて足を止めた。

「な、何・・・？」

「こつち向けよ」

苛立った声に恐怖を覚えながらも、亮輔はそつと振り返った。だがそこにいたのは、いつものように不機嫌そうな顔ではなく、微かに居心地の悪そうな顔をした翼だった。

「倉沢君、」

「きよ、今日はその……悪かった。あんなに、恐がらせちまうて」

「え、あ……」

今日の階段での出来事か。

「そ、そんな。あれは倉沢君が悪いんじゃない、僕が……弱いせいだから」

そう言つて、気弱に微笑む。

「気にさせてごめんね。……僕は、大丈夫だから」

亮輔はそう言つて一言も翼を非難することなく、その場から立ち去ろうとする。

「ちよつと待て!!」

まだ訊きたいことがある。翼は思わず亮輔の腕を掴んでいた。だが掴み所が悪かったのか、亮輔が小さく呻いた。

「……」

「あ、悪い!」

「だ、大丈夫。……ま、まだ何かあるの?」

「……単刀直入に訊く。お前、あの男に虐待でもされてるんじゃないのか?」

「!!どう、して?」

訊き返す声が頼りなく震えている。

「あれ、煙草の跡だ。蘭子だつてそうだつて言つてたぞ?」

「ちが、違うよ……そんなのじゃない、」

適当に言い繕つて逃げ出そうというのが見え見えだった。既に腰が引けている。

「あいつ、前から酒好きだったよな?酒の勢いに任せてお前に手を

上げてるんじゃないのか？」

どうしてこんなに問い詰めてるんだ、と翼は自分で混乱している。俺は亮輔が嫌いな筈なんだ。なのに、どうしてこんなにも亮輔の身を案じているんだ。

「そんなことしない、おじさんはそんな人じゃない、」

まるで自分に言い聞かせるように、亮輔は言う。翼に聞かせる、という意図を放棄しているように思える。

「あのさ、あまり無理すんなよ。添山だって心配するだろ」

「か、和音ちゃんは関係ない」

亮輔は和音に対して一体どういった感情を持っているのか分からなくなるが多々ある。彼女を寄せ付けられないようにすることもあれば、甘えたりすることもある。

時々によつて態度が変化しすぎて、分からなくなる。

「亮輔、」

「もう放してよ!!」

いきなり亮輔が声を荒げて、力任せに翼の手を振り払った。

廊下をゆく生徒たちが何事かと声の発信源を見遣り、教室にいた生徒たちも顔を覗かせる。

だが亮輔はそんな観衆の存在にまで気が回らないらしく、

「僕がどんな目に遭おうが、倉沢君には関係ないじゃないか！キミは僕のことを嫌いなんだろ、嫌いなら放っておけばいいじゃないか!!」

怒鳴った。そして呆然と自分を見詰める翼を置いて、走り出した。

「おいっ………!!」

制止の声を投げて、小さな背中が止まることがなかった。

「……いきなり切れやがった、」

小さく呟き、翼は小さな溜息を吐いた。亮輔には小さい頃から、いきなり切れるということがたまにあった。

生来は気が小さいのだが、時にそうなるのだ。

動揺の度合いが高いほどにその傾向は顕著になると翼は見ているの

だが。

「ちよつと翼あ」

背後で、蘭子の気たるそうな呼び声がした。

「ん」

「また切れたの？あれ」

どうでもよさそうに大欠伸しながら訊いて来るものだから、翼は何だか気が抜けてしまった。「ああ、切れた・・・つつつか俺が切れさした、って言える」

珍しく弱気な翼に、蘭子は何かを言いたそうにしたが、それは本当に一瞬だった。すぐにいつもの緩い、弛緩した笑みを浮かべる。

「翼あ、あたしらも早く帰ろうよ」

「、だな」

構内に居残つてもすることなどない。さつさと帰宅して、家でごろごろする方がマシだ。

翼は蘭子を伴ってその場を後にした。

「ねえ月波、辛かったらちゃんと言いなね？絶対無理したり我慢したりしたら駄目だよ？」

「つ、月乃ちゃん・・・本当に僕大丈夫だから、」

月波の戸惑った声にも、月乃はめげない。

「本当？本当ね？」

「うう、桜庭君、」

月波にうるうるした目で見られるが、尚基にはどうしようも出来ない。

「月波、寮までの辛抱だ。寮に入れば、詠倉には手出し出来ん」
「う、うん」

「ちよつと桜庭！私の月波を、何誘惑してんのよ！？」

「誘惑？寝言は寝て言えよ」

「ね、寝言ですって！？私はちゃんと起きてるわよっ！」

「つ、月乃ちゃん・・・落ち着いて、」

月波に諫められ、月乃は鼻息荒くも尚基への怒りを何とか抑える。

「あれ、あの人、」

月波の不思議そうな声に、尚基が声を掛ける。

「月波？」

月波がいきなり駆け出し、尚基と月乃はきよとんとする。だが月波が向かう先にあった人影に、尚基は激しく眉を寄せた。

（草薙、亮輔……………）

草薙亮輔が、道端で踞っているのである。月波はいち早くそれに気付いたらしい。

尚基も近付こうとして、ふと疑問に思った。

（月波は、草薙亮輔と知り合いなのか？）

ということを。

「草薙先輩、大丈夫ですか？伊織です！」

知り合い、という証拠に月波は亮輔の名を呼び、肩すら叩いた。踞る亮輔がビクツと震えるのが傍目にも分かった。亮輔の顔は酷く青ざめていたが、月波を認めるとその顔に微かに安堵の色が広がった。

「伊織、くん……………」

（月波のことを知っている？何故？）

一体いつの間に知り合ったのだろう。

「草薙先輩、気分でも悪いんですか？」

「……大丈夫。ちよつと目眩がしただけ、だから」

「で、でも」

月波が見守る前で亮輔は立ち上がって見せるが、ふらついていて酷く頼りない。

「……………っ、」

案の定、亮輔の体が目眩を起こしたかのようにぐらりと揺れた。

「！」

月波では支えきれないと思った尚基は、咄嗟に動いていた。ダッシユで二人に駆け寄り、崩れ落ちそうになる亮輔を両手で支える。

「桜庭君、」

月波が尚基に感謝の視線を向けてくる。その視線が何故か恥ずかしくて、尚基は亮輔に注意を移した。

「……………」

確か屋上で和音共々と会ったときは、“正気”を失っていた筈だ。亮輔にとって尚基は初対面になるのだらう。支えた亮輔の肩が強張っているのはそのせいだと思いたい。

「草薙先輩、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫」

小さく震える体を見て、亮輔が寒気を感じていると思ったのだらう。月波が彼を気遣う言葉を発するが、亮輔が体を震わせているのは、見ず知らずの他人に触られているからに違いない。尚基はそう思った。

「す、すみません……………」

か細い声で礼を言われた。

「いえ、別に」

と答えながらも、和音に言われたことを思い出す。

（こいつの縁者が、兄貴を……………）

そう思えば、亮輔のことが憎くて堪らない筈なのに何故か彼に怒りを感じる事が出来ない。何故だ。弱そうに見えるから、だらうか。「あの、本当に顔が青いですよ」

月波が心底心配そうに言う。だが亮輔は大丈夫、と応えるだけだ。傍目から見ても全く大丈夫そうには見えない。

「僕ら、寮生なんです。良かったら寮のホールとかで休んで行ってください」

「で、でも……僕は本当に何も、」

「あゝ！イライラする！」

いきなり金切り声を上げたのは、今まで静かにしていた月乃だった。

「あんた！！」

先輩を“あんた”呼ばわり、しかも指まで指す始末だ。

「詠倉、お前なあ」

「つ、月乃ちゃん！」

男二人に諫められても、月乃は止まらない。

「月波の好意を無下にするってどういう了見よ！？」月波限定、らしい。

「え、」

亮輔すら呆気にとられ、月乃を見る。

月乃はそんな亮輔の腕をグツと掴み、

「月波の好意には素直に甘えれば良いのよ！！」

やはり月波限定らしかった。月波が困った顔で尚基を見上げてくるが、今の月乃を止めることは出来そうになかった。

「……良いんじゃないの？月波だって、草薙がいかにも具合悪いって言うの分かるだろ。少し休んでもらったほうがこっちだって安心できるってもんだ」

「……う、うん」

そんなものかなあ、と月波が小首を傾げる間にも、月乃は亮輔の腕を掴んだまま、引き摺るようにして歩を進めている。

亮輔は自分に起きている事態が飲み込めていないのか、ただ引き摺られるままだ。

尚基と月波は慌てて彼らに付き従った。

寮はまだ閑散として、静かだった。

男子寮と女子寮は両性共用の大食堂や、事務棟などのある空間を挟んで屹立している。外壁などの見た目は全く同じで、気を付けないと間違えることがあるから注意しなければならない。

「詠倉、お前何処まで付いてくる気だ？」

男子が女子寮へ、または女子が男子寮に入ることは固く禁止され、敢えてその禁を破る者はあまりいない。月波大好きな月乃でも、流石に男子寮にまで潜入したことはないはずだ。

（そう思わせてくれ）

だが月乃は、何の躊躇もなく男子寮にまで付いてきた。というより草薙亮輔の腕をぐいぐいと引っ張って、一番に男子寮に足を踏み入れたのこそ、月乃だったりするのだが。

「まだ夕方なんだから、良いじゃない。ロビーに入るだけなんだから」

「あ、あの……そろそろ腕、放し……」

蚊のなくような声をあげる亮輔を、何故か月乃が軽く睨み付ける。

「黙ってあたしに従ってください」

口調こそ丁寧だが、内容は不穏である。

「……………」

亮輔が助けを乞うように、月波を伺うが月波は幼馴染みの奇行には慣れっこだから亮輔の視線に気付いても気弱な笑顔を返すしか出来ない。

「はい、座って下さい!!」

ロビーは、玄関を入ってすぐ右手に伸びる廊下を辿ると見えてくる。入ってすぐ横手に自販機が三台が並び、ガラスの丸テーブルと椅子が数セット、それを囲むようにクリーム色の長ソファアが壁伝いに数個設置されている。

月乃に促されるまま、亮輔はストンツとソファアに腰を落とす。

「苦手な飲み物とかありますか？」

「え、あ……別に、」

「了解です」

どうやら亮輔に飲み物を奢ってやるらしい、と思いながら二人の会話を眺めていた尚基に、月乃がニユツと手を伸ばして来る。

「は？」

「草薙先輩と月波とあたしのジュース代を寄越せって言ってるの」

「な、何で俺が」

「男でしょ。ぐだぐだ言わずに有り金出しなさい」

「男だとか関係ねえだろ……」

「……………」

「分かったよ！！」

無言の視線攻撃に晒され、尚基は鞆から財布を出して月乃に握らせた。

「あ、あの、僕は大丈夫ですから、」

「遠慮なく奢られてください。桜庭のお金なんですから」

「意味わかんねえよ」

亮輔が驚いたような顔で尚基を見る。

「？何か」

「あ、えっと……君は、桜庭君というの？」

まさか兄のことで何か疚しいことでもあるのだろうか。目の前にいるのが、翼を持つ異常な人間の弟だということが信じられないのだろうか。

「……………はい。桜庭尚基と言います」

兄の名前は悠基。兄を知っているなら、尚基の名前を聞いたら二人は兄弟かも知れないと思うだろう。だが亮輔は、

「そう、桜庭尚基君、」

何かを考える彼から、一瞬気弱そうな影が跡形もなく消える。違和感を感じた。

「俺の名前が何か」

少し踏み込んでみる。すると、亮輔の顔がまた気弱な色を浮かべる。
「いえ、別に」

「……………」

言葉通りに捉えて良いものか、惑う。

「桜庭君、どうしたの？」

尚基の心の動きを敏感に察したらしい月波が、心配げに顔を覗き込んでくる。

「いや、何でもないよ」

「……………なら、良いんだけど……………」

「ちよつと桜庭！また月波を苛めてるんじゃないでしょうねっ！！」

「誰がだ！」

「てか運ぶの手伝え！」

何でそんなに偉そうなんだ、と文句を垂れつつも自販機前の月乃に歩み寄る。

「はい、こっちの苺ミルクが月波で、草薙先輩がカフェオレね！」
「どうやら缶やペットボトルではなく、紙コップの飲料にしたようだ。
まだ安くつきそうで良かったと思った。」

「はいはい……………」

月乃から受け取ったコップを持ち、月波たちの待つソファーに戻る。

「ほれ、月波は苺ミルク。草薙先輩はカフェオレだそうですよ」

「ありがとう」

「あ、ありがとう……………ございます」

敬語かよ、と思う。

「桜庭は何が良い？」

「俺？俺は、」

「あっ！」

月乃を振り返ろうとした瞬間に、亮輔が持つ紙コップに手が当たってしまつたらしい。亮輔もしっかり手にしていなかったのか、あっさり彼の手からコップが離れてしまう。

バシャ！という音を立てて、コップの中身が零れた。

「す、すみませんっ！」

「だ、大丈夫、」

明らかに大丈夫ではない。シャツにはかなりの大きな染みが出来つつあり、ズボンにも少し零れてしまったらしい。

尚基はハンカチを取り出して、亮輔に渡す。

「これ使って下さい！」

「だ、大丈夫だから、」

「大丈夫じゃないです、染みになりますから！」

亮輔が受け取るうとしないから、尚基は強行手段に出た。あまり他人にベタベタ触れるのは好きではないが、仕方ない。

「失礼しますよ！」

そう言えばこの暑いのにどうして長袖なんか着てるんだろう、とそんな疑問が一瞬だけ、過った。

「大丈夫、」

亮輔が抵抗しようとするが、尚基が彼の腕を掴む方が早かった。

「いつ………！」

大した力を込めたはずじゃないのに、ひどく痛がられた。

（あれ、）

昔にもこんなことがあった。幼い頃から“不思議”な少年で通っていた兄の悠基は手酷い苛めに遭うことがあった。ある日、何気無く兄の腕を掴んだ瞬間痛がられたことがあった。

怪訝に思っただけで兄の抵抗を往なしながらそでを捲ると、一体誰に付けられたのか刃物によるであろう傷痕や、暴力によって出来たであろう痣があった。

そのときと今の亮輔の態度が妙に重なり、

「先輩、失礼します」

「やだ、やめっ………！」

月波が息を呑む音が妙に大きく聞こえた。

尚基からの返事がないのを不思議に思った月乃が近づいてくる気配を遠くに感じた。

「先輩、」

「は、放してっ」

裏返った声に、胃の腑が縮まる気すらした。

「これ、煙草の、」

「っ、」

亮輔の目から涙が溢れ、俯いてしまう。月波が唇を震わせながら、何を言えば分からないのだろう、……じっと亮輔を見守っている。

「……先輩、これは」

「何、でもないから」

「けど」

何でもない、訳がない。だが今の亮輔から根掘りはほり聞けそうな雰囲気ではない。

「本当に大丈夫。大丈夫だから」

その言葉はまるで自分に言い聞かせているようで。

「……とりあえず服、拭いたほうが、ってもう遅いかな」

硬直した空気を動かしたのは、月乃だった。

「遅い、かな」

「替え、あるから」

小さく呟くように応え、亮輔は鞆をその細い腕に抱えて立ち上がった。

「先輩、」

「ごめ……なさい、僕、帰ります」

お気遣いありがとうございます、と言って、亮輔はロビーを出て行ってしまった。

「あれ、酷いね」

流石の月乃も言葉少ない。月波は酷くショックを受けているらしく、ピクリとも身動ぎしない。

「……ああ、」

しばらくは頭から離れそうにないな、と尚基は鬱々とした気持ちになった。

亮輔とおじと不思議な双子（前書き）

何だか不思議なサブタイですが、気にせず本文へどうぞ!!

亮輔とおじと不思議な双子

虐待、という単語を何度も脳裏に浮かべながら、月乃は寮の自室で着替えをしていた。

（あれは多分煙草を押し付けられた痕だし、あの痣は……きつと殴られた結果に出来たんだ）

なまじ月波と似たような印象をしているから、余計に痛々しかった。

「月波は泣き出すし、」

草薙亮輔が立ち去ってからしばらくして、言葉も出せずにいた月乃や尚基を横にいきなり月波が泣き始めたものだから、月乃も尚基も慌てた。しかもそういうタイミングのときに限って寮に生徒がたくさん戻って来たのである。

月波は泣いているし、ロビーとはいえ堂々と男子寮に月乃がいるしで、寮は少し騒がしくなり、尚基に言われて寮監に見つかる前に退散してきた訳である。

月乃は溜め息をつき、ベッドに腰かける。

「何か疲れたなあ」

と呟いた瞬間、コンコンとドアがノックされた。

「月乃」。英語教えて？」

月乃はがくり、と肩を落とした。

（お願いだから休ませてっ）

尚基は月波に気付かれない程度の溜め息を溢した。

「月波、頼むからそろそろ泣き止んでくれよ」

「う、うん…ごめ、うう」

更に両目からぼろぼろと大粒の涙が溢れ落ちる。

（何か俺が泣かしちまったみたいじゃねえか）

通り過ぎる寮生たちの視線と囁き声が痛い。

…月乃を女子寮に帰した後、尚基はどうかして月波を宥めようとした。

だがよほど亮輔の体の傷痕に衝撃を受けたのか、今も尚、月波は泣き止まない。場所はロビーのままで、移動することすら出来ていない。

「月波、せめて部屋に戻ろう。部屋の方が人目も気にせずに泣けるだろ？」

「う……うん、」

ぐずぐすと鼻を吸いながらも、月波は尚基に腕を引かれてどうにかソファから立ち上がった。

ようやく動ける、と安堵した尚基に掛かる声。

「おい、桜庭」

「げっ、藤宮寮監、」

素直に嫌悪感を露にしていまい、尚基は慌てて口をつぐむが時すでに遅し。

藤宮寮監、と呼ばれた三十代前半くらいの男性は口端をぴくりとひくつかせ、睨むような目付きで尚基と、そして月波を見た。

「げっ、とはご挨拶だな。桜庭尚基」

いちいちフルネームで呼ぶなよ、と尚基は心中で思う。

「……………」

尚基が黙っていると、藤宮は俯いていまだに鼻を吸っている月波を訝しげに見下ろした。

何か嫌な予感がして、早く泣き止めよ、と月波に要求する。飽くまで心中においてだが。

「こいつはどうして泣いてるんだ」

ビクッと月波が震える。

「そ、それは」

咄嗟な言い訳が思い付かず、尚基は口ごもる。

「それに、今は居ないみたいだが、女子がお前らと一緒にいたそうだな？」

誰かが早速吹聴して回ったらしい。

「何か疚しいことでもあるんじゃないのか？」

一切ない、と声を大にして言える。だが月波が泣いている訳をどう説明すれば良いのだろうか。草薙亮輔の体には痣や煙草の痕があり、それを見た月波が泣いてしまった。

(……そう言えば良いのか？)

「何を黙ってるんだ。答えられないのか？」

藤宮の目が獲物を捕らえたかのように、一瞬ギラリと光った。

二人いる寮監の内のもう一人、浅葱修介は優しく生徒想いの“いい人”なのに、どうしてこうも違うんだ、と尚基は思う。

「もう一度訊く。伊織月波は何故泣いてるんだ」

「それは……………」

「さ、くらは君は何も悪くないです……………桜庭君は、そばにいてくれただけなんです、」

消え入りそうな、弱々しい声。

「じゃあ伊織は何故泣いている。こいつに苛められでもしたんじゃないのか？」

「！」

この野郎、やっぱりそういうふうに考えてやがったのか、と尚基はカッとなる。

「桜庭君……！」

「っ！」

月波が尚基のシャツの裾を掴み、彼を制止する。

……そうしてくれていなければ、尚基は藤宮を殴っていたかも知れない。

「ダメ、ダメだよ……………」

「……分かった。ありがとうな」

「なにやら二人で盛り上がってるな……まあ良い。泣くんなら部屋で頼むぞ。衆人環視の中は困る」

「………はい、」

藤宮は嫌らしいほどに大袈裟な溜め息を吐きながら、ロビーを出て行く。尚基はそんな彼の背中に思いつきり舌を出してから、溜飲を下げるようにせめてもの努力する。

「……月波、そろそろ手、放してくれるか。止めてくれたのは有り難いけど、」

「う、わっ、ごめん」

月波は何故か顔を赤くしながら手を放す。どうやら涙は止まってくれたらしい。

「部屋に行こう。また藤宮の奴が戻ってきたら面倒だ」

「う、うん」

藤宮の登場で生徒たちの注意がこちらに向いている。尚基は見世物じゃねえぞおと言いながら彼らの間を擦り抜けて行った。

丁度バス停に停まっていたバスに飛び乗り、周囲の怪訝そうな視線を目を瞑ることでシャットダウンしながら、草薙亮輔は上がった息を整えていた。

（見られた、見られた、見られた……っ！）

どうしよう、誰かに言い触らされたら。和音に伝わってしまったら。もし、おじにばれたら、

（・・・・・大丈夫、他の子は兎も角、あの伊織君っていう子はみだりに触れ回ったりはしないはず、）

そうとでも思わないと、平静ではいられない。

「おい」

いきなり肩を叩かれ、亮輔は目を見開いて体を強張らせた。周囲に漂う酒臭さ。

「よう、亮輔。そんな蒼い顔してどうしたよ、うん？」

周りの乗客たちも柄の悪い人間がいることに気付いたらしい。だが知り合いが同乗していると分かっているのか、誰も注意しようとはしない。

「おじ、おじさん・・・・・・」

白髪がたくさん混ざった短髪、下膨れの顔、とろんとした虚ろな目付き、伸ばし放題の無精ひげ、猫背の体、夕方から酒臭い息を撒き散らした男。それが草薙亮輔のおじであり、現在の同居人の草薙浩介である。

「これから帰るのか？随分遅いな」

「ちょ、ちよつと用事があつて、」

おじが喋るたびに酒臭い息が鼻先にかかる。それだけでなく、亮輔が怯えるのを楽しんでいる気配すらする。

「用事だあ？あの和音って女くらいしか親しい奴がないお前に、何か用事でもあるのかあ？」

おじの腕がにゅつと伸びてきて、亮輔の黒髪に触れる。それだけでゾクツと背中に悪寒が走る。

（気づかれちゃ駄目だ、気付かれたら、）

「用事って何だ？和音ってのとよろしくやってたのか？」

「ちがつ・・・・・・」

恐い恐い恐い恐い恐い、おじが恐い、

「ねえおじさん、うるさい」

いきなり甲高い声が亮輔の耳に飛び込んで来た。亮輔はギョツとしたし、周囲の空気もざわつく。

「公共交通機関でわあわあ騒ぐなと小学校で教わらなかったか、おじさん」

「教わらなかったんだよ、綾音」

「そうなのか、というか都合の悪いことは忘れる、っていう人間の愚かな性分が出てるんじゃないの？空音」

そこにいたのは、まだ小学生くらいの良く似た女の子と男の子だった。

「そうかもね」

「そうだよ」

そしてにつこりと小さな顔を見合わせて笑い合う。手まで合わせ出す。

バスの揺れの中でも全くバランスを崩さずに話し、笑い合う子ども二人を、亮輔は呆然と見下ろしていた。だがおじはそうもいかない。他の乗客のことなど一切頭に無い程の大声で怒鳴った。

「何だ、このクソガキどもがっ！！！」

だがビクツとしたのは亮輔で、二人の子どもたちは逆に喜びだす始末だ。

「わあい、吼えた吼えた」

「空音、吼えたね」

「ね、綾音」

「き、さ、まらあああああああつ……！！！」

おじが今にも子どもたちに掴みかかろうとした瞬間、

「あ、綾音。ぼくらの降りるバス停だよ」

「そうだね、空音。運転手さんにお礼を言っただけ降りようね」

「うん。ママもそうしなさいって言ってたもんね」

衆人環視の中、二人は和気藹々とバスを降りようとする。だが男の子のほうで、ポカンとしている亮輔に気付いてにつこりと微笑む。

「お兄さん、案内してよ」

「……え？」

「ねっ、綾音ちゃん。良いよね、この人とっても優しそうだし」

「仕方ないね。こういう弱い男って嫌いなんだけど、まあ空音がそう言うなら」

女の子は仕方ないなあと大きく息を吐きながら、男の子共々亮輔に手を差し出して来た。

まだ小さい、けれどふくよかな手。

「……ぼ、僕は、」

「ね、お兄さん」

「あたしの気が変わらないうちに。後ろで恐いおっさんが睨んでるよ」

二人の素性はよく分からないが、おじから逃れられるのなら、その手を取りたい。

でも、今は良かったとしても、夜になれば、

「……！！！」

いきなり後ろから強い力で首根っこを掴まれ、揺れる足元のせいでバランスを崩し、あっさり後ろに倒れそうになる。

「お兄さん！」

二人の、亮輔を呼ぶ声が見事に重なる。

車内がざわつく。降車ボタンが押されたため、バスが徐行する。バス停に近付き、

「……行かせんぞ、亮輔、」

「……っ！」

気付けばおじの腕の中だった。酒の臭いがもろに鼻っ面にぶつかる。

「空音、降りるよ」

「え、綾音……」

女の子は亮輔の先行きには何ら興味がないらしかった。男の子の方は心配そうに亮輔を見るが、女の子が振り返らずにバスから降りようとするから、慌てて彼女の後に続いて行っただ。

二人の姿が車外に消え、今度こそ誰も助けてはくれないことを亮輔は知った。

「……待て！！！」

「え、おじさんっ……!!」

おじは酒を飲んでいるとは思えないほどに俊敏な動きでバスの運転手のもとへ走った。

「俺も降りる！開ける!!」

おじの気迫に運転手がギョツとしていることが分かる。おじは開いたドアから飛び出し、

「何処行きやがった、糞ガキども!!」

とだみ声で怒鳴っている。

運転手はもう一度乗られたら迷惑だとしても考えたのか、慌てた様子でバスを発車させた。

「……」

亮輔はふらりと立ちくらみを起こし、力なく座席に腰を下した。他の乗客たちの視線が痛いほどに感じられる。

（恐かった……でも、あの子たちは）

不思議な雰囲気の二人だった。

（……僕を、助けようとしてくれた、）

誰もが見て知らぬフリをしていたのに、あんな小さいのに亮輔を助けようとしてくれた。

（お礼、）

お礼を言うことも出来なかった。

「……でも、」

あの二人とはまた会うことになる。

亮輔は何故かそんな予感に囚われていた。

悩み（前書き）

そろそろ更新しないと……と書き上げました（汗）ちょっと横道に入ってしまった……。

悩み

「さく、桜庭君、ごめんね……僕のせいで、迷惑かけ、って……、」
まだ泣いている月波に、尚基は勝手に冷蔵庫から出したジュースを渡した。

「さっき飲んだけど、飲んどけ」

「う、うん、」

月波はおずおずとオレンジジュースの注がれたグラスに口をつけた。
こくん、こくんと小刻みにジュースを飲む姿が何処か愛らしい。

「少しは落ち着いたか？」

「う、うん……、」

月波はグラスを机に置くと、真っ赤になった丸く大きな瞳を手の甲で擦った。そしていつもの穏和な笑みを浮かべる。

「ありがとう、桜庭君」

『ありがとうね、尚』

まただ。また月波と兄の笑顔がダブった。

「……いや、別に。じゃあ、俺は、」

立ち上がりかけた尚基の腕を、

「………月波？」

月波が掴んだ。

「あ、あの…あのね、」

「何だよ、」

何だ、この空気…と尚基が怪訝に思っていると、

「も、もう少し一緒にいてくれない、かな……。な、なんかまだ不安定で、」

尚基の腕を掴んでいない方の手で、自分の心臓のあたりを掴んでいる。

顔を見れば、確かに蒼白い。

「月波、分かった。分かったから腕を放せ」

「あつ、ご……ごめんね、」

尚基は微かに息を吐きながら、再び腰を下ろした。

「少し横になつてたらどうだ？」

「眠つたら帰る気でしょ」

（何だよ、この恋人同士みたいな会話……）

尚基はまた一つ、微かな息を吐いた。

鈴宮晶菜は、風井晃輝の顔色が優れないことに気付いた。蒼い顔で、じつと課題のプリントを見下ろしている。

「晃輝君、どうかした？気分でも悪い？」

心配そうな晶菜に顔を覗き込まれ、晃輝は慌てて両手を振る。

「な、なんでもないです……すみません」

「……また謝る」

「あつ、す……すみません、」

「……………」

一生会話のループが続きそうな気がして、晶菜は一端口を閉じた。

そして真正面にある恋人の幼顔をじつと見つめる。

「あ、あき」

「晃輝君、私に何か隠し事してない？」

前々から思っていたことを、何の気なしに訊いてみた。謂わばただの勘、だったのだが、

「……………っ！」

晃輝は明らかに動揺した。息を呑み、更に俯く。

（あれ、凶星な訳？）

まさか、また“あれ”が、

「晃輝君、話して。もしかしてまた、」

「あ、ち、違うんです。“あれ”のことじゃなくて、」

泣き出しそうな顔で言い繕う晃輝を見ると、段々と意地悪したい気持ちになってきた。

「私のこと、嫌になった？」

「！そ、そんなことあるわけじゃないですか！」

バン！と机を叩きながら大声を上げたため、周囲から非難の視線が晃輝に向けられる。

晃輝はすぐに自分の醜態に気付き、小柄な体躯を更に縮こまらせた。顔が羞恥からか、真っ赤だ。からかい過ぎたか、と晶菜は反省する。「なら、何？私には言えないようなことなのかな？」

「あ、そ……その、以前お会いした、晶菜さんのお友達、の、」

「友達……あ、月乃のこと？」

「は、はい。その月乃さんのお友達の、」

「伊織君がどうかしたの？」

「ぼ、ぼく……聞いちゃったんです」

「聞いた？何を？」

「生徒会長の添山先輩に、生徒会長になって欲しいって誘われてるのを、」

「伊織君を？」

月波が生徒会長、と考えただけですぐに無理だろう、と晶菜は容赦なく思った。正直に言っつて、月波は人の上に立つような性質ではないと思う。

「伊織君に、ねえ。添山先輩、面白い人選するなあ」

晶菜が変な感心の仕方をしているその横で、晃輝が明らかに胸を撫で下ろすのが見えた。

（……………やっぱり何か隠してる、）

晶菜は周囲に目を遣る。放課後、二人は連れ立って学校を出ると、

市内の図書館に移動した。

そこで勉強をしていたのだが、

「晃輝君、出よう」

「えっ、で、でもまだ途中、」

「良いから」

晶菜が無表情で机の上を片付け始めるのを見て、晃輝も慌ててそれに従った。

片づけを終え、図書館から出ると晶菜がいきなりズイッと顔を思い切り近づけてきて、晃輝は慌てて仰け反った。

「あっ、晶菜さんっ？」

「晃輝君、まだ隠してることあるでしょ」

「な、ないです」

「嘘」

「な・・・ないですって、」

今にも泣きそうになりながら身を引く晃輝だったが、

「あ、晃輝君！！」

何処からか聞こえて来た女の子の声に、傍目からも分かるくらいに大きく動揺した。

ビクッと肩を震わせ、周囲をキョロキョロと見回す。

「・・・・・・・・」

晶菜も声の主を探す。

「晃輝君！こんなとこで何やってるの？」

いきなり現れた少女が、いきなり晃輝に飛びついてきた。彼自身だけでなく、普段落ち着いている晶菜ですらギョツとする。

「み、観神さつ、」

顔を真つ赤にしながら、晃輝が少女を必死に引き剥がそうとする。

「観神さん、だなんて。聡子って呼んでって言ったじゃない！」

にこにこ笑顔で、全く晃輝から離れそうな気配がない。加えて晶菜の存在にも気づいていないようだった。

「・・・・・・・・」

晶菜は冷め切った瞳で、目の前で恋人に抱き付いている少女を見る。というより自分と同じ制服だから、明らかに同じ学校の生徒に違いない。

緩いパーマのかかった、肩口まで伸びた茶髪。

血のように赤い唇。

微かに香る石鹸の匂い。

色気よりも可愛げのある顔立ち。

規定よりも少し短めなスカートから伸びる足は、ほっそりとしてとても白い。

「あ、晶菜さん・・・・・・・・つ、あの、この人は、」

クラスメートをたまたま見付けて喜びのあまり飛びついてきた。

そういうことなのだろう。

晃輝に限って、自分を裏切ったりなんかしない、そう思う。

（・・・・・・・・違う、思いたいんだ）

「？晃輝君、この人誰？あたしと同じ制服だし・・・・あつ、もしかして晃輝君ってお姉さんがいたの？」

わざとか天然か。晶菜の顔色を見て、お姉さんだなんてよく言えたものだ。

「み、観神さん、この人は・・・・ぼ、ぼくの、」

「・・・・・・・・・・」

晶菜はこの場にいたくなくて、無言で晃輝たちに背を向けた。

「あ、晶菜さんっ、」

「帰る」

言葉少なに吐き捨て、晶菜は一人で歩き出す。

晃輝は何とか聡子を引き剥がすと、慌てて晶菜の手を取った。

「あ、晶菜さん・・・待って、違うんです、観神さんは本当にクラスメートで、その、」

「ならそんなに慌てること、ないじゃない」

普段とは違う、氷のように冷たく凍った声音が晃輝の耳朵を打った。

「あ、」

晶菜は晃輝を見ようとしなない。見られない。

「・・・・何かあるから。何か疚しいことがあるから、慌てるんでしょう?」

「ち、ちが、」

「まだ何か隠し事があるって思ったけど、こう言うことだったんだ、」

「ちが、違うんです。本当に観神さんは、ただのクラスメート・・・わっ」

いきなり聡子に後ろから腕を掴まれ、晃輝は慌てて蹈鞴を踏んだ。

「ひどい、ただのクラスメートだなんて。だってこの前二人で屋上に、」

「みつ、観神さんっ!」

晃輝が泣きそうな声を上げるが、泣きそうなのは私の方だ、と晶菜は思う。

「ねえねえ、この人誰?お姉さんじゃないの?」

「ただの知り合い」

晶菜がそう言うと、晃輝の瞳が悲しみに歪んだ。

(何て目をするのよ。・・・私が悪いみたいに、)

「あき、あき・・・なさ、ちが・・・、」

「そうなんだ。あ、近所の人？」

「たまに電車で会うだけ。それじゃ」

晃輝から顔を逸らし、晶菜は一人で家路につく。

晃輝の脳裡に、母親に置き去りにされた記憶を呼び戻させる。

「ま・・・って、晶菜さ、」

「よくわかんないけど、行っちゃったね。ねね、この近くに美味しいケーキ屋さんがあるの！ご馳走したげる！」

聡子は一人浮かれ、茫然自失する晃輝の腕を引っ張る。

暫くは彼女に抵抗するように足に力を込めていたが、やがて諦めたように聡子に付き従った。

晶菜に嫌われた。そんな絶望を胸にして。

自分じゃないみたいだった。

普段の自分なら、晃輝が女の子と話したら、異性に馴れてきたんだろ？な、と思えた筈だ。

なのに今日はどうだ。ちゃんと晃輝から話も聞かず、勝手に自己完

結して、一人で勝手に怒って。もう最悪だ。
晶菜は自己嫌悪に陥りながら、本当は晃輝と二人並んで帰る筈だった家路を辿ったのである。

何だかんだで月波は寝入ってしまった。保健室でも結構眠った筈だが、それだけ疲れているのだろう。

（・・・まあ俺にも原因はあるわけだし、）

彼の寝顔を見ながら、尚基はガツクリと頂垂れる。

「兄貴、」

添山和音の言葉が頭から離れない。

本当に兄の悠基は生きているのか。和音の嘘ではないのか。

（兄貴と月波。どっちかを選ぶなんて、俺には……、）

選ぶなんてしたくない。そしてそれ以前に、兄が本当に生きているのか知る必要がある。そのためには、どうにか草薙本家に近づかなければ。

（だけど、どうやって？草薙亮輔とは少し接点が出来たが、あの様子じゃあまり深いことまでは知らされてないだろうし、）

あくまで飾りとは言え草薙の当主なのだから、もって自信を持つても良さそうなのに。

尚基はそう思う。

しかし正面から草薙にぶつかっていくことも出来そうにない。恐らく学園理事長の草薙緒爪にもこちらの情報は伝わっているはずだか

ら。

下手に、動けない。

（月波、悪いな。俺も部屋に戻るよ）

近くにあったタオルケットを月波にかけ、尚基は静かに彼の部屋を出た。

月波は穏やかな寝息で眠ったままだった。

悩み（後書き）

次はなるべく早く書き上げます……。

羽化（前書き）

本日二回目更新……。亮輔にとんでもないことが起こります……。

羽化

自宅最寄りのバス停に降り立った草薙亮輔は、小さく息を吐いた。ただ学校に行つて授業を受けて、そして帰宅するだけのことなのに自分は何をこんなに疲れているのだろうと、亮輔は自嘲する。

「……………ただいま帰りました、」

おじはまだ帰っていないだろうとも思うが、いつもの習慣で帰宅の挨拶をしながら玄関を上がった。

亮輔は台所に行くと、水道の水をコップに入れて飲んだ。はぁ、と息を吐く。

おじは今日は何時ごろに帰って来るのだろう。

（ずつとさっきの子達を追い掛ける訳はないし、）

そんなことを思っていると、先程自分が開けた玄関の戸が荒々しく開けられる音が響いた。

「あ、」

「亮輔、」

早くても夜の八時まで滅多に帰宅しないおじが、夕方に帰ってきた。厳つい顔に、青筋を浮かべて。

まるで亮輔を射殺さんばかりに血走った目で睨み付けている。

（に、逃げなきゃ、）

だが足がすくんで動かない。頭が真っ白になる。

「どいつもこいつも俺を虚仮にしゃがって!!」

ついにおじの牙が甥に向けられる。

「いや、」

亮輔の腕を掴み、狭い台所を離れ自分の部屋に彼を引き摺るようにして連れて行く。

「おじ、おじさん、痛いっ……………」

「緒爪のババアも、お前も、お前の両親も……………」

「あうっ……………」

亮輔を畳に引き摺り倒すと、彼の頬を力任せに打った。バシン！と物々しい音が響く。

「草薙の他の人間も、みんな俺を馬鹿にしゃがって……！」

今度は反対側の頬を打ち、苦痛と恐怖に泣き始める亮輔の上に跨がると、鬼のような形相で彼の細い首を掴んだ。

「がつ……！」

「よりによってお前みたいなチンケな餓鬼を当主に命じやがって！」

「お……じ、さ……や、め、」

「お前さえいなければ、お前さえいなければ！」

首を絞める手に、更に力がこもり、亮輔は目を白黒させる。

足を必死にばたつかせ、おじの手首を掴んでどうにか逃れようとす
るも、もともと非力な上に怒りに我を忘れているおじの力が強すぎ
て上手くいかない。

「あ………、」

目の前がチカチカし出す。おじの顔が徐々に霞んで行って……、
だが、唐突におじが手を放したから、意識を失うことにはならな
かった。

「うつ、げほつ、ごほつ……はあはあ、」

霞む目でおじを見上げれば、

「な、何だ……お前、」

顔に恐怖をありありと張り付けたおじが自分を見下ろしていた。

「……？」

「な、なんだよ……それは！」

おじが何を言っているのか掴めず、亮輔はただ彼を見返すしか出来
ない。

ついにおじが叫んだ。

「何なんだよ、その“羽”はっ！」

（羽？）

鳥に付いている、あの羽のことだろうか。

「ば、化けモンが……！」

状況を理解出来ないでいる亮輔にそう吐き捨てると、おじは脱兎の如く部屋を飛び出して行った。

「……けほっ、……っ、」

亮輔は首を押さえた。熱を持っている。

ふらつく足でどうにか立ち上がり、洗面所に向かう。おじの言葉が、引っ掛かる。

「はあ、はあ」

おじに殺されかけたという事実、亮輔は押し潰されそうになっていた。

玄関が見える洗面所に辿り着き、亮輔は顔を上げて……そして目を疑った。

「な、なに……これ、」

……鏡の中に、蒼白な、今にも死にそうな顔をした自分が映っている。

「どうな……っ、」

亮輔は力を失い、その場に崩れ落ちた。自分の見たものが信じられない。いや、信じたくない。

自分の背中から、真っ白な羽が生えているなんて。

「あ、ああ、」

完全な翼ではない。一本だけ、羽が生えている。付着しているだけなら、少しでも身動げば落ちるはずだ。でも、どれだけ払っても根が生えたように動かない。体の中に、根が生えているとしか思えない。

キモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイ、

「……っ、う、ああああああああっ!!」

人間であるはずの自分から羽が生えた。亮輔はその事実には叫ばないではいらなかった。おじに首を絞められていたことも忘れ、叫んだ。心の底から。

決意（前書き）

ブラック和音登場です……。

決意

放課後、亮輔と全く接することが出来ず和音は用事を済ませるとすぐに学校をあとにした。

（きつと真つ直ぐ帰った筈、）

バスに揺られながらも、早く亮輔に会いたくて仕方なかった。学校でも会っているのに。

「亮輔？いる？」

勝手知ったるなんとやら、和音はチャイムを押すことすらせずに草薙家に上がりこんだ。

「亮輔、亮輔！？」

洗面所を覗くと、そこに探し求めた人物が茫然自失と座り込んでいるのを見付けた。洗濯機に背中を預けて。顔は蒼白で、瞳は光を映していない。

「亮輔！亮輔！！」

名前を呼びながら肩を揺ると、ようやく反応が返ってきた。

「……………っ、」

「どうしたの？具合でも悪いの？」

和音が額に触れようとすると、

「さ、触らないでっ！」

手を払われた。

「り、亮輔？」

「触らないで、僕、に触らないで、」

ガクガクと体を震わせながら、怯えたように和音を見上げる。亮輔の両頬が微かに赤くなっている。

「またあいつに叩かれたの？」

「……………っ、」

「！首の回り、どうしたの！？」

ビクッと肩を震わせる亮輔。

「な、何でもない、もう帰って……………」

首の回りに赤い線が見える。自然に出来ようのないものを見せられ、黙って引き下がるわけがない。

「亮輔、何があったの！言いなさい！」

本当は手酷くはしたくない。だが、亮輔を守るには亮輔のことを知っていなければならない。怯む亮輔の細い腕を掴み、引き寄せる。

「やだ、放してよっ……………」

「亮輔、なに……………」

何があったか再び訊こうとした和音の口が閉ざされる。彼女は見てしまったのだ。

「亮輔、」

「っ、」

和音に腕を掴まれたまま、亮輔が俯く。

「和音ちゃん、どうしょ……………」

「……………」

亮輔に、ある青年を重ねる。草薙本家に幽閉されている、羽の生えた青年。弟を想い、静かに泣いている。

「ぼ、僕化け物になっちゃったよ……………」

亮輔の背から、彼の青年とは比べるべくもないが、一本の羽が映えていた。色は汚れない白。亮輔と心と同じで、全く汚れない。

「大丈夫、あなたは化け物なんかじゃない……………」

「で、でもおじさ……………」
「っひく、おじさんが、僕……………」
「つく、のこと、ばけ、化け物って……………」

和音は抵抗を止めた亮輔を、抱き締める。日差しを受けて温かくなっている黒髪を、優しく撫でる。

「大丈夫。あなたは、れっきとした人間よ……………」

「う、僕……………」
「どうしたら良いの？も……………」
「此処にはいられ、な……………」

「亮輔は、この家にいたいのか？」

少しずつ。少しずつ。真綿で首を絞めるように。

「あの男と……………」
「自分を傷付ける人間と、一緒にいたいのか？」

腕の中、華奢な体が強張る。

「痛いのは、嫌でしょう？それでもこの家にいたいのか？」

亮輔を守るのは、この私だ。亮輔を傷付け、泣かせる全てのものから。

結果的に亮輔を守れるなら、一時の苦痛には耐えてもらわなければ。我慢してもらわなければ。

「でも、あなたがどう思おうと、きっとあなたはこの家に残ることになるわ」

そう。今夜、あの男はこの家に戻らないのだから―否、今日からずっと。

「和音ちゃん、どういう、」

「あなたは、私を守るから」

何かを言いかけた亮輔の言を遮り、和音は決意を口にする。亮輔に初めて聞かせる、ずっと昔から秘めていた決意。それを、亮輔の前で口に出した。

「だから、泣かないで。一人で、抱えないで」
全てを、私に預けて。

その言葉は、言えなかったけれど。

「ありがとう、和音ちゃん、」

おずおずと発された謝礼に、和音はそれだけで喜びを感じた。

「亮輔？亮輔？」

抱き締めている幼馴染みがぴくりとも動かなくなった。どうやら眠りに落ちてしまったようだ。

「……綺麗ね、」

亮輔の羽を見ながら、和音は呟く。よりもよってあの男に一番に見られたことが腹立たしい。そして、化け物と罵られたことも。

（……でもまさかこんなに早く“羽化”するなんて。いつかは起こることだとは分かっていたけれど、）

人間であるはずの自分から、羽が生える。そんなの、亮輔でなくても不気味に思える。自分は人間ではないのだと突きつけられ、素直に認められる者などいないはずだ。少しの例外はあるにせよ。

（緒爪に知られるのは一番まずい。でもあの女の網は半端ない……何か手を打たないと、）

あの女に亮輔を渡してなるものか。

和音は決意を新たにする。

（そのためには、）

亮輔の“羽化”を知ってしまった男を、“処分”しなければならぬ。

垂れ込む前に。早急に、手を下さなければ。

「亮輔、すぐに楽にしてあげるからね」

亮輔を殴り、蹴り、痛罵するあいつを……、

「もしもし、ああ……私よ。ええ、あの男を、」

息を小さく吸い込み、亮輔が意識を手放しているのを確認し、冷徹な口調で告げる。

「……………殺せ」

退行

夜の帳が降りた頃、月波は目を覚ました。

「……………今、何時、」

今日は眠ってばかりだなあ、とぼんやりした頭の中で思う。

月波はベッドから起き上がると、目をごしごしと擦った。

光る壁掛け時計は、午後八時を示している。

「もう八時か……………」

このまま眠ってしまおうかとも思うが、そうすると風呂に入らないことになり明朝が慌ただしくなってしまう。シャワーという手もあるが、季節に関係なく湯冷めしやすい月波は滅多なことではシャワーは使わない。

（少しダルいけど、ちゃんとお風呂に入ろう……………）

月波がそう決めた瞬間、

「月波、起きたかあ？」

という声がしたような気がした。

「？桜庭君？」

トントントツ、と軽くドアをノックする音も聞こえる。月波は小走りで玄関に向かった。

「さ、桜庭君？」

ドアを開けると、風呂の用意をした尚基が立っていた。

「よう。よく寝たか？」

「あ、う……………うん。今日は、振り回してばかりで……………本当にごめんなさい、」

「い、良いつて。何ともねえからそんな泣きそうな顔をすんなって」
知らず知らず泣きそうな顔をしていたらしい。

泣き上戸にも困ったものだ。

「それよか、ほい」

放られたものを慌ててキャッチする。鈍色に光るそれは、部屋の鍵

だった。

「ほら、俺が出るとき月波寝てたし、内側から鍵は掛けられねえだろ？だから悪いとは思ってたんだけど、勝手に借りて鍵しといたんだ…… 幾らなんでも開けっ放しは無防備過ぎるし……」

「そ、そうなんだ…… ありがとう桜庭君」

細かな気配りに、月波は嬉しくなる。

月波が笑うと、しかし何故か尚基は苦しげな顔になる。

「……………ッ、」

「桜庭君？」

「そ、そうだ。俺、これから風呂に行くんだけど月波も行かねえか？」

「あ、僕も丁度行こうと思ってたんだ。準備して来るね」

尚基の様子は気にかかったものの、問うことは出来ずに月波は室内にとつて返した。…… 今日は色々あって本当に疲れてしまった。

お風呂に漬かって疲れを癒そう、と月波は思う。

「桜庭君、そう言えばご飯は食べた？」

再び玄関に行き、月波は尚基にそう問いかけた。

「メシはまだ…… あんまり食欲なくてな」

「だ、駄目だよ…… ちゃんと食べなきゃ体に悪いよ」

「けど、」

「あつ、今日迷惑ばかりかけたお詫びにお風呂のあとでご馳走するね…… って言っても大したもののは作れないけど」

基本的に食事は寮の中にある食堂で摂るが、それぞれの部屋にある簡易キッチンで食事を作り部屋で食べることも出来る。

「そ、別にそんなお詫びとか、」

月波が鍵を掛けるのを待ちながら尚基が言うつと、

「僕がしたいんだよ？…… あ、迷惑、かな」

「わ、分かった。喜んでご馳走になるからそんな顔をすんな……」

「うん。じゃあ楽しみにしててね」

につこり微笑み、エレベーターに向かう親友の後ろ姿を尚基は複雑

な表情で見つめた。

時間が少し遅めなせいか、浴場にはあまり生徒の姿はない。

「ふう〜っ……………」

湯に漬かるや否や、月波が思い切り深いため息を吐いた。

「お前、すげえ疲れたんだな」

尚基は思わず苦笑する。

「ん……………」

白い頬がほんのりと赤く染まっていく。

「月波、気持ちいいからって寝るなよ」

「分かってるよう……………」

などと言いながら、月波は既にうとうとし始めている。

尚基はそんな彼の頭を軽く叩く。

「俺にメシをご馳走してくれるんだろ？」

そう言くと、月波がハッとして体勢を元に戻した。

「わ、分かってるよ」

月波は照れ隠しか怒ったような口調で言うと、湯船を出て体を洗うためにそそくさとシャワーの方へ歩いて行く。

（……………メシ、か）

近しい人に手製のご飯をご馳走になるのはいつぶりのことだろうと尚基は感慨深く思う。

「……………今日は、疲れた」

考えなければならぬこと、しなければならぬことは沢山あるのに、頭が、体が、言うことを聞かない。

とりあえずまた明日からにしよう、と決めて尚基も湯船から出た。

「じゃあ座って待ってて。軽いものを作るから」

風呂から上がったあと、尚基と月波は再び月波の部屋に戻っていた。月波は笑顔で尚基に待つように言い、簡易キッチンへ消えた。

（・・・ちよつと浸かりすぎた、）

尚基はどちらかといえば鴉の行水タイプなのだが、月波はゆっくり浸かるタイプのように、何となく彼に付き合ったのがまずかった。体は火照りまくりだし、少しだけ気持ち悪い。

「・・・月波、」

「桜庭君？」

「ちよつと湯中りしちまったみたいなんだ・・・水、貰って良い？」

「うん。ちよつと待ってて、」

「悪い、」

月波が冷蔵庫からペットボトルのミネラルウォーターを取り出すのを見ながら、尚基は頭全体が鈍く痛み出したことに気付いた。ズキンズキン、と定期的に痛みが響く。

「・・・ッ、」

足元がぐらつく。目が、霞む。思わず膝を着く。

「さ、桜庭君!？」

ガシャンッ！！と硝子の割れるような音が尚基の鼓膜を震わせた。

「ど、どうしたの、大丈夫っ！？」

「……に、き」

「え？」

慌てて尚基の前にしゃがみ込んだ月波の腕を、いきなり彼が掴んだ。

「桜庭君、大丈夫？吐きそう？」

月波の問いに、尚基がゆるゆると首を左右に振る。

「じゃ、じゃあどうしたの？顔が真っ青、」

「兄貴、どうして……？」

「え？」

尚基が今にも泣き出しそうな顔で、月波にグイッと自分の顔を近づけた。

「どうして兄貴に羽が生えたの？」

「は、羽？」

「どうして俺じゃなかったの？落ちるのは俺で良かったのに、」

尚基が何を言っているのか、月波には全く掴めない。

どうして今にも泣き出しそうな顔をしているのか。

ただ唯一分かるのは、尚基が月波と誰かを重ねて見ているのだということ。

恐らく、いや……きつと兄と。

だが“羽”、というのが分からない。“羽が生えた”。文字通りに考えれば、尚基の兄に羽が生えた……ということなのだろうが、「ねえ兄貴！どうして兄貴はあの時、俺を助けてくれたの？なんで俺も一緒に連れて行ってくれなかったの！？」

「さ、桜庭君、落ち着いて！僕は月波だよ、ねえっ」

「兄貴、どうして……どうして、」

「桜庭君、」

どうしたら良いのだろう、と月波が惑っていると急に彼の鼻に焦げ臭い匂いが漂ってきた。

「あっ！！」

月波の大声に、尚基がビクツと体を震わせて月波からパツと離れる。
「ご、ごめんね桜庭君っ」

一言謝り月波は立ち上がると、慌ててコンロの火を止める。
フライパンに火を通していることをすっかり忘れていたのだ。

「危ない危ない・・・」

月波が冷や汗を拭っていると、背後で尚基が立ち上がる気配を感じた。

「桜庭君？大丈夫？」

紙のように真っ白な顔をして、今にも倒れそうな親友が心配で仕方ない。

「・・・月波、やっぱり今日は無理みたいだ。ごめんな」

「う、うん・・・」

酷く辛そうな人間に、それでもご飯を食べて行つて欲しいなどと言える空気ではない。

月波がおずおずと頷くと、尚基は自棄に透明な笑みを浮かべるとスツと月波から目を逸らした。

「お休み、月波」

「お、お休みなさい・・・」

月波が見送る前で、玄関のドアが静かに閉まった。

「桜庭君、」

親友の身を案じながらも、彼の心の深奥を覗くことは月波には出来そうになかった。

変化

……穴があつたら入りたい、というのはこういう気持ちを言うんだな……と自室への道を歩きながら桜庭尚基は自滅していた。

（俺はなんてことを、）

恥ずかしくて仕方ない。迷子になった幼児でもあるまいに。

（……くそっ、全部生徒会長のせいだ）

添山和音が兄の悠基が生きているなどというから。

期待、してしまう。

兄を、求めてしまう。

（そりゃあ月波を兄貴と勘違いしちまうつてのも、なあ……）

自分の体が自分の心から離れてしまったように、先程は感じた。月波を兄と見なして矢継ぎ早に話している自分を、もう一人の自分が頭の中で恥じながら見ていた。

（……もう寝よう、）

部屋に入り、薄暗い部屋のベッドに倒れ込む。

頭が鈍い痛みを放っているが、体の疲れがそれを凌駕する。

（兄貴、月波、）

完全に眠りに落ちる間際、兄と親友の顔が完全に重なった。

桜庭綾羽が夕食を持って悠基を幽閉している牢に行き扉を開けると、微かだが反応があつた。

ピクツと痩せ細った肩を震わせ、少しだけ目を綾羽に向ける。

「悠基様……？」

綾羽が名を呼ぶと、そっと目を伏せる。

「ゆ、夕食をお持ちしました、」

待たれているのは自分ではなく、彼の弟だ。

分かっているはずなのに、胸が痛む。

（……余計なことは考えるな、）

綾羽は己を叱咤し、悠基の前に食事を置く。だがいつもと同じように、悠基は食事に見向きもしない。普段の綾羽なら、食事を置いて地上へ戻るのだが今日は違った。

「悠基様、ちゃんとお食事をお召し上がり下さい。ずっと召し上がっておられないでしょう」

悠基からの反応は一切ないが、ここで怯んでいるわけにはいかない。綾羽は悠基の前に回り込むと、更に言い募る。

「……………お召し上がり下さい。今のあなたをご覧になったら、」
卑怯だとは分かっている。でも、それでも。

「……弟様が悲しまれますよ」
こっかてきめん
効果観面。

「おと……と、な……お、」

「そうです、尚基様です。衰弱した今のあなたを見たら、きっと悲しまれます。それでも良いのですか？」

「なお、悲し、む……や、」

片言ながら、悠基が喋っている。それだけで、胸がじん…と熱くなつた。

「だから、お召し上がり下さい。少しでも、構いませんから、」
「……………」

悠基が綾羽を見た。ぼんやりとした瞳で。綾羽の顔に一体何を見ているのか。

昔、自分の頭を優しく撫でてくれた頃の悠基を思い出してまた胸が熱くなった。

「悠基様、」

「・・・め、たべ・・・くない、」

食べたくない、と言ったのだろう。

本当は食べて欲しかったが、声を聞かせてくれただけで上出来だろうと綾羽は矛を収めることにした。

「分かりました。一応このままにしておきますから、気が向いたら召し上がってくださいね」

悠基が微かに頷き、すつと綾羽に背を向けた。

綾羽は悠基に合わせてしゃがんでいた足を伸ばし、立ち上がる。

「失礼します」

羽だけが綾羽に応えるように小さく揺れた、ように見えた。

（・・・悠基様、）

悠基がどれだけ弟の尚基を大事に、そして愛しく思っているのがよく分かる。

・・・いや、そんなこと、綾羽はずっと昔から知っていた。

（以前のように、悠基様には穏やかに笑っていて欲しい、）

こんな日の光の届かぬ地下に幽閉されているべき人ではないと、綾羽はずっと思っている。

綾羽は地上に上がると、白衣のポケットから携帯電話を取り出した。

「・・・主任？はい桜庭です・・・申し訳ありません、明日、急遽有休を使わせていただきたいのですが」

玄関のドアが激しく連打される音で、草薙亮輔は目を覚ました。

「う……ん、」

おじが帰ってきたのだろうかと思い、慌てて起き上がり玄関に走る。おじに殺されそうになったことも、自分の背中に一本の羽が生えたことも全く忘れて。

「い、今開けます、」

たどたどしく鍵を回して、ドアを開けると見覚えのある壮年の男がなだれ込むようにして隙間に体をねじ込んできた。

「亮輔君！」

町内会長だった。

粟を喰ったような慌てようで、目を真っ赤に血走らせている。

「ど、どうしたんですか？」

電気を点けておらず周囲が暗いため、町内会長は亮輔の“羽”に気付かなかったようだ。

「た、大変だっ、あんたのおじさんが……！」

おじさん？

亮輔は首を傾げる。おじに何かあったのだろうか。

「おじさんが死んじまったって……！」

瞬間、亮輔の頭の中は真っ白になった。

面白いことになってきたな、と草薙緒爪はもたらされた情報に不気味な感想を抱いた。

「そうか。“あれ”は死んだか、」

亮輔は一体どんな心持ちだろうかと思う。

自分を虐げて来た人間が死んだ。それを知ったとき、亮輔はどうするのか。

（・・・・・・さて、問題は“あれ”を誰が殺したか、だよな）

幾つかの候補が緒爪の頭の中で浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返していたが、どれも違うような気がした。

（怪しいのは添山の娘だが・・・・流石に人殺しまではせんだろう。幾ら亮輔のためとは言え・・・・）

何かしつくり来ないもやもやが緒爪を悩ませる。

「まあ、時が来れば自然と分かるだろう、」

緒爪はそう結論付けて、“あれ”の遺骸を見るべく自分の居室を後にした。

ついにこの時が来たか、と添山和音は完全に冷めきった瞳で草薙亮輔の後頭部と彼のおじの亡骸を当分に眺めていた。

「おじさん、おじさん、ねえ、」

何が悲しいのか、亮輔がぼろぼろと大粒の涙を溢しながら何度もおじさんと涙声で呼ぶ。

（亮輔、どうして泣いているの？あなたを沢山傷つけてきたクズなのよ？死んで、嬉しくないの……………？）
時刻は午前零時半。亮輔におじの訃報が伝わってから数時間は経っていた。

「おじさん、どうして、何で……………」

場所は亮輔の……………もといおじの持ち家。普通ならば死体は死因に関係なく警察が引き取ることになっているが、草薙は例外だった。草薙に連なる男の亡骸は、数時間前に甥を殺しかけた場所に戻っている。

（やつぱり羽がある……………。今は私と二人だけど、その内草薙本家が乗り込んで来るはず、）

そして亮輔と対面するはずで、その時に亮輔に羽が生えていることがばれてしまえば……………亮輔は“変異種”として囚われるだろう。

（それだけはダメ……………亮輔をあんな光の当たらない場所に押し込ませるわけにはいかない……………）

この男の訃報は当然本家にも伝わっているはずで、あいつらが乗り込んで来るのも時間の問題だろう。

(どうする?)

羽のことさえあれば、どうにかなる。だが上手く隠せるのだろうか。

布で隠す?

駄目だ。違和感があり過ぎだ。

和音は腕時計に目を落とす。耳に、亮輔の囁り泣くのが聞こえる。段々、苛立ちが募る。

「何、泣いてるの?」

「ぐすつ……、え?」

誰のためにしたくもない殺しをさせたと思っているんだ。

和音は亮輔のすぐそばに膝を着くと、呆けている彼の腕を掴んだ。

「いつ、」

「何が悲しいのよ」

じいつ、と目を見つめながら疑問をぶつける。

「か、かず……、」

「こいつがどれだけあなたを傷つけたか……どうして自分を傷つける人間が死んで泣いてるのよ!!」

ビクッ、と体全体を震わせ、亮輔がギョッときつく目を閉じた。

「ねえ、喜びなさいよっ!!」

「やめ、イタァッ、」

知らず知らずの内に亮輔の腕を掴む手に力を込めていたらしい。

和音は我に返って、亮輔の腕を解放する。

「……………」

亮輔が完全に怯えた瞳で和音を見る。

「りよ、」

「今日の和音ちゃんは怖い……、」

「亮輔、違っの……、」

和音がどうにか言い繕った時、

「おやおや、こんな深夜、死体の前で痴話喧嘩かい?」

草薙家“裏”の当主、草薙緒爪が数人の従者を従えて姿を現した。

拒絶と違和（前書き）

ブラック和音、再臨……。

拒絶と違和

「お、大叔母様、」

震える亮輔に、緒爪は意味深な笑みを見せる。

「やあ亮輔。加減はどうだい？」

場違いな挨拶をする女を、和音は焦燥感に苛まれながら見上げる。

（この女が来ることは分かっていたのに……警戒心が無さすぎた……っ、）

亮輔の“羽”を隠せていないというのに。

（それにしても緒爪が反応しない……見えていないふり、か？）

だが緒爪ならば、“羽”に気付いたら何か行動を起こす筈だ。

和音は緒爪に不審に思われぬよう、目線だけを亮輔の背中に向けた。そして瞠目する。

（は、羽がないっ！？）

確かに洗面所で亮輔の背中に目撃した、一枚の羽。それが、今は綺麗に跡形もなく……消えている。

一体、どうして。

「亮輔、死体の回収に来た。邪魔はするなよ」

「ま、待って、」

か細く反駁する“表”の当主を、緒爪がぎょろりと睨み付けた。

「……何だね、」

「いち、一日待って下さい、」

「はあ？」

「一日だけ、おじさんをこの家で休ませてあげたいんです……。ここは、おじさんの家だから、」

「構わん、連れて行け」

緒爪は亮輔の願いを一蹴し、背後に控えていた三人の男たちに命令を下す。

和音は緒爪が死体を連れ出すのは大歓迎だから、彼らの邪魔になら

ぬように移動する。だが、

「待つて下さい、待つて……………」

亮輔は頑ななおじの亡骸を運ばせまいとしている。

何と、亡骸を自分の体で覆ったのだ。

「!？」

流星の緒爪も啞然としているが、和音も驚いた。亮輔が何をしたいのか理解出来ない。

「亮輔、退ける」

「嫌です、一日だけで良いんですつ、」

「私の命令を聞くことすら出来んのか」

緒爪の口調が徐々に荒くなってくる。このままでは亮輔に危害を加えられてしまう、と和音は危惧したのだが……………、

（まあ、良いわ。少し反省して貰わないと）

亮輔のためを想い、彼に暴力を振るう人間を消し去ったのに亮輔はおじが死んだことを酷く嘆き悲しんでいる。それが赦しがたいから、少し緒爪たちに灸を据えられるべきだと思った。だから和音は傍観を続ける。緒爪はどう出る？

「亮輔、最後にもう一度言つ。……………その上から退け」

それに対する亮輔の返事は、

「い、嫌です」

だった。

「構わん、強制だ」

緒爪の命に、男たちが動く。

「嫌だ、お願いですから一日だけつ、」

一人に肩を引っ張られても、亮輔は動こうとしなかった。業を煮やした男に髪を掴まれる。

「……………つ、」

それでも嫌々と首を左右に振りながら緒爪に懇願する。

「……………ねがつ、お願いです大叔母様、一日だけ、」

「くどい」

「……………はうつ、」

首元に男の太い腕が絡み付き、亮輔が喘ぐ。

必死にもがいて男の腕から逃れようとしているが、

「……………っ！」

成功しそうにはない。

亮輔の涙で濡れた瞳が和音に助けを求めてくる……………が和音はそれから目を逸らすことで助ける気はないことを示す。

「かずっ、」

「可哀想にね。この場で唯一の見方だったはずの女に見捨てられて男ががら空きの亮輔の鳩尾に容赦のない拳を叩きつける。

「……………う、えっ…、」

襟首を掴まれ、畳の上に放られる。

「全く、手間をかけさせる。連れて行け」

緒爪の号令を受けて、二人の男がそれぞれ亡骸の両腕両足を持つと、そのまま亮輔のおじを連れ出す。

「待つて、ま……………っあうつ、」

尚も追いつがろうとする亮輔の手の甲を、緒爪の足が踏みつけた。勢いは殺されていたものの、なぶるように徐々に力を込めて行く。

「っ、お……………おばさま、」

「大人しくしていなさい。お前に出来ることは何もないのだからね」

「っねが、しま……………す、お願いします」

「……………分からねえ。あの男は甥のお前に何をしてくれたと言うんだ？確かに衣食住は補償されていたかも知れんが、大酒飲みの穀潰しでしかなかったんじゃないのか？」

「……………っ、そ、それは……………でも、」

「兎に角！あの男は本家が茶毘に付す。亮輔、」

緒爪は亮輔の手から足を退かすと、彼に視線を合わせるためにしやがみこむ。恐怖から顔を逸らそうとする亮輔の顎を掴み、じいっと揺れる瞳を覗き込み、

「妙な真似は……するなよ、」

氷のように冷たい声音で忠告をする。亮輔がビクツ、と体を震わせる。

「私はお前が好きではないが、嫌いではない……だから私がお前を殺すようなことにはならないようにしてくれ」

「……………っ、」

「ではな」

緒爪はスツと立ち上がると、立ち去ろうとした。

「ああ、そうだ」

しかし彼女はピタリと足を止めた。しかも、和音の真横で。そして、全く身動きしない和音に、言う。

「妙な真似をしない方が良いのは、貴様もだよ。添山和音」
意味深な笑みとともに。

「……………」

それに和音は反応しない。

「亮輔を焚き付けるのは止せよ？あれは不安定に過ぎるから、下手をすれば余計な化学反応を起こすぞ」

「……………」

「相変わらず可愛くない餓鬼だ」

ポソツと呟くと、緒爪は今度こそ本当に部屋を出ていった。

「……………」

部屋には、壁に凭れたままの和音と伏せて恐怖に震えている亮輔が残された。

「おじさ……………おじさん、」

「……………」

まだ言うか、と和音は静まっていた苛立ちが再び胸に渦巻いてくるのを感じた。

「どうしてよ」

「ひっ、く……………う、」

「分かんない、どうして？あんな奴、死んで当然じゃないっ！！」

「和音ちゃ、何で……」

「だって亮輔のこと、一杯叩いたじゃない、一杯殴ったじゃない、亮輔が、亮輔が痛いつて言うから、」

……だから殺させたのに。解放されたと、喜んで貰うために。なのに、どうして。

「なのはどうして、泣くのよ……どうして？」

あいつがいなくなることが、亮輔のためになると思った。思ったのに。

「和音ちゃん、僕は、」

亮輔が何かを言おうとするのを、和音は耳を手で塞ぐことで拒絶した。

「聞きたくないわよ、きれいごとなんて」

亮輔が目を見開き、和音は耳を塞いだまま薄く笑う。ゾクツと亮輔の背筋を激しい悪寒が走る。

（怖い、）

「あんたは心の中では本当は喜んで……あいつが死んだことを」

「和音ちゃん、」

「なのになぜ悲しむフリをするの？良い子でいるため？」

和音がゆっくりと亮輔に向かって歩み寄って行く。

「もろ手を上げて喜びなさいよ。あいつが死んで良かった、殺されて良かったって」

「和音ちゃん、止めて、」

違う、こんなの和音ちゃんじゃない……亮輔は泣きそうになりながら、そう思う。

「偽善者ぶるのは止めるよ。ヘドが出るから」

和音は緒爪のようにしゃがみこみ、やけに透明な瞳で亮輔を凝視する。

「和音ちゃ、」

「ねえ、私のこと、好き？」

「えっ、やっ、」

いきなりだった。和音の唇が亮輔の唇と重なったのは。

「っ！」

突然の行為に、亮輔は目を見開いて固まる。

しかし和音の手が下に下りてきたのを感じたときは流石に抗った。彼女を突き飛ばしたのだ。

「か、和音ちゃん、」

「……………帰る」

いきなりそう言い、にこりもしないまま彼女は立ち上がりふらふらと部屋を出ていく。

「な……に、どうなっ、て……、」

和音が何を想ってキスなぞして来たのか、亮輔には分からない。ただ今にも姿を消そうとしている幼馴染みの少女が、いつもの少女とは違うことだけは、分かった。

「……………」

亮輔は和音が口付けた唇を、震える手でなぞった。

拒絶と涙（前書き）

『絡まる血』、お久しぶりの次話投稿です。
ちよっと伸び悩んでます、最近。

拒絶と涙

……頭の鈍い痛みで目が覚めた。

「ん、」

桜庭尚基は枕元の時計を掴み、まだ重たい目でどうにか数字を読み取る。

……午前4時半。いつもならまだ夢の中の時間だ。

「はあ、だりい……」

いつも以上に体が重く、ダルい。

頭は痛い上に、ぼんやりもする。

「っ、」

一瞬、目眩がして尚基は時計を床に落としてしまう。

「くそ、風邪引いたか、」

手も首元も熱いし、呼吸もしにくい。

熱がある、と思う。

尚基はどうかベッドから這い出し、薬箱を置いている棚まで歩く。薬箱から体温計を取り出し脇に当ててから、尚基は再びベッドに体を投げ出した。

「はあ、」

……たった3分が酷く長く感じられる。

やがてぴぴぴ、と軽い電子音がして尚基は気だるそうに体温計を目の前に翳した。

38度5分。完全に風邪だ。これは休むしかない……が今学校に電話しても誰も取らないから、もう少し時間が経たないとダメだ。

（だけど今から寝直したら、きつと俺は授業が始まるまでには起きない……とすると、）

尚基は携帯を掴み、月波のアドレスを液晶画面に表示させる。

月波に休むことをメールして教師に伝えてもらう。そう決めて、新規メール作成画面に移す。言葉少なに熱があり学校を休むことを書

き、送信する。

“送信完了”の文字を確認し、尚基は携帯を手放した。

月波の起床時間は大抵似たり寄ったりで、午前六時過ぎである。

「ふああ、もう朝かぁ……………」

いつもの言葉を呟きながら、うぐんつと背伸びをする。

朝は目覚めが良いので、すっきりと目を覚ます。

「あ、メールが届いてる……………桜庭君？」

普段は朝から携帯を弄ったりはしない月波だが、今日は何故か手が伸びた。

液晶画面に尚基の名前を見て取り、何かあったのだろうかと不安になる。慌ててメールを開き、かじりつくように文面に目を通す。

内容は、風邪を引いたから学校を休む。出来たら担任に伝えて欲しい、といったことだった。

「桜庭君、風邪引いちゃったんだ、」

大丈夫だろうか。熱は？頭は痛くない？お腹は？気分が悪い？嘔吐して苦しんでいないだろうか。

不安が不安を呼び、月波は電話をしようかとも思ったが、ちゃんと眠れていたら起こしてしまうことになる。

(…………放課後、そうだ放課後にお見舞いに行ってみよう)

尚基の寮の部屋番号は知っている。放課後にすぐ学校を出てお見舞いに行く事に決めた。

「ちゃんと先生に伝えとかないと、」
月波はベッドから立ち上がると、食堂へ朝ご飯を食べるために着替えを始めた。

倉沢翼は、その言葉に目を丸くした。

「か、母さんマジかよ」

「そうみたいだよ・・・何あんたがショック受けてるの？」
目玉焼きを焼きながら、翼の母親は怪訝そうな声を出す。

「草薙浩介が・・・、死んだ」

昼日中から酒に溺れ、罵詈雑言を口走りながら街中を闊歩する。
そして深夜に帰宅すれば、甥である亮輔に暴行を加える。毎日がただそれらの繰り返し。

「ほら、さっさと顔洗って来なさい。バスに乗り遅れるわよ」
「あ、うん・・・」

言われるままに洗面所に向かいながら、亮輔は大丈夫だろうかと思っただけだ。

「では悠基様、行ってきますね」

桜庭綾羽は白衣を羽織ってはおらず、眼鏡はコンタクトに変えている。着ているものもぴしとしたスーツで、よそ行きの様子を示している。

「……………」

悠基は相変わらず無反応で。綾羽は瞳を揺らがし、言うかどうか迷っていた言葉を吐いた。

やはり自分も桜庭の人間だな、と諦めにも似た想いを抱きながら。

「あなたの弟に会いに」

「、」

ぴくりと悠基の肩が微かにぶれる。

「あなたが沈黙を破る程に大きな存在に、会いに」

「あ……………」

「行ってきます」

思惑は、敢えて語らない。綾羽は軽く悠基に礼をすると、牢を出た。悠基の視線を背中に感じながら。

朝を迎えるまで、一睡も出来なかった。亮輔はおじの部屋で横になったまま、真っ赤に充血した瞳をぼんやりとさせている。

「朝……………」

そっ、朝だ。早く支度をしなければ。

体が重い。……重いけれど行かなければ。緒爪に叱責される。

（そうだ、羽……）

よろよろと洗面所に行き、恐る恐る鏡を覗き込む。

「あれ……、」

だが恐れていた光景はなく、亮輔は目を疑った。啞然とする。頭
の理解が追いつかない。

「どうして？ 昨日のは……夢？」

そうは呟きながらも、昨日のことは夢ではないと確信している。

おじが死んだことも、夜に緒爪が配下を連れて訪れたことも、そし
て、

「……………っ、」

和音がキスして来たことも。羽が生えたことも、現実だった筈。で
も、羽はない。和音の唇の感触は明確に残っているのに。

「どういう、こと？」

異形である羽がなくなったのだから喜ぶべきなのに。どうしてこん
なにも釈然としないのだろう。

亮輔は茫然と鏡の中の、色の悪い自分の顔を見詰める。頼りない、
弱々しい表情。

「あ、」

鏡の中の自分の唇に朱が滲み、つつ、と顎に向かって流れる。

どうやら唇をきつく噛んでしまったらしい。亮輔は我に返って、腕
で血を拭った。

「行かなきゃ、学校……」

うわ言のように呟いて、亮輔は歯ブラシを手に取った。

羽のことは、唐突にどうでも良くなっていた。

「ねえ和音、やっぱり今日は休んだ方が・・・ふらふらじゃない、」
心配顔の母親に無理矢理笑みを見せ、和音は肩を竦めた。

「大丈夫よ。元気元気」

「でも、」

「大丈夫よ。じゃ、行つてきます」

休めという母の声を聞かず、和音は自宅を後にした。

「・・・」

バスを待っている間にも、ちらちらと顔を窺われて亮輔は居心地悪く思う。だが表立って身動きすることも出来ず、亮輔は俯いて立ち尽くしていた。

「ねえ、あの子」

「やばいよ、やめときなよ」

中には声に出して亮輔のことを言う者までいた。

（バス、早く来てくれないかな、）

幸い和音の姿はなく、それだけは安心できた。

きつと姿を目にしただけで平静ではいられない。

まだ、和音の唇の感触が残っている。

（和音ちゃん、）

彼女のことをあてどなく思っていると、やがてバスがその姿を現した。

尚基のことを案じながらも、月波は一人で寮を出て登校した。

「あつ、草薙先輩！」

つい最近知り合った先輩の後ろ姿を見つけ、月波は思わず大声で彼を呼んだ。

「！」

足を止めても振り返りはしない彼を不思議に思いつつ、月波は小走りで走り寄った。

「先輩！……先輩？」

「………あ、伊織君、」

草薙亮輔の顔色は真っ白で、今にも倒れそうに見えた。

「せ、先輩？大丈夫ですか？」

月乃に接する感覚で、月波は何気なく彼の額に手を当てようとした。
「！」

だがその手は敢え無く亮輔に払い落とされる。

「あ、」

「っ、ごめ……ね、伊織君、」

「ど、どうしたんですか？具合でも悪いんですか？」

「………らないほうが良いよ、」

「え？」

「僕には、関わらない方が良いよ」

そう言うや否や、亮輔は逃げるように校舎に向けて走り出した。月波は彼の様子が気になり追おうとしたが、

（先輩、泣いてた・・・？）

ちらりと見えた涙が月波を拒絶しているような気がして、足が鉛になっちゃったかのようにピクリとも動かなかった。

接触

「桜庭……」

綾羽が渡した名刺を、副理事長は穴が開くほどに凝視している。

「桜庭綾羽と申します。以後、お見知り置きを」

「はあ……」

「今日、理事長は」

「り、理事長は所用で席を外しておられます……それで、桜庭の方が何用で？」

落ち着きなく、綾羽や室内、窓の外など視線がさ迷う。

（確か、こいつは外戚だったな……）

そう考えながら、綾羽は事務的に応える。

「単刀直入に申し上げますが、この学園に、桜庭尚基という生徒がいるはず……彼に会いたいのですか」

「桜庭……あなたの親族何かですか？」

不思議そうに訊く男に、綾羽は、

「会えるのか会えないのか、はつきりしていただけませんか？」
ときっぱりとした口調で言う。

「は、はあ」

自分の子どもでもおかしくはない年代の綾羽に対し、かなり気後れしている副理事長に、綾羽は内心で憂慮の溜息を吐いた。

（あの理事長に、この副理事長。……この学校、大丈夫なの？）

「面識はありませんが、桜庭尚基という生徒が私の家系に連なる者ということは分かっています。上の許可も取って参じているのですから、そのあたりも考慮していただけると助かるのですが」

「わ、分かりました……あの、今すぐ呼んだほうが良いのかね」
「出来ましたら」

学生の本分が、とぶつぶつ言う男の声は無視して、綾羽はソファの背もたれに背を着けた。

ようやく会えるのだ。桜庭悠基の、弟に。彼が我が身にかえても守ろうとし、そして実際に守った存在。一体どんな少年なのか。

「あの、」

「はい」

副理事長が机上の電話を置き、綾羽に何うような目を向けて来る。

「桜庭尚基ですが、今日は欠席のようです」

「欠席？」

「はあ。何でも風邪で体調不良らしく……」

それを聞くや否や、綾羽はソファから立ち上がると、

「彼は寮生ですよね？」

「え、」

「至急、寮の部屋番号を調べてください。あと、合鍵の手配も」

「え？」

「直接、寮に行きます」

決然とした口調で、綾羽は言い切った。

… 今度の眠りの中では、夢を見なかった。だからこそ平穏な眠りをずっと貪っていたかったのに。

（っ、誰だよ……）

チャイムの音と、ドアのノック音が等間隔に交互に鳴らされ、目を覚ましたときの尚基は苛々の絶頂状態であった。

それでも無視していようと思ったのだが、いつまで経ってもその音は止みそうになかった。

「ああ、うるせえな・・・っ!!」

苛々と唸り、尚基はベッドから出ると、ふらつく足取りでドアまで移動する。

「誰だよ！」

勢い良くドアを開けると、そこには全く面識のない女性が立っていた。意思の強そうな、キリツとした眉と澄んだ瞳が印象的で。

「……あなたが、桜庭尚基君？」

だが女性の方は、尚基のことを知っているらしい。顔以外で、だが。

「……誰？」

尚基が回らない頭で必死に彼女が知り合いかどうか考えていたのだが、つい誰何の言葉が出てしまった。

尚基の問いを受け、女性はスーツの胸元から名刺入れを取り出し、尚基に一枚を渡した。

「桜庭……？」

自身と同じ名字に、思わず繁々と女性を観察してしまった。こんな親戚がいたのだろうかと思うと同時に、一気に警戒心が湧く。自分と兄のことを知っている可能性もあるからだ。

（兄貴……）

不意に、添山和音の言葉が思い出される。

兄が、死んではないかと。自由を奪われ、閉じ込められていると。

「桜庭綾羽と言います。少し、話があるの」

尚基は震える口で、先回りをする。

「……兄貴のこと、ですか？」

「！」

瞬間、無表情にも近かった綾羽の表情が、強張る。

それは、凶星の証拠だった。

接触 2

桜庭綾羽は、動揺し呼吸が乱れている少年を観察するように見詰めている。

流石にすぐに悠基の話かと聞かれたときは動揺してしまったが、すぐに平静を取り戻す。

（この少年は、悠基様が・・・兄が生きていると知っている？）
もし知っているとして、何故知っているのだろうか。

（・・・桜庭の縁者が、近付いた？）

だが綾羽の知る限り、そうした行動をとった者はいないはずだ・・・あくまで桜庭本家の人間という条件付きでは、だが。

（風邪、と言った、わね）

顔が赤く、今にも倒れてしまいそうだ。

背は高く、顔立ちも端正なのだろうが、調子の悪さがそれにブレーキをかけてしまっている。

寝ぐせのついたぼさぼさの髪、腫れぼったい目。

だが確かに悠基によく似た面影を持っている。

（これが、悠基様が守ろうとし、実際に守った弟・・・）

「あの・・・」

完全に黙ってしまった綾羽に、尚基が声を掛けてくる。

「あの、立っているのお互いに辛いと思うので、あがりませんか・・・？部屋、汚いですけど・・・」

「・・・あなたが宜しいのなら」

尚基は立っているのが明らかに辛そうだ。綾羽は彼の提案に頷き、部屋に上がらせてもらうことにする。

「どうぞ、」

ついに堪えきれなくなったように咳を始めた尚基について、綾羽は先へ進んだ。

「けほっ…、あ、どうぞ……」

尚基が言うほどに部屋は汚くはなかった。整頓されているとはいえないが、高校生男子にしては綺麗な方だろう。

尚基は何処からか丸い座布団を出して来て、綾羽に差し出した。

「ありがとう」

そして尚基自身は、今まで寝ていたのであろう乱れたベッドの上に腰掛けた。熱に浮かされた瞳が、綾羽を見詰めている。

「……兄貴のことって、何ですか？」

「その前に、一つ質問があります」

「何ですか？」

「……桜庭尚基さん。あなたは、お兄様のことが好きですか？」

「当たり前です！」

いきなり、尚基が声を荒げた。

「俺は、兄貴が大好きだったし、今だって大好きだ。優しくて、強くて、俺を守ってくれた……！こんな、取り柄のない俺を……自分の人生と引き換えに、」

瞳から溢れ落ちそうになるものを抑えるためか、尚基は俯き、片手で両目を覆った。

「でも、あの時は……兄貴を嫌いになりそうだった。何で、どうしてだ、そう思った。俺のことなんかどうでも良いから、自分を犠牲にしないで欲しかった。……そうじゃなけりゃ、」

「一緒に、連れて行って欲しかった……」

「っ！」

尚基が息を呑み、体を硬直させる。

「あんた、知ってるんだろ……？」

「……………」

「兄貴が今何処にいるのか、何をしてるのか……！」

「……知っているとしたら、どうする？無理矢理にでも、訊き出す？」
尚基が綾羽を睨み付けるが、全く迫力がない。

「……………」頼みます、教えてください、」

かと思えば今度は、丁寧な頭を下げる。「もし私が教えたなら、あなたは……どうするの？……その場所に乗っ込むのかしら？」

尚基はすぐには応えなかったが、やかて小さく呟くように、言った。

「……………」助けます、兄貴を自由にしたい」

「……………」

「……………」あの時は兄貴が俺を助けてくれた。だから、だから………今度は、俺の番だから」

決意をこめ、呟く。

「……………」俺は、兄貴を助きたい………っ」

そして以前のように、慎ましく暮らすのだ。兄弟水入らずで、穏やかな時を過ごすのだ。

「無理よ」

だがそんな尚基の決意を、綾羽のにもない言葉が一刀両断しようとする。

「え？」

「あなたに、あの方は救えない。あなたも捕らえられるのがオチだわ」

「……………」っ、」

「はつきり言うわ。あなたに、彼を救う力はない。あなたには、何も出来ない」

「そ、そんなことねえっ！！俺は、」

「……………」すぐにカッとなる。冷静さが足りない」

「……………」っ、」

尚基が悔しそうに歯噛みするが、綾羽は何処吹く風だ。

「……………」あの方が守ったのがこの程度の人間、か」

「あんた、兄貴とどういう……」

尚基が二人の関係を問おうとするが、綾羽があっさりとそれを遮った。

「残念だけど、あなたにあの方の居場所は教えられない。それに…本来、そのために来た訳じゃないから…」

「え？」

「ただ、興味があつて」

「……興味、」

「あの人が命をかけて守つた、あなたという存在に、興味があつたから。一度、会つてみたいと思つたのよ」

でも期待外れ、という言葉は呑み込んでおく。

「何なんだ、あんた、何がしたいんだっ」

声を荒げる尚基だが、急に苦しげな顔になったかと思うと、咳き込み出した。

「っ、げほっげほっ……！ごほっ」

「体調が悪いのに意気がるからよ」

綾羽の口調は淡々と冷たい。身勝手だとは思いながらも、既に尚基への興味は薄れていたから。

（私だつて悠基様を自由にして差し上げたい。以前のように、穏やかに笑つて欲しい……）

だが……無理なものは無理なのだ。少なくとも、今の状態では外になど出られないし、あわよくばもとの状態に戻つても、追っ手がいなくなることはない。

常に命と人権の危機に見舞われながら生きるのだ。…足手まといの弟とともに。

（ならば、どのような形であれ…保護出来る桜庭のもとに居ていた
だくしかない……）

「……大丈夫？」

綾羽が考え事を終えても、尚基はまだ咳をしていた。風邪にしては

激しい気がするが……。

「げほつ、……すみません、ちょっと……」

「え、ええ」

尚基は口元を押さえると、キッチンの方へふらふらと歩いて行く。ただの風邪ではないのかと綾羽は訝った。

そして次の瞬間、

ガシャンツ！と硝子が割れる音がキッチンの方から聞こえて来た。

「！？」

ついで、何か重たいものが落ちたような、ゴトツという物々しい音が響く。

「桜庭尚基さん？」

フルネームで呼び掛けながら、綾羽は立ち上がる。

「！」

キッチンに行き、絶句する。

「ちょ、ちょっと大丈夫！？」

尚基が流しの前に俯せで倒れていた。周囲に硝子コップの破片が散らばり、水が床を濡らしている。水を飲もうとして倒れたのか。

「尚基さん！尚基さんっ」

「うつ、」

意識はあるらしいが、目付きがとろんとして、息がひどく荒い。抱えた体が熱い。

「こんな時につ……」

綾羽が苛立ちに襲われていると、腕の中の尚基が何事かを呟いていた。

「尚基さん？」

「兄……貴、ごめ……んなさい……」

力のない瞳から涙を流しながら、ひどく心細そうに。

接触3 side 尚基（前書き）

今回は尚基の一人称です。短いです。

接触3 side 尚基

「う……」

俺は、激しい頭の痛みと目眩で目を覚ました。

「あ、起きたね？」

頭上から、おっとりとした柔らかな声が聞こえて来た。寮の医務室に常駐している美原だ。昔看護師をしていた経験を生かし、親戚の伝でこの学園寮に保健教諭として雇ってもらったらしい。

「美原さん……」

「全く……。体調悪くて寮にいるんだったら必ず私に連絡しなさいって前から言ってるじゃないの」

「……すみません、」

美原さんに謝りながら、自分が何か大切なことを忘れているような気がして、俺は身動きを止めた。

「桜庭？」

「俺、部屋で寝てた筈じゃあ……」

そうだ。俺は体調不良で学校を休み、部屋で寝ていたんだ。そうしたら、誰かが部屋を訪ねて来て……、

「そうそう。変な電話があつたんだよ」

「？」

俺が眉を顰めると、美原さんは腕を組んで、

「君の部屋の電話からね。“桜庭尚基”という生徒が自室で倒れるから、助けてやってくれって。女の人の声だったかな」
などと言う。

……女？

「！！」

桜庭綾羽。兄貴と俺のことをよく知っている、私の強そうな顔立ちの女！

「桜庭？」

「俺、行かなきゃ……！」

折角兄貴のことを知る人間に会えたのに、みすみすと逃して堪るか！俺はその一心でベッドから抜け出そうとしたのだが……、

「こら！ちゃんと寝てなきゃ駄目でしょうが！」

見た目は華奢な美原さんに両手首を掴まれた俺は、ベッドに縫い付けられる格好になってしまったのだ。当然、俺は慌てる。

「み、美原さん、何するんスカ……」

「体調良くなる迄、此处で寝てなさい」

「いや、俺、用事が……」

「駄目」

美原さんは有無を言わせぬ口調でそう言い、俺をじつと見下ろす。

口調は厳しいのに、その瞳が頼りなく揺れているのは明らかで、抵抗する気は一気に萎れた。

「……俺のことを電話した女の人は、」

「人を部屋に遣った時は、誰もいなかったよ」

「そう……ですか」

美原さんは尚も俺を食い入るように見つめ、

「……女人禁制の男子寮にいたってことは、うちの生徒じゃないよね？禁制を打ち破れる、特別な人と会ってたのかな？」

「……疚しい相手、ではないですよ」

「ふうん？……まあ、君が大人しく横になってるなら、見逃してあげる」

そう言つて微笑み、美原さんは俺を解放した。

「……分かりましたよ」

綾羽には名刺を貰ったし、確か何らかの電話番号が印字されていた筈だから、それを見れば良い。

……それに、やはり体が重く、頭は鈍痛に切り替わったものの、未だに痛む。ちゃんと眠って快復したいのも確かだ。

「……じゃあ、お言葉に甘えて……」

言つそばから、意識が遠退くを感じる。

美原さんが何か言っているのが分かるが、内容までは掴めない。

……嫌いになりそうだった、か。

眠りに落ちるほんの直前、綾羽に漏らした本音が胸を衝いたけれど、すぐに何も分からなくなった。

第二の嵐 s i d e 月波（前書き）

ちよつと寄り道してます…でも本編にちゃんと絡んで来ますので、
よろしくお願いします。

第二の嵐 side月波

今日は、桜庭君の体調が気になって気になって、なかなか授業に集中出来ない。僕は思わず深い溜め息を吐いてしまった……今だって、立派な授業中なのに。

「む。伊織が溜め息など珍しいな。何やら悩み事か？」

「あ……すみません……」

タイミング悪く、先生が傍を通りかかったときにしてしまったみたい。

「謝ることもないが……具合が悪かったら、%難しい以前に、問題に注意を向けることが出来ないのだ。」

「まあ、ゆつくり考えてみて」

「……はい」

先生が歩みを再開する。僕は今度は控えめに溜め息を吐いた。集中しようとするばする程、意識は桜庭君の方へ逃げてしまう。

「そろそろ良いかー」

先生が皆にお伺いを立てると、ようやく手が動いた。やっぱり問題自体は全く難しくなくて、すらすらと解ける。

「あ」

最後の問題を解いた後で、僕はもう一人気掛かりな人がいたことに気付いた。

…草薙先輩のこと。明らかに何かあったみたいに、朝の先輩はおかしかった。自分に関わるな、とまで言われてしまい、僕は悲しくなると同時に苦しくなった。また僕は他人の迷惑になるようなことをしてしまい、嫌われたのかと思って。月乃ちゃんの呆れ顔が頭に浮かぶ。

何かあるとすぐに自滅してしまう僕。治したいとは思っても、幼い頃からの性質たちは簡単には治せない。いや、僕は治そうとしていないのかも知れない。

…これ以上内面のことを考えたら更に自滅しそうな気がして、僕は黒板に目を転じた。先生に指名されたクラスメートたちが、一生懸命に問題を解いてる。その中に、月乃ちゃんの姿もある。

問題を解き終えた月乃ちゃんは、涼しい顔で振り返り、席に戻って行く。

その最中に目が合ったから微笑んだ…のだけど、月乃ちゃんにはこりもしない能面のような表情で、それを黙殺して顔を逸らしてしまった。いつもなら笑うか、おどけてみせるかしてくれるのに。

……どうしたんだろう。

確かに此処最近、月乃ちゃんと会話することは減っていたけれど喧嘩をした訳ではないし。僕が知らず知らずの内に機嫌を損ねるようなことをしてしまったのかな……とまたも不安になる。

「じゃあ、答え合わせするか」

先生のその言葉も、何処か遠くに聞こえる。

それでも僕は無理矢理黒板に意識を集中させ、内省することから、逃げた。桜庭君や草薙先輩のことも、無理矢理頭から追い出した。

……あまり巧くは、いかなかったけど…。

数学の授業が終わり、僕は力なくノートや教科書を閉じて筆記具を収めた。

頭がぼうつとする。背を椅子につけ、何気無く廊下のほうへ目を遣ると、見知った子がいることに気付いた。今にも泣き出しそうな顔で、おどおどと教室内に目を配らせている。

……確か、鈴宮さんの。

僕は立ち上がり、彼の所へ歩み寄る。

「あ……」

僕に気付いた彼ー風井晃輝君が、頼りない声を上げる。飼い主に捨てられ、心細そうな犬のような瞳だと思った。

「風井君、だよね？」

「は、はい……」

蚊のなくような声で応えて、小さく俯いてしまう。

「どうしたの？ 鈴宮さん、今日はお休みみたいだけど……って、風井君っ？」

鈴宮さんはお休みの下りから、いきなり風井君が静かに泣き出したから、僕は思わずぎよっとした。何か悪いことを言ってしまったのだろうか。わたたと慌てていると、風井君が小さく

「すみません……」

と謝り、そのまま立ち去ろうとする。

「ま、待って」

僕と似通った性質の持ち主だと勝手にシンパシーを感じていた僕は、彼を放っておけず、思わず腕を掴み静止を促していた。風井君がびくりと全身を震わせる。

「あつ、ごめん！ 痛かった？」

「あ……いえ、」

僕に向き直った彼は、伏し目がちに僕を見詰めた。長い睫毛が、目元に影を作っている。

「どうしたの？ 鈴宮さんと、何か……」

「ぼ、ぼくが悪いんです」

「は？」

いきなりで何のことか分からず、頓狂な声を上げてしまった。

「嫌われました…… 鈴宮さんに」

「え？」

このままでは埒があかない気がして、僕は困惑する。月乃ちゃんに応援を頼もうかとも思ったけど、先程の授業中のことがあつて躊躇してしまう。だけど、風井君をこのままにすることも出来なくて、僕は風井君の腕を引いた。

「あ、あのっ？」

風井君が慌てた声を上げる。それでも僕は無言で彼を引いて、歩みを止めない。兎に角、話を聞かなければ。何が僕をこんなに駆り立てているのか分からないまま、僕は屋上へ向かった。

屋上には当然人はいなくて、緩い風が周囲にたゆたっている。

「……………」

僕は風井君の腕を放し、

「鈴宮さんと何があったの？」

と訊いた。僕には関係ないはずなのに、どうしても気になるのだろう。月乃ちゃんの友達に関することだから？それとも、ただのお節介に過ぎないのかな。

「……………」

風井君はやっぱり泣きそうな顔をして、困ったように口を閉ざしている。

「鈴宮さんは、滅多に人を嫌うような人じゃないし、その……恋仲の君のことを嫌うなんて、」

「あ、あなたにあき、鈴宮さんの何が分かるんですかっ！」

「っ」

いきなり口を開いたと思えば、風井君はそう声を荒げた。

「ぼ、ぼくだって……ぼくだって、鈴宮さんがそんな人じゃないって分かってます……でも、昨日実際に嫌われた……」

うっ、と嗚咽を漏らし、風井君はまた押し黙ってしまった。はらはらと涙が零れ落ち、コンクリートの床に染みを作る。

「風井君、」

やっぱり、鈴宮さんとの間に何かあったんだ。もしかしたら、今日鈴宮さんが休んでいるのは……。

「……ぼくが悪いって分かってるから、昨日何度も携帯に電話したけど……応えてもらえなくて……もう、どうしていいか分からなくて……」

そして先程、勇気を出して上級生の教室までやって来た……というわけらしい。風井君は真っ赤な顔で、鼻を嘔る。

「……言いたくなければ、良いよ」

「……」

「……鈴宮さんと、何があつたの？」

沈黙。風井君の全身が一目で分かる程に強張っている。

「……」

「……分かった。もう聞かない」

と僕が言うや否や、

「あゝ！こんなところにいた！」

という場違いに明るいい声があたり一帯に響き、僕は驚いた。

「晃輝君！何してるのぉ？」

語尾を伸ばし、甘えるように風井君にしなだれ掛かかってきたのは、見知らぬ女の子だった。風井君のクラスメートだろうか。僕には気付いていないのか、はたまた気付いていながらに無視しているのか、女の子は僕に対しての注意を一切払わない。

「ちょ、は、放してよ、」

風井君は弱々しい声で女の子を抑制しようとするけど、女の子には全く効果がないらしい。さらに体をすり寄せ、

「早く教室行こうよ」

「みつ、観神さんっ」

風井君が助けを求めるように僕を見る。……存在に触れられてさえない僕に何が出来るのだろうか……と思いながら、僕は女の子に声を掛けていた。

「あの……今、風井君は僕とお話ししてるんだけど……」

「？あなた誰？」

きょとん、として訊かれた。やっぱり気付かれていなかったみたい

だ。

「……二年の伊織月波と言います」

「やだ、先輩？同じ一年かと思いました」

そう言つて、あははと笑う。月乃ちゃんがいたら、絶対に激怒するだろうなと僕は思った。

「で、先輩が晃輝君に何用ですか？もしかしてかつあげ？」

「みつ、観神さんっ」

「あはは、冗談だよ！冗談っ」

「……冗談でも失礼だよ、」

風井君が消え入りそうな声で言う。本当に失礼だと思ってるのかな、と少しだけ思った。

「で、どういう関係？あ、今度はお兄さん？」

「……今、名字で呼んだばかりなのに。」

「ち、違つよ…先輩」

「ふうん？昨日の女の先輩みたいな感じ？」

風井君の顔が苦虫を噛み潰したようなものになり、僕はおや、と思つた。

「昨日の女の前輩。」

まさか鈴宮さんのこと？

「風井君、昨日鈴宮さんという時に、この子に会つたの？」

「っ」

「……………」

大体、想像出来た。

観神さんは、きっと鈴宮さんがいる前で今のように風井君に甘えるように抱きついたんじゃないかな。その時の風井君も、今みたくしどろもどろになってしまい、鈴宮さんに要らぬ誤解を与えたのではないか。

……恐らく、そういうことなのだろう。だけど普段の鈴宮さんなら、呆れながらも怒ることはない気がした。風井君はどうも人見知りしがちなタイプのようなだから（僕が言うのもあれだけど……）、人に慣

れて来たのかなとぐらいに思いそうなものだけど……。

「晃輝君、何のお話ししてるの？早く行こうよあ」

「うわっ、ちょ…引つ張らないでよっ」

彼女の尻に敷かれる彼氏…に見えないこともないけれど……

「観神さん、ごめんね。まだ風井君と大事な話があるんだ」

「先輩……」

風井君が感謝の意を視線にこめて見詰めてくる。そんなに大層なことをしたつもりはないのに……。僕が複雑な気持ちでいると、観神さんがこんなことを言ってきた。

「大事なお話？なら私も聞いて良いですかあ？」

いや、大事な話だからこそ部外者に居て欲しくないんだけどなあ……。

「ただの先輩の“大事なお話”っていうのがすごく気になるしい？」
と言つてあはは、と笑う。何がそんなにおかしいんだろう、と僕は思った。相変わらず風井君は弱り顔で佇むだけだし、僕にどうしろというのだろう。

「？黙り込んで、変な先輩」

観神さんがもう一度風井君を引つ張り、僕が何故か焦った瞬間……
鈴宮さんが息を切らしながら屋上に雪崩れ込んで来た。

「はあ、はあ……」

「あき、晶菜さん……」

気付いた風井君が、彼女の名を呼ぶ。鈴宮さんは、僕がいることに驚いた顔をして、だけどすぐににっこりと笑った。そして観神さんの腕の中にいる風井君を、思い切り引つ張った。

「あ、晶菜さんっ？」

「最初に言っておく…昨日はごめんね」

「あ……」

惑う風井君に力強く頷き掛けて、鈴宮さんは観神さんに向き直った。
観神さんは笑顔だけれど、口端が微かに震えている。

「あと、あなた」

「何ですか？先輩」

「この子は、私のだから」

堂々とした口調。

普段の、温厚で柔らかな印象からは想像出来ない姿に、風井君だけでなくて僕まで驚いてしまう。

「あなたにも、誰にも、渡さない。この子は、私のもの……手を出したら、絶対に許さないからね」

そしていまだに半ば呆然としてる風井君を完全に観神さんから引き剥がし、小柄な彼を自分の背中の中後ろに隠すようにする。

「あ、晶菜さん……ぼく、」

「あの、何か勘違いされてるみたいですけど……先輩」

「何？」

観神さんがいたずらっ子のような笑みを浮かべ、風井君を見る。

「私、風井君みたいに人見知りで気弱な人、まったく好みじゃないので」

「……………」

「からかったら過剰な反応するのが面白かったです……昨日の風井君も、おかしいくらい動揺しちゃって」

悪意ある物言いに、風井君が悲しげな表情を浮かべる。そんな風井君の手を、鈴宮さんが優しく握るのが見えた。

「二人が付き合ってるの知ってたから、からかってみたんですよ」

「そう。暇ね」

さらりと、しかも笑顔で応える鈴宮さん。……何か、怖い。

「……あゝあ、興醒めだなあ。玩具みたいで楽しかったのに」

観神さんがそう言った瞬間、鈴宮さんが彼女に近付き、白い頬を打った。

パン！という小気味良い音に、当事者よりも僕や風井君の方が吃驚してしまう。

「何するんですか、先輩」

観神さんの相貌が、怒りに歪む。お門違いな、怒りだ。

「私の大事な人を玩具呼ばわりしたから。これくらい、当然でしょう?」

「晶菜さん……」

“大事な人”と称され、風井君が感極まったという感じで鈴宮さんの名を呟いた。

「手を出すな”っていうのは、色恋だけの意味じゃないからね? 貶すのも馬鹿にするのも、絶対に許さない」

「怖い」昨日の醜態とはえらい違いですねえ」

観神さんは一切退く気がないらしく、そんなことを言う。僕は完全に場違いな存在になり、居場所を失ったまま立ち尽くすしかない。

「晶菜さん、」

「もう行きましょ。……伊織君も、ありがとう」

「えっ、」

不意に見つめられてお礼を言われ、僕は慌てる。

「晃輝君の話、聞いてくれたんでしょ?」

朗らかに笑う、いつもの鈴宮さんの姿に僕はホッと安堵する。鈴宮さんはこうじゃなきゃ。

「さあ、伊織君も」

「う、うん」

ちらりと観神さんを見遣れば、能天気そうな面影なく鈴宮さんを睨み付けていた。素直に怖いと思った。そして不意に観神さんが僕を見たかと思うと、僕に照準を合わせたみたいにつこりと微笑んできた。

「……っ」

ゾクツと背筋に言い様のない寒気が走る。

「伊織君」

鈴宮さんに促され、僕は慌てて二人に従い屋上を後にした。

「……………」

私は三人がいなくなったあと、スカートのポケットから携帯電話を取り出して、メール画面を開いた。

でも、すぐに向こうから電話が掛かって来た。

「……………はい」

不承不承出ると、クスリと軽く笑う声が聞こえた。

「笑わないでよ」

『いい様だと思ってね』

「うるさい。まさかもう立ち直るなんて思ってなかったのよ！」

『ふふ。それほどあいつらの絆が深いということなんだろうね』

「ふん……………！良いの？風井晃輝を取り込むこと、出来そうにないけど」

そうは言いながら、私の頭にはさっきの先輩の怯えたような顔が浮かんで、嗜虐心が刺激されていた。あの先輩なら、どうだろう。

『もう一人、居たみたいじゃないか』

「……………」

『人を使って調べたら、面白いことが分かってね。こちらに戻って来たら、教えてやるよ』

その言葉が終わると同時に、通話を終えられた。

……………なんだろう。

あの先輩に、面白いことが？

深い興味を抱きながら、私は意気揚々と屋上を後にした。あのバカツプル二人のことは、すでにどうでも良くなっていた。

徐々に迫る不穩 side 月波

僕の前を、鈴宮さんと風井君がぴったりと寄り添って歩いている。本当に好きなんだな、と思う。

「伊織君」

不意に立ち止まり、鈴宮さんが僕を見て来る。

「何？」

「さつきの子に、変なこと言われたりされたりしなかった？」

さつきの子、というのは当然観神さんのことだろう。最後の笑みが気になりはしたけど、特に何かをされたり言われた覚えはない。

「特にはない、かな」

「…なら良いんだけど、」

鈴宮さんは何処か歯切れの悪い口調でそう言っ

「伊織君も、あの子とは関わらない方が良いよ……よくない噂、聞いたから」

よくない噂…何だろう。

「晃輝君もだからね」

「は、はい」

「何よ、何か言いたそうな顔して……まさか、お友達になりたいとか言っんじゃないわよね？」

「ち、違いますっ」

風井君が、必死に首を横に振る。

「あ、あの…さ、さつきの、」

「さつきの？」

「ぼ、ぼくのこと……大事な人だっ

「風井君の小さな顔は、熟れたトマトのように真っ赤だ。対して鈴宮さんはきょとん、と気の抜けたような表情をして、

「え、今更？」

「う……」

「私は出会った時から、君のことを大事な人だと思ってるよ」

うわあ、聞いてるこつちが恥ずかしい…と赤面すれば、風井君は今にも卒倒してしまうんじゃないかくらいに逆上せあがっていた。

「晃輝君は、違うの？」

「ちっ、違わなくないです！大正解！」

「大正解は違うと思う」

突っ込む際も容赦がないなあ、と僕は苦笑してしまった。でも、仲の良い姿を見れたから良いか。

「だから、ね？私以外の女性に目移りなんてしたら駄目だからね？」

「は、はいっ」

風井君はまたも必死に頷く。

「はい、良いお返事」

ぼふぼふ、と軽く風井君のの頭に触れる鈴宮さんも楽しげだ。良かった、と心から思う。

「……月乃にも心配掛けたなあ……」

「！」

月乃ちゃんの名前が出て、僕は何故か心臓が強く跳ねるのを感じた。授業中の、冷たい表情を思い出す。

「月乃ちゃん……」

「うん。学校には休むこと伝えたんだけど、月乃には心配させたくなくて敢えて連絡しなかったの……そしたら、何度もどうしたどうしたってメールくれて。晃輝君のこと話したら、多分晃輝君のことボコボコにするなあと思って、それでも返信しなかったんだ」

ボコボコ、という部分を一番強調して言う。

「……」

風井君が、一転して蒼白になる横で僕は少し安堵していた……月乃ちゃんは僕に怒っていたりしたのではなく、鈴宮さんのことで頭が一杯で、僕のことにはまだ気が回らなかった……そう思っ

「月乃にも謝らないと」

そう呟いて、鈴宮さんは再び歩き出した。風井君が、鈴宮さんの横

に並び、僕は二人の後ろを二歩ほど離れて歩く。二人のことを邪魔したくなかったから。

「あ……」

「？晶菜さん？」

「今、授業中だよね」

「あ」

……僕はとつくに気付いていたけど、鈴宮さんと風井君は完全に失念していたらしい。二人して似たような間抜け声を上げ、顔を見合わせている。

「晃輝君、入れる？」

「だ、大丈夫です」

「じゃ、いつか。またお昼に、いつもの場所だね」

鈴宮さんの誘いの言葉に風井君は、嬉しそうに頬を染めて頷く。初恋真つ最中の女の子みたいに初々しい仕草だ。

「それじゃ……」

風井君は一人、一年生の教室が並ぶ一階へと降りて行く。

「私たちも戻ろうか」

「うん」

僕たちは教室に戻ったけれど、そこはがら空きだった。はて、と思えば黒板を見れば、『化学は実験に変更になりました。化学室に移動！』と殴り書きがしてあった。

「あらら」

鈴宮さんは肩を竦めて席に着く。

「伊織君、行く？私はもうサボろうと思うんだけど」

まあ今日は既にサボってるんだけど、と自嘲的に笑う。

「じゃあ……僕もサボる」

と応えると、鈴宮さんが渋面を作った。嫌なのだろうか。

「……月乃に何を訊かれても、私とサボったとか、サボろうって誘われただなんて口が裂けても言わないでよ？私がボコボコにされちゃうから」

「う、うん……」

「月乃は良い子なんだけど、伊織君のことになると見境がなくなっちゃうから」

「そ、そうかな？」

「自覚なし？…月乃も大変ね」

大仰にため息を吐かれてしまった……。何がそんなに大変なんだろう？

「ま、いつか。晃輝君の支えになってくれたみたいだし。本当にありがとう、ね」

「僕は何もしてないよ？」

「またまた無自覚かぁ。伊織君はさ、何気に皆の支えになってるんだから」

「？」

そんなの初耳だし、自分もそう思ったことなどない。でも鈴宮さんは真剣そのもので、僕をからかっている風でもない。

「だからさぁ…あんまり月乃に心配かけたら駄目よ？」

それには僕は何度も首をたてに振る。言われなくても、分かっている。月乃ちゃんが僕のことをいつも見守り、気遣わしく思ってくれていることは。だから僕は、月乃ちゃんに心配をかけないようにしなくてはいけない。

「何だか堅苦しい話になっちゃったね。あれ、そう言えば、私鞆を何処に置いたっけ……」

鞆…置き忘れるのも珍しいなあ。しかも通学鞆を。

「伊織君も是非に探してちょうだい」

「う、うん」

鈴宮さんに命じられ、僕は鞆搜索に取りかかった。

……月乃ちゃんに心配をかけたくない、というのは僕の本心で。月

乃ちゃんには僕のことなんかで心を痛めたりして欲しくないと思っているのも、嘘じゃない。でも僕はこの時、全く想像だにしなかった。

月乃ちゃんと僕の関係ががらりと変わってしまう不吉な出来事が、徐々に近づいて来ていることに。

全く、想像もしていなかったんだ……。

繋がる絆

最悪だ、と草薙亮輔は自己嫌悪に陥っていた。

伊織月波のことだ。朝、自分なんかを心配してくれた彼の手を無下に振り払った。あの時の、月波の傷付いたような表情が頭から離れない。

謝りに行こうかと、何度も思った。でも、出来ない。月波が怒っていたら。泣いていたら。そう思うと、情けないくらいに足が震えた。他人に拒絶されるのが怖い。自分は沢山の人を拒絶しているのに。

「おい草薙」

「！」

物思いに沈んでいると、いきなり名前を呼ばれた。慌てて顔を上げると、昼休みの喧騒を背にして三人の同級生が自分を見下ろしていた。誰もがニヤニヤと下卑た笑みを醸つい顔に浮かべている。

「あ……」

嫌な予感に身を震わせると、唐突にシャツの襟首を掴まれた。

「……………っ！」

「聞いたぜ。お前のおじさん、逝っちまったんだって？」

「お前が殺したんじゃないかって噂だぜ？」

「！？？」

あまりのことに反論しようとするが、襟首を掴まれたままでは無理な話だった。息が苦しい。

「ちよつと来いよ」

荒々しい手付きで腕を掴まれ、亮輔はまるで罪人のように彼らに従わざるを得なかった。

「あうっ……」

連れて行かれたのは、人気のない体育館裏だった。胸を突き飛ばされ、体育館の固い壁に思い切り背中を打ち付ける破目になった。

「なあ、ほんとーなの？お前がおじさんをやったっていう噂はさ？」

「ち、違う…そんなこと、してない」

どうして自分がそんなことを言われなければならないのか。

「でもよお、火の気のないところに噂は立たないって言うだろ？」

耳元で囁くように言われ、背筋に悪寒が走った。それを目敏く気付かれ、頬を叩かれた。

「っ！」

「おいおい、お前が聞き取り易いように近くで喋ってやってんだぜ？俺だって、犯罪者の近くになんか寄りたくないっつうの」

「ぼ、僕は犯罪者なんかじゃない……」

「ああ？聞こえねえな」

「うっ、」

一人に顎を掴まれ、強い力で上向かされる。

「もっと大きな声で話せよ。その可愛いお口でな！」

ぎやははははっ！と何が面白いのか、三人は下卑た笑いを響かせる。

「……」

なぜ自分がこんな目に、と亮輔の瞳に涙が浮かぶ。皆、そんなに僕が嫌いなのか。

「泣いてンじゃねえよ！クソ野郎っ」

力任せに頭を突き飛ばされ、地面に倒される。

「うっ、」

踞る亮輔の腹に、靴の爪先が抉り込む。

「げほっ……」

「気持ちわりいんだよ！いつもいつもメソメソウジウジしやがって
！」

「がっ……」

「いっつも添山の背中に隠れてよお！」

「女に守ってもらうなんてなっ！」

口々に罵りながら、三人は亮輔の腹や背中に蹴りを入れて行く。亮輔は抵抗も出来ず、体を丸めて三人が飽きるのを待つしか出来ずにいた。

（早く、早く終わって……早く、）

それだけ願いながら、耐えていた。すると、

「草薙先輩っ!？」

今朝傷付けてしまった後輩の声が、何処か遠くで聞こえた気がした。

「先輩!!」

草薙亮輔が三人に取り囲まれ、暴行を受けている光景に月波は慌ててその中に飛び込んだ。不良や暴力は嫌いだし、怖い。でも、亮輔が酷い目に遭っているのと分かると、体が動いていた。集団に近寄り、自分なりに大きな声を出す。

「せ、先輩を放して下さいっ!!」

「……………」

亮輔が月波に気付いて、苦し気な顔を向けて来る。

「何だ、お前」

「草薙にこんな可愛い後輩がいたんだなあ？」

一人が亮輔から離れて、月波に近寄る。体格差に怯むが、気丈にも彼を見上げ、

「先輩を放して下さい！先生を呼びますよっ」

と声を上げる。

「ふうん？生意気なやつだな」

「痛っ……………」

腕をつねられる。

「伊織……くん、」

亮輔がか細い声を上げる。

「お前、伊織って言うんだ？一年？」

「あ、あなたには関係ない……です」

「……………」

バシッ、とビンタを食らう。痛いけれど、今度は声を上げなかった。

「草薙い」

月波の前にいた一人が、亮輔のところにとって返し、痛みに悶える彼の首元にしゃがみ込んだ。

「……………今日は健気な下級生に免じて許してやるよ。だけど、また……な」

彼の合図を受け、他の二人も亮輔から離れた。

「じゃあね、伊織君」

三人が完全に姿を消すまでを確認し、月波は体育館を背にして座り込んでいる亮輔の前にしゃがみ込む。

「先輩っ、大丈夫ですか？」

顔は狙われなかったのか、そこに傷や痣はないが痛そうに腹を片手で押さえている。

「伊織、君……………」

息が荒い。

「大丈夫ですか？何でこんな……………」

「……………どうして、」

「先輩？」

「どうして、助けてくれたの？」

「どうして、って……………」

「下手をしたら、君だって酷い目に遭ったかも知れないんだよ？なのに、どうして……………それに、今朝だって酷いことを言った……………」

「……………先輩、僕は、」

「僕に関わるな、って言って君を傷つけた。手を振り払った。なの

に、どうして……………」

亮輔は顔をくしゃくしゃにして、泣くのを堪えている。その姿がとても痛々しくて、月波は彼の背中をそつと撫でた。

「いお、りくん…？」

「僕は、先輩のこと嫌ったりしてません……」

「嘘だ」

「本当です。確かに朝はびっくりしたけど、心配で仕方なくて……先輩、泣いてたから、」

「僕は、泣いてなんか……」

「僕は、先輩を嫌ったりしてません……もっと仲良くなりたくらいですよ？」

「……嘘だ」

亮輔は頑なに月波の言葉を信じてくれない。

だから月波は辛抱強く言い続けた。

「本当です。僕は、草薙先輩を嫌ったりしてません。もっともっとなお話をして、仲良くなりたいです」

「……………」

「先輩、保健室に行きましょう。どこか腫れてたらいけないし、……ろしてない」

「え？」

月波の胸に額を着けるようにして頂垂れ、亮輔が何事かを言った。だが聞き取れずに月波が聞き返そうとした時、

「僕は殺してないっ！」

亮輔が叫んだ。

「先輩、」

「僕はおじさんを殺してなんか……っない、そんなこと、してない……っ」

「先輩、誰がそんなこと……」

「違う、僕じゃない、僕じゃないっ」

誰がそんな無責任なことを、と月波は腹立たしく思う。

「大丈夫です。僕はそんなこと思ってないし、他の人だって心から信じてるわけじゃないですから」

ひく、ひくつと亮輔が肩をひくつかせる。

「君は、信じてくれるの？」

「当たり前です！先輩はそんなことをする人じゃないって、僕は信じます」

「……………」

「僕は、信じますから」

亮輔の肩のひくつきが止まる。月波からおずおずと顔を離し、真っ赤になった目で月波を見つめる。

「ご、ごめん…取り乱して、」

「僕は平気ですよ？」

「あと……ありがとう、信じてくれて……」

「お礼なんて良いですから。行きましょう」

「う、うん」

どうやら、ようやく信じる気になってくれたらしく、月波はホッと胸を撫で下ろす。

「いつ」

「だ、大丈夫ですか!？」

立ち上がることは出来たものの、その瞬間に脇腹を押さえて苦鳴を漏らしてしまう。

「……何とかね、」

亮輔が力なく微笑む。

「僕にもっと力があれば、先輩を背負ったり出来るんですけど……」

「そ、そんな……伊織君は、僕を信じてくれるから、」

おどおどとそんなことを言われ、月波は何だか面映ゆい気持ちになる。

「ゆつくり行きましょう」

「うん……。そういえば、伊織君はどうして此处に？」

亮輔は今更そんなことに気付いたらしい。

「えっと……実は草薙先輩を探していたんですよ」

「僕を？」

亮輔が目丸くし、月波が小さく頷く。

「…朝の先輩の様子が変なことが気になって、勇気を出して先輩のクラスに伺ったんです。そうしたら、クラスの方が何処かに行つたと教えてくれて……」

「それで、僕を探しに？」

「はい。本が好きって伺っていたので、最初は図書室に。でも姿がなくて、そしたら誰かの話がたまたま耳に飛び込んで来て」

「話？」

「さっきの草薙の当主よね、みたいなことを。その人に、先輩を何処で見たのかをお訊きして」

「それで、この場所が？」

はい、と月波がこくりと頷く。そして悲しげに眉を下げる。

「……でも遅くなったみたいで、ごめんなさい」

「…いい、伊織君が謝ることじゃ無いよ。…全部僕が悪いんだから」

「先輩……」

二人はようやく保健室に着いた。

「あら、どうしたの！」

「先生、」

養護教諭は、月波に支えられてやって来た亮輔を見て目を丸くする。

「ちよっと階段から落ちてしまつて……それを先輩が庇つて下さったんです」

月波は咄嗟にそんなことを口に出していた。亮輔が居心地悪そうに身動きするが、月波は構わなかった。教諭は納得してくれたのか、月波から亮輔を受け取り支ええると、

「とりあえずベッドに横になつて」

と彼を誘導してくれた。

「何処か、痛む？」

亮輔が口を開きかけるが、月波が素早く声を被せるようにした。

「取り敢えず全体を見て貰えませんか？変な落ち方をしてたらいけないし……」

「ふむ。それじゃあ、」

養護教諭は、足首や手などを調べてから、

「シャツ、上げてみてくれる？」

と何気無い口調で依頼したのだが、途端に亮輔が体を強張らせた。

「それは、ちよつと、」

「でも、君の後輩の依頼だよ？私はどつちでも良いんだけど」

亮輔が思わず月波を見れば、彼は小さく頷いた。念のため、ということなのだろう。

「変なところ打って、内出血してたらいけないしね」

教諭に言われ、亮輔はようやくシャツのボタンを外して行く。

「ん、全部は良いよ」

亮輔の白い肌に軽く触れながら、不意に教諭の眉が寄った。怪訝そうな顔。

「……本当に階段から落ちただけなの？」

ビクッ、と亮輔が正直に体を震わせる。

「伊織君」

「本当です。先輩、酷いんですか？」

月波はさらりと嘘を吐く。意外に肝が据わっている子だ、と亮輔は思った。

「まあ伊織君がそう言うなら……」

教諭は納得出来ない顔つきながらも、頷く。

「うっ血はしてるみたいだけど、内出血まではいかないかな……ちよつと押すよ、」

教諭が亮輔の右側の脇腹を軽く押すと、亮輔が小さく呻く。

「痛い？」

「す、少し……」

「うっ血が此处と、お臍の少し上の所にある。湿布、貼ろうか」

「……お願いします」

教諭は一端ベッドから離れ、薬品などが並べられている棚に移動する。

「先輩、」

「ごめんね…僕のせいで、あんな嘘……」

教諭の耳に届かせない為だろう、亮輔が潜めた声で話す。

月波は首を左右に振る。

「僕は、やつぱり……」

「先輩？」

亮輔が声を出さず、口を動かす。

「や？」

頭文字だけ、何故か“や”だと分かった。

「湿布貼るからね、退いてよ」

「あつ、すみません」

月波は慌てて後ろに下がった。

「あ、君はもう行きなさい。五時間目が始まっちゃうよ」

「……………はい」

もうそんな時間なのかと驚くと同時に、この場所から離れたくないという想いが湧き上がり、月波は複雑な心境になる。

「伊織君、ありがとう」

亮輔の言葉に、何故か涙腺が弛みそうになる。

いや、言葉だけじゃない……亮輔の声から感じられる、“諦念”というか、“寂しさ”というか、そういったものに、心が震えるのだ。

「先輩、あの、」

何か、何か言わなくては。亮輔という存在が跡形もなく消え失せてしまいそうな錯覚に陥る。

「ほら、行った行った」

教諭に蹴り出されるようにして、月波は保健室をあとにした。

湿布を貼られ、シャツの前を戻される。

「……君の後輩に免じて深くは訊かないけど、まあ気を付けなさい」
教諭の言葉に、亮輔は力なく頷く。

「あと……駄目だよ、あんたいたいけな子に嘘を吐かせたら」

「はい……」

「まあ君のことだから、分かっているだろうけど」

「はい」

分かっている。

分かっているけれど。

「……どうする？今日はもう帰る？」

教諭の口調が僅かに鈍る。当然、亮輔のおじの死は彼女の耳にも届いているのだろう。亮輔の居場所が家にはないのではないかと危惧しているのに違いない。実際、今日あたり本家の人間が聴取に来てもおかしくはない。ならば亮輔が何処に居ようが同じこと。亮輔が何処に居ようと、彼らは亮輔を見付ける。獵犬のように。

「少し、このまま……」

「……分かった。ゆっくり休みな」

「………はい」

昨日、羽が生えた肩胛骨のあたりが何かぞわぞわしたけれど、亮輔は意識的にその感触を忘れようと、瞳を閉じた。

（目が覚めたら、次はどんな景色が広がってるのかな……）

まだ幼い頃聞いた、童話に出てきた一節を頭に思い浮かべながら、亮輔は徐々に眠りに落ちて行った。

不信

五時間目の授業を受けながらも、月波は亮輔のことが気になって仕方なかった。

「それをここでも応用するから……」

教師の言葉はほとんど右から左に垂れ流しの状態だ。

（この授業が終わったら、一度先輩の様子を見に行こう……。それにしても、）

シャープペンシルを手持ち無沙汰にゆっくりと振りながら、月波は亮輔の態度を思い出していた。

（先輩は、何を抱えてるんだろう。僕じゃあ、力になれないかな……。）

確かに頼りないかも知れないけど、話を聞くぐらいなら出来る。でもきつとすぐには話してくれないとは思う。自分と亮輔は似ている……。そんな気がするから。

「じゃあそれぞれ演習問題をやって」

（演習問題、）

ようやく教師の言葉が頭に入ってきて、月波は慌てた。どこまで進んだのか、サッパリだ。

「伊織、67頁」

月波の慌てぶりに気づいたクラスメートが教えてくれる。

「あ、ありがとう」

彼にぺこりと頭を下げたから、月波は慌てて問題に取り掛かった。

「綾羽が？」

外での用事を済ませた緒爪が学校へ戻ると、あまり顔色の良くない副理事長が彼女を迎えた。そこで事情を聞くと、桜庭綾羽が桜庭尚基に会いに来たとのことだった。

「それで、綾羽は？」

「おそらくもう帰られたと・・・門を出る姿を守衛が目撃しています」

「そう、か・・・」

彼女が研究・監視している存在、桜庭悠基。だが彼女は彼女に対して複雑な感情を抱いていると緒爪は見抜いている。今回こちらに来たのも、思慕の対象である男の弟に会いたいが為なのだろう。

（ふん、思春期のガキでもあるまいに）

「・・・まあ良い。しかし桜庭尚基のほうは授業中だったはずだろう？呼び出したのか」

「よ、呼び出したのですがどうも体調不良で欠席していたらしく・・・寮へ案内しろと言うので案内した次第で」

「ふむ、そこまでして会いたかったのか」

悠基に対する思慕の念だけでそこまでして彼の弟に会うことに何かメリットがあったのか。

（あの女、何を企んでいる？）

またあの地下牢に行かなければならんのかと、緒爪は憂慮のため息を吐いた。

「さて・・・戻ったばかりだが、私はこれから亮輔に会って来る。

おじのことで伝えることがあるからな」

緒爪は一度その老体をググツと伸ばして、理事長室を後にした。

夢現な頭に、誰かの声が届く。

「亮輔が此処に居るだろう」

「しかし彼は今眠っています。心労もひどいのは、理事長もようく御存知でしょう？」

「ああ、ようく御存知だがそれがどうした。草薙当主がそんなに軟弱では困る」

「でも彼はまだ高校生で多感な年頃。しかも一緒に暮らしていたおじが亡くなったばかりなんですよ？ちよつとはそつとしてあげて下さい」

「お前のように甘やかすやつがいるから、子供はつけあがるんだ。良いからそこを退け」

「理事長の命令でも、今の彼との面会は許可出来ません。保健医の権限で」

ふう、とこれ見よがしの大きな溜息。

（………大叔母様、）

どうやら大叔母であり理事長でもある草薙緒爪が保健室まで亮輔に会いに足を伸ばして来たのだろう。だが養護教諭はその面会を許可せず、揉めているようだ。

（……止めさせなきゃ。先生の立場が悪くなる……）

どうにかしてベッドから体を起こそうとするけれど、疲弊しきった体は容易には言うことを聞いてはくれない。だから亮輔は細い声ながらも、

「先生、」

「………」

「僕は大丈夫ですから、大叔母様……いえ、理事長をお通しして下さい」

「でもね、草薙、」

「ほら、本人もああ言っている。通らせて貰うよ」

「あ、ちよつと……！」

教諭の制止の声が響くのとほぼ同時に、シャツと音を立てて自分の周りを覆っていたクリーム色のカーテンが開かれた。

「・・・大叔母様、」

「ああ亮輔、気分はどうだ？」

「・・・」

亮輔が目をそつと伏せるのを、緒爪がくくつと喉の奥で笑う。

「お前のおじを、先ほど本家のほうで茶毘に付して来た。お前も来れば良かったのに」

「・・・そうですか、ありがとうございました」

「礼を言われるほどのことでもないよ。あんなのでも草薙の一族だからな、手厚く葬ってやらればな」

ずつと纏わりつく、嘲り。

亮輔は気づいていながら、反論出来ない。

「さて、あれが死んでお前はあの広い家で一人になった。何かと不便も多いだろう」

「いえ、僕は・・・」

一人でも大丈夫です、と続けようとする亮輔に皺だらけの掌を伸ばして来て、緒爪が言う。

「お前にはあの家を出て貰う」

「・・・え？」

「お前は幾分一族の不安を買っていてな。お前をあの家に一人で野放ししておくのは危険だと声を、今日はたくさん本家で聞いてきたのだよ」

「僕は、何も・・・」

「お前には今晚にでも本家に移って貰う。まあ、有体に言えば“監視”の為にな」

亮輔は開けっぴろげな緒爪のその言葉に、言葉を失う。

（監視・・・）

おじとの生活は、彼からの暴力に怯える日々だった。

だがおじはそれ以外では奔放に暮らし、亮輔の行動に口やかましくすることはなかったし、自由を奪うこともされなかった。

しかし本家に移り、監視されれば・・・

「大叔母様、僕は、」

「今までだつて勝手にしていたんだ。お前には本家に移る義務がある。これ以上、引つ掻き回すな」

きつとその中には、自分の両親のことも入っているのだろうな、と亮輔は思う。そしてそう思つてしまえば、不意にこんな言葉が口を衝いていた。

「——ならば、僕を母に・・・母さんに会わせて下さい」

それには緒爪も虚を突かれたようで、不思議そうな顔をする。

「・・・なぜ此処でお前の母親の話が出てくるのだ」

「・・・交換条件です」

自分はそんな交渉事など行つたことなどないし、ましてや緒爪に強く発言したことだつてない。緒爪の言うとおり、なぜ此処で実母の事が頭に浮かんできたのか自分にすら分かつていないのだ。でも、それでも。

亮輔は体の震えを気取られないよう、顎を引き締めて大叔母を見た。彼女は怪訝そうに顔を歪めている。

「——ある日突然、今まで一緒に暮らしていたのは本当の母親じゃないなどと父さんに言われ、母さんは分家に送られた。僕は理不尽な想いを抱いたまま父に従うしかなかった。それ以来、母さんには会つていない。そんなの、やつぱりおかしい」

何かにとりつかれたかのように矢継ぎ早に語る亮輔を、緒爪だけでなく養護教諭ですらも奇妙なものを見るような目つきで見ている。

今までおとなしく周囲の言うとおりにしてきた彼らしからぬ饒舌さに、驚いている。

「僕を本家に入れて雁字搦めにするなら、僕の願いのひとつくらい聞いてくれても良いでしょう？大叔母様？」

いつの間にか体の震えは止み、瞳にも普段はない力が宿る。

本当に、“何か”が乗り移っているかのように。

（・・・こいつ、本当に亮輔か？）

緒爪が初めて感じる、亮輔に対する薄気味悪さ。

（ふん、やはりこいつも“草薙”の人間ということか）

所詮呪われた一族でしかないのだろ。だから亮輔も、自分も、一族郎党みな、呪われているのだ……。

やれやれ、と緒爪が溜息をつき、どうするべきかと思案していると「ちよつと待って」

亮輔でも緒爪でも、ましてや養護教諭ですらない別人の声が保健室に凜と響き渡った。

その瞬間、憑き物が落ちたかのように亮輔の体がビクンと震えた。夢から目覚めたかのように目をぱちくりと瞬かせ、呆然とする。

（？）

本当に何か乗り移っていたのではあるまいな、と緒爪は思う。

「亮輔、駄目よ」

「部外者が草薙のことに口を挟むな」

緒爪の忠告になど見向きもせず、その乱入者——添山和音は亮輔にだけに話しかける。言い包める。

「亮輔、あなたが本家に行っても、何の益もないわよ。ただ口うるさい長老どもに良い様に扱われるだけ」

「和音、ちゃん……」

「あんな腐った世界に行かなくても、あなたの居場所は私が作ってあげる。そのために代わりも、検討をつけているから、ね」

意味深長な台詞に、その場にいる全員が和音を注視する。一体彼女は何を言おうとしているのか。

「どういう意味だ、娘」

「そのままの意味ですわ。亮輔の代わりに、ある人物の身柄を草薙本家に拘束するのです。いえ、拘束などと物々しいことをしなくても、交渉すればどうにかなると思います。“彼”、亮輔にはとっても優しいものね？」

ハッと亮輔は息を呑む。頭に、なぜかある一人の後輩の笑顔が浮かんだからだ。

（まさか、和音ちゃんは、あの子を巻き込むつもり……？）

裏社会のことなど何一つ知らないであろう彼を、こちらの世界に引き入れるつもりなのか？

「何を馬鹿なことを。一般人を草薙の領分に引き込める訳などなからう」

「一般論で言えばそうでしょうね。……でも理事長。もしその人物が一般人でなかったらどうでしょう？」

「何を……」

「あら、理事長ともあるうお方が、お気づきにならないの？ “彼”が持つ不思議な“氣”に」

「……まさか、最近お前がご執心だとかいう」

「はい。伊織月波君です。彼ならば、亮輔の代替になる得るはずです。草薙で暮らす内、必ずや異能力を顕現させるでしょう」

一体どこからそんな自信が来るのか、和音の口調はハッキリとしていて揺ぎ無い。却って亮輔のほうが不安になる。それは月波が自分の身代わりに足る存在なのかどうか、というものではなく、

「和音ちゃん、彼は駄目だよ……巻き込みたくない、」

「亮輔。これはあなたのこれからの人生がかかっているのよ？ 私は、あなたを幸せにするためなら何だってするわ」

和音は淀みない。緒爪が愉快そうに肩を揺らして含み笑いをする。

「結構結構。愉快的修羅場だ」

「大叔母様、何を言ってるんですか、」

「私にとつてはお前でもその伊織月波でも、草薙の将来を負ってくれる人間が居れば良いさ。当然凡人では困るがな」

今にも緒爪は月波に会いに行きそうな気配だ。亮輔はそれだけは避けなければならないと決意する。

あの子を、こんな世界に巻き込む訳にはいかない。

「お願い亮輔。あなたはそろそろ自分の身を守る術を身に着けるべきよ」

「嫌だ。他人を犠牲にしてまで、僕は自分を守りたくない」

「あなたがそうでも、私はあなたを幸せにしたいの。ほかの誰が犠

牲になろうと、それで誰か泣く人が居ても、私はあなたを一番に考える。あなたの幸せは、何物にも変え難いの。——分かつて、亮輔」

「分かりたくない!!」

いきなり亮輔が声を荒げ、和音を睨みつけた。大きな瞳に浮かぶ涙のせいであまり迫力はないけれど、確かに和音が息を呑んだ。

「和音ちゃん、おかしいよ！僕の知ってる和音ちゃんは、そんなこととは言わない！他人を平気で傷付けるなんて、おかしい！」

「亮輔、」

「……僕のせい？」

「え？」

「和音ちゃんが変わってしまったのは、僕のせい？僕が弱いから？僕が泣き虫だから？」

「な、何言っているの、亮輔！そんなこと言っていないし、思っても居ないわ！」

「じゃあ止めて！あの子は、あの子だけは止めて……」

あんなに純真で無垢な子を、亮輔は知らない。自分を傷付ける相手にまで優しく出来る存在を、ほかには知らない。

「彼の平穏を引き換えにしなければ僕は不幸になるって言うなら、僕は不幸で構わないっ!!」

亮輔の剣幕に和音は驚きを隠せない様子だったが、不意に意地悪な笑みをもらした。

「あらあら、亮輔にしては珍しく頑固ね。そんなに伊織君に固執するなんて……情でも移ったのかしら？」

「っ！」

「でもね、亮輔」

和音がしゃがみこみ、亮輔に視線を合わせて来る。

「伊織君があなたを裏切らない証拠が、何処にあるの？」

「……」

「いつかは彼だってあなたという存在を忘れていく。今までの人た

ちと同じ様にね」

亮輔はいやいやをするように、無言で首を左右に振り続ける。

「いい加減、理解しなさい。あなたには、今も昔も私しかないのだと」

和音の白く細い指が、亮輔の米神にそつと触れる。まるで彼を指先一つだけで洗脳しようとするかの様に。

「僕は・・・、」

頼りなく震える彼の声に、和音はまだ見込みはあると思う。

亮輔はまだ、迷っているのだ。

伊織月波という後輩が、本当に信用に足る存在だと信じて良いのかどうかと。

昔からそうだったように、亮輔の心はいつだって揺れ動いている。心の底から他者を信頼することが出来ないのだ。

「おい、そろそろ自省は止めてくれ。亮輔、さつさと支度をしろ」
月波のことはどうにもならないのだと察したのか、緒爪はそう口を挟んできた。だが彼女はきつと決めているはずだ。

伊織月波の経歴を調査することを。

「・・・はい、」

亮輔が小さな声で返事をし、おぼつかないながらもベッドから這い出す。

和音は・・・もう止めなかった。

亮輔を完全に思い通りに動かすのは、時間が足りない。また策を講じ、完全に洗脳する。

そして伊織月波を人身御供にすることを承諾させ、彼を亮輔の代替品にする。そうすれば亮輔は晴れて自由の身。

（そう。この私と、自由を謳歌するの。この世に生を享けたときから私たち二人を縛り付けていた鎖を解き放ち、二人だけで生きていくの）

そのためなら、ほかの何を犠牲にしても自分の心は痛まない。

亮輔以外の泣き顔など、自分の心には一切の漣を立てはしない。

（亮輔、私はずっと昔から、あなただけの自由のために・・・）

自分の“存在理由”など、そこにしかないのだから。

「亮輔、あと少しの辛抱だからね・・・」

緒爪にひつとらえられるように保健室を後にする頼りない背中を、和音はただじっと見詰め続けた。

襲撃

その日最後の授業を終えると、月波は鞆すら教室に放置したままでそこを飛び出し、亮輔がいるであろう保健室へと走った。

「先生っ」

保健室では、机に着いて何か書き物をしている教諭がいた。月波を見ると、なぜか居心地悪そうに身じろぎするのが分かった。

「伊織君か」

「あ、あの、草薙先輩はまだいらっしゃいますか？」

「草薙ならとづくに帰ったよ。・・・草薙理事長とご一緒にね」

理事長と言われ、月波は一瞬で彼女の鋭い眼光を思い出した。

“獲物”を狙う“捕食者”のような、目。

月波は、初めて理事長を見たときから、彼女が苦手だった。いや、苦手というよりは、怖かった。

捕まったら二度と逃れられないのではないかと思ったものだ。

「理事長と、ですか」

「そう。だから、あなたも用がないなら早く帰りなさい。伊織君は、寮住まいだったかしら？」

「はい、そうですけど・・・」

「なら、寮監に面倒や心配をかけないようにしなさいね」

「？はい」

教諭の態度は、先ほどとは違って何処か余所余所しい。急いでいるのだろうか。

「失礼します」

「気をつけて帰りなね」

月波が礼をして顔を上げると、すでに教諭は書き物に戻っていた。

(?)

やはり違和感を抱きつつ、保健室をあとにする月波。
すると、

「月波？」

「あ、月乃ちゃん」

月乃が、鈴宮晶菜と、そして風井晃輝と一緒に歩く場面に立ち会った。

「あたしたちこれから図書室で勉強して帰ることになったんだけど、月波はどうする？」

月乃が鞆を微かに持ち上げて、訊いて来る。やはり授業中に無視されたように感じたのは、晶菜とうまく連絡が取れずに心ここにあらずだったためなのか、今の月乃の様子は普通だった。

月波は頷きかけ、慌てて首を左右に振った。

「ご、ごめん。桜庭君の様子が気になるから、僕は先に寮に戻るよ」

「・・・分かった。桜庭によろしく」

月乃はごく普通に頷くと、晶菜たちを促した。

「じゃあまたね、伊織君」

「先輩、さよなら・・・」

晶菜・晃輝に挨拶を返し、月波はまたも違和感を感じ取った。

普段の月乃なら、尚基を優遇すると「あんなの放っておけば良いのよ！」とでも言いそうなのに。

（さすがに桜庭君、病人だもんね・・・うん、きつとそうだ、きつと・・・）

そうやって自分を無理に納得させ、月波は鞆を取りに教室へ舞い戻ったのだった。

ほとんど駆け足状態で学校を飛び出して寮に辿り着くと、月波は一目散に尚基の部屋を目指した。その途中で見知った存在の何人かに出くわし、そのたびに「お疲れ」と声を掛け合う。

「着いた・・・」

もし寝ていたらいけないと思いながら、月波は軽めにドアをノックした。だが返答はなく、やはり眠っているのだからと思った。それか、少し具合が良くなって気分転換に散歩でも……。

「……失礼します」

でももし中で倒れていたら。

そんな嫌な予感で不安になり、月波は気づけばドアの取っ手に手を掛けていた。

鍵は……開いている。

ドアは何の抵抗もなくあつさりと開いた。

「桜庭……君？」

そうつと呼びかけてみると、奥からカタン、と音がした。尚基が月波の呼びかけに気付いたのだろうか？

「桜庭君、月波です。……入るよ？」

洋間と玄関の狭間に立つドアを、そつと開ける。

「え？」

そこで月波は予想外の光景を目にすることになる。

「……」

閉じられたカーテンと電気の点いていない暗い部屋。

その部屋にあるベッドの上に、確かに尚基の姿はあった。しかし、

「桜庭……君、何・して……」

尚基の上に誰かが押し掛かり、二人はキスを、していた。

「やめ……ろ、」

尚基の息苦しそうな声が、月波の耳朶を打った。

合意の上ではないのだと、すぐに悟る。

「止めて下さい！」

月波は慌ててベッドの二人に近づき、尚基に押し掛かる存在を引き剥がそうとした。だが月波の手がそいつに届く前に、そいつは行動を起こしていた。月波の顔が接近した絶妙なタイミングで、上体を起こしたのである。結果、月波は顔面から仰向け状態の尚基に突っ込む形となった。

「うひゃっ」

奇声を発しながら突っ込んだ月波の後頭部に、鋭い肘鉄が一度だけ降って来た。

「あうっ……！」

「つき……て……めえっ！」

月波が攻撃されたのを見て、尚基が体を起こし、影に反撃をしようとする。

だが、

「……っ、それは、」

影は、片手にスツと伸びた棒状のものを持っていた。それが尚基の喉元に鋭く突きつけられ、彼は動くことが出来なくなってしまふ。

「動くなよ」

甲高い女の声が出た。影は、女のような。確かに胸には大きなふくらみがあり、胴体には綺麗な括れがある。

「いた……！」

影は突っ伏していた月波の前髪を手探りで引っ掴むと、無理やり彼の顔を上げさせた。

月波は苦痛に呻き、涙が流れるのを止められなかった。

「お前の大事なこれを壊されなくなったらね」

「……っ！」

「別にお前たちの命が欲しいわけじゃないんでね。私たちが要るのは、こっち」

そう言つて、棒状の先を尚基の顎に三度ほど軽く触れさせた。

「これより大事かい？ “お兄さんの形見” が、さ」

「あんた、一体、」

「今のあんたに名乗る名前なんて、ないね」

女は嘲りを籠めてそう言い放ち。

「と・いうわけで、 “お兄さんの形見” は頂いて行くからね。ばいばい、弱虫坊や」

「待て、……っ!？」

月波を解放した女に体当たりでもぶちかまそうと身構えた尚基だが、いきなりの眩暈を感じて体から力が抜けてしまう。

「ただのキスなんて、あんたみたいなひよっこにはまだ早いよ。

私が上げた“お薬”で、ゆっくりお寝んねなさい、坊や」

「くそつ、返せ・・・返せよ・・・！」

兄貴の大事な形見なんだ。

俺から、兄貴だけじゃなくて兄貴の物まで奪って行くのか。

女への呪詛は実際には発されることはなく、尚基の意識は混濁していく。

「桜庭君、桜庭君・・・！」

自分だって痛めつけられて消耗しているのに、それでも必死に名前を呼んでくれる月波の存在が何だか嬉しくて、尚基は意識を失いながら、静かに涙を流した。

（兄貴が遺してくれたものまで、盗られちゃったよ。・・・ごめん、兄貴）

『尚』

自分を呼んでくれる兄の優しい声は、今はもう遠い。

拡がる暗雲

……誰かの話し声がする。懐かしい声だ。

『……じゃなかったわ』

『おいおい、そう言うなよ。お前だってあの子を可愛がっていたじゃないか』

柔らかない、優しい声音。

……お父さんだ。

なら、もう一つの女の人の声は、お母さん？

『そりゃ、最初はね。実の両親に先立たれて、哀れみも覚えたし、おとなしくて良い子だったし可愛いくもあつたわ』

『ほらみるよ。なのに、何であの子に手をあげたりしたんだい？』

『あなたが知らないからよ！あの子が学校や近所から何て言われているか！』

『だから、他人の言うことだから、』

『それにあの子、最近不気味なのよ。何もないのに、上を見てニコニコ笑ったり、独り言を言ったり、何より私を見るあの目！吐き気がするわっ』

『静かにしないか。あの子に聞こえる』

『構わないわよ！私、決めたんだから』

『……何を？』

『私、もうあの子を育てて行く気はありませんから。あの子は、他所にやることにしましたから』

『お前、』

『反対はさせないから。いつも仕事仕事で、あの子のことは私に任せきり。話も聞いてくれない。そんなあなたに、口を出す資格はないわ！』

『……』

『幸い、引き取り先はもう決まってるの。良いわね、これは決定事

頂なのよ。……あら、起きてたの」

『ママ、』

『良いわね？あなたは明日から私の息子じゃないし、私はあなたの母親じゃないの。もともと、母でも息子でもない、ただの他人なんだから』

『ママ、』

『そんな目で見ないで！今まで育ててやっただけ、ありがたく思いなさい！』

『やめなさい！』

『うるさい！あなたに口を出す資格はないと言ったでしょう！』

『ママ、痛いっ』

『ママなんて呼ぶな！他人だと言っただろう！』

『ママ、嫌だ。嫌わないで、僕を捨てないで、』

『触るな！！』

『ママ、ママ、』

『ああもう鬱陶しいっ！来なさい！』

『嫌だ、痛い！痛いよ！！』

『我が儘を言うからだ！』『ママ、ママ、』

『うるさいと言ってるだろっ！！』

『！おいっ』

『ママ、苦し……』

『見るな、見るな見るな！私をそんな目で見るな！！』

『止めなさい！本当に死んでしまうぞ！！』

『お前なんか、お前なんか引き取らなければ良かった！お前みたいな不気味な子なんか、息子にするんじゃないかった……！！』

『ま……ま、』

『二度と私をママなんて呼ぶな！！』

「月波、ごめんな……俺のせいで、こんな」

（誰……？とても悲しそうな声、）

「お前も、兄貴も。俺が大切にしたいと思うものは、みんな傷付いて行くんだな……」

僕は、徐々に自分の意識がクリアになっていくのを感じた。ぼやける視界に、桜庭君の俯く姿が入り込んでくる。

「桜庭、くん？」

「月波！」

「ダメ、だよ……風邪なんだから、ちゃんと寝てないと……」

僕はどうやらベッドの上で、桜庭君の膝を借りて眠ってしまった。いい。そして、変な夢を、

（膝を借りて眠ってしまった？……変な、夢？）

「月波？おい、月波っ！？」

「あ、」

「大丈夫か？やっぱり、頭を殴られたから、」

桜庭君の顔が、今にも泣き出しそうに歪んでしまう。僕は慌てて桜庭君の膝から起き上がり、必死に、

「大丈夫だよ！僕は、全然……っ？」

不意に、自分の両目から熱量を持った液体が流れるのを感じた。

『二度とママなんて呼ぶな！』

「あ、」

「月波？」

『もう母親なんかじゃない』

「あ、ああ……っ」

「おい月波！おいって」

『お前なんか引き取るんじゃない！』

「桜庭、くっ」

「月波！？」

僕がシャツに包まれた桜庭君の胸板にしがみついたから、桜庭君は仰天して仰け反った。でも今の僕に、そんなことを気にする余裕なんてなかった。

「捨てられ、た」

「え？」

「僕、要らない子なんだって」

「月波、何を言って……」

「そうだ、僕は」

唐突に思い出した。

自分は実の両親と死に別れ、養父母に育てられた。でも僕はその養父母に捨てられ、この寮に放り込まれた。この学園の、前学園長によつて。

「月波、どうした。しつかりしろっ!!」

「僕の、本当のお父さんとお母さんは、」

……死んだ。

「ごめんね、月波」

「お前が大きくなるまで、そばにいてやれないのが、哀しいよ……」

「私たちの、愛しい月波」

「どうか、健やかに。××には、気を付けて。××は、いつかはお前を狙つて来るだろう」

「私たちはもう空の上から見守るしか出来ないけれど、」

「そばでお前を守ってくれる人が、きっと現れる」

「月波、」

「愛しているよ、私たちの、月波……」

「どうか、幸せになりますように」

「月波、大丈夫か。しつかりしろ」

桜庭君が何度も僕の肩を揺すつて、声を掛けてくれるけど、その声にはあまり現実味がない。

「月波。うん、きれいな名前だ」

「でしよう？この子は男の子だけど、きつと気に入ってくれるわ。」

ほら、今笑った」

『そうか？』

『疑うの？』

『……笑ったね、うん。笑った』

『ふふ。情けないお父さんですね、月波？』

「月波、おい！俺が分かるか？」

『あの子は絶対に渡しません！！』

「っ！！」

「月波？」

「あ、僕は」

頭の中、女の人——本当のお母さんに違いない——と男の人——本当のお父さんに違いない——の声が巡る。二人の声は穏やかなもので、僕は懐かしさを感じている。確かに自分は本当の両親の声を聞き、覚えている。なのに、ずっと忘れていた。一体、どうして？自分の記憶に、頭に、何が起きている？

「月波、少し休んだ方が良い。顔が真っ青だ」

「う……ん、」

僕は自分の部屋に戻ろうと、立ち上がろうとした——んだけど、激しい目眩を感じてまた桜庭君に寄り掛かる形になる。

「ご、ごめんね……」

「月波、俺のベッド、使え」

「で、でも、桜庭君は風邪、」

「俺はもう大丈夫だ。……それより今の状態の月波を部屋で一人にする方が心配だ。ぶっ倒れて誰にも気付かれなかったらどうするんだ」

「う……」

「だから、遠慮すんな。俺がそばで見といてやるから」

「ほ、本当に良い、の？」

今、部屋に一人になるのは、正直嫌だった。一人になったら両親のことで頭がぐるぐるして、辛くなるのは目に見えていた。

「良いよ、見舞いに来てくれたからな」

桜庭君が照れたみたいに笑う。桜庭君がそんな顔をするのは珍しくて、僕は何故か面映ゆい気持ちになる。桜庭君がよいせ、と掛け声を掛けながら、僕をゆっくりと寝かせてくれる。

「月波、その……言いたくなければ良いんだが……その、」

「……桜庭君なら、言えるよ」

「月波……」

「まだはつきり何があったのかは分からないけど、僕の本当の両親はもう死んでる」

「！」

「原因も理由も分からないし。変な話だけど、本当にたつた今、思い出したんだ。本当の両親は死に、僕を養子にしてくれた養父母には気味悪がられ、捨てられ、彼らの知り合い前学園長の手で、この学園に入学させられたこと……いつのことなのか、詳しいことは全く分からないんだけど——それに、月乃ちゃんのことも……」

「……そうか。詠倉は、お前の幼馴染なんだよな……」

「うん……でも、確かに小さいときの月乃ちゃんのこと、僕は覚えているんだ。何して遊んだかとか、何処で遊んだのかとか、家族同士でご飯に行ったりとか、」

「月波、分かった、分かったから泣きそうな顔をしないでくれ……」

「ごめ、ごめんなさい……でも僕、分からないんだ、ついさっきまで現実だったはずのことが嘘で、全部嘘で、」

「月波、落ち着け。分かっているから、大丈夫だから」

「！？」

一度僕の顔を見つめた後、桜庭君がいきなり僕を力一杯抱き締めて来た。

「さ、桜庭君？」

「前に、言つたろ？俺の兄貴が、月波に似てるって」

「う、うん」

「友達、っていうのもあるけど、月波、兄貴に似てるから、兄貴に重なって、月波が苦しんだり悲しんだりすると、胸が痛くなるんだ。

どうにかしてやりたいって、強く思えて、どうにかなりそうなんだ……！」

「桜庭君……」

お兄さんに何かがあったことは、前にお兄さんについてのやり取りをしたときに気付いてはいた。ただ、内容に踏み込む勇氣までは持てなかった。

「ごめん……月波の方が辛いのかな」

「良いよ、」

「月波？」

「なんか、また変なこと、言うけど……」

今日の……いや、今の僕は何か変だ。両親のことだって、いきなり思い出して。そして今から、また変なことを口にして桜庭君を困らせてしまう。

「……桜庭君の心臓の音を聞いてると、何だか安心するんだ……」

抱き締められ、僕の片耳は桜庭君の胸の辺りに思い切り当たっていて、彼の心臓が鼓動する音が聞こえて来るんだ。トクン、トクンという音。耳に、胸にじんわりと染み込むような感覚。

「な、なんか今日の月波は大胆だな」

「へ、変な言い方しないでよっ」

「悪い悪い。怒るな」

桜庭君の手が腰を微かに撫でて来て、僕はくすぐったくて身を竦めた。

「くすぐったい……」

「ごめん……でも月波を抱き締めてると、俺も安心出来るから……もう少し、このまま……」

「桜庭君、」

やっぱり僕とお兄さんを同一視してるの、と聞きたかったけど、出来るわけがなかった。

「桜庭君、あの……」

「ん？」

「……お兄さん、何ていうの？」

「名前か？」

「うん」

「……桜庭悠基。悠久の悠に、基地の基って書く」

「桜庭、悠…基」

……桜庭君と殆んど同じ名前だからか、その名前を聞いた瞬間に何かが引つ掛かった。ちくり、と頭を針で軽く突かれたような感覚。

「月波？どうした？」

桜庭君がようやく僕を放して、不思議そうに訊いて来る。僕は引つ掛かりを話そうとしたけど、結局は止めた。大したことじゃないし、桜庭君と似たような名前だから聞いたことがあるように感じたんだと思うことにした。

「ううん、何でもない。……ごめん、なんか……」

急に、眠気が沸き上がって来た。

「ねむ……い、」

「月波、」

桜庭君が呼び掛けて来たけど、もう限界だった。まるで僕に知られたら都合が悪いことがあると言つかのように、僕の意識はあっという間に睡魔に覆い尽くされて行った。

「月波？…もう寝たのか」

まるで死んで行くようにあっという間に眠りに落ち、俺は正直嫌な予感に襲われた。

だが、寝付いた月波の頸動脈のあたりに手を遣れば、確かな鼓動が伝わって来たから、安心して深い吐息を吐き出した。月波の寝顔が兄貴と被りそうになって、俺は自分を宥めるためにも月波から視線

を逸らす。

そのまま月波を起こさないようにベッドから下りて、そつと布団を掛けてやる。

「ん……」

小さく声を漏らして、月波が寝返りをうつ。その様を見ながら、俺は深いため息が出て来るのを止められなかった。……今日は何て日だ、と嘆息する。風邪の症状は落ち着いたが、頭に鈍い痛みがある。

「……………」

ソファで寝る、という手もあるが今の体調でそんなところで眠ったら体調がもつと悪くなりそうな気がする。

「月波、許せ」

幸い、月波は小柄で寝相も良さそうだ。俺は眠る月波に一言詫びて、月波の横に潜り込んだ。

拡がる暗雲2

「え！嘘」

「声がでかいぞ、馬鹿者」

軽く頭を叩かれ、観神聡子は手の主を睨みつけた。

「痛い」

「お前がいきなりでかい声を出すからだ」

「だって誰だって驚くよ！あんなおとなしそうで人畜無害そうな人が草薙の血を引いてるなんて」

「いくら草薙の人間だからって、誰も彼もが緒爪みたいな連中って訳じゃないからね。おそらくあの生徒は、外部の血が濃いんだろう」
ふうん、と聡子は納得行かない、というように唇を捻じ曲げる。

「面白い話だとは思わんか？」

「まあ、面白くはないけど」

「“鬼神”の血を引く風井という生徒も面白そうだが、あちらの引き入れは難しそうだしね」

「……でもさ、あの先輩が草薙の人間って緒爪が知ったら、先を越されるんじゃないの？」

聡子が言くと、相手はそうだろうな・と平然と頷く。

「そうだろうなって……。また後手に回っちゃうよ？」

「ふふ、そうでもないさ……。ああ、お帰り」

「？あ、ふうか楓香」

聡子が気付かぬうちに、その部屋に新たな来客があったようだ。

「やあ、聡子。ご機嫌麗しく……。なさそうだな」

檜の木で出来た重厚な扉の前に立つその来客は、右手に袱紗に包まれた長い棒状のものを持っていた。聡子の興味が一気にそれに傾く。

「ご機嫌は地を這うすれすれのところをさまよってるけど……。・なあに？それ」

「これ？これは学院長様ご所望の大事な切り札さ」

「？」

観神聡子は怪訝そうな顔で、振り返った。
柔らかな長いクリーム色の髪を後ろに一つで結び、穏やかな笑みを浮かべている青年を。

「楓香、ご苦労様だったね」

楓香――邸やしき楓香は、楽しそうに微笑む。

「ご苦労どころか、戯れにもならなかった。桜庭の人間と聞いて少し楽しみにしていたんだが、期待はずれだったようだ」

楓香はこの学院の高等部三年生で、目の前の青年の従姉妹にあたる人間だ。

私立浄命学院・学院長、長谷悠一郎はせゆういちろうの。

「まあそう言わないで欲しいな。何せ彼は変異種ではないし、普通の人間だし。彼の兄とは違ってね。それに」

「それに・・・？」

「平凡でつまらない人間のくせに、精一杯生きてるんだから。虫けらにも魂ってあるんだよ」

虫も殺さぬような穏やかな笑みを浮かべながら、エグイことを言う。
それが長谷悠一郎の性質であつた。

「相変わらず容赦ないな。・・・ほら」

「ありがとう」

悠一郎は楓香からそれを受け取ると、満足そうに目を細めた。
聡子が尋ねる。

「ねえ！何よ、それ」

「これ？これはね、人権を認められずこの世から迫害され、今も自由を奪われ、自死も出来ず、弟への罪悪感に苦しんでいる、哀れな男の遺品さ」

聡子が頭の周りにたくさんクエスチョンマークを浮かべ、「はあ？」と苛立った声を上げる。

「私は、具体的な内容について訊いてるんだ・け・ど？」

「これは、刀さ。しがない刀工が作り出した、刀。しかも、持ち主

と共鳴し合う、ね」

「共鳴？」

「今は袱紗に包まれ、加えて“封”がされてるから眠ってるけど、それを解除すれば、面白いことが起きる」

「面白いこと？」

「文字通り、持ち主と刀が“呼び合う”んだよ」

「……………」

「学院長は、この刀の本来の持ち主が欲しいだよ。だから、弟からこいつを奪わせた」

「本来の持ち主……？」

聡子が学院長を見れば、青年はやはり穏やかな笑みを浮かべたままで小さく首肯する。

「彼の名前は、桜庭悠基。人権を認められずこの世から迫害され、今も自由を奪われ、自死も出来ず、弟への罪悪感に苦しんでいる、哀れな男さ」

……………本家に連れて行かれた亮輔を待っていたものは、長老を始めとする郎党たちの不躰な視線だった。草薙の血を引かない家政婦ですら、亮輔を人間ではないようなものを見る目で見てくる。

「座れ」

「……………はい」

鹿威し（ししおどし）を設えた大きな池のある庭に面した座敷に、亮輔は通された。亮輔の暗い心情とは裏腹に、池で飼っている鯉の一匹が高々と跳ねるのが俯く視界に入る。

庭に生えた立派な松を整えていた庭師が、空気を読んでか早々と退

散していく気配がする。

「もうすぐ泰志様と紀枝様がお出でになる。妙なことは言わず、必要最低限のことのみ話すように」

緒爪に声高に言われ、亮輔は頷くしか出来ない。

そこへ、二人の人物が姿を現す。

「緒爪、ご苦労だったな」

草薙泰志。今年で七十五歳。立派な白髭を伸ばし、元から太い眉も真っ白になって久しい。

眉と違って糸のように細い瞳は、明いているのか否か見分けがつかないことも多い。

昔は陸上競技で名を馳せた名残が、老人になった今もがっしりとした足腰を持ち、気質は生まれつき豪胆。厳格で、仕来りにそむくものには一切の容赦はしない。

「いえ」

泰志が妻の紀枝を伴い、上座に腰を下ろす。泰志の細い瞳から発される視線を、亮輔はただただ俯いたままで受けるしか出来ない。

(……息が、苦しい)

本家は、昔から居心地が悪くて嫌いだったが、母親の一件があつてからはますます嫌悪の対象となった。

親族が集まる場合があつて仕方なく出向く際にも、家全体が自分を拒絶している気がして、じつとしていることが酷く窮屈だった。

「亮輔」

「……はい」

「お前はここ本家で暮らすべきだ、という声が郎党の方々から聞こえてくるが、それについては緒爪から聞き及んでいると思う」

「はい、」

「それについてお前自身はどうだ？あの広い家に一人で住むのと、本家に住むのと。……正直に申してみよ」

亮輔は思わず顔を上げて、泰志をまじまじと見つめてしまった。

しかし彼の顔は何も語ってはおらず、亮輔の言葉を待っているだけ

だった。横にいる妻も、無表情に亮輔を見つめているだけだ。

「僕……僕は、」

「……」

「僕に、この家の敷居は高すぎます。だから、」

「敷居が高い？居心地が悪いだけだろう」

いきなり強い口調で吐き捨てられ、亮輔はびくりと体を震わせた。

「ぼ、僕は、」

「お前の気持ちは分かった。貴様は、本家を否定するというわけだな」

「ひ、否定だなんてそんなこと……」

亮輔が思わず膝立ちになると、今まで黙って控えていた緒爪が耳元でささやいて来た。

「おとなしくせんと、お前ご執心の後輩のこと、言うぞ」

「……」

「巻き込みたくないんだろう？亮輔」

「……」

亮輔は力なく視線を落とし、弱々しい動作でまた正座に戻る。

「お前は、本家ではなくあの家に住みたいとそう言うのだな？」

「……はい」

「そうか。ならば、決まりだ。紀枝」

「はい」

ずっと黙ったままだった紀枝が、夫の呼びかけに一言で応えた。鈴が鳴るような、細く綺麗な声だった。

「すぐに業者を手配しなさい。金に糸目はつけんとも伝えろ」

「分かりました」

三つ指について夫に礼を尽くし、紀枝は静かに座敷を出て行った。

（今の、やり取りは……）

何か嫌な予感がして、亮輔は思わず顔を蒼くする。泰然としている長老の方へ身を乗り出し、

「長老！今のは、どういう、」

「決まっておる」

細い瞳を見開き、泰志が下卑た笑みを浮かべた。緒爪とそっくりの、他者を苛んで愉快がっている態度だ。

「お前が大層お気に入りなの家を、壊すのだよ」

「！！」

一気に箸が弾けた気がした。

背後にいる緒爪のことも、気になって仕方ない後輩のことも、すべてが頭の中から吹き飛んだ。

「駄目だっ……！」

紀枝が出て行った扉に飛びつく。勿論、彼女を止めるためだ。だが、

「抑えろ！！」

「！？」

一体いつから控えていたのか、隣室と繋がる襖を引き明け、若い衆が二人ばかり、座敷に飛び込んで来たのだ。

「大人しくしろ！当主」

一人が亮輔を押し倒し、一人がうつぶせになった彼の上に馬乗りになる。

「やめて、放してっ」

「亮輔、ことが済むまでおとなしくしている」

「大叔母様！お願い、止めさせてっ……！！」

必死の亮輔の叫びを聞き、しかし緒爪は無碍に吐き捨てた。

「あの家を壊すのは、私も賛成なのでね。あれは害にはなれど、何の益にもならん」

「そ、んな……」

亮輔の頭の中、紀枝が工事業者に電話を入れる姿が展開される。ほとんど辛いことしかなかった、でも心温まる出来事だった、ああの思い出の家が壊される情景がありありと想像出来る。

胸が、何かに食い潰されるような痛みを襲われ、亮輔は無我夢中で叫んでいた。

「止めろ、止めろおおおおおつ・・・！！！」
自分の願いも、声も、誰にも届かないのだと知りながらも、亮輔に
は叫ぶことしか出来なかったから。

危惧

「っ!？」

心臓を何かに驚掴みされたような衝撃が体中に走り、月波は深い眠りから一気に覚醒させられた。

無我夢中で飛び起きて、目を見開いてぜえぜえと荒い呼吸を繰り返す。

「月波・・・?どうした」

横で眠っていた尚基も、月波の異変に気付いて起き上がる。こちらはまだ眠そうに目を擦ってはいいたが。

「すごい汗だな。変な夢でも・・・ってうわあっ」

いきなり月波が尚基の胸板にタツクルするくらいの勢いで突っ込んで来た。

「さ、桜庭君・・・先輩が、」

「先輩って・・・草薙亮輔？」

「う、うん・・・」

かたかたと、月波の細い体が小さく何度も震える。見開かれた目は、此処ではない何処かを見ているような・・・。

「先輩がどうしたって？」

「分からない、分からないけど・・・聞こえたんだ。先輩の、悲しい叫び声が・・・」

「・・・俺には、何も聞こえなかったけど、」

どう対処すべきか決めかね、尚基は困ったように柳眉を下げた。

「先輩、きつと今頃泣いてるんだ。どうしよう、僕に何が出るの・・・?」

「月波、」

どういうことだ。あの先輩と月波の付き合いはとても浅い。つい先日知り合ったばかりのはずだ。

なのになぜ強い結びつきがあるようなことばかり起きる。

（まさか、こいつ・・・）

一瞬頭を過ぎる考えに、しかし尚基はすぐに思い直す。

（まさか、そんな訳はねえか。月波が、そんな・・・）

「月波、良いから落ち着け、ゆっくり深呼吸しろ」

尚基が月波の目を覗き込みながら、彼を自分から離す。月波の瞳が不安を顕にして尚基を見つめる。今にも粉々に壊れてしまいそうな硝子を想像してしまい、尚基はそれをどうにかして打ち消す。

「月波、大丈夫だから。ほら、落ち着いて。な？」

「う……うん、ごめん、ごめんね。桜庭君……」

「いや、良い。何か飲むか？そんなに汗をかいたら、喉が渴いたろ？」

「うん。お水、下さい」

「ああ、待ってろ」

月波をベッドに残し、尚基はキッチンへと向かった。どうやら完全に風邪菌は逃げたらしく、ダルさもない。考えなければならぬことは山積みだが、今は月波のメンタルのケアが大事なようだから、自省は一人になったときのために取って置くことにする。

「ほら、月波」

「ありがとう、」

弱々しく微笑み、月波は尚基からミネラルウォーターを注がれた透明なグラスを受け取る。

「……月波、今日は俺の部屋で休んで行くか？一時的なものじゃなくて、朝までっていう意味で」

「え？」

「何か今の月波を一人に出来ねえっていうかさ。心配なんだ、月波に何かあったらって」

「桜庭君、」

「その、両親のことも、草薙先輩のことも、お前がどれだけ悩んでるか、分きたいから」

気恥ずかしいのか、尚基の頬が微かに赤く染まり、月波は思わずふ

ふつと笑みを漏らした。

「な、何を笑ってるんだよ」

「う、うん。ありがとう、桜庭君」

自分には勿体無いくらい優しい人だ、と月波は思った。こんな人が自分なんかと親友でいてくれると思うと、嬉しかった。

「・・・放課後にね、保健室に行ってみたの。草薙先輩のことが、どうしても気になったから」

「うん」

「そしたら、保健室の先生に、先輩は理事長と帰ったって聞いて、」
「理事長・・・草薙緒爪か」

うん、と月波は小さく頷いて返事にする。

「誰にも話したことないんだけど、僕、初めて理事長を見たときから、何だか怖い印象があつて、」

「怖い・・・？」

「うん、自分でも表現しにくいんだけど、とにかく怖いと思ってて、」

「・・・」

「先輩が理事長に怒られたりしてないと良いんだけど、って思う」

「それで、月波はどうしたんだ？」

「・・・先輩のお家事情なんて知らないし、僕に何が出来るわけでもないし・・・そのまま保健室を出て、寮に戻って来たんだ。桜庭君のことも、心配だったし・・・」

「・・・そうか」

自分が知っている草薙の“お家事情”を、月波に話すべきなのか、尚基は惑った。自分が知るのもほんの一部で、今では草薙との関係は一切、切れている。それに尚基が知る草薙と今の草薙では当然、差異も出ている筈だ。

（だが俺も、知るべきなのかも知れない。草薙の暗部と、今でも草薙の支配下にあるであろう桜庭の本家の人間のことを）

今日、自分を訪ねてきた桜庭綾羽という女性の姿を思い出す。

彼女は恐らく桜庭本家の人間だろう。分家筋にあたる尚基とは違い、草薙に対する柵しがらみはよほどの筈だ。やはりもう一度、彼女と話をすべきだ、と尚基は思う。兄のことも、彼女は絶対に何か知っているはずだから。

「月波、ちよつと電話してくるから、此処にいろ」

「え？あ、うん・・・」

一人になるのがよほど不安なのか、電話をしてくるという尚基の言葉に、一瞬だけ悲しそうな目をする。

（まるで犬みたいだな）

心中で苦笑し、尚基はすぐ戻ると言い残して部屋を出る。

綾羽からもらった名刺には、携帯電話の番号も記載してある。それと携帯の液晶画面を何度も見比べながら、間違いがないように番号をダイヤルして行く。

「よし、これで」

呼び出し音をさせる携帯を耳にあて、尚基は綾羽の応答を待った。やがて、

『もしもし』

綾羽の、慎重そうな声が聞こえてきた。見知らぬ番号に警戒してのことだろう。

「あの、俺です・・・桜庭尚基です」

『ああ、あなたね。・・・体調はもう良いのかしら』

気遣いとは無縁の平坦な声で訊かれ、尚基は彼女の無表情な顔を思い出していた。

「一応は・・・あなたが、寮の医務員に連絡して下さったんですね。ありがとうございます」

『別に。放っておいてあなたに何かあったら目覚めが悪くなるから』

そつけない上に、辛口らしい。

「・・・迷惑ついでに、一つお願いがあります」

『聞きましょう』

「ありがとうございます」

『お礼は良いから、本題に早く入りなさい。私は学生さんと違って暇じゃないの。倒れる隙もないくらいにね』

「・・・一度、学外で会えませんか？」

『どうして』

「あなたに訊きたいことがたくさんあります。でも学校の敷地内では、いろいろな目や耳があります。学外のほうが互いに都合が良いのではないかと思って」

『・・・』

「兄貴に会わせろなんて無理なお願いはしません。ただ、知っておきたいんです。・・・草薙のこと」

『どうして？あなたは確かに草薙と関係はあったけど、あくまで過去の話のはず。いまさらあなたが草薙のことを知ってどうするといふの？』

「・・・俺の大切な親友が、草薙の当主のことをひどく心配しています。でも、下手なことを言って慰めるのは、何か違う気がするんです。俺は、草薙の本性を知り、親友に何もかも話してやりたいと思っています。それがたとえ親友や草薙当主を苦しめる結果になつたとしても。それに、俺はやっぱり草薙のことを知るべきなんです。・・・たつた一人の大切な兄が、草薙に囚われている限り」

『・・・』

「俺は、兄貴に助けてもらった。今度は、俺が助ける番なんだ」

『その件については話したはずですよ。あなたに、悠基様は救えぬ・と』

「そんなの分からない！俺は、もう決めたんです。守られるだけなのは、もう止めにする・と」

向こう側から、深い溜息が聞こえてきた。

『やはりあなたには草薙の血が流れているようね。そういう意固地なところは草薙緒爪にそっくりだわ・・・不快でしょうけど』
そして、

『分かりました。あなたの親友に対する陳腐な親愛の情はどうでも良いとして、私も悠基様を助けたいことに違いはないのですから』
「なら！」

『学外で会い、草薙について私が知っていることは話しましょう・・・条件付で』

「・・・条件？」

『その、あなたが大事に思う親友も、一緒に連れてお出でなさい』
思いもよらぬ条件に、尚基は眉を寄せる。

「その必要は、」

『条件を飲めぬのなら、私の口からは何も言えない。以後、電話にも応じませんから』

「・・・・・・っ」

月波を巻き込む、ということか。

『話をするだけなら、問題はないかと思いますが』

「でも、親友は一般人だし」

『しかし、草薙の当主のことを心配しているのでしょうか？どちらにしろあなたは私から聞いた話を親友にするのですから、誰が話そうと構わないはず。そうではないかしら？』

「でも、」

『それに、興味もあるの。一見他人なんかどうでも良さそうに見えるあなたが、そこまで大事に思う存在がどういった体^{てい}をしているのか』

「・・・・・・」

『その、親友の名前は？女？男？』

「・・・・・・伊織、月波。男です」

尚基がしぶしぶと応えると、奇妙な沈黙が落ちた。

「綾羽さん？」

『つきは．．．もしかして、天体の月に、小波の波と書いて、月波？』

「え？」

綾羽の反応に、尚基は虚を突かれた。どうして綾羽が会ったことのないはずの月波の名前を知っているのだ？

（まさか、本当に．．．？）

尚基の危惧が現実になりそうな気配に、身震いする。

（俺が月波を巻き込みたなくても、巻き込まないように努力しても、無駄なことなのか？）

そう、もし尚基の読みどおり、月波が草薙の血縁者ならば。

望むと望まざるとに関わらず、月波はいつかは草薙を取り巻く禍根に巻き込まれる．．．？

『その様子だと、ビンゴのようね』

綾羽の溜息交じりの声が聞こえた瞬間、

「さ、桜庭君？」

シャツの裾を引っ張られると同時に、か細く頼りない声に名前を呼ばれた。

「月波、」

「な、なかなか戻って来ないから心配で．．．」

「月波、お前」

「な、何？」

月波をじつと見つめると、睨まれているとも思ったのか、大きな瞳に微かに涙を浮かべて怯えたようにほんの少しだけ身を引く。

「あ．．．いや、何でもない」

『月波っていう子、今そこにいるのね．．．？』

「あ、」

『．．．．次の日曜日、午前十時』

「え？」

『月波君と一緒に、来なさい。場所はまた連絡を入れます』

「あ、ちよつと．．．！」

しかし電話はあえなく切られ、携帯の画面は待ち受けに戻った。

「くそ・・・っ！」

何処までも勝手なことを言う、と尚基は臍を噛む想いだ。命令が好きなのも草薙譲りというわけか。

「さ、桜庭君・・・？どうし、たの？」

今にも泣き出しそうな顔の月波を見ていると、胸に言い様のない痛みが走る。それは兄と月波を重ねてしまうからか、それとも。

（本当に月波は草薙の縁者なのか？だが、それならばほぼ初対面の亮輔との間に、”共鳴”のようなものがあるのも納得が出来る・・・でも、）

月波が草薙の人間だとは、どうしても思いたくないのだ。きっと、自分がそうであって欲しくないと思っているから。月波のように純情で穢れを知らなそうな人間が、草薙の人間であって欲しくない。

「月波、今度の日曜日、予定を空けておいてくれる？」

「え？」

「行きたいところがあるから、付き合ってくれ」

危惧2

「珍しいね、月乃」

「何が」

「だって、普段の月乃だったら、伊織君が桜庭君のことを優先したら、きいきい怒るじゃないの。あんなやつ放っておけとか何とか」
「……そうだっけ」

月乃はそっけなくそう言い捨て、すぐに参考書に目を落とした。

晶菜は晃輝と顔を見合わせて、軽く肩を竦めた。親友の気まぐれには馴れっこ、とでも言うように。

「私、ちよつとトイレに行つて来るね」

晶菜が行つて、一人、席を立つ。晃輝が行つてらっしゃい、と応え、月乃は無心に数学に取り組んでいる。

「あ、あの……先輩、」

何かを決意したかのように、風井晃輝が月乃に声を掛けるが、彼女はノートに目を落としたままで、

「何？」

と素っ気無い。晃輝は一瞬怯むが、今日は負けていなかった。ぎゅつとシャーペンを握り、

「要するに、やきもちなんですよね……？」

「……何か、言つた？」

「そ、その……だから、桜庭さんと伊織先輩が仲良くしてるのを見ると、苛々しちゃうんですよね？」

「聞こえない」

「うっ、」

晃輝はしゅん、と頂垂れる。その様を横目で見ていた月乃は、がしがしと前髪を掻き篦り、

「ああ、そんな泣きそうな顔しないでよ！私が晶菜に怒られるんだから！」

思わず大声を上げれば、ほかの学生や司書がそれぞれの視線を向けてきた。司書が、

「・・・図書室では静かに」

と注意するのに、慌てて頭を下げて詫びる月乃だった。

「・・・コホン。風井君」

「は、はい」

「“やきもち”とは、聞き捨てならないわね・・・」

「で、でも・・・傍から見ればそう見えちゃいます。さっきは・・・違ったみたいだけど」

「友達のことを心配して、様子を見に行くから先に帰る。月波らしくて良いじゃないの」

「だけど、普段の先輩だったら、そこで言ってるんじゃないですか？桜庭さんなんて放っておけば良いって」

「晶菜と同じことを言うのね」

それはまたいつもがそうだから、とはさすがに晃輝の口からは言えず、口ごもる。

「・・・今日はそう目くじら立てる気分じゃなかった。これで良い？」

「・・・」

「何よ、まだ何か言いたそうね」

「あの・・・これは晶菜さんにも話してない、ぼくの直感みたいなものなんですけど」

「は？」

晃輝の瞳に、彼にしては珍しく力が入るのが月乃にも分かった。普段の気弱な雰囲気が一掃されたことも。

「風井君？」

「・・・伊織先輩は、近いうちに“大きな嵐”に巻き込まれてしまっ気がするんです」

「え？」

突然この子は何を言い出すのだろう、と月乃は奇妙に思う。

それに何だか、目付きがおかしい。ぼうつとしているようで、でも何かをじっと見つめているようで。

頬の辺りが微かに淡く光っているように見えるのは、光の加減か。

「ちよつと、風井君？」

「先輩のそばにいてあげてください。そうしないと、きっと後悔することになりますよ」

「晃輝君！！」

「！」

トイレから戻って来た晶菜が、図書室のドア口から大声で恋人の名前を叫んだ。

すると、晃輝の目付きが普段のそれと変わらない、穏やかでしかし気弱そうなものに戻る。そしてまるで白昼夢でも見ていたかのように目をぱちくりとさせ、

「あ、あれ・・・？ぼくは、」

「晃輝君、帰ろう」

「え？え？」

晶菜は自分と晃輝の荷物を手早く纏めて、戸惑っている晃輝の腕を掴んで彼を立たせ、

「月乃、ごめん、私たち、先に帰るから。また明日ね！」

「え、ちよつと！晶菜！？」

そして普段の彼女らしくない焦燥感を漲らせながら、晃輝をひつとらせるようにして図書室を出て行ったのである。

「・・・一体何なのよ、」

晃輝といい、晶菜といい。

（大きな嵐？月波のそばにいないと後悔することになる？・・・どいう意味？）

何だろう、この胸に迫る不安は。

（月波に、何が起るっていつのよ）

晃輝の気のせいだ。晶菜と結託して、あたしをからかってるんだ、絶対そうだ。

（・・・そうよ。月波に限って、危ない目に遭うなんて、絶対にな
いんだから）

月乃は必死に自分にそう思い込ませ、再びノートに目を落とした。
・・・結局、ほとんど身が入らなかったけれど。

「ん・・・、」

草薙亮輔は、軽く呻きながら目を開けた。鼻に微かに香る、木のか
おり。

「僕は、・・・!!」

自分が今どういう状況なのかハツと思い出した亮輔は、布団から出
ようとした。だが膝をついた瞬間に、軽い酩酊感が襲って来て、動
きを止めざるを得なくなった。

（そうだ、確かあの時・・・）

おじの家を壊されてしまうと知り、拘束された中で必死に止めてく
れと叫んだ。

しかし許してはもらえなくて、懸命に拘束を振り解こうとした亮輔
に焦れた誰かが、薬の染み込んだ布を亮輔の口に押し当てて、無理
やり意識を奪ったのだ。

クロロフォルムあたりの薬品なのだろう。まだ効果が少なからず残
っているらしい。

（・・・僕は、なんて無力なんだろう）

当主なんていうのは、ただの肩書きに過ぎない。

自分には、何の力も権限もないのだ。一つの家を守ることも出来な
いのだ。

（僕は、無力だ。守りたいものが壊れて行くのを、眺めているだけ
……何も、出来ないんだ……）

悲しくて苦しくて、息がうまく出来ない。

（……なんだかもう、疲れた……）

いつそのことこのまま死ねたら楽なのに、と亮輔の心に闇が差す。虚ろな瞳が、何かを求めてさ迷う。

（何か、僕を殺してくれるものは……）

上座に視線を遣れば、掛軸と陶器で出来た花瓶がある。

（あれを、割って……）

うつ伏せになり、肘と腕、足の力を使って這い始める。体がガクガクと震え、頭がぼんやりする。

（早く、）

誰も来ないうちに、死ななければ。

（っ、）

ようやく花瓶に手が届く。しかし手に力が入らず、掴むことが出来ない。手は花瓶に触れるだけで、それ以上は全く言うことを聞いてくれない。

（死にたいんだ、僕はもう死にたいんだっ！！）

早く、早く、早く。

掴め、掴め、掴め！

『先輩！』

「っ！？」

不意に、あの後輩が自分と呼ぶ声がした。

こんな出来損ないで、疫病神でしかない自分をとても心配してくれて、自分のことを信じてくれる、あの優しい後輩の声が。

「伊織、くん？」

後輩の名を、呟いてみる。当然、返事があるわけもない。虚しい静寂だけが座敷に広がるだけ。

「……………伊織君、」

あの優しい後輩は、死のうとする自分を許してくれるだろうか。まだ幼さの残る顔を怒りの形に歪めるだろうか。……………それとも、泣いて悲しんでくれるだろうか。

「当主、起きたか」

「……っ！」

野太い声がした瞬間、一人の男が座敷に姿を見せた。

「……いかな」

「や、山縣さん……」

「当主、それだけは駄目だ」

花瓶にすがり付く亮輔に近づくと、ガタガタと小刻みに震える手をそっと自分の手で包んだ。

彼――山縣祐治は亮輔がしようとしたことを察しているのだろうか。
やまがたゆうじ

「や、山縣さん、僕……」

「何があるうと、自分の命を自分で奪うのは決してしてはいけない。それは、命への冒瀆だよ」

「……………」

「さあ、横になりなさい。若い奴等から話は聞いたが、まだ薬が完全に抜けてはいないんだろう？」

それでも亮輔は抵抗しようとしたが、無理だった。

抗おうにも力が出ないし、それに何より幼少のころから何かと自分を気に掛けてくれていた山縣に迷惑は掛けたくなくなっていたから。
「当主、失礼しますよ」

山縣は亮輔を抱き上げ、そっと布団の上に下ろした。

「……私がいれば、薬を使うなどさせなかったが……悪いことをしたね」

山縣は今年四十八歳で、三十歳のころから草薙本家に使用人として住み込みで働き、幼い亮輔に優しく接してくれた。血のつながりのある大叔母と、血の繋がらない使用人の山縣。両者の、亮輔に対する態度は雲泥の差があった。

「山縣さんのせいじゃ、……ないです」

むしろ、山縣には感謝している。本家に寄り付くことはほとんどなかったけれど、どうしても来ねばならないときには、いつも亮輔のことを気かけ、労わってくれたから。

「もう少しお休みになるのが良い。緒爪様はお屋敷を離れられますので」

「大叔母様が、」

「私がそばにいる以上、危害は加えさせませんから。もう少し休みなさい」

「は・・・い、」

亮輔が小さかったころのように、山縣の大きくて暖かい手がそっと亮輔の額を撫でてくれるのが心地よくて、亮輔の目蓋は徐々に下りて行く。

「少し、瘦せたな・・・」

（・・・山縣、さん）

悲しげに目を伏せるその顔が、なぜか後輩のものに重なる。

「山縣さん、一つ、良いですか？」

「何でしょうか」

「僕、最近仲良くなった後輩がいるんです。こんな僕のこと、とても心配してくれて、心から信じてくれる、優しい子が」

「それは、良かった」

「・・・山縣さんの悲しそうな目と、その後輩の目が、似ている気がしました」

「・・・当主、」

「・・・すみません、変なこと、言って・・・、」

もう限界だった。今度は、自然な状態で亮輔の意識は眠りへと落ちて行く。薬を使うような、無理やりなものではなく、自然に。

「ゆっくり、休まれるが宜しい」

「・・・は、い」

辛うじて返事をして、亮輔は完全なる眠りへと落ちて行った。

（緒爪様は何を考えていらっしゃるのか）

眠りに落ちた亮輔の額をいまだに撫でてやりながら、山縣は鬱々とした表情で亮輔の寝顔を見ている。

（もともと細い子だが、最後に会ったときよりも一段と痩せてしまっている。・・・なんと痛々しいことか、）

「おり、く・・・」

「？」

寢言だろうか、亮輔が何かを呟いたことに気付く。

（夢でも見ておられるのか・・・）

「いお、りくん・・・」

「いおりくん。・・・話に出てきた、“仲良くなつた後輩”の名前、だろうか」

一体どういう人間なのだろうか。亮輔のことを友人だと思ってくれるのだろうか。

（高校生とはいえ、まだ子供だ。当主には、もつと自由に生きてもらいたい・・・）

草薙の血を引く限り、それは夢のまた夢のままなのだろうか。

（否、そんなことがあっていい筈がない。当主が犠牲になる必要など、一切ない）

（私に、何か出来ることは無いのだろうか。あれば、良いのだが）だが自分は所詮、使用人。

ただ気まぐれに、草薙の人間に拾われたに過ぎない。

（そんな存在の私の言葉を、草薙の人間が聞き入れてくれるはずもない）

山縣の彫りの深い顔に、自嘲的な笑みが浮かんだ。

（とにかく今は当主にはしっかり体を休めてもらうことが大事だ）緒爪がない今、亮輔に手荒な真似をする人間がいるとも思えなかった。どういう存在であろうが、亮輔は今の草薙の当主であることに変わりはないのだから。

過去

「悠基様、」

桜庭綾羽の声に、桜庭悠基からの反応はない。

その様を見ていた綾羽は、不意にぎゅっと目を閉じると、辛そうにある人物の名前を口にした。その途端、目の前にある細い肩が、ビクリッと大きく震えた。

（やはり、か・・・）

綾羽の危惧は的中した訳だ。

「悠基様、私は、次の日曜日に、あなたの弟とまた話をしに行かねばなりません。・・・彼も、言葉に表せなくても気付いているようです。草薙の本質も、あなたの真実も」

「・・・」

「彼は、草薙の本質を知ろうとしている。たった一人の、親友のために」

「・・・」

「ですが、その親友というのが問題なのです。何故なら」

白い翼が、主人を守ろうとするかのように羽を広げる。ばさりと彼の頭ごと、多い隠そうとする。

だが、悠基の耳には、綾羽の次の言葉が嫌というほどに響いた。

「その親友が、その親友こそが、あなたたち兄弟を奈落の底に突き落とした張本人なのだから」

「！」

翼によって作られる白い世界の中、悠基の体が再び痙攣をした。

「悠基様の弟は、その事実を知らずにその親友のそばにいて、あまつさえ彼の力になろうとしている。それなのに、あなたは見てみぬふりをするのですか？」

「・・・」

「命よりも大切なあなたの弟が、危険な目に遭うかも知れない！な

のにあなたはそのまま黙ったまま、動きも食事もせず、無駄な生を送るおつもりですか！」

本当は言いたくもない言葉が、次々と口を衝いて出てくるのを止めることが出来ない。

悠基は、もう十分苦しんだのだから。

草薙も桜庭も関係ない場所で、平穏な生活を送って欲しい。

これ以上傷つかないで欲しい。

それが綾羽の本心。

でも、それでも。

「このままで良いのですか！？弟を、助けなくても良いのですか！」

ひとしきり言葉を紡ぎ、綾羽はあはあと荒い息を吐く。こんなに叫んだのは、久しぶりだったから。

「悠基様！」

綾羽の必死な言葉にも、悠基はたいした反応を返さない。だが、彼が綾羽に注意を向けていることは、なんとなくでも感じられる。亡羊とした雰囲気、薄れている。ならば何故、何も言ってはくれないのか。

「お願いですから、何か言ってお下さい！悠基様の声を私に聞かせてください！」

「何を騒いでいる」

「っ！」

不意に聞こえた声に、綾羽は思わず体を硬直させた。最も悠基との逢瀬を知られたくない人間の声に。

「地上までただ漏れだよ。桜庭の娘」

「お、つめ……様、」

「おや、どうした。珍しく動揺を露にして。……そんなに私が怖いかな？」

草薙緒爪は、陰鬱な笑みを浮かべた顔で綾羽を見ている。

「いつから、話を……」

「気になるかね？」

「……………っ、」

「……次の日曜日、私も参加させてもらうぞ?」

「!」

「そうか、添山の娘が拘っていたあの生徒が……なるほど、面白い」
呟く程、皺の目立つ緒爪の顔が歡喜に歪んで行く。

「添、山……?」

「ああ、お前には関係ない。日曜日、違^{たが}うなよ?」

緒爪は満足そうに綾羽と悠基を等分に眺め回した後で、足音を響かせながら地上へと戻って行く。

（緒爪に、知られてしまった。……くそっ!）

言い切れない焦燥感が、綾羽を襲う。思わず唇を強く噛み締めてしまい、舌先に血の味がじわりと拡がった。

（日曜日……）

緒爪に知られてしまった今、それを反故にすることは出来なくなつた……己の迂闊さを呪いたい気分だった。

「あ………うー」

不意に、うめき声のようなものが綾羽の耳に飛び込んできて、思わず悠基のほうを振り返った。

「う、」

悠基が、こちらを見ていた。

硝子玉のような瞳で。

「悠基様……?」

白い翼が、意志を持ったように、一度だけさりと羽ばたく。

自分を此処から出せ、そう言っているように、綾羽には思えた。

・・・赤い。

此処は何処だろう、と少年は一人、立ち尽くす。

鼻から忍び込む、異様な臭気。

ゴムが焼けるような臭いと、人々の悲鳴、怒声。

赤い、空。

（僕は、何をしている・・・？）

少年の視野に、一つの異形が入り込む。

すらりと均整の取れた体を持つ青年の背中には、一對の翼がはえていた。

赤い世界にいて、それでも純白の光を放つ、美しく整った翼を。

その青年は、明らかに誰かを探していた。

整った顔が焦りに歪み、切れ長の瞳が周囲を間断なく見回している。
（・・・・・・見つけた、）

少年の唇に、満足気な笑みが浮かんだ。

そう、少年の標的は、この翼を持つ青年だった。彼を燻り出すために、自分は火を放ったのだ。

青年の生家に。

（あれを、殺す。それが、僕の存在理由・・・）
レイゾン・デートル

「尚、何処だ！尚！！」

青年が、誰かの名前を呼んでいる。どうやらその名の主を探しているらしい。そのことだけに必死で、すぐそばに己の“敵”がいて、自分を狙っていることなど全く気がついていないらしい。

・・・滑稽だ。実に滑稽だった。

少年は、ジーンズのポケットから一振りのサバイバルナイフを取り出す。そのナイフの刃先には、猛毒が塗りこんである。それで、青年を斬る。

「尚、お願いだ！返事を・・・！？」

少年が一挙動で青年の懷に飛び込むと、青年が驚愕の表情を浮かべる。

大きく振られた少年の刃を、上体を捻ることでどうにかかわす。

「君、は」

「見つけた……僕は前を、殺す!!」

「!!」

少年が再びナイフを振り上げる。青年は今度は余裕を持ってかわすが、その顔には困惑が浮かんでいる。

「どうして、君が」

「黙って殺されてる!!」

「やめ、」

青年がどうにか少年の動きを止めようとするが、少年も一歩も引かない。

「どうして君が！君は尚の友達なんだろう!？」

「友達？」

不意に青年を追うのを止めて、少年が動きを止めた。

「そうだろう？尚が嬉しそうに君のことを話していたんだ。やっと初めての友達が出来たって。桜庭の人間でも、受け入れてくれたって・
・!!」

「とも、だち……？ふ、ふふふ」

「何、」

「ふふふふふ、あはははははははは!!」

突然少年が大笑いし始め、青年は瞠目する。少年の笑いには、哄笑と嘲りが多分に含まれていたから。

赤い空の下、細身で小柄な体には全く似合わないサバイバルナイフを右手に握り締めたまま、壊れたように笑い続ける少年に、青年は背筋が寒くなるのを抑えられなかった。

「そつか、あいつがねえ！」

その声を張り上げた瞬間、再び少年の攻撃が始まった。青年に向かって飛び込みながら、彼の心臓を標的にしてナイフを振り回す。青年はどうにかナイフを持つ手を拘束しようとするが、少年の動きは思いの外すばやく、うまくいかない。だから足を封じてしまおうと、青年は少年の軸足に目をつけた。

「馬鹿だよ、あいつ！何も知らないで、呑気にそんなこと思ってたんだ！？」

「どういう意味だ！」

少年の左拳が顔を狙って来る。体を捻り、軌道をそらして腕を掴もうとするが、白銀の刃先が視界に飛び込んで来て、離脱せざるを得なくなる。

「無垢なあいつに教えてやったら？お前に近づいたのは友達になるためなんかじゃなかった！あんたに近づく餌にするためさ！！」

「っ！！」

青年の脳裏に、友達が出来たと嬉しそうに破顔する弟の姿が過ぎる。

『こんな僕でも、必要としてくれる人が居るんだね』

頭が怒りで狂いそうだった。

「怒った？怒ったんだ！！なんて弟想いなんだろう、笑わせるね！」

！！

少年の顔に、狂気が走る。

（こいつは、尚にまで手を掛ける気だ・・・！）

そう思ったら、あとは無我夢中だった。

周囲を覆う煙の所為で、息は苦しくなるばかりだったがここでこの少年にやられる訳にはいかない。

何より、まだ自分は死ぬわけにはいかないのだ。

そして尚を傷付けることも避けたかった。

「ああああああああ！！！」

己を鼓舞するように雄たけびを上げ、青年——桜庭悠基は、純白を翼を羽ばたかせる。

「っ、」

一瞬、少年が咆哮に肩を竦める。その隙を、悠基は見逃さない。翼で風を起こし、少年の体にそのまま叩き付ける。

「うあっ」

悠基は怯んだ少年のもとへ走り、ナイフを掴む手を蹴り上げた。一度では離さなかったものの、二、三度と蹴り上げれば、根負けした

ようにナイフを手放した。少年の軸足を払い、後頭部はかばった上で少年と二人して地面に倒れ込む。

「放せ、放せよ化け物！！！」

「お願いだ、お願いだから尚に気付かれる前に、此处を離れてくれ！」

「じゃあ俺にお前を殺させる！！」

少年の言葉遣いは荒々しくなり、アーモンド型の瞳は憎悪に爛々と輝いている。

「どうして、どうして君はそんなに俺を殺そうとするんだ！」

少年の左手が悠基の頬を力任せに打つ。何度か続けて打たれて口内に血の味が広がるが、悠基は少年を逃そうとはしない。

「尚まで使って、どうして！」

少年がもう一度悠基を打とうと手を振り上げた瞬間、

「お、お兄ちゃん・・・お兄ちゃんどこお？」

最愛の弟の、涙交じりの声が聞こえて来た。

「尚っ・・・」

悠基の意識が、完全に弟に向かう。

少年がにやりと笑ったことにも気付けない。

「おにいちゃ、そこにいる・・・の？」

「尚、駄目だ、来るなっ！！！」

弟の親友と戦っているところなど、見せたくない。その一心で、弟がいるであろう方へ怒鳴った。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、」

だが兄と逸れて心細い想いをし続けていた弟にとって兄の声は天の助けにも等しく、その声に縋るしかない。

「お兄ちゃん、何処・・・お兄ちゃん、」

「尚、来るな・・・っ？！」

もう一度戒めの言葉を投げたほんの数秒後、右のわき腹に強い衝撃が襲って来た。

二度、三度と衝撃は続く。

「あ、がつ……!!」

「退け」

少年が低く暗い声で言い、力を失った悠基の体を自分の上から押しのける。彼の血に染まったナイフを握り締めて。

「うつ、うあ……」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、何処お……?」

「安心しなよ。お前の弟も、殺してやるから。仲良く二人並べて殺してやるから」

「ぐっ、ああああっ!!」

少年がぶつぶつと呟きながら、悠基のわき腹の傷を靴を履いた足の裏で踏みつける。

激痛に、悠基の口から悲痛な悲鳴がこぼれる。

体が痙攣する。寒い、さっきまで熱の余波で体は燃えるように熱かったのに、今はどうだ。

翼が生えて異能だと蔑まれても、体の構造は人間と全く変わらない。すなわち、必要以上の血がなくなれば、死んでしまうということ。

「な……お、」

「ふん。自分の身が危なくなっても、まだ弟のことが心配か?」

「……う、つつ」

「阿呆らしい」

もう放置しておいても出血多量で死ぬとも思ったのか、少年は止めらしきものも刺さずに弟の声がするほうへ行こうとする。

(そうはさせるか……っ!!)

痛む体に鞭打って、少年の細い足首を掴む。

「何っ、」

「尚は……尚にだけは手出しさせないっ!!!!」

「放せ! うわっ!」

少年の足首にありったけの力を込める。何処にそんな力が残っていたのかと自分でも驚くほどの力が入り、ゴキリツという嫌な音が悠基の耳に焼き付いた。

「いつ……てえな！この化け物がっ！！！」

少年が怒鳴り、怒りも露わにナイフを悠基の心臓に突き立てようとしたときだ。

「！！駄目、やめてっ」

「！！！」

尚だった。

尚は少年の正体に気付いていないのか、無我夢中の体で、兄を殺そうとする人間の腰に武者ぶりついた。

「尚、駄目だ逃げなさいっ」

「や、ヤだ！お兄ちゃんを置いていくなんて出来ないよっ」

「……尚っ！」

業を煮やした少年が、自分の腰に回る尚の腕を掴んで体を捻る。

「退け！」

「嫌だ！お兄ちゃんを放せ！！」

「ならお前が先に死ぬか！？」

少年が苛立ちを隠そうともせず怒鳴り、尚の拘束から逃れて彼を真正面から見据える。

尚の顔に、驚愕の色が走る。

「……どう、して……？」

「いまさら気付いたのか、馬鹿が！」

呆然と立ち尽くす尚に、少年のナイフが風を切って襲い掛かる。尚は身じろぎどころか瞬きすらも出来ず、少年の顔を凝視し続けるだけ。

少年の刃が、尚の眼前で煌き、

「！！！！！」

声にならない絶叫が、赤い空に迸る。

「あうっ！」

尚の体は、何かに押されて吹き飛ばされていた。硬いコンクリートの床に背中から激突し、悲鳴を上げる。

「あ……う、お兄ちゃん……？」

「居たぞ！あそこだ！！」

尚の耳に、聞き慣れぬ声が聞こえて来た。次いで、バタバタと荒々しく何人かが走ってくる音も。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん・・・？」

嫌な予感が、尚を包む。突き飛ばされる瞬間、一瞬だけ視界に映ったのは大好きな兄の優しい笑顔。純白の、綺麗な羽。

「お兄ちゃん、」

煙の向こう、兄からの声がやけに響いて聞こえた。

「尚、逃げて・・・」

綺麗な顔が苦痛に歪んでいる様がありありと分かる声。苦しげに吐き出された言葉は、尚を逃がそうとしていた。

「やつはこつちだ！」

「お兄ちゃんっ！！」

「良いから早く逃げるんだっ！！お願いだから、逃げて・・・」

尚は煙の向こうから聞こえる兄の悲痛な声に圧され、逃げ出した。逃げたなくても、足が勝手に前へと進んでしまう。

「さようなら。尚・・・しっかり、生きるんだよ」

兄の悲しげな最期の声が、尚の耳や胸にずしりと響いた。

・・・少年は、はあはあと荒い息をしながら、満足げに微笑んでいた。

標的はいまや虫の息で、ひゅうひゅうとか細い呼吸を繰り返すだけ。それでも弟を守れたからか、綺麗な顔は微かに微笑んでいるようにも見える。

（それに、僕を見たときのあいつの顔と言ったら！傑作、愉快愉快だっ！！）

混乱と衝撃の走った、年齢にしては幼い顔。

少年の嗜虐心を煽るのに十分だった。だから思わず尚を追おうとした。

しかし、

「ご苦労だったな」

「・・・・・・・・・・」

たった一声が、少年から動きを奪った。

「どうなることかと思っただが、さすがだな。私は嬉しい」

「・・・・ありがとうございます、“お父様”」

お父様と呼ばれた男は、ぐったりとした尚基を右肩に、そして少年を左肩に担ぐと配下のものたちを従えて歩き出した。

「これで桜庭一異能といわれる男が手に入った。・・・・・・、戻ったら存分に可愛がってやるからな」

男の不気味な笑い声が、炎と煙の充満したその大地に暗鬱に響き渡った。

「悠基様、今は・・・・」

白昼夢というのはこういうもののことを言うのだろうか、と綾羽は夢から醒めたような心持ちで居た。

「う・・・・あ、」

（まさか、悠基様の翼が、私たちに過去を見せたと言うの？・・・・そんな非科学的なことが・・・・）

だが確かに今まで見ていたのは、過去に実際にあったことなのだと知れた。

作り話にしてはリアル過ぎるし、今ここで作り話をする必要もないはずだ。

（悠基様を襲ったあの少年。・・・・確認してみる必要があるが・・・・）

綾羽の調査で、すでに尚基の親友が悠基をこんな目に遭わせた人物だと分かっている。名前を聞いただけで検討がつくくらいだから。

（でも念のため、顔を照らし合わせておく必要があるわ）

かなり珍しい名前で、同姓同名など恐らく居ないだろうとは思うが綾羽は慎重だった。

草薙のように状況証拠だけで他人の人生を決めたくないから。

（もし、今見た少年と尚基の親友が同じ顔で完全に同一人物だと断定出来たら、そのときは、）

そのとき自分はどうするのか。

綾羽はその先を考えたくはなかった。

とにかく今は顔を照合することが一番の重要事項だ。記憶が薄れないうちに、確認しに行かなければ。

悠基が見せてくれた“過去”の少年と、尚基の親友が同じ顔をしているのかを。

（――伊織月波、か）

過去を知るもの

「ん．．．うん、」

何かに呼ばれたような気がして、月波は薄っすらと瞳を開けた。自分が何処に居るのか一瞬だけ分からなかったが、すぐに尚基の寮室なのだと思います。

（今度の日曜日、か．．．桜庭君、何か思いつめてたように見えただけど、どうしたんだろう．．．）

そんなことをぼんやりとっていると、耳元に息が吹きかけられた。「ふやあっ」

こそばゆい上にいきなりだったので、思わず変な声が衝いて出てしまった。

「さ、桜庭君．．．？」

尚基が背後から月波の腰に両手を回し、彼の耳元で軽く寝息を立てていた。

（かつ、顔が近いよ！）

同性なのに、なぜかドキドキしてしまう月波。腰に回された手が熱を持っているような気がするのは気のせいかな。

「ん、．．．．」

（う、うう．．．動けない、桜庭君、起きてよあ．．．！）

月波が体をカチンカチンに強張らせていると、耳に携帯の微かなバイブレーションの音が伝わって来た。

（桜庭君、ごめんっ）

「ああ、電話だっ！．．．！」

「おぶっ！．．．！」

勢い任せで起き上がったものだから、月波の肘が思い切り尚基の顎にヒットする。

「いってえ！」

「さ、桜庭君、ごめんね！ちょっと電話出てくるから！」

顔が真っ赤なのを自覚しつつ、自分の鞆を引っ掴んで月波は玄関へ猛ダッシュした。

「いてえ・・・」

自分がどういう体勢で眠りに就いていたか知る由のない尚基は、月波の焦り具合に首を捻りつつ、じんじんと痛む顎を撫で続けた。

「はあっ」

廊下にまで出た月波はドキドキと高鳴る胸を押さえつつ、携帯を鞆から取り出す。

（……？誰からだろう）

非通知ではないが、液晶画面には十一桁の番号が並んでいるから、月波の携帯には登録されていない相手から掛かってきている。

（どうしよう、）

あまり出たくはなかったが、なかなか着信が止まないために、思い切っ

って出てみることにする。

「はい……もしもし？」

『伊織、月波君？』

聞いたことのない声。男か女かハッキリとしない、不思議な声音だった。

「そ、そうですけど、あなたは？」

『私？私は……お前の秘密を知る者だよ』

「……………え？」

どういうことかと、月波は訝^{いぶか}る。僕の、秘密？

『お前は、覚えていないようだ……………』

「な、何を……………」

『お前が昔、一体何をしたのか、だ……………』

「っ！？」

ぞくつと背中に強い悪寒が走る。冬でもないのに、体が寒さに震える。

「な、何を・・・」

一体誰だ。

僕の秘密つて、何？

『目を閉じてじっくりと内省してみると良い。そうすれば、自然と思い出せるよ・・・自分のことだからな』

月波の心を甚振るように、わざとゆっくりと言っているのが気配で伝わって来る。

この人は自分を恨んで、憎んでいる。月波はそう悟る。

「あ、あなたは・・・誰、」

声が震えるのを止められない。

『・・・私が誰かなどお前には何の関係もない。お前は、自分の“本当の姿”を思い出すべきだ』

「本当の・・・姿、」

『・・・そして、警告だ。伊織月波君』

相手の声が更に一段と低くなる。

『・・・桜庭尚基にはもう近づくな』

「っ?!」

尚基のことまで知っているのかと、月波は愕然とする。

まさか、身近な人間なのだろうか。

「桜庭君のこと・・・、」

『良いか、これは警告だ。・・・これ以上、桜庭尚基に近づくな。』

この警告を無視すれば、お前の大事な人間に危害が及ぶと思え』

「!」

『そして早くお前の過去を、お前の秘密を思い出せ。お前の“本当の姿”を曝け出せ』

「・・・あなたは、一体、」

『私が誰かなどお前には関係ないと言ったはずだ』

「あ、あなたは・・・僕を恨んでいるんですか？憎んで、いるんで

すか・・・？」

電話の向こう、鼻で笑う気配がする。

『お前を恨まない人間など、何処にもいない』

意味深な言葉を残し、電話は向こう側から切られた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

月波は半ば呆然と、開いたままの携帯電話を見つめる。最後の言葉が、まるで呪詛のように己の頭の中をぐるぐると巡る。それに、

（・・・僕の、過去。僕の、秘密・・・・・・・・）

そして、“本当の姿”とは、一体どういう意味なのだろう。

（何だろう、すごく、・・・・・・・・気分が、悪い・・・・）

頭が、ずきずきする。

そして心の奥の奥で、何かがざわめいているような感覚がする。

「・・・・・・・・本当の、姿・・・・」

桜庭尚基にこれ以上近づくな。

（桜庭君、）

彼ならば何かを知っているのだろうか。

（駄目だ、桜庭君に頼ってばかりじゃあ、駄目だ・・・・）

月波はどうにか携帯を鞆に仕舞い、よろよと壁に凭れかかった。動揺をどうにか隠し、ほかの寮生に変に思われないように、平静を装おうとする。・・・体が小刻みに震えるのを止めることは出来なかったけれど。

そして月波は目を閉じて、必死に思考を巡らせる。

——電話の相手は誰なのか。

——どうして月波を憎んでいるような声を出すのか。

——月波の“本当の姿”とはどういう意味なのか。

——本人も忘れている過去とは何なのか。

——秘密とは何なのか。

そして、なぜ尚基に近づくなと警告して来たのか。

（警告を無視すれば、僕の大事な人を傷付けるようなことを、言っ

てた・・・)

さつと脳裏に過ぎるのは、一人の少女だった。

いつだって自分を気遣ってくれる、優しくて頼りになる人。

(・・・月乃ちゃんが傷付けられるなんて、嫌だ・・・)

でも、あからさまに尚基を遠ざけるようにすれば、尚基がおかしく思う筈だ。

(僕は、どうしたら良いの?・・・ああ、頭が痛いよ、)

今日は、一日何かがおかしい。

何の脈絡もなく思い出した——夢という形で——両親のこと、そして、今の脅迫紛いの電話。

何か、月波の知らないところで自分の行く末を決める出来事が起きている・・・月波にはそう思えてならない。

そして意外にも両親の真実は、衝撃ではあつたけれど、たった少し時間が経過しただけで、月波の中には“それならそれでしょうがない”という諦念のようなものが生まれてもいた。

——シヨックだったはずなのに。

(・・・やっぱり桜庭君に相談してみようか。僕一人じゃ、抱えられそうに、ないし・・・)

もしくはただの悪戯だと割り切つて、平然と過ごすか。

「・・・きは?」

(でも、もし本当に、月乃ちゃんに危害が加えられたりしたら、僕は・・・、)

「おい、」

——赤い空の下。

大切な少女が、炎と煙に巻かれて、消えていく——

(もしもそうになったら、僕は、は)

「月波、おい!」

「っ!」

・・・完全に我を失っていたらしい。

いつの間にか目の前に尚基がいて、怪訝そうな顔で月波を見下ろし

ている。

「桜庭、く……」

「いや、いつまで経っても戻って来ねえから、用事が出来てどこかに行ったのかと思って」

そしたらこんなところで突っ立ってるから、と尚基が苦笑する。

「ご、ごめん……ちよつと考え事、」

「別に謝る必要はねえけど……何か顔色悪いけど、大丈夫か？」

「大丈夫だよ、」

真っ直ぐに尚基の顔を見ることが出来ない。

電話口の、桜庭尚基にこれ以上近づくな、という警告が耳と頭から離れない。

「本当か？真っ青だぞ、」

その声にこもるは心配、気がかり。

尚基の手が、月波に伸びて——来たのを、月波は片手で払った。

ぱしんと、小気味良い音が人のいない廊下を走る。

尚基が、びっくりしたように目を丸くして、月波を見る。

「月波？」

「あ、ご・ごめんなさい……ビックリ、して」

「わ、悪い。そんなにビックリするようなこと、だったか」

後味悪そうに、尚基が手を引っ込める。その姿に、なぜか月波は涙腺が緩んで来るのを感じる。

尚基は何も悪くないのに、傷付けた。

「おい、その二人。喧嘩か？」

「！藤宮……寮監」

「ワザとらしく寮監をつけるな、と言っている」

藤宮は、不愉快そうな口調を隠そうともせずになんか言い捨てると、月波をじろじろと嘗め回すように見てくる。

「りよ、寮監……？」

「……顔色が悪いな。医務室に行ったほうが良いんじゃないか？」

そんなに顔色が悪く見えるのだからと、月波は思う。

「だ、大丈夫です。これから自室で休みますから」

「え、月波……」

「け、喧嘩とかじゃないですから。し、失礼します……！」

月波は藤宮にぺこりと頭を下げると、鞆を胸に抱えてバタバタと走り去った。

（……月波？）

尚基の寮室に泊まる、と言う話になっていたはずだったのに、と尚基は首を傾げるものの、月波の姿はもうない。

「……本当に喧嘩沙汰ではないんだな？」

藤宮が疑り深く、尚基を睨むように見る。尚基は、なぜ自分がここまでこの男に邪険に扱われなければいけないのか、時々不当に思う。「違う……違いますよ」

それだけ言って、さつさと部屋に戻ろうと思った。

「……」

「え？」

藤宮が小さく何かを呟いたことには気がついたが、何を言ったのかまでは聞き取れなかった。尚基は思わず彼を見たが、彼のほうはすでに尚基への関心は絶たれたようで、背を向けて歩き去り始めていた。

（気の……せいかな？）

なんとなく不可解なものを感じながらも、いつまでも廊下に立つている訳にもいかず、尚基は自分の部屋に戻った。

「月波、大丈夫かな」

明らかに様子がおかしかった。顔色は普段から白いタイプだったが、さつきは白を通り越して蒼白だった。何か言いたそうに半開きになった口が、どうしても気になる。

（……少し時間を置いて、様子を見に行くか）

そう決めて、尚基は再びベッドに横になった。

それぞれの不安

自分の部屋に戻った月波は、倒れるようにベッドに横になった。ギョツと目を閉じて、頭痛を堪える。

(・・・っ、)

『お前を恨まない人間など、何処にもいない』

『そして早くお前の過去を、お前の秘密を思い出せ。お前の“本当の姿”を曝け出せ』

先ほどの電話の声。憎らしそうに、月波を糾弾するように。

(あれは、一体誰だったんだろう・・・。僕のことを、知ってる人・・・)

寝返りを打ち、天井を見上げる。染み一つない、こげ茶色の天井。見慣れたはずのものなのに、自分が初めて来た場所にいるように感じられる。

(月乃ちゃん、)

無性に月乃に会いたくなる。

あの笑顔で、心配性ねえと言って欲しい。

月波は月波よ、と言って欲しい。

(――月乃ちゃんの声が聞きたいな・・・、)

心で願うだけでは叶わぬと知りながら、月波は何度も心の中でそう繰り返していた。

一方その頃、月乃は月乃で迷っていた。

手の中の携帯の液晶画面に目を落としたまま、ぴくりとも動かない。液晶画面には、月波の携帯電話の番号が並んでいる。

(晶菜の彼氏の所為で、不安がどんどん大きくなる・・・)

普段はおどおどして、見ているこちらが心配になってくるような少年——風井晃輝。

その彼が、神か何かが乗り移ったかのような風情で、月乃に警告してきた言葉。

『……伊織先輩は、近いうちに“大きな嵐”に巻き込まれてしまう気がするんです』

『先輩のそばにいてあげてください。そうしないと、きっと後悔することになりますよ』

（何なのよ、月波が一体何だって言うのよ……）

大きな嵐って何よ、と呟く。

「ああ、もう！私らしくないわ！」

考え込むのが面倒になったのか、月乃はもうヤケクソとでも言わんばかりの勢いで通話ボタンを押した。

呼び出し音が、無機質に脳内に響き。

『も、もしもし』

今にも泣き出してしまいそうな、幼馴染みの声がした。

……本当に月乃のほうから連絡が来るとは思わず、月波は携帯が月乃からの着信を告げたのを見て、息を呑んだ。

「も、もしもし」

思わず上ずった声になってしまい、内心でしまった・と思う。だが、

『ごめんね、いきなり電話して』

月乃からの追求はない。

「う、ううん、大丈夫」

月乃の声も緊張を孕んでいるように聞こえるのは月波の気のせいなのだろうか。思わず姿勢を正す。

『…今日、あまり月波と話せなかったから、用事はないんだけど電話してみた。今、大丈夫？』

「うん、大丈夫」

大丈夫どころか、電話を貰えて嬉しいくらいだ。

（口に出して言えたら、良いんだけど……）

『月波、何かあったの？』

「な、何で？」

『…泣きそうな声、してるから』

「！」

痛いところを追求されたと思った。月波は息を詰めた。

『月波？』

月乃の怪訝そうな声。月波は慌てて言葉を紡いだ。

「だ、大丈夫だよ。月乃ちゃんは心配性なんだから」

無理にえへへ、と笑い声を立ててみる。わざとらしいな、と我ながらに思う。

『月波、』

「月乃ちゃん、今何してたの？寮室にいるの？」

『…うん。勉強してたの』

「偉いなあ。僕も見習わなきゃ」

『月波、本当に何も無いのね？大丈夫なのね？』

「本当だよ。僕は、大丈夫。元気だから」

本当は大丈夫なんかじゃなかった。今日はいろいろとありすぎた。全てを月乃にぶちまけて、楽になりたい。

でも絶対に月乃に心配を掛けたくない。すでにたくさんの心配や迷惑を掛けてきたから。

『なら良いんだけど…。何かあったら言うのよ？月波は何でも我慢し過ぎるんだから』

「ありがとう、月乃ちゃん」

『今更お礼なんて良いよ。それじゃ、そろそろ切るね』

「うん。また明日ね」

『うん。お休み、月波』

「お休みなさい、月乃ちゃん」

月波は心が温まったのを感じながら、携帯を切った。
その途端、

「あ、れ．．．．．？」

何の脈絡もなく、両目からぼろぼろと落ちるものがあつた。
涙。

「あ、あれ．．．僕、どうして、泣いて．．．」

混乱している間にも、涙は止まることを知らずに流れ続ける。

「どうして、」

悲しくなんてないのに。

泣きたくなんてないのに。

（僕、どうしちゃったんだろ．．．）

月乃と会話して温まった心が、一気に冷たくなるのを感じる。不安
が心を占める。

（．．．．もう、寝よう、）

このままで居ても、益々混乱するだけ。眠って、忘れよう。

月波は携帯を机の上に載せて、ベッドに潜り込んだ。現実から逃げるかのように。

桜庭尚基は、ベッドの上で上体を起こした。

薄闇の中、友人のことを思う。今、月波は何をしているのだろう。

『日曜日、付き合ってくれ』

（まるで恋人になれって言ってるみたいだったな、）

今更そんなことを思い、一人、気恥ずかしくなる。

（．．．．だけど、本当に月波とあの女を会わせて良いんだろうか．．

．）

何か嫌な予感がする。胸の奥の、そのまた奥の方。何かが尚基に対して警鐘を鳴らしている。

こんなに何かに対して嫌な予感がし、不安な気持ちになることは滅多にない。

（もし俺の悪い想像が当たって、月波が本当に草薙の関係者だったら）

綾羽という女の様子を鑑みるに、その可能性はかなり高い。

（・・・なら、兄貴と月波が似ていると感じるのは、そのせい？血のつながりがあるから・・・？）

目を閉じれば、今もありありと思い出せる。

紅蓮に染まる空。一族の悲鳴。怒声。

立ち上る煙。兄の、最期の笑顔。

『いまさら気付いたのか、馬鹿が！』

「っ！？」

耳元で誰かが怒鳴ったように聞こえて、尚基は目を見開いた。だが当然、部屋には尚基一人だ。幻聴としか思えない。

（幻聴・・・？本当に？）

それにしてもやけにリアルだった気がする。まるで、過去に本当に聞いた言葉のような。

「いまさら気付いたのか・・・」

何かを確かめるかのように、尚基は呟く。

（何だ、誰の言葉だ・・・？）

じわじわと湧き上がる焦燥感。穏やかだった心臓が、小刻みに鼓動を刻み始める。

「兄貴、」

——もし、あの女の言う通り本当に兄貴が生きているのなら、また、会いたい・・・。

兄ならば、この焦燥感も不安も、鎮めてくれると思う。あの穏やかな笑顔で、優しく包み込んでくれるはず。

「兄貴、本当に生きてるなら、」

早く会いたい。会って、あの時言えなかった言葉を……。

（なあ、兄貴。月波っていう俺の友達は、兄貴によく似てるんだよ。もし月波が草薙の血縁者だったとして、兄貴は知っていた？月波のこと）

兄のことを想いながら、深呼吸をする。落ち着け、と心の中で自分に言い聞かせる。

（全ては、日曜日……）

月波とともに、桜庭綾羽に会う。そして、今の草薙のことを話してもらう。

月波自身のことも。

（日曜日……何も起きなければ良いが……）

目を閉じれば、兄と月波の笑顔が重なった。なぜか、今にも泣き出してしまいそうな切ない顔が。

「で、どうするわけ？」

厳しい眼差しが向けられても、穏やかな表情が崩れることはない。

「どうする・とは？」

「……私が頑張って我慢して好みのタイプでもないお子様にキスしてまで奪ってきた“それ”を使ってどうするのか、ということだ」
楓香の直接的表現にも、悠一郎は穏やかに笑うだけだ。

「邸君らしい物言いだね」

「茶化さないで欲しい」

邸楓香は、鋭い瞳で従姉弟を見つめる。

「……あなたが何を考えているか、昔から分かりづらかったが最近は特に顕著だ。私にも話せないことか？」

「話すほどのことじゃないというだけだよ」

一点の曇りもない笑顔でそう言われれば、毒気も抜かれるというものだ。

楓香は肩を竦め、組んでいる足を入れ替える。

「・・・でもさっき手に入れたあの刀を使って、何かをする気ではいるんだろう？」

「・・・」

悠一郎の視線が、自分の執務用のデスクに向かう。桜庭尚基から奪った“刀”は、その脇に立て掛けられている。

「そうだね、そのうち、とても楽しいことをしようと思っているよ」

「・・・楽しいこと？」

「そうだよ。まだ、秘密だけだね」

そう言つて、悠一郎は革張りのソファから立ち上がり、腕時計の盤面を楓香に示して見せた。

「僕はこれから人とお会いする用事があるんだ。・・・そろそろお引取り願えますか？」

楓香は返事はせず、黙したまま立ち上がる。彼女がドアへ歩く後姿を見つめる悠一郎の瞳は、悲しみと不安が宿ったように見える。

「学院長」

ドアノブを握り、悠一郎には背中を向けたままで、楓香は彼を役職名で呼んだ。

「・・・何かな」

「いつでも、手は貸すから」

それで話は終わりだった。楓香はもう何も言わず、静かに学院長室を出て行った。

（——邸君、ありがとう。でもこれは、僕自身の問題だから）
気持ちだけで十分だよ、と悠一郎は寂しげに呟いた。

わきあがる感情

こんなときでもお腹って空くんだなあ、と草薙亮輔は見慣れぬ天井を見上げながら思っていた。

電気の点いていない室内は薄暗く、自分の手ですらぼんやりとして見える。

（今、何時なんたる・・・）

時間を確認しようと身を振ると、

「当主、失礼する」

山縣祐治の声がして、手に盆を持った彼が襖を開けて姿を見せた。

「食欲はないかも知れないが、食べた方が良いと思ってな」

山縣は亮輔の枕元に膝を着いて、

「食べれそうか」

と優しい声音で聞いてくる。亮輔は両手をついてどうにかだるいながらも上体を起こし、盆の上に並ぶ料理を見る。

「電気を点けようか」

山縣が点けた電気で、暗闇に慣れた目が悲鳴を上げる。少しの間だけギョツと目を閉じてそれを遣り過ぐす。

「・・・」

「久しぶりだからと、登紀子さんが腕を振るってくれたんだ。当主のために」

慣れたと判断して、ゆつくりと目を開ける。

香ばしい魚の匂いが、鼻腔をくすぐくすぐる。

「登紀子、さんが」

登紀子は家政婦で、山縣よりも草薙家に仕えて長い老齢の女性だ。料理の腕はぴか一で、亮輔も彼女の作る食事が大好きだった。

「・・・美味しそうです」

此処最近、まともな食事を摂っていなかったから、余計に切なさが増み上げる。

盆の上の食事は和食だった。炊き立ての白米、野菜たっぷりの味噌汁、秋刀魚の塩焼き、高野豆腐、ひじきの煮付け。どれも美味しい。うだ。

「・・・ちょうど、お腹が空いたと思ってたんです」

亮輔が照れながらそう言っていると、山縣がそうか、と嬉しそうに笑う。

「腹が空くのは良いことだ。しっかり食べなさい」

「・・・はい」

箸を手に取り、まずは味噌汁に口をつけた。懐かしい味が、舌に、胸に、じわりと染み渡る。

「美味しい、」

「まだまだたくさんあるから、遠慮せずお代わりしてくれ。ほかに何かあれば、言って欲しい」

「ありがとうございます、山縣さん」

まだこんな自分にも、味方になってくれる人がいるんだと知り胸が熱くなるのを亮輔は止めることなど出来そうになかった。

（・・・伊織君も、今頃は誰かとご飯を食べてるのかな、）

いつか彼と一緒に食事をしたい、と亮輔はぼんやりと思った。

時間はいつの間にか午後七時になっていた。

（腹、減ったな。・・・今日はどうするか）

寮の食堂か、自分の寮室で何かを作るか。どちらもピンと来ない。購買で何か買うか、少し頑張って寮近くのコンビニまで行くか。

（月波はどうしたんだろうか・・・）

別れ際のあの様子から見ると、食事をしそうには思えない。

もしかしたら疲れきってもう眠っているかも知れない。だとしたら起こすのも可哀想だが・・・。電話してみるか、と思った瞬間、その携帯電話が音楽を奏でた。電話だ。

（月波の番号だ）

もしや向こうも尚基と同じことで電話をして来たのでは、と苦笑しつつ電話に出る。

「もしもし、月波？」

「・・・くらは、くん・・・」

その出だしだけで、月波に異変が起こったのだと知れた。聞こえる息が荒い。まるで風邪でも引いたかのように。

「月波、どうした！？」

「わかつ・・・ない、寝てたらいきなり息苦しく・・・げほっ、」
「今から行くから！待ってろっ」

電話の向こう、月波のすすり泣くような音がする。

尚基は電話をつないだまま、寮室を飛び出した。

月波の寮室のドアを、一応ノックするがやはり返事はない。それほど苦しそうだっただ。

「月波、入るぞっ！」

声を掛けながら、靴を脱ぎ飛ばす。

「月波、」

ベッドの下に、月波が蹲っていた。

ひゅーひゅーというか細い息の音が、耳に飛び込んで来る。

「月波、大丈夫かつ！？」

項垂れていた頭を上げさせる。

「月波！しっかりしろっ」

ぐったりと閉じられていた瞳が、尚基の呼びかけに応えるようにゆっくりと開けられる。

「桜庭君、」

「どうした、苦しいのか」

「……胸が、」

「どうする、医務室に行くか？」

腕の中、月波が弱々しく首を左右に振る。

「だい……じょうぶ、そこまでじゃ、……ひうつ」

奇怪な呼吸音を漏らした後、激しい咳が月波の小さな口から吐き出される。

「げほっ、がはっ、ごほっ、ごほっ……!!」

「月波！」

慌てて背中を擦ってやる。女の子みたいに細くて頼りない背中だと思ふ。

「ごめ……ね、」

「謝らなくて良いから！気にするなっ」

自分が辛いのに、相手のことを気に掛ける。

その姿が健気でもあり、苛立ちの原因でもあった。こんなときくらい、自分のことを考えてくれれば良いのに、と思ってしまう。

「月波、頼む——頼むから無理しないでくれ。辛いときは、はっきり辛いつて言ってくれ。俺をもっと頼ってくれ」

気付けばそんな言葉が出ていた。そんな性質たちではない筈なのに。

細い体を、抱き締める。自分の体温が少しでも月波の冷えた体を温めてくれたら良いと願って。

月波が上擦った声で、

「さ、桜庭君……？」

「月波、体が冷たい。寒くないか？」

「へ、平気だよ……」

月波が体から力を抜いて、尚基に全体重を掛けてくるが、それでも“重い”とは感じなかった。

むしろ自分を信頼してくれているのだと分かって、口元が喜びに綻ぶのを止められない。

「……ありがとう、落ち着いたみたい、」

咳は止まり、呼吸も安定したようだ。月波がそう言う。

「月波、飯は？」

「ん・・・まだだよ」

「一緒に食わねえか？腹なんて減ってないか・・・？」

月波の手が、尚基の襟元をギュツと握り締める。

「月波？」

「あの・・・あのね、」

月波が何か重大なことを言おうとしている、と尚基は悟る。黙って、月波の言葉の続きを待つ。

「あのね、」

しかし月波は言うか言うまいか、迷っているようだ。困惑しているのが体を通して、ひしひしと伝わって来る。

「言いにくいことなら、無理して言わなくて良いぞ」

「・・・うん、ごめん」

結局言わないことにしたらしく、そう謝罪して月波は口を閉ざした。話したいことがうまく言葉で表現できないのかも知れない。

「ご飯、だったよね。桜庭君、何か食べたいものあるの？」

「いや、まだ決めてない。月波はどうするか聞きに来ようと思ってたくらいだから」

「じゃあ、僕作るよ。簡単なものしか作れないけど」

そういえば、以前そんな話もあった。あの時は、どうして先送りになったのだったか。

（ああ、俺が不安定だったせいかな）

尚基はそのときのことを思い出して、苦笑する。

「でも月波、体が辛いんだろ？無理しなくて良いぜ」

「・・・ううん。何かしてた方が気が紛れるし」

「そうか」

少し名残惜しく感じながら、月波を解放する。相変わらず冷たく冷えた体を。

「何が食べたい？」

「月波が冷蔵庫と相談して決めてくれ」

「分かった」

月波がゆつくりと立ち上がり、簡易キッチンへ向かうのを尚基も付き従った。

キッチンへ着くと、月波は冷蔵庫に首を突っ込んで内部を物色し始める。

「月波はよく料理するのか？」

「そんなにでもないけど、下手ではないと思ってるよ。・・・桜庭君で、オムライスとか好き？」

「嫌いではないけど」

滅多には食べない、という言葉は飲み込んでおく。

「じゃあオムライスを作るね・・・そのくらいの材料しかないや」

「ああ、頼む」

尚基を見て、月波がにっこりと微笑む。

まだ微かに青白い顔で。

「じゃあ、テレビでも観ながら待ってて。すぐ作るから」

「よろしく」

軽く月波の肩を叩いて、尚基はベッドのある部屋に戻った。

（桜庭君の腕の中、暖かった・・・）

卵二個を割って硝子ボウルの中で掻き混ぜながら、月波はぼんやりとそんなことを思っていた。

同性に抱き締められたのに、嫌悪感など一切なく、居心地の良さだけがあつた。

（僕、その毛があるんだろうか）

だが同性を好きになった経験はないし、それどころか異性にすら特別な感情を持ったことはない。

だから同性に恋愛感情を持つ性質ではないとは思っただが・・・。

（きつと桜庭君だから、かな・・・）

フライパンが温まって来たから、月波は一人分の溶き卵をそこに流し入れる。

中身のケチャップライスは、先日作ったもののストックがあるからレンジで温めるだけにする。

（ほかの男の人だったら、避けそうな気がする・・・）

「月波」

（でも、何で桜庭君なら良いんだろう・・・。桜庭君と居ると、何故か安心出来るんだ）

「月波！」

「っ！」

声に驚いてパツと顔を上げれば、尚基の呆れ果てたような顔がある。

「さ、桜庭君・・・」

「ぼうつとするな。火傷するぞ」

気に掛けてくれているのか、尚基の口調は硬い。

「ご、ごめん」

「俺に謝る必要はないよ。火傷して痛い思いをするのは月波だからそれもそうだ、と月波は項垂れる。

「ぼんやりして、何考えてたんだ」

「！」

まさか素直にあなたのことです、などとは言えず、月波は赤面する。卵のことは頭から吹き飛んでいる。

「・・・注意散漫。それとも、具合がまだ悪いのか？」

「う、ううん。体は、もう本当に、大丈夫だから」

「なら良いんだが」

尚基の顔からは月波の体調を気遣う色が消えない。

やっぱり心配を掛けてばかりだ、と月波はやるせない想いになる。

迷惑ばかり、掛けている。

「卵、焦げてるんじゃないのか？」

「あ、うん・・・あつつ！」

「！馬鹿っ」

動揺してしまったのか、月波は菜ばしを持った手をフライパンの側面に当ててしまふ。ぴりり、とした痛みが手の甲に走り、月波はびくりと手を引っ込めた。

「手！」

その月波の手首を、尚基が掴んだ。思いの外、熱のこもった手で。

「すぐに冷やさないと駄目だろう！」

流しから水を勢い良く出し、あっという間に赤くなった手の甲に流し当てる。

「ご、ごめんなさい・・・」

尚基の横顔が怒っているように見えて、月波は泣きそうになる。怒らないで欲しいという感情と、こんな自分のことで怒ってくれることが嬉しいという、相反する感情に板ばさみにされ、微かに困惑する。

「謝らなくて良い」

その言葉も、何処か素っ気無い。

「ごめ・・・なさい、」

もう堪えられなかった。泣くまいと思っても、涙は自然と零れてしまふ。

「！な、泣かなくても・・・」

尚基の動揺する気配。

「う、うう」

「月波、」

「ごめ・・・なさ、ごめ・・・」

「月波、違う。謝らなくて良い。俺は怒ってないから、だから、泣かないでくれ・・・」

ほとんど困り果てた声。尚基には珍しいことだった。

「・・・俺、嫌なんだよ。月波が痛い思いするのが。や、火傷くらいで大袈裟と思うかも知れないけど、痛いだろ？月波が痛い、俺も痛いんだよ」

此処が、と尚基は自分の心臓のあたりを指差す。月波の涙に濡れた大きな瞳が、そこを見つめる。

「桜庭君……」

「だから怒ってるんじゃないくて、心配してるだけなんだ。だから泣くな」

尚基の声は何処までも優しくくて。

「うう」

「っ！月波っ」

「ち、違っの。僕……嬉しくて……」

「え？」

嬉し泣き？と尚基が呟く。月波はこくこくと何度も頷く。

「僕なんかのこと、こんなに心配してくれるのが嬉しくて……涙が止まら……ない、」

「月波……」

「えへへ……、僕、何か変だね……」

泣き笑いを浮かべながら、月波は蛇口を回して水を止めた。

「大丈夫か？」

「うん。痛くないよ」

「……そうか」

ホッと胸を撫で下ろす尚基。

「卵、焦げちゃった……」

火傷のどさくさに紛れて、コンロの火を止め忘れていたようだ。焦げ臭さすらも、二人の頭からは一切抜け落ちていた。

「良い。焦ったら食欲がなくなったみたいだ」

「そ、そっか……ごめんなさい、」

「謝るなよ。一食抜いたくらいで死にやしないさ」

「う……うん、」

尚基は月波の、手を取る。幸い、火傷の痕は残らなかったようだ。心底ホッとする。

「月波、やっぱり今日はもう休め」

「そう…だね、そうする」

「此処は俺が片付けておくから。ゆっくりしてろ」

「ありがとう…桜庭君」

「気にするな」

月波は穏やかに微笑んで、キッチンをあとにした。

（やっぱり僕、おかしい……）

ベッドの上でうつ伏せに寝転がり、月波は自分の中に芽生え出している感情に戸惑っていた。

（桜庭君に握られた手首が……熱い、）

今更ながらに、尚基に手首を握られたという事実に関頭の中が熱くなる。有り体に言えば、“ドキドキ”するのだ。

（ま、まさか僕は、本当に……）

尚基のことが、好き——なのだろうか。

（だ、だって桜庭君は男で、僕も、男で……）

なら、このドキドキは何なのか。異性である月乃に触れたときには感じないこの気持ちは、何なのか。

「僕は、桜庭君のこと……好きなのかな」

小声で呟いてみる。尚基に聞こえてしまったら、それでこそ変に意識してしまうから。

（ま、まさかね……）

手首が熱く感じるのは、きつと気のせい。
胸がドキドキするのも、きつと気のせい。

そう、全て気のせいだ。

（それに、）

不意に、蘇る嫌な記憶。

先ほど月波の携帯電話にかかってきた、謎の脅迫電話。

それを思つと、さっきまで感じていた感情も地に落ちてしまう。

（桜庭君と、僕の両方のことを知っている人。そして、僕の過去を知っている人・・・）

一体誰だつたのだろう。声だけでは全く検討はつかなかった。

（これ以上桜庭尚基に近づくな・・・か）

もし今までどおりに尚基と接する、もしくは今以上に親密になれば・・・月波の大事な人に危害を加えると言っていた。

（・・・あれは、本気だつた）

あの声音から考えたら、ただの脅しとは言い切れないものがあつた。（・・・僕は、どうしたら良いんだろう）

尚基へ向ける感情、謎の人物からの意味深な発言に脅迫。

それらが月波の頭と心の中をぐるぐると巡り、なかなか眠りにつくことが出来そうになかった。

月彦という男（前書き）

今年もよろしくお願い致します！執筆、頑張りますっ

月彦という男

月波がようやく寝入り、キッチンの片付けを終えた尚基が優しげな眼差しで彼の寝顔を見つめていた、同時刻——日本のある空港に、一機の飛行機が着陸していた。

「月彦様、足元にお気をつけ下さいませ」

「ああ」

秘書に深々と礼を尽くされ、月彦と呼ばれた壮年の男性は満足げに頷く。

「日本も久しぶりだが・・・相変わらず空が狭いな」

「・・・仰る通りで御座います」

「そう畏まる必要はない。行こうか」

「はい」

優しく微笑まれ、秘書の白い頬が僅かに朱色に染まる。

「莉伊佐。例の件はどうなっている？」

搭乗口へと足を進めながら、月彦が問う。秘書——沖村莉伊佐は、それを受けて黒皮の手提げ鞆から、クリップで留めた数枚の書類を取り出して月彦に恭しく差し出した。

「どうぞ、こちらを」

「うむ」

彼が書類を受け取った瞬間に、好々爺然とした顔に冷たい色が宿るのを莉伊佐は感じた。

細い瞳に、非情な色が浮かぶ。

「・・・ふふふ。しばらく野放しにしておけば・・・」

「月彦様、いかがなされますか？」

月彦が愉快気に、喉の奥を鳴らす。

「莉伊佐、愚問だよ。自由を愛する私が、わざわざ柵だらけのこの国に戻って来た・・・それが何を意味するか、お前ならば簡単に分かるだろう？」

月彦の視線が、莉伊佐から書類の二枚目に貼られた写真に移る。まだ幼さの残る顔立ちをした少年の写真を、じつくりと見詰める。粘着質な光を浮かべて。

「わが最愛の息子に会いに行こうじゃないか。この可愛い顔が絶望に歪む瞬間が、楽しみだ」

陰鬱な笑いが、広々とした空港のロビーに響いていた。

「月彦が数時間前、日本に入りました。今頃は秘書と空港を出る頃でしょう」

藤宮寮監の言葉に、悠一郎はそうですか、と頷くだけに留めた。亡羊とした瞳からは、何の意思も感じられない。

「“彼”の件は、どうしますか？」

「まだ今は静観の時です。まだ、僕たちが動くべき時ではない」
藤宮寮監が、納得出来ないというように眉を顰める。

「だが、手遅れになつては困ります」

悠一郎がクスリと微笑み、藤宮寮監が柳眉を逆立てる。

「・・・何が可笑しいんですか？」

「いえ。“彼”はどうやら気難しい人の心を妙に解す力を持っているのだと思ひまして」

「私が、その“気難しい人”だと？」

「そう聞こえたのなら謝ります」

くすくすと微笑む悠一郎からは一切の悪意は感じられず。藤宮寮監は深い溜息を吐いた。

「“彼”にはもう少しの間泳いでもらいます。怖い思いをさせてしまつかも知れませんが、それも仕方のないこと・・・あの男の子供

として生を享けた“彼”には、どうしても着いて回るものですから
「私は出来ることなら“彼”には平穩に暮らして欲しいんですけど
ね」

「……それは、親友のために？」

悠一郎の問いに、藤宮はふいと顔をそらした。

「とにかく、“彼”の監視は引き続き行います。月彦の追尾はお任せしますよ」

「はい。分かっていますよ」

藤宮寮監はソファから立ち上がり、それでは、と言い置いて部屋を出ようとする。

「ああ、藤宮さん」

「……何か？」

「いえ。“彼”のこと、よろしく願いますね」

「分かっていますよ。あいつが悲しむ姿は、もう見たくないですから」

そう言つて、藤宮寮監は今度こそ部屋を出て行つた。

（あいつが悲しむ姿は、もう見たくないですから……か）

相変わらず青臭い性格だと思つが、それが彼らしいとも思う。冷たい性格を演じていても、生来の他者を気遣う心を完全に消すことは出来ないものだから。

（今は、まだそのときではない——）

皆にはまだまだ踊つてもらわねばならない。そう、今はまだ……。

（何だろう……とても、温かい……）

とても心地好い温もりを、月波は感じている。

日だまりで眠っているような、感覚。

（でも……確か寮の部屋で寝てる筈なのに……）

温かい、と思う環境ではないはずなのだが。

月波は不思議に思うものの、居心地の良さを手放すことは出来ずにまどろみに身を任せる。

この気持ちよさが、一生続けば良いのに、とも思う。

（ずっと、このまま）

月波は眠りながら、祈る。

平穏な生活が、これからもずっと続きますように・と。

（……だけど僕は、知ってる気がする）

心のどこかで、理解している。

平穏は、いつだって破られるために用意された、仮初のものに過ぎないのだと。

月波は感じている。

月波の平穏を打ち破る何かが、刻一刻と迫っていることを。

「ああ、そうだ」

空港ロビーを出て、出入口で待っていたリムジンに乗り込んだ所で、月彦が不意に何かを思いついたように声を上げた。

「月彦様？」

「ホテルに行く前に、寄りたい……いや、会いたい人間が居るのだが」

「どなた様に」

「……草薙のお姫様だよ。ほとんどお会いしたことがないから、ご挨拶をしたい」

「草薙当主のことですか？」

“お姫様”という言葉に引っかかったのだろう、莉伊佐が珍しく眉

根を寄せて月彦を見遣る。

月彦が喉の奥で笑う。

「あれは男だが、深窓の令嬢のようなものだろう」

「・・・分かりました。少し、お待ちください」

月彦に一つ断ってから、莉伊佐は携帯電話で何処かへ連絡をし始めた。その間、月彦は流れる車窓の景色を眺める。

（早く最愛の息子に会いたい、急いては事を仕損じるといふしな・・・それに、最大のお楽しみは、最後の最後に取って置かねば・・・）

想像しただけで、愉悦に顔が歪む。

最愛の息子が、泣いて懇願する姿。絶望に顔を歪める姿。高い声を上げて、喘ぐ姿・・・。

「月彦様？」

「！ああ、すまない。どうなった？」

莉伊佐は一つ頷き、

「草薙の当主——草薙亮輔は、今日付けの本家預かりの身になったようです。現在、本家にいます」

「本家？おじの家に住んでいるのではなかったのか？」

「そのおじですが、何者かに殺害され、本日本家によって荼毘に付されています」

「そうか、それでその家を出て本家預かりの身か・・・」

ふん、と月彦は鼻を鳴らす。

正直草薙亮輔には興味はあるが、草薙本家にはいけ好かないものを感じている。だが。

（とりあえず、顔見せくらいはしておくかな・・・）

「莉伊佐、草薙本家と連絡を取ってくれるか。私の名前を出してくれて構わん・・・草薙本家へ出向く」

「・・・畏まりました」

莉伊佐は再び携帯を使って、今度は草薙本家の番号をダイヤルする。
「もしもし、私は・・・」

（さて、長老連中は何と言うか・・・）

裏当主と呼ばれる草薙緒爪は、そこそこ話が分かるし、理知的でもある。

だがそれ以外の長老衆は、頑固で愚かだ。顔を合わせるだけで疲れる。

「それでは、後ほど」

莉伊佐が一切の感情を排した口調でそう告げ、通話を終えた。

「月彦様、草薙本家の了承を得ました。緒爪も同席する、という条件で、草薙亮輔との面談を許すと」

「そうか。では、向かってくれ」

「はい」

莉伊佐が運転手に指示を下す。

（緒爪とも久しく会っていないな。・・・ますます美しくなっているであろうな）

日本を離れる間際に会った時の、意味深な彼女の涙は、ずっと月彦の胸の中で燦り続けていた。

登紀子の心づくしの手料理を食べ、再び横になってうとうととしていた亮輔のいる座敷の襖が、勢い良く開けられた。

「っ」

廊下から差し込む灯りが、否応なしに亮輔の眠りを退ける。

「起きろ」

高圧的な口調。緒爪だ。

「大叔母、様、」

「早くしろ」

グイッと思い切り腕を掴まれ、痛みが走る。

「客が来る。支度をしろ」

そう命じる緒爪の口調は、心なしかいつもよりも固い。亮輔は半ば夢うつつの体で、布団から出る羽目になる。

（支度と言われても……何をしたら、）

制服のまま布団に入っていたせいで、シャツは勿論ズボンにも皺がたふさんついてしまっている。

「まずは冷たい水で顔を洗って、その腑抜けた顔をしゃっきりとさせろ」

緒爪の命令に、亮輔は人形のように従う。いまだに気だるい体を、あまり力の入らない足で運ぶ。

「……………っ、」

洗面所に着いた途端、言い様のない寒気がぞくぞくと背中を走り抜けた。

（風邪、引くかな……）

あとで山縣に言って体温計を貸してもらおうと思いつながら、亮輔はゆつくりと蛇口を回した。

（大叔母様は、客が来ると言った……誰だろう）

ほとんどのことでは動じない彼女が、妙に口調を固くしていた。何故？

（そんなに大層なお客さんなのかな……）

幾ら考えても分からない。草薙の当主というのは形だけ。普段はおじの家で暮らしていたこともあり、本家のことについてはほとんど何も知らない。大叔母が顔色を変える程の相手とは……。

「考えても、無駄かな……」

タオルで濡れた顔を拭き、手櫛で髪を整える。

「亮輔、これに着替えろ」

緒爪がやって来て、亮輔に真新しいカッターシャツとスラックスを差し出す。

「は、はい」

「早くしろよ」

緒爪は足早に立ち去る。やはり余裕がなさそうに。

(……………)

自分もその客に会うのかと思うと、気が重くなる。いまだにぞくぞくと背中に悪寒が走っていた。

緒爪に手渡された服に着替え、しばらくすると、

「緒爪様、いらっしやいました」

玄関で、山縣が声を上げた。

「亮輔」

「は、はい」

自分が寝ていた座敷とは別の座敷に、亮輔は居た。緒爪に命じられるまま、上座に座らされているので居心地の悪さと言ったらこの上ない。

「山縣！通せ」

大きな声で緒爪が命じて、少しのあと——座敷の襖が静かに開いた。
「……失礼する」

そう言つて現れたのは、一組の男女だった。

男は四十代後半から五十代前半くらいか。身長は百七十センチ近く。恐らくブランド物であろうグレーのスーツを身に着けた、均整の取れた体躯。白髪混じりの黒髪は綺麗に切り揃えられている。

「お邪魔致します、草薙当主」

穏やかな笑み、聞く者を安心させるような深みのある声。人見知りの激しい亮輔ですら、無防備になつてしまいそうになる。

「私は相ヶ瀬月彦あいがせつきひこと申します。こちらは、秘書の沖村莉伊佐です」

月彦の横に立つのは、二十代半ばに見える女だった。真っ黒なスト

レートの髪を腰の半ばくらいまで伸ばし、雪のように白い顔には一切の表情がない。黒いパンツスーツ姿で、こちらも均整の取れた体軀をしている。

「どうぞ、宜しく」

莉伊佐が小さく頭を下げる。

「緒爪、久しぶりだね」

「……そうだな」

「そんなに固くならないで欲しいな」

「……亮輔に用があるのだろう」

緒爪が苦虫を噛み潰したような顔をするから、亮輔は意外なものを見た……と思い、驚く。月彦が笑い、次いで亮輔を見る。

「初めまして……ではないんだが、私のこと、覚えてないかい？」

「え？」

てつきり初対面だと思っただけに、その問いかけに目を見張る。

「どう？」

「あ、す、すみません……よくは、」

「まあ仕方ないな。私はほとんど日本にいないし、君と最後に会ったのも何年も前だしね」

そう言つて、朗らかに笑う。

「は、はあ……」

「失礼します。お茶をお持ちしました」

漆塗りの盆に、四つの湯呑みを乗せた山縣が姿を見せた。

「これは、ありがとうございます」

「いえ。……それでは」

山縣は気がかりそうな視線を亮輔に寄越したが、何も口にすることはしなかった。

「……あ、あの、僕に何かご用なんですか？」

「用、というほどのものはないんだ。ただ久しぶりに日本に戻って来たものだから、挨拶回りのようなものだよ」

「……………」

一瞬、穏やかな笑みの下にある悪意のようなものを感じた気がして、亮輔は微かに息を詰めた。

（何だ……？）

ぴりっ、と肌に電流が走ったような感覚。亮輔は思わず尻を浮かせかける。

「どうしたんだい？急に呼吸が浅くなったね？」

「……………っ！」

——見切られている。

「そんなに怖い顔をしないでくれ。本当に挨拶回りなんだ……ただの、ね」

「は、はい……」

頷かなければ、という強迫観念に襲われた亮輔は、必死に何度も頷く。途端、月彦の笑顔が純然たる笑顔に戻る。

（っ、この感じ……前にも何処かで……、）

「月彦、お前……我が当主に何をする気だ」

しばらく黙っていた緒爪が、不意に男に問い掛ける。男が緒爪を見る。

「どういう意味だい？」

「……自分の胸に訊いてみたらどうだ」

「訊いても分からない場合は？」

「……戯けたことを」

吐き捨てる緒爪に、月彦は慈しみのこもった眼差しを向ける。

「君たちの当主に何かをするつもりはないよ。なあ、莉伊佐？」

挨拶以降、黙ったままの秘書に同意を求める。

「はい」

秘書は無感動に頷き、

「しかし、まだお訊きしたいことを訊けておりません」と付け足した。

「ああ、そうだ！大事なことを忘れていた」

わざとらしい口調でそう言い、月彦は再び亮輔を見遣った。びくっ、

と亮輔が肩を震わせる。

「もう一つ、当主にお訊きしたいことがあるんだ」

「なっ、何でしょうか」

嫌な予感がぶわりと膨れ上がる。

「……私には、一人息子がいてね……」

「息子……」

「訳あって、息子とは長い間会えなかったんだが久しぶりに再会出来そうなんだ……」

「……」

長い間会えなかった息子と、自分に何の関係があるのか……と亮輔は怪訝に思う。

「実は、君と私の息子はもう会ってるみたいなんだよ」

「え？」

「だから、最近の息子はどんな感じなのかお訊かせ願えないだろうか？」

もう会ってる？

このひとの息子と……？

「な、名前は……？」

月彦の笑みが深くなる。冷たい空気が、彼自身から発される。

「私の最愛の息子の名前、それはね——」

激動1

…本当に亮輔には手を出さず、二人の男女は草薙宅を辞した。緒爪は苦い顔のままで、しばらく二人が消えたドアを見ていたが、やがて無言のままで姿を消した。

（――さっきの人が、……伊織君のお父さん……？）

似ても似つかなかった。穏やかな笑顔という共通点はあるが…。

（伊織君の笑顔は、僕をとて穏やかな気持ちにしてくれる。けど、あの男の人の笑顔は、どこか裏があるような……作り物のような……）

不気味な人だ、と思う。あんな人が月波の父親とは、到底信じられない。

秘書だという女性も、どこか無機的で表情というものがなくて、そら恐ろしいものを感じた。亮輔を見る瞳は硝子玉のようで、全くの色がなかった。

（……あの様子だと、二人は近いうちに伊織君に会いに行く筈……何だろう、凄く嫌な予感がする。伊織君に、何かが起きてしまうような、）

ただの杞憂であれば良いのに、と亮輔は思う。

あんなに純粹で他人想いの子を、亮輔はほかに知らない。彼が傷付いてしまうのは嫌だった。彼の泣き顔は、見たくない。

（……僕は、伊織君の力になれるのだろうか……）

頭の中、ぐるぐると月波の笑顔が巡る。

（何だか、息苦しいな……）

そう言えば、山縣にお願いして、体温計を借りようと思っていた筈だ。風邪を引いてしまう予感がしたから。

（熱い、）

体が火照っている。頭がぼんやりする。本当に風邪を引いてしまっそうだ。

（山縣さん、今、何処に居るんだろう……）

探しに行こうか、と腰を浮かしかけた時……襖が開いた。タイミン
グ良く山縣がやって来たのだろうか、と亮輔が期待のこもった眼差
しをそちらに向ければ、

「え………むぐっ!？」

月彦の秘書が無表情に座敷に入り込んで、いきなり亮輔の口をその
左手で塞いだのである。目を白黒させる亮輔に、秘書の冷たい声が
降る。

「…あなたはまだ、月彦様のご子息について全てお話しになつては
いませんね？」

「……っ、っ!」

「話さない。下手な小細工は、あなたの身を滅ぼしますよ」
有無を言わせぬ口調。

「~~~~~っ」

どうにかして手を放して貰おうと、両手で彼女のひんやりと冷たい
それを掴む。だが彼女の力は思いの外強く、男の自分の力をもつて
しても引き離せない。

それでも亮輔は、彼女に月波のことを話す気にはならなかった。

『……彼に会ったことはありますが、深い仲ではありません。少し
会話をした程度で、詳しい人となりは知らないです』

先程の対面では、それだけしか話していない。月彦も納得したふう
で、彼共々、目の前の秘書も草薙家を立ち去ったはず。なのに、何
故……、

「!あ……っ」

秘書の右手が、亮輔の首を鷲掴みにする。

「う……んっ………!」

「話さない。あなたが知る、月彦様のご子息についてを。そうす
れば、先程の“騙り”については不問に付して差し上げます」

秘書の瞳が、すうつと細くなり、亮輔の瞳を見詰める。まるで心の
奥底を覗こうとするかのように。

「っ、っ！！」

その間にも、亮輔の首は絞め続けられたままだ。振り払うことが出来ない。

「良いのですか？このまま黙り続ければ、あなたは死にますよ……？」

「……っ、！」

秘書の手に、更なる力が入る。その上口も塞がれているため、亮輔は更に追い込まれる。頭の中が真っ白になる。目の奥が、熱い。

（それでも……僕はっ）

月波のことを話すつもりは一切、ない。たとえこの場で息の根を止められようと、絶対に屈するつもりはない。

「そうですか……残念です」

秘書の声が、ワントーン下がる。もう猶予を与えるつもりはない、と言われているように、亮輔は感じた。

「仕方ありませんね。私も仕事なので、悪くは思わないで下さい」

（……え？）

秘書の声に、微かに亮輔を哀れむような色が宿った——そう気付いた瞬間、

小さな一つの影が視界に入った。次いで、秘書が低く呻く声。

「……っ、」

秘書は亮輔を突き飛ばす勢いで、彼から手を放した。——否、放すしかなかったというべきか。

白い手の甲、刃物で裂かれた赤い線が走り鮮血が数滴ほど床に滴り落ちた。

「お兄さん、また会ったね」

「正義の味方、参上」

自分のものでも、秘書のものでもない、二種類の声が室内に響いた。両方とも、舌足らずな声だった。

声の主は、瓜二つの顔をした、男の子と女の子だった。まだ小学三年生くらいに見える。

そして亮輔は彼らに見覚えがあった。

「そのお兄さんに手を出すのは私たちが許さない」

「だって、お兄さんに傷がついたら、ぼくたちがあの人に怒られちゃうものねえ」

「……お前ら、誰の姦計だ」

今までの慇懃無礼な態度を一変させ、秘書が二人を睨み付ける。自分の“仕事”を邪魔されたことに腹を立てているのだろう。そんなことには興味がなさそうな二人は、亮輔の方へとトコトコと足を進めた。

「あ、」

「これで二回目だね」

男の子が、につこりと花も綻ぶような笑みを浮かべてピースサインを作って見せた。

「全く、お兄さんて本当に弱いよね」

女の子が、誇らしそうにその胸をそらしながら鼻息荒く言う。

「き、君たちは……」

つい先日、バスの中でおじに絡まれていた亮輔を結果的に助けてくれた二人だった。二人が互いに呼び合っていた名前は、確か――

「お前ら、私を無視するな！！」

激昂した秘書が、男の子の首に手を伸ばすが、

「！」

「汚い手で、私の分身に触らないでくれる？……オバサン」

先に反応したのは、女の子の方だった。素早い動きで、秘書の手首を掴んだのだ。手酷い台詞を口にしながら。

「綾音ちゃん、かつこいいなあ」

まるで亮輔を秘書から守るかのように彼の前に立った男の子が、呑気そうな口調でそう言う。

「オバサン……？」

「オバサンが誰の手先だろうがどうでも良いけど、このお兄さんにだけは手出しはさせないから。あんたの親分に言っというて――また

お兄さんに手を出すなら、綾音と空音あかねの姉弟が相手をするからと。その手の人間なら、それだけで伝わるはずだから」

秘書の顔が、動揺を浮かべる。

「綾音と空音・・・？」

「オバサンでも知ってるんだ？ 私たちのこと」

亮輔の位置からでは綾音の表情は見えないが、彼女が笑んでいるのは分かる。それほどまでに綾音の声には愉悦が混じっていた。

「・・・どうしてお前らのような者が、草薙の当主を守る」

「オバサンには関係ない」

綾音は秘書をオバサンと呼称するのを止める気はないらしい。

「・・・」

「ほら、さつさと帰った帰った。異変に気付いたじいさんどもが来たらそれでこそ厄介だ」

秘書はそれでも綾音と亮輔を等分に睨んでいたが、勝ち目はないと判断したらしくサツと踵を返した。

亮輔は呆然とその後姿を見送り、完全に見えなくなったところで深い安堵の溜息を吐いた。

体中が汗びつしよりだ。心臓が今更になって、ドキドキと高い音を立てている。

「行っただよ、お兄さん」

空音が、そう言っただよ亮輔を振り返る。大きなどんぐり眼が、笑みの形にしな撓る。

「汗びつしよりだね、大丈夫？」

「う、うん・・・」

綾音が、空音の隣に並ぶ。

「お兄さん、だらしない。あんな女、ぶっ飛ばせば良いのに」

「ば、僕には無理だよ・・・」

実際問題、手を払うことすら出来なかったのだから。亮輔が弱々しく否定すると、綾音がやれやれと天井を仰ぎ見た。心の底から呆れ

ているようだ。

「草薙当主が何を寝ぼけたことを。あの人の気苦労が分かるなあ・・」

「あの人？」

綾音のその言葉に、思わず亮輔は反応する。途端、綾音がしまった、と顔を歪める。

「あの人って、誰？前に僕をバスで助けてくれたけど、それも・・・？」

「空音！行くよっ」

「あ、うんっ」

「待って！」

亮輔は、空音の細い腕を掴んだ。

「お兄さん、」

「お願いだ！教えてっ。あの人って誰！？」

必死の形相で縋り付いて来る亮輔を、空音は困惑の眼差しで見ている。綾音は背中を向けたままだが、足は止めている。

「やっぱり、僕の知ってる人なの！？」

「あ、綾音ちゃん、どうするの・・？」

腕を掴まれたままの空音が、綾音に助けを求める。

「・・・知ってどうするの？当主」

綾音の静かな声。小学三年生ぐらいの子供が出す声とはとても思えないくらいに落ち着いた声だ。

亮輔はその声に気圧されたが、

「どうするなんて、分からない。でも知りたいんだ！誰が僕を守るうとしてくれるのか・・」

「あなたのおじを殺せと私たちに命令した人と同一人物だと知っても？」

「・・・・・え？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。空音が粟を食ったような顔で綾音を見つめている。

「あ、綾音ちゃん・・・！」

「私たちは、あなたのおじを殺しました。あの人の命令によって」
「・・・・・・・・・・」

何も、考えられなくなる。

「あの人は、あなたの幸せを最優先に考えています。最も、“あの人が思うあなたの幸せ”に過ぎませんけどね」

「綾音ちゃんっ」

「それでも当主は、あの人が誰かを知りたいのですか？それとも、肉親であるおじを殺した私たちを、殺しますか？」

空音が心底不安そうな眼差しを亮輔に向けるが、亮輔は気づけない。ただ呆然と、小さな少女の背中を見つめるだけ。少女の声すらきちんと届いているか疑わしい状況だ。

「少なくとも・・・あの人はあなたに正体がばれてしまうことを望んではおられません」

亮輔の反応がないようなら、綾音はこの言葉を残して座敷を辞すつもりだった。反応がないことを望んでもいた。

しかし――

「・・・・・・・・教えて」

「・・・・・・・・」

意外ではあったけれど、予想外ではなかった。

「分かりました」

「あ、綾音ちゃん！それって契約違反じゃあっ」

慌てる空音を、綾音は視線だけで黙らせた。双子といえど、力関係は綾音が何倍も上らしい。綾音の強い視線に、空音はグッと喉を詰まらせる。

「・・・・・・・・あの人の正体を知りたいと願ったのは、当主自身です。何を聞いても、自己責任でお願いします」

亮輔が、真っ直ぐな瞳で自分より十歳近く若い女の子を見つめ、頷く。その気高い瞳が、悲しみや怒りに歪む瞬間を見たいと、綾音は思った。

綾音は一種の陶酔を感じながら、“あの人”の名前を紡いだ。分身が、何かを堪えるように顔を歪めているのを視界におさめて。
「あの人」……あなたの幼馴染みである。添山和音様です」

和音は、その綾音の声を聞いていた。

事前に了承を得て、綾音のシャツの襟の裏に、マイクロチップ型の盗聴器を仕掛けておいたのだ。

（知られた・・・か）

空音は契約違反だと言っていたが、実際は和音は承諾していた。

亮輔が、“あの人”という存在の正体を知りたがった場合は、素直に話して良いと。

だから、知られてしまったという悔恨の情は一切湧かなかった。知られたな、くらいにしか思わない。思えない。

（亮輔は、どうするだろう）

きつと泣くだろう。

もしかしたら激怒するだろうか。和音が双子に殺させた男は、亮輔に暴力を加えていたとはいえ、一緒に住んでいた肉親だということに変わりはない。草薙本家に居場所のなかった亮輔の、第二の家を奪ったのも、誰あろう和音なのだ。

（怒られても構わない。私は、それだけのことをしている）
だが。

（たった今、亮輔を助けさせたのも事実・・・）

亮輔が、たった一つの側面だけを見て物事を捉える性格でないことを、和音は十分に理解していた。だから一概に和音を批判し、和音に怒りを露わにすることはあまり想像出来ない。

（亮輔、どうする？）

どんな亮輔でも、受け止めてあげる。

亮輔の言葉を待ち、和音は瞳を閉じる。
自宅で一人、膝を抱えたままで。

ゆるる心

穏やかに眠っていた人が、いきなり魘され出す。

それを目前で見ていた場合、どうすれば良いのかと桜庭尚基は困惑していた。

「う………っ、」

「月波………」

どうしてだ、さっきまで、幸せそうな寝顔を見せていたのに。

一体、どんな怖い夢を見ているんだ。

起こすべきなのか。

必要以上に苦しむ必要はないと。

尚基は、恐る恐る、月波の片手を取った。ひやりと冷たい。何だか、泣きたくなった。

「うっ、」

月波は思い切り顔を顰め、熱のこもった息を吐き出す。苦しげに、眉根がきつく寄せられている。

「……めて、」

「月波……？」

月波が意味のある言葉を発したような気がして、尚基はそっと彼の名を呼んだ。月波が目覚めそうな気配はない。

「おと……さま、」

「？」

月波の体が、ビクンツと仰け反った。いきなりの急激な動きに、尚基はぎよっとして身を引いた。

「ああっ」

「!？」

月波の震える口から、艶っぱい声が漏れ、尚基は更にぎよっとする。

「月波!！」

すぐに気を取り直し、尚基は月波の肩を掴んで彼を揺すった。

「月波！大丈夫かつ！？」

「！！！！」

月波が、カッと目を見開いて、ガバツと上体を勢い良く起こす。口の端から涎が垂れる。

「月波、」

「！嫌っ・・・」

尚基が手を伸ばすと、月波がか細い悲鳴を上げて身を引いた。まるで自分を外敵から守るかのように、両手で自分の肩を抱く。

明らかな拒絶に、尚基は身動きが取れなくなる。月波が両目に涙をいっぱい溜めて、怯えを含んだ瞳で尚基を見た。

「っ、月波・・・？」

月波は荒い息でしばらく肩を上下させていたが、

「・・・桜庭君・・・？」

息が整う頃には、目の前の人間が桜庭尚基という存在だと認識したらしく、弱々しい声で彼の名前を呼んだ。

「月波・・・」

「あ、あれ・・・僕、」

月波は自分が今どこに居るのか困惑しているらしい。困った顔で、尚基を見る。

その様子からは、数秒前に尚基を拒絶をしたことを覚えていないことが伺える。

「月波、魘されてたぞ。大丈夫か」

それならこちらが取り乱して、月波を不安にさせる訳にはいかない。尚基はあくまで平静を装って、月波に声を掛ける。

「魘されてた・・・？」

「結構な。悪い夢でも見たのか」

訊いてから後悔した。

わざわざ蒸し返させる必要など、何処にもないのに。

「そつなの、かな・・・。覚えてないや、」

月波が、弱々しく微笑む。形のよい唇が血の気を失って何処か痛々

しい。

（この唇が、さっきの・・・）

先ほど月波が発した艶のある声を思い出して、尚基は慌てて首を左右に振る。

（・・・俺は何を考えてる。馬鹿かつ）

「桜庭君、どうしたの？顔、真っ赤だよ・・・？」

「！い、いや・・・何でもない」

「そう？」

月波は納得行かないような顔をしているが深く突っ込むのも気が引けたのだろっ、それ以上は何も言わなくなる。

「お、俺、そろそろ自分の部屋に戻るわ！明日の宿題しとかねえと！」

「宿題なんて、今日出たっけ？」

「こ、個人の宿題だよ。それじゃ、また明日な！」

「？」

尚基の妙な慌てように、月波は小首を傾げる。それには気付かないフリをして、尚基はいそいそと月波の部屋を出て行こうとする。

「あ、あの！」

「！な、何だ？」

「・・・お休みなさい、桜庭君」

「お、おう！お休みっ」

手を挙げて応え、尚基は立ち去った。

「・・・」

一人自室に残った月波は、フツと肩の力を抜いた。ぶるつと、体は震える。

それは寒さから来る震えではなく、

（・・・嫌な感触、）

今も感じる、足を這う気持ちの悪い感触だった。何かか足を這っている・・・例えば、生温い、人間の指。

「！！」

月波は、両手で素足をごしごしと擦った。

（夢を見た、その名残なのかな・・・）

尚基曰く、魘されていたらしい。

自分では魘されるような夢を見たような覚えはないのだが、尚基がわざわざ月波を不安にさせるような嘘を吐くとも思えない。ならば自分は、どうして魘されたのか。普通に考えれば、悪夢を見たからなのだろうけれど。

（でも、体がだるい・・・）

足を擦るのを止めて、月波はベッドから降りた。シャワーを浴びるために、浴室へ足を運ぶ。

湯冷めしやすいので本当は風呂に入りたいのだが、大浴場に行く元気もないし、自室のものでバスタブに湯を張る元気すらないから尚基に風呂まで付き合ってもらっても良かったが、さっきはそこまですで頭が回らなかったし、何よりこれ以上尚基に迷惑を掛けるのは気が引ける。

（今日は、桜庭君のことばかりで頭がぐるぐるする・・・）

苦笑しながら、シャワーの蛇口を捻ってお湯を出す。湯気に触れ、少し心が落ち着いた。

足を這う気持ちの悪い感触は、いつの間にか忘れていた。

いつまで経っても、亮輔の反応がない。

和音は、眉を寄せる。一体どうなったのか。双子の声もしない。まさか、やけになった亮輔が凶行に走った？

（それにしたって、物音一つしないのはおかしい）

辛抱強く待つことにする。

・・・やがて、

「和音ちゃんは、今何処に居るの？」

意外と平坦な幼馴染みの声が、和音の耳朵を打った。

「それは言えません」

綾音の、これもまた平坦な声。

空音の声はしないが、きつと困惑した顔でおろおろしているのだろう。

「和音ちゃんに会わせて」

「そんなに会いたいなら、ご自分でお探してください。それに同じ学校の生徒なので、明日にでも会えるでしょう」

「今会いたいんだ！！」

亮輔が怒鳴った。

今にも泣き出してしまいそうな声だ、と和音は……うつとりと恍惚の笑みを浮かべる。

自分でも場違いな笑みだと思っているが、止められない。やっぱり私は亮輔の泣きそうな声が好きなのだと認識する。

「どうして、どうしておじさんを殺したの！ねえ！？」

「命令だからです」

「命令だからって、そんなに簡単に人を殺せるの！？」

「私たちは、契約を履行しているに過ぎません。契約内容が、殺人だった。それだけのことです」

「そ、それだけのこと……！？」

亮輔が更に声を震わせる。

「……それに、責めるべき相手が違います」

「何が！？」

「あなたが責めるべきは、私でも空音でもありません。私たちの雇用主とも言い難いですね」

「どういう意味だよ……」

「これ以上は、私からはなんとも。あとはご自分で考えてください」
綾音の声は何処までも平坦で、しかも十歳前後の子供とは思えないことを言う。

和音は苦笑する。

「空音、行こう。時間の無駄だ」

「あ、綾音ちゃん・・・」

「ここから先は、当主自身の心の問題だよ。私たちがとやかく言う資格も義理もない」

綾音が歩き出したのだろう、足音らしきものがある。空音はその場にとどまっているのか、音は一つ分しかない。だが、

「空音！」

綾音の鋭い呼び声に、

「う、うん！」

と応えている。空音のものだろう足音が続く。

（亮輔、そんなに私に会いたいのか）

亮輔が自分を求めてくれている。それがどんな理由から来るものであるかと、その事実が和音を喜ばせる。亮輔には自分が必要なのだと、震えるような歓喜が沸き起こる。

（でもね、まだお預けよ。ふふふふ）

今すぐに会ったら、面白くない。明日学校で会うまで、一人悩み、苦しみ、悶々とすれば良い。

和音はイヤーマイクを引っ抜き、それを無造作に床に放った。

明日、亮輔とどんな顔をして会おうか———そんなことを考えながら、和音は一人、目を閉じた。

沖村莉伊佐が、月彦の待つ車に戻ると、彼は穏やかな笑みをもって彼女を迎えた。

「月彦様、申し訳ありません。失敗、してしまいました・・・」

悔しそうに言う利伊佐の片手の甲から出血していることに気づき、月彦はサッと顔色を変えた。

「血が出ているじゃないか！早く手当てをしないと！」

「このくらいの怪我、大丈夫です。月彦様、本当に申し訳ありません・・・草薙亮輔から、ご子息の情報を得ることが出来ず・・・、」

「良いから、手を出して！」

月彦の大きくてごつごつした手が、莉伊佐の手を包む。

「つ、月彦様の手が汚れてしまいます」

「構うものか」

熱い口調で反駁し、月彦はスーツの胸ポケットからイタリア製のハンカチを出して、莉伊佐の怪我をしている手をそのハンカチで包む。
「痛みは」

「……私の痛覚は元々鈍いですから、このくらいは平気です」

「そうか……。だが、幾ら痛みがなくても、怪我は怪我だからね。ホテルに着いたら、きちんと消毒をしよう」

今度は、莉伊佐も素直に頷く。

「あと、息子の件は気にする必要はない。草薙の当主が必死に嘘をつく姿が滑稽だね……ただ当主をからかってみたかっただけだから」
月彦の声は、莉伊佐にとって何処までも温かくて……それゆえに申し訳なさもひとしおになる。何故なら、月彦は息子を心底愛しており、何物にも代えがたく感じているから。

（私など、及びもつかないくらいに……）

そう思えば、月彦の息子に対して、言い表せぬくらいの嫉妬を感じてしまう。

「莉伊佐、今日は疲れたろう。ホテルに着くまで寝ていたら良い」

「大丈夫です。月彦様の為なら、なんともありません」

莉伊佐の言葉に、月彦は一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに柔らかい笑みを浮かべた。

「そうか。……ありがとう」

その言葉だけで、莉伊佐には十分だった。

双子の綾音と空音がなくなった後、亮輔は呆然と座敷に座り込んでいた。

（今の二人が、おじさんを殺した……それに、それを命じたのが、和音ちゃん……）

信じられない……信じたくない。

（嘘だ、和音ちゃんがそんな、こと……）

確かに和音はおじを疎んじていたし、おじの家を出るべきだと忠告されたこともある。和音が、亮輔の身を案じてくれていたことも知っている。でも、だからと言って——殺したいと思う程に憎んでいたなんて。

（だけど、あの子達が嘘を吐いたようには見えなかった……）

空音という男の子はおどおどして、落ち着きがなかったけれど、綾音という女の子の方は、外見からは想像出来ないくらいの真摯な瞳で亮輔をじつと見詰めていた。嘘を吐く人間が、あんなに真っ直ぐな瞳をするだろうか。だが……。

（信じたくない。……ずっと一緒に居て、僕のことを心配してくれていた和音ちゃんが、あんな酷いことをするなんて……、絶対に信じたくない……！）

そうだ、明日学校で面と向かって訊けば良い。

きつと、何言ってるの・と苦笑して否定してくれる。

そんな双子なんて知らない、言ってくれる。そうだ、一人で悶々と悩んでいても仕方ない。和音本人に訊けば良いんだ。

（……疲れた、）

布団の敷かれている座敷に戻ろう。……そう思うのに、体が言うことを聞いてくれない。

（そう言えば……今の騒ぎで誰も顔を覗かせなかったけど、気付いてない……？）

そんなことがあるだろうか。百歩譲って長老たちや山縣などの使用人が気付かなかったとして、あの緒爪までも気付かないということがあるだろうか。あまり、ピンと来ない。あの大叔母が、今の騒ぎに気付かないなんて。

（そう言えば、屋敷全体が静か過ぎる……）

亮輔は、力の入らない足でどうにか立ち上がる。情けない、という自嘲の念を噛み締めながら。

襖を開け、左右に伸びる廊下に出る。キシ、と微かに床が軋む音がやけに耳に響く。

「山縣さん、」

真っ先に山縣を探そうと、亮輔は歩き出した。

自分の寮室に戻った尚基は、ぜえせえと荒い呼吸を繰り返す。その耳の中では、いまだに月波の艶っぽい声が響き渡っている。

（ば、馬鹿かつ、俺は！）

こんなに理性が乱されることは、滅多にない。こんなときは、

（兄貴の形見を……ああ、）

いつも机の脇に立て掛けている紫の袱紗に包まれた、長い棒状のもののは尚基の瞳には映らない。

（奪われた。兄貴の、形見を……）

休んでいるところを襲撃してきた謎の女。兄の形見を強奪し、あまつさえ尚基に口付けをして来た。——たとえ、尚基に薬を吞ませて意識を奪うためとは言え、口付けはどうかと思う。

（知らない女だった。くそっ、どうやって取り返せっていうんだ！）
だが、諦めるわけにはいかないのも事実。必ず取り戻さなければ。

（だが、……あの女は一体誰だったんだ……？）

それに、兄の刀を盗んで一体どうするつもりなのか。あの刀に、盗むような価値があるとでも？

女は兄の刀のことで知り、加えて尚基がそれを寮室に置いていたことも知っていた。

（まさか、草薙の関係者？もしくは、桜庭の…？）

それにしても、今更兄の刀を手に入れてどんなメリットがあるというのか。

（分からねえ……。なあ、兄貴……）

どうやら理性を取り戻したらしい尚基は、心の中の兄に問いかける。（一体、何が起きて……。いや、起きようとしてるのかな……。それに、兄貴は生きてるのか、生きていて……くれるのか、）

無性に兄に会いたかった。あの優しくて穏やかな笑顔を見せて欲しい。意外と逞しいあの腕で、ギュッと抱き締めて欲しい。尚、と名前を呼んで欲しい――。

（ダメだ、兄貴のことを考えると……。弱気になる、）

まだ兄がいた頃、尚基は弱虫で泣き虫な子供だった。いつも兄の背中に隠れていたし、人見知りも激しかった。兄がいないと、不安で仕方なかった。

（……そういや、小学生の頃って……友達とかいたかな……）

ただでさえ草薙の縁者である桜庭の家系だったから、学校のみなは尚基を遠ざけた。仲良くしたそんな子供たちもいたが、そういう子たちは彼らの親が遠ざけさせた。

『あの子は危ないからね。遊んじゃ、駄目よ』

何度その言葉を耳にしたことか。何度その言葉に、心が悲鳴を上げたことか。

（……あれ、）

一瞬、脳裏に一人の男の子の顔が浮かんた。顔立ちの詳細は分らないが、自分と同年の男の子だとは分かる。……誰、だったか。

『友達に、なろうよ』

（誰だ……？とても、懐かしい声、だ……）

尚基は力なくベッドで横になる。

（そう。俺に、友達になろうと言ってくれたのは、小学校ではたった一人だった・・・）

目を閉じれば、目の前にピンクが広がる。

確か、あれは四月だった。校庭にある桜の木が、綺麗に咲き誇っていたから。

学年は忘れたけど、四月の初旬。始業式で学校に来ないといけなかった日。

まだ始業式開始まで時間があつた。でも一緒に時間を潰す友達もいないし、教室にいたらいたで陰口の的になるから、尚基は一人で校内をうろろろしていた。いろんな教室から賑やかな児童の声が響く（尚、行つてらっしゃい）

朝、いつもの笑顔で見送ってくれた兄のことを思い出すと、今すぐにも家に帰りたくなつた。

どうしてこんなに寂しい思いをしてまで学校になんて来ないといけないんだ、と尚基はますます泣きたくなつた。

職員室のある廊下で立ち尽くし、尚基は微かに滲んだ涙を細い腕で拭つた。ついで、予鈴の鳴る音。

『行かなきゃ、』

一度教室で全員が集合し、それから体育館に移動するからだ。自分が居ないほうがみんなは安心するだろうが、尚基は教室へ戻ろうとした。

『あ！』

『！』

いきなり背後で大きな声がしたから、尚基は思わず肩をびくつと震わせてしまった。

『ねえねえ』

『な、何』

声の主が尚基の真後ろまで走って来て肩を叩くから、尚基は恐る恐る振り返つた。

『？何でそんなにおびえてるの？』

少し舌足らずの口調で言うその子は、尚基と同年くらいに見えた。にこにこと屈託のない笑顔は、尚基にはないものだったが。

『べ、別に・・・』

『そう？あ、僕ね！今日からこの学校に来たんだよ！先生の目を盗んでいろいろ歩きまわってたなら、場所がわかんなくなっちゃった！』
あっけらかんと言い、あははと笑う。

何だか毒気が抜かれてしまつて、尚基は半ば呆然とする。少年が、そんな尚基の手を取った。

『ふ、ふえ？』

思わず変な声が出た。少年の行為がいきなりだったこともあるし、何よりも、家族以外の人間に手を握られたことなどなかったから。尚基が伸ばした手は、家族以外にはことごとく払われた。なかったことにされて来た。

『変な顔』

『だっ、だつて……』

尚基が泣きそうになると、少年が慌てた。

『な、泣きそうな顔しないでよ。からかつてごめんっ』

少年の手はとても温かくて、心地良かった。

『ねえねえ、お願いがあるんだけど』

『…お願い？』

戸惑う尚基の顔を見詰めるのは、優しい笑顔だ。

『僕と友達にならない？』

『……え？』

『友達に、なろうよ』

そっぴにかんで言われた瞬間――

『ちよ、何で泣くのさ？』

堪えきれなくなつて、尚基はぼろぼろと涙を零し出したのである。少年がおろおろと手を彷徨わせる。

『ご…ごめんなさい、嬉しくて、』

『え？』

『ぼくなんか友達になってよ、なんて言ってくれた人・・・はじ、初めてだから・・・』

尚基の言葉に、彼の境遇を理解したのか、少年が複雑そうな顔になる。しかしすぐに笑顔に戻って、

『ね、なるうなるう。友達になろう』

陽気な口調で言ってくれる。

その陽気さが嬉しくて、尚基は真つ赤な目で笑った。

『君、名前は？』

『尚基。桜庭尚基だよ』

『ナオキね。あとで漢字、教えてね』

『うん！あ、きみは何て言うの？』

尚基の問い返しに、少年が笑みを深くする。

『僕？・・・僕の名前はね・・・、』

「っ！！」

そこで過去の再現がぶつりと途切れて、尚基は閉じていた目を見開いた。

頭をガツンと殴られたかのような衝撃が、尚基を襲ったのだ。

「・・・何だ？」

啞然として、呟いてみる。

（今の子は、誰だった・・・？）

小学校で出来た、たった一人の友達。

なぜそんな大事な存在のことを、今の今まで忘れていた？・・・いや、今だって完全に思い出せたわけじゃない。顔の詳細も名前も、

思い出せていない、忘れたままだ。

（顔が分からないのに、どうして今の子が笑顔になったことが分か

ったんだ・・・？）

尚基は、何となしに両手を自分の真上に翳して、掌をじつと食い入

るように見詰める。

この皮膚の下を流れるのは、忌むべき家系の血だ。

それが酷く嫌な気持ちにさせるが、尚基が生きているのはこの血が体に流れているからだ。

たとえ忌み嫌おうと、この血は一生尚基について回る。

（くそっ……）

両手をグツと握り締め、尚基はきつく目を閉じる。頭の中では、“顔のない友達”のことがぐるぐると巡っている。どんな顔をしていた？名前は？今は、どうしてる？

そんな疑問が、取りとめも無く浮かんでは消えて行く。

今日は本当にいろいろなことがありすぎて、心底疲れきっている。

明日も学校だし、早く休みたいのに。

それなのに、頭は考えることを、思い出そうとすることを止めよう
としない。

いい加減、眠りたいのに……。

（兄貴なら、分かるだろか……）

きっと自分の性格だから、初めての友達が出来たら兄に紹介したのではないか。実際に会わせなくても、名前くらいは教えたのではないか。

そこまで考えて、尚基はそんな考えを持った自分を鼻で笑った。

——たとえ兄が“友達”のことを知っていたとして、どうやって訊くつもりだ？

——兄貴がいらないことまで忘れてしまっくらいに、疲れてるのか？

「ああ、もう！！」

気合を入れるように、尚基は両手で自分の頬を張った。

勢い良く、ベッドの上で起き上がる。

「考えたって無駄無駄！さっさとシャワーでも浴びて寝てやる！！」
半ば自棄気味に声を上げて、尚基は浴室に向かった。

“友達”のことは、ひとまず考えないように、苦勞して頭の片隅に
追い遣った。

不可解な動揺

「当主、起きられて大丈夫なのか」

嫌な予感は意外にも外れ、山縣と廊下でバツタリ出会した。

「あ、山縣さん……」

「どうかしたのか？」

「そ、その……体温計を……。少し熱っぽいので、」

「風邪でも引くのだろうか……。分かった、持って行くから部屋で休んで居なさい」

山縣の態度は普通で、いつもと変わらない。月彦の秘書や双子の姉弟のことには全く気付かなかったというのだろうか。

「他にも何かあるか？」

亮輔が何を言うでもなく立ち尽くしているのを不思議に思ったのだらう、山縣が声を掛けて来る。

「あ、いえ……」

正直に話して山縣に心配を掛けたくない。その思いで、咄嗟に首を左右に振っていた。

「ごめんなさい、部屋で休んです」

「そうしなさい。すぐ体温計を持って行くから」

山縣の視線を背中に感じながら、亮輔は辿ってきた廊下を引き返し始めた。

「……これで良かったですか。緒爪様」

亮輔の足音が完全に聞こえなくなってから、不意に山縣が口を開いた。亮輔は気配すら感じなかったが、緒爪がそばに居たのである。

完全に気配を殺し、亮輔の様子を伺っていた。

「ああ。構わん」

「どちらへ？」

「……お前には関係のないことだ。朝までには戻る」

彼女にはしては珍しい抑えた口調に、山縣はスツと目を細める。

「あまりご無理はなさいませぬように」

「……誰に言っている……。では、家のことを頼むぞ」

緒爪はそれだけ言うと、外へ出て行った。山縣はただ、彼女の背中を見送るだけしか出来なかった。

月波の笑顔が見たい、と座敷に戻りながら亮輔はふと思った。それと同時に、彼を息子だと言う月彦という男の顔が浮かんだ。全く似つかない二人。本当に親子なのか。だが、月彦がその点で亮輔に嘘を吐く理由や利点があるのだろうか？

（伊織君、）

さつきも感じた、嫌な予感。それはまだ続いている。

（明日、明日、伊織君に会いに行こう……）

勿論、和音におじの件の真偽を問うことが第一優先事項だが、月波のことも気がかりで仕方ないから。

月彦のことを話すかどうかは月波に会ってから決めることにしよう、と亮輔は思った。

シャワーを浴びた尚基は、洗った髪をまともに乾かす気力もないままにベッドにダイブした。

（ふう……………）

髪や体を洗いながらも、考えないようにした“友達”のことが頭から離れない。ぶつ切れの記憶、思い出せない顔と名前。そのくせ、記憶の中の“友達”が笑った覚えは鮮明に覚えている。

（あゝあゝ、なんかイライラするな……………）

色々なことが胸につかえている感覚に、尚基は苛立ちを抑えられない。こんなことは殆んど無いのに、だ。

（こんなときは早く寝るに限るのに）

そしてこんな時に限って眠気は一向に訪れないのだから、嫌になる。尚基は上体を起こして、持っていたタオルでごしごしと髪を擦った。冷えた水滴が、あちこちに跳ねる。

（眠くねえけど、横になるか……………）

その内眠くなるのを期待して、尚基は眠る支度を始めた。頭の片隅で、月波はもう寝入っただろうかと何となく、考えながら。

（眠れない……………）

その月波本人も、シャワーを浴びた後はベッドに入っているが、眠れていなかった。体は疲弊しているし、精神的にも参っている。なのに、なかなか眠りは訪れてくれない。

月波は枕元の携帯電話に手を伸ばし、折り畳み式のそれを開いてみた。

電話帳を開き、尚基の情報を表示する。

（桜庭君、寝た……………かな）

確か宿題をするって言うってたし、まだ九時にもなっていない。

(……………)

迷った末、月波は電話番号を表示して通話ボタンを押した。尚基の
声が無性に聞きたくなったから。

『月波？』

やはり寝ていなかったのだろう尚基が、すぐに電話に出てくれた。
それが何だかとても嬉しくて、月波は思わず笑みを溢してしまう。

「ごめんね……………宿題があるって言ってたから、邪魔になるかなって
思ったんだけど……………」

『いや、別に大丈夫だよ。どうした、眠れないのか？』

「うん。…体は、すごく疲れてる筈なんだけどね」

『まあ、そういうこともあるよ。添い寝してやろつか？』

尚基の口調に、からかいが混じる。

「……………子ども扱いしないでよ」

電話の向こう、尚基の愉快そうな笑い声上がる。月波はますます
むくれる。むく、と唸ると、

『悪い悪い』

尚基の爽やかな笑い声。

「……………からかわないでよっ」

一度少しだけ声をあらせる月波。尚基が慌てる気配がする。

『お、怒るなよ。俺が悪かったからさ……………』

「別に怒ってないけど……………」

月波の言葉の後、何とも言えない沈黙が広がる。電話を通し
た互いの息遣いだけが聞こえて来るだけ。

『月波』

不意に、尚基が月波を呼んだ。

「何？」

『……………少し、気になることがあるんだ。聞いて、もらえるか？』

「気になる、こと？」

『ああ。あ、でも嫌なら構わないよ』

「大丈夫。話して」

尚基の支えになれるかどうかは分からないが、話を聞くくらいならば簡単に出来る。その思いで、月波は尚基の話を促す。

『ありがとうな。……俺、どうしても思い出せない人の顔があるんだ』

「え？」

『小学生のときに出来た、たった一人の友達。すごく大事な存在だった筈なのに、思い出せないんだよ』

尚基の声が苦渋に満ちているように感じられ、月波は胸が痛んだ。

「桜庭君、」

『名前も、全然思い出せない。すごく、大切な存在だった筈なのに……』

「……何か、羨ましいな」

気付けば、月波は呟いていた。尚基が電話の向こうで首を傾げている様を想像しながら。

『月波？』

「桜庭君に、そんなに大切に思われてる……その人が羨ましいよ」

『……何言ってるんだよ。月波のことも、その……た、大切な友達だと思ってるぜ』

尚基が照れている。月波は、唇に笑みが浮かぶのを感じる。

「うん……ありがとう」

『……い、いや、別に』

クスクスと月波は笑って、

「それで、桜庭君はその人のこと、どれくらい覚えてるの？」

『うん……初めて小学校で会った時のことか、』

「うん」

『その時の会話の内容とか。でも、その他のことは殆んど……。顔も、全く思い出せなくて……』

「そうなんだ……。どうしてなんだろうね」

そう相槌を打ちながらも、凪いでいた心中に細波が立ち始めたのを、月波は感じている。

(……何だろう、この気持ち、)

『男だったことは覚えてる。感覚的に、笑った顔が男なのに綺麗だ
なつて、小学生ながらに感じたのを覚えてるから』

『そ、そうなんだ……』

我知らず、どもつてしまふ。自分は何を動揺しているのだろう、と
月波は思ふ。

『俺も不思議でさ……。なんで顔が思い出せないのか、さ』

『も、もしちゃんと思ひ出せたら桜庭君は嬉しい?』

『え、そりゃあまあ……。俺は思ひ出したいつて思つてゐるから。変
か?』

『そつ、そんなことないよ?思ひ出せたら、良いね。その時は僕に
も教えてね』

『ああ。思ひ出せたらな』

尚基の“顔を思ひ出せない友達”の話題から何故か早く離れたくて、
月波は次のターンで話題をがらりと切り替へる。

『ね、ねえさつき言つてた宿題は済んだ?』

『宿題?』

尚基の聲が怪訝そうなそれになる。

『違ふの?個人的な宿題つて……』

『あ、ああそうだったな!終わった終わったよっ』

今度は尚基が焦る番だったらしい。

『いや、大変だったよ!俺つて馬鹿だからさ』

ははは、という乾いた笑い。

『つ、月波は頭良いよな!羨ましいよ』

『そんなことないよ。普通だよ』

“友達”の話題が完全になくなり、月波は一安心しながら尚基との
世間話に没頭したのだつた。

手当て

夕食を手に地下牢へ赴けば、桜庭悠基は上体を起こす形で眠りに就いていた。

（普段は殆んどお休みにならないのに……。力を消耗したのか、）
綾羽に過去の映像を見せたことで、恐らく体力や気力を消耗してしまっただろう。これで安らかな寝息が聞こえて来れば、少しは気休めにもなるのに……。と綾羽は思わずにはいられない。

（それにしても…悠基様のあの“力”は一体……。、）
いや、“翼”の“力”なのか……。

（何かが引つ掛かる）
悠基の“翼”に、そんな異能の力が備わっているなどと聞いたこともない。

（書斎で調べてみるか…）
目を覚ましてから召し上がるかも知れないと考え、食事は置いて行くことにする。まだ湯気の立つ温かい内に食べて欲しいが、無理だろう。

（どんな状態でも、召し上がって貰えたら良いか）
綾羽は方膝を着いた状態から立ち上がり、悠基に背を向ける。お休みなさい、と心の中で唱えながら、ゆっくりと地上への階段を昇って行った。

「あ、そうだ。桜庭君」

尚基と、電話で世間話をし続けていた月波は不意にあることを思い出した。

『どうした？』

「今日言ってた、今度の日曜日って何かあるの？」

何が何でも聞き出したい訳でもないのだが、何となく気になったのだ。買い物などであんなに真剣に「付き合ってくれ」と誘うものだろうか、と。

『あ、ああ…あの件な』

「？」

何やら言いにくそうな空気が、携帯電話を通して、犇々と伝わって来る。

「桜庭君？」

そんなに言いにくいことなのか、と月波が眉を寄せていると――

『……人に、会った』

尚基が気持ちを落ち着けるかのように、ゆっくりと応えた。

「人？」

『…俺の親族の、桜庭の人間とだ』

「親族…」

親族と月波を対面させて一体どうしようと言うのだろう。月波は疑問符だらけの頭を必死に働かせるが、分かる訳もない。

『月波は、一緒に居てくれたら良い』

「そ、そうなの…？」

なら何故わざわざ会うのか、と月波は思う。

『ちなみに、親族と言っても血の繋がりは薄い。だからあまり似ていない』

……尚更、何故自分が必要なのか分からなくなる。

「女の、人？」

『！……どうして分かったんだ？』

ただの勘に過ぎなかったのに、尚基が酷く驚く。

「え、えつと……ただの勘なんだけど、そんなにびっくりした…？」

『あ、いや…』

尚基が居心地悪そうに口ごもる。失敗した、と思っているに違いない。

『…………正直、驚いたよ。エスパーかと思った』

苦しい言い訳に、しかし月波は追及出来ない。追及したら嫌われるのではないか、と考えてしまうからだ。

「そっか…………」

『ああ、会ったのは女の人だ。……兄貴のことも、よく知ってる』

「！…………お兄さんのことを…………？」

『ああ』

「じゃ、じゃあお兄さんのお話もするんじゃないの？僕なんかがいても、大丈夫なの…………？」

『構わない。俺が、月波に居て欲しいんだ……』

「っ！」

思ってもみなかった言葉に、月波は鼓動が高鳴るのを感じた。

（ふ、深い意味はないはず…………深く考えたら駄目だ……）

『……もしかして、用事があるのか？』

尚基の声音が、気がかりそうなそれになる。

月波は尚基から見えもしないのに、大慌てで首を左右に振る。

「そ、そうじゃないよ。ただ、僕なんかが居る必要があるのか、分からなくて…………」

どんと尻すばみになる月波の声。

『…………自分のこと、そんな言い方する必要ないと思うぜ、月波』

「そ、そうかな…………」

そうだ、と言う電話の向こうの声が優しく、月波の胸はじんと熱くなった。

「ありがとう…………。そんな風に言って貰えるとすごく嬉しいよ」
それは月波の素直な気持ち。

温かくなる胸に手を置いて、月波は目を閉じる。尚基に対して感じるこの気持ちは、やはり“恋”なのだから。相手は、同性なのに。

『月波、寝たのか？』

「！あ、うつん。起きてるよ」

『そうか。・・・でも、そろそろ寝たほうが良い。いろいろあつて、疲れたろ』

月波は小さく頭を振る。

「でも・・・眠れないんだ」

どうしても声がか細くなってしまう。

『でも、明日も学校だ。眠らなくて良いから、横になるだけで違うだろ？』

「だって、不安なんだもん・・・」

耳に蘇る、月波の過去を知っていると切り切った人物の声。そして、これ以上尚基に近づくなといわれたこと。こうして電話を通して話していることをもし知られていたら？自分だけでなく、月乃にまで危害が及ぶ可能性は限りなく高い。それを考えたら、すぐに尚基との回線を遮断し、接触もしないでいるべきなのだろう。でも、それが逆に不安にもなるのだ。自分ひとりのときに、何かあつたら対処する自信がないから。

『不安？』

月波のその言葉を、尚基が聞き咎める。

『どうした。何かあつたのか？』

「あ・・・えつと、その・・・」

『月波』

強く名前を呼ばれ、月波は更に困惑してしまう。尚基が自分のことを心配してくれているのが犇々と伝わってくるけれど、あの電話のことを正直に話してしまつても良いものか。それが原因で、尚基に更なる迷惑を掛けてしまうのではないだろうか。

『月波』

また、尚基が月波の名を呼ぶ。それでも、月波は電話の件を素直に話すことが出来ない。かと言って無碍に尚基との回線を遮断すること出来ず、口ごもつたまま携帯電話を耳に充てるしか出来ないで居る。

電話の向こう、尚基が微かに溜息を吐くのが聞こえる。まさか見限

られたのだろうか、という不安が沸き起こって、その恐怖にぶるりと体が震えた。

『今から行くから』

「ふえ？」

思っていなかった言葉に、月波は変な声を上げてしまつて恥ずかしくなる。

「い、今からつて」

『不安がつてる親友を放置するほど、俺は冷たい人間じゃない』
そっけない声がそう言つて、何の前置きもなく電話を切られる。

「さ、桜庭君！」

呼びかけても返事など来ないのに、月波は彼の名を呼んだ。当然、返事などなく、無機質なツーツーという電子音が響くだけだ。

「・・・・・・・・」

尚基が来る。来てくれる。

不安がつている親友——自分のところへ。

（・・・・・・・・どうしよう、すごく嬉しい、）

あの電話のことも、本当は尚基に話すべきなのではないかと思った。尚基なら、何があつても月波を守ってくれそうな気がする。あの力強い腕で。

尚基なら、何があつても月波のそばに居てくれそうな気がする。信じて、いてくれそうな気がする。

——たとえそれが単なる希望であつたとしても。

月波はそう思つていたかつた。

尚基は本当に来てくれた。

慌てて走つて来たらしく、ノックに応えた月波がドアを開けると、

壁に手をついて必死に息を整えていた。

「桜庭君、大丈夫・・・？」

「・・・一応。大して走ったわけでもねえのに、情けないな」

情けない顔をする尚基を見て、つい笑ってしまう。せつかく自分を心配して来てくれたのに、と思うが笑顔は隠せない。

「上がって。何か飲み物、準備するから」

「ああ。お邪魔します」

今日は行ったり来たりだ、と尚基は思った。

「月波、気分はどうだ？」

「あ、うん。桜庭君と長いこと電話でお話ししたら、落ち着いたみたい。全然大丈夫だよ」

につこりと微笑む月波を見て、尚基はほっと安堵の息を吐く。

「なら良いんだ」

「・・・ありがとう。心配してくれて」

真正面から月波と対面した尚基は、彼の頬がほんのり桜色に染まっていることに気付いた。

「月波、熱でもあるのか？」

尚基に、冷たいお茶の入ったグラスを差し出す月波が、きよとんとする。

「どうして？」

「いや、頬が赤いから」

そう言って、氣遣わしそうに尚基が月波の頬に触れた。すると――

「っ」

ビクンツと月波が体を大きく震わせたので、尚基も思わずビクンツとして手を引っ込めた。

「あ！」

その拍子にグラスを取り落としてしまい、落ちたグラスは無残にも割れてしまう。

尚基に頬に触れたことで動揺した月波は、何も考えずに慌てて

ガラスの破片に手を伸ばしてそれらを手に取ろうとした。

「あ、馬鹿!!」

「あつ——」

尚基の制止は間に合わず、月波はガラスの破片で指を切ってしまう。白く細い指に、鮮血が滴る。

数時間前に、キッチンで火傷をした自分のドンくさを再び味わいながら、月波は慌ててそばにあったタオルで指を抑えようとする。

「月波」

だがそれよりも早く、月波の意図を察した尚基は、彼を呼びながら、月波の手を自分の方へ導き、

「さ、桜庭君!？」

血を滴らせている指を、そっと咥えたのだった。尚基の舌の先が、一瞬だけ指に触れ、月波は思わぬ官能に再び体を震わせる。

「・・・タオルが汚れる。血は落ち難いんだ」

一分ほどそうしてから、尚基は月波の指を解放した。だが解放したのは口からで、まだ月波の手を放そうとはしない。まじまじと患部を見詰め、もう傷口からはたいした出血がないことを確認する。

「傷口が浅かったんだな。・・・消毒した方が良いけど、医療キツトとかあるのか？」

「しょ、消毒液なら・・・あと絆創膏もある」

いまだに衝撃から立ち直れない月波は、ただ反射的にそう答える。
「何処？」

それに対して、尚基は至って冷静だった。そして、手際が良かった。

「く、クローゼットの、下のスペースに・・・」

「開けても？」

「だ、大丈夫」

「なら、俺が取って来るから、月波は座って待ってる。血、苦手なんだろ？」

月波はおずおずと頷く。

「お、お願いします」

「なんで敬語なんだか」

ようやく微笑んだ尚基が、クローゼットのある方へ歩いて行く。

（ど、どうしよう——）

絶対に意図的なものではないことなど百も承知なのだが、一瞬だけ尚基の舌が月波の指に触れた瞬間があつた。そのときに感じた、背徳的な官能。それを思い出すと、体中が火照るのを止められない。

「あつたあつた。ほら月波、手え出して」

「は、はい」

「だから何で敬語なんだか」

苦笑する尚基は、救急箱から消毒液を出してガーゼに含ませると、そつと月波の指の患部にそれを触れさせた。

「っつ、」

「沁みるだろうけど、我慢しろよ」

「う、うん——」

消毒後は、絆創膏を器用な手付きで巻いてくれる。

「ほら、完成」

「ありがとう・・・」

「これくらいどうつてことないよ。・・・というか月波、無防備過ぎだぞ。破片を素手で触るなんて」

「ご、ごめんなさい。気を付けます・・・」

しゅん、と目に見えてしょ気る月波。

やれやれ、と溜息を吐いた尚基は、そんな月波の頭を軽く叩く。

「まあ、大した怪我じゃなくて良かったけど。正直、焦ったんだからな」

「うん。ごめんね」

「さ、て。俺は破片を片付けられないとな」

「あ、それは僕が・・・」

「月波」

「う・・・、お願いします」

「宜しい。ちよつとの間、そこを動かすなよ。破片を踏ん付けでもし

たら大変だからな」

尚基は月波が来客用でいつも常備しているスリッパに足を通して
いるが、月波は素足だ。それを考えてのことだろう。

「この時間だけど、まあ良いか。月波、掃除機あるか？」

「あ、この間壊れちゃって、寮監に修理はお願いしてるけど、まだ・
・・。」

「筈は？」

「柄が折れてから、買い換えてないんだ・・・。」
どンドン落ち込んでいく月波だった。

「桜庭君、本当にありがとう」

「どうってことないぜ？」

「・・・でも、僕を心配して来てくれたのに、その拳句が破片の後
片付けと僕の怪我の処置だなんて」

「だから、俺が好きでやってることなんだから構わねえって」

「・・・ありがとう」

今、月波と尚基は二人で月波のベッドに腰掛けていた。時刻は何だ
かんだですでに十一時近い。そろそろ月波の目もしょぼしょぼして
来た。

それをそつと確認した尚基は、“不安”の理由を訊くべきかどうか
悩んでいた。

尚基がこの時間帯に月波を訪ねたのは、“不安”について訊くため
だったのだから。

しかし、今自分の横にいる月波は、いささか眠そうにしている。不
安で眠れそうにないと言っていたが、今なら大丈夫そうな気がする。

わざわざ“不安”の理由を訊いて緊張させる必要性はないと思えるのだ。

「月波、眠いか？」

「・・・うん、何だか急に」

自分の存在が安定剤の役割を果たしているのかも知れない、と尚基は一人考えて苦笑する。思い込みも激しすぎるというものだ。

「じゃあ、もう寝ろ。月波が寝付くまで、そばに居てやるから」

「・・・でも、これ以上桜庭君に迷惑は掛けられないよ、」

「だから迷惑でも何でもないから。・・・月波の役に立てるなら、俺は――」

その先は、声にはならなかった。

なぜなら、月波が尚基の肩にそつと凭れ掛かって来たからだ。さらさらの黒髪が、尚基の首筋を撫る。

「・・・お休み、月波」

何処か微笑んでいるような月波の寝顔に、尚基はそつと就寝の挨拶をしたのだった。

二人と一人、それぞれの朝（前書き）

今回は短めです。

二人と一人、それぞれの朝

「……………んう、」

耳に微かに届く、誰かの息遣い。

（僕、一人で寝てるはず……………なのに、）

少し腫れぼったい瞼をそっと持ち上げれば、

「っ！？」

目の前に、端正で精悍な青年の寝顔があつた。微かに開けられた口からは、穏やかな寝息が聞こえて来る。

「さ、桜庭……………君」

「ん……………」

名前を呼んでも、尚基は起きない。小さく呻いて、更に月波の方へ体を傾けて来る。

（そ、そつか……………。昨日は桜庭君のお部屋に泊まらせて貰ったんだ……………）

「桜庭君、桜庭君、」

「む……………う？」

何度か名前を呼ぶと、ようやく目を開けてくれた。

「桜庭君、あの……………」

「つきは、おはよう……………」

寝起きだからか、まだぼんやりしている尚基は舌足らずな口調で朝の挨拶をする。

「う、うん。おはよう」

「今、何時……………？」

「え、えつとね……………」

月波は首を巡らせて、枕元の置時計を見つけた。

「ごめん……………まだ朝の五時半みたい」

「……………じゃあまだ、良いよな」

「あ、でも……………っ！？」

部屋に帰って支度しなきゃ、と言い掛けた月波は、絶句する。

「ちょ、ちよつと桜庭君……」

尚基が月波の背中に両手を回して、ギュツと抱き締めて来たからだ。
「なんか月波って、良い匂いがする……」

「な、何言って……」

「六時半になったら、起こして……」

そしてそのまま再び眠りに落ちてしまった。

月波は困ってしまい、身動きすら満足に取れなくなってしまった。

（……どうしよう、）

しかも自分はもう完全に覚醒してしまっているし、かと言って無理矢理尚基を引き剥がすのにも抵抗がある。昨日散々迷惑を掛けてしまったから、それに対する謝罪の意味をこめて——それに何より、尚基が穏やかな顔で眠っているから、彼を無理矢理起こすのが忍びないから。

（今日だけなら、良いか）

月波は苦笑しながら、ただ尚基の寝顔を見守っていた。

「いや、悪かった。本当に」

心底済まなそうに頭を下げる尚基に、月波は苦笑で応える。

「本当に良いんだってば。気にしないで？」

「でも……」

「桜庭君！お醤油こぼれるからっ」

「！あ、おわつと……」

場所は変わって、月波の寮室。制服に着替え終わった二人は、月波手製の朝食を摂っていた。といっても、トースターで焼いたパンと目玉焼き、かりかりに焼いたベーコン、レタスサラダという簡単なメニューだったけれど。

「桜庭君、食パンまだあるけど要る？」

「良いのか？」

「勿論」

尚基が頷いたから、もう一枚トースターに入れる。

「今日、一時間目はなんだったか」

ようやく気を取り直したのか、尚基が世間話を振る。

「確か数学だったかな」

「数学か。面倒だな」

「まあまあ。頑張ろうよ」

「まあ、適当に」

肩を竦める尚基を見て、月波がクスクスと笑う。

「月波、体調は平気か？」

「うん。…きつと桜庭君が添い寝してくれたから、安心して寝られたんだと思うよ」

「そっか。なら良かった」

「ん。ありがとう」

月波が微笑んだところで、パンが焼き上がった。

「マーガリンで良い？」

「ああ。サンキューな」

甲斐甲斐しくパンにマーガリンを塗り、月波は尚基に手渡す。

「これ食ったら、学校行くか」

「うん。今日も頑張ろうね」

月波はにつこりと顔中で微笑んだのだった。

「見事に風邪、だな」

「……はあ、」

亮輔は、熱のせいで潤んだ瞳で山縣を見上げる。

「今日はしっかり食べて、しっかり温かくして寝ていることだ」

山縣の言い付けに頷きかけて、亮輔は慌てて上体を起こす。

「当主」

「きよ、今日は駄目なんです。今日は大事な用事が……」

「駄目だ。風邪は、悪化する前にきちんと治さないといけない」

「で、でも」

今日は、和音と月波、それぞれと話をしなければならぬから。亮輔は必死に山縣に言うが、彼は厳しい顔つきで首を左右に振るばかりだ。

「とにかく駄目だ。寝ていなさい」

「山縣さんっ」

山縣は部屋を出て行ってしまった。

「っ、」

亮輔は、ほぞを噛む。自分の不甲斐なさが悔しい——ここぞという時に、体調を崩すなんて。

（これは、抜け出すしか）

山縣が亮輔の身を案じてくれているのは分かるし、とても嬉しい。彼の気持ちを無下にすることなど、したくはない。——でも、それでも。

「綾音ちゃん、空音くん。居るんでしょう？」

亮輔は、静かに彼らに呼び掛ける。熱で火照る、だるい体を起こしたままで。

「君たちに頼みがある。主人は僕ではないけど、和音ちゃんから僕には便宜をはかるように言われてるんじゃないのかい？」

ただの勘に過ぎなかったが、一か八か問うてみる。

「……僕は、今日はどうしても会わないといけない人たちがいる。ここで、休んでいるわけには……いけないんだ……」

言い切ると同時に、一気に咳き込む。こうしている間にも、着々と体温が上昇していくのが何となく分かる。

「お願いだ。僕が抜け出す手伝いをしてくれ」

そう言った瞬間――

「仕方ないなあ」

「仕方ないですね」

二つの幼い声とともに、綾音・空音が音もなく姿を見せた。

「当主も、やるときはやるのね。腐っても草薙の当主ってことか」

綾音は朝から辛辣だ――朝だからかも知れないが。

「……迷惑掛けて、ごめんね」

「構わないですよ」

綾音に対して、空音はにこにここと微笑んでいる。

「じゃ、早くお召し物をお着替え下さいね。洗顔などは学校で行い
ましょう」

空音の言葉に頷き、亮輔は重たい体で、どうにか布団から出る。

「よろしくね」

そう二人に言つて、亮輔は着替えを始める。学校に行くために。

――亮輔はまだ知らない。今日は登校などせずに自宅療養してお
けば良かったと、心の底から後悔する出来事が起こることなど……

…。

二人と一人、それぞれの朝（後書き）

お読みいただき、本当にありがとうございます。

学校へ（前書き）

こんばんは。

今回は繋ぎ部分なので、短めです。

学校へ

「月波」

「月乃ちゃん！おはようっ」

月波と尚基が連れ立って男子寮を出ると、女子寮の前に立っていた月乃が声を掛けて来た。それに、満面の笑みで応える月波。月乃が普段通りに声を掛けてくれたのが心底、嬉しいのだ。

「……桜庭も、おはよう」

「ん？俺にも挨拶してくれるとは、珍しいこともあるもんだな」
ニヤニヤと笑う尚基に、月乃があっさりと切れる。

「何よ、嫌な言い方してっ！人が折角挨拶したって言うのに！！」
「これは失礼しました〜おじよ〜さま〜」

「っ！バカ桜庭っ！！」

「ちょ、ちよつと二人ともお……」

相変わらずの三人のやり取りに、寮生たちがクスクスと笑いながら通り過ぎて行く。

「み、皆見てるから、ね？」

しかし、やり合っている二人には、月波の取り成す声も寮生たちのクスクス笑いも何の影響も与えはしない。

「二人とも〜」

お願いだから仲良くして、と言い掛けた月波だったが、不意に背中に視線を感じて口を閉ざした。背後を振り返るが、特に月波自身を凝視している人は居そうにない。

（気のせい……かな、）

やっぱり疲れてるんだろうな、と月波は思うことにした。

「月波、どうしたの？」

ようやく口喧嘩を終えたのか、月乃が月波に意識を戻していた。

「……うつん、何でもないよ。ほら、行こっ」

再び口喧嘩が始まったら居たたまれないから、月波は幼馴染みと親

友を急かした。……いつの間にか視線は一切感じられなくなっていた。きつと、口喧嘩をしていた月乃と尚基たちを見つめていたのを自分に向けられた視線と勘違いしたのだろう。

「遅刻しちゃうから、急ごっ」

二人の背中を軽く手で押しながら、月波は学校への道を歩き出した。

（今の女……）

月波の掌を背中で感じて歩きながら、尚基は先程草場の影から月波を見つめている女の姿があることに気付いていた。

黒のパンツスーツを身に着けた二十代半ばのその女は、氷のように凍てついた瞳で月波だけを無心に見つめていた。

（……何だ、嫌な予感がする、）

月波を見る瞳。まるで親の仇でも見るような……。

女の目的は、明らかに月波だ。だが、月波は恨みを買うようなタイプではない。考えられるのは、あの女の単なる逆恨みか、もしくは

（草薙の関係者か……）

桜庭の可能性もなきにしもあらずだが、尚基の知る範囲内ではあんな女は居なかったはずだ。

（ただ、桜庭も分家があちこちにあるからな……。一概に言い切るのは良くないな）

とにかく今は、女の正体が分からない以上は月波の周囲に間断なく目を光らせておくくらいのことしか出来ないだろう。

「桜庭君？」

急に黙り込んでしまった尚基が心配になったのだろう、月波の不安そうに曇った大きな瞳が尚基を見上げている。

「具合、悪いの？」

「ん、いや……。どうやって詠倉に一泡吹かせてやろうかと思案していた」

「なんですって!!」

こちらも大人しくなっていた月乃が、きいっ！といきり立つ。

「そういうっけいなことばかり考えてるから、風邪なんか引くのよ！」

「ふむ。要するに知恵熱ってわけだな？」

「違う！バカッ!!」

「馬鹿って言った方が馬鹿だって聞いたことねえ？」

「む、ム力つくっ……。!!」

「っ、月乃ちゃん、まあまあ落ち着いて、」

「月波、こんなやつ放っておいて、さっさと行くよ！」

月乃はやおら月波の手首を掴み、ずんずんと勢い良く進んで行く。

尚基はその姿を苦笑して見つめながら、頭にさっきの女の顔と体格をしっかりと焼き付けていた。

綾音・空音の手引きで、誰にも見咎められることなく草薙本家を脱した草薙亮輔は、学校を目指していた。

「当主って、自転車に乗れるんですね」

亮輔が漕ぐ自転車に並走する綾音が、しれっと失礼なことを宣う。

空音は苦笑しつつ、何も言わない。

「……熱、あるから……結構辛いけど……」

気弱に微笑み、綾音の失礼な発言にも真面目に応える亮輔。

「……そこまでしてあなたが学校に行くなんて、想像だに出来ませんでした」

「というより、バスが何かを使った方が良かったのでは……」

「バスは、本家からだと言回りになってしまっから。……タクシーに乗るのは、金銭的にも出来ないし……すぐ本家に伝わるだろうから

……」

「……そうですね」

空音が、少し悲しげな眼差しで亮輔を見る。

それに対して、綾音は素知らぬ顔だ。

「当主、話すのは結構ですが、余計な体力を使ってしまうですよ」

「……そうだね、」

会話の口火を切ったのは綾音だったような……と思ったが、亮輔は気付かぬ振りで、頷くに止めた。

（……和音ちゃん。伊織君……）

二人の顔を思い浮かべながら、亮輔は学校へと急いだ。

学校へ（後書き）

ご閲覧、ありがとうございます。

違和感と再会

……自転車を漕いで学校に到着する頃には、体と頭が悲鳴を上げていた。体も頭も、熱くて熱くて堪らない。

「当主、私たちはここまでです」

綾音が言い、空音とともに礼をする。

「うん、ありがとう……」

二人に見送られ、亮輔はふらふらする足取りで構内へ向かう。

「……っ、」

下駄箱から上履きを取り出す歳に屈み込んだ瞬間、激しい目眩を感じた。

「先輩っ！」

「え、」

膝を着くと同時に、誰かに体を支えられていた。

それは、会いたいと思っていた一人目の人物の声。

「い、伊織くん、……」

「だ、大丈夫ですかっ！？っ、凄い体が熱いじゃないですか！！」

「伊織くん、どうして……」

「……先輩が自転車で来るのが教室の窓から見えて、なんだか調子が悪そうだったから気になったんですっ」

「そう……なんだ」

月波の気遣いが嬉しくて、亮輔は微かに微笑む。伊織月波は、亮輔の背中から感じる熱につい声を荒げてしまふ。体温表皮だけでこんなに熱さを感じられるということは、実際の熱は如何ほどのものなのか。

「先輩、風邪引いてるんじゃないですか！？」

「……大丈夫、」

「だ、大丈夫って……大丈夫には見えませんっ」

次々に登校して来る生徒たちが、下駄箱先で座り込んでやり取りを

している二人を不思議そうに見下ろしながら通り過ぎて行く。

「と、とにかく、保健室に行きましょうよ。顔、真っ赤だし、ふらふらじゃないですか……」

「僕、君に話があるから……」

「え？」

「大事な……話、」

月波の大きな瞳が、不安そうにゆらゆらと揺れながら自分を映し出している。

「で、でも……こんな体で……、」

「おと……さん、」

「え？」

「君の、お父さん……に会った」

「父に？」

月波が怪訝そうに呟く。亮輔はそれにすら気付かず、必死に言葉を続ける。

「……でも、全然、君に似てない人、で……何だか、不安になつたから、君に、一言……、」

「せ、んぱい……」

「……そんな、泣きそうな顔、しないでよ……」

「えっ、」

「僕は……平気、だから」

「ちょ、ちよっと、先輩っ！」

月波の支えをそつと辞退し、亮輔は真正面から月波を見詰めた。

「……先輩、」

「……もしかしたら、君の、お父さんが、会いに来るかも知れないよ」

「！」「気を、付けて。……君のお父さんのこと……悪く言いたくないんだけど、何だか、こわ……い、人に思えたから、……っ」

「先輩、分かりました。先輩の言いたいこと伝わりました！だから、保健室に行きましょうっ。熱が上がっちゃいますよっ」

「……………ねえ、伊織君」

「……………はい、」

保健室に行く素振りすら見せてくれない亮輔に、月波は困惑の色を隠せない。…亮輔がこんなに意固地になる人だとは思わなかっただけに、尚更。

「……………一つ、我が儘を言っても良い、かな」

「え……………はい、」

真正面から真摯な瞳で見詰められたら、嫌だなんて言えなくなる。

「和音ちゃんのこと……………連れて行ってくれないかな。一人で、もう……………立てそうにないから……………」

「和音ちゃんて……………」

「添山和音ちゃん……………僕の幼馴染なんだ。きっとこの時間なら、生徒会室に居ると思うから」

「添山先輩のこと……………ですか、」

「うん。和音ちゃんにも、大事な……………話、が」

「そ、それは今じゃないと駄目なんですか？こんな、しんどそうな時に……………」

月波が自分を案じてくれていることがハッキリと分かって、亮輔は嬉しく思う。でも、

「ごめん……………ね。でも、今じゃないと、手遅れになる、かも知れないから……………」

「……………先輩、」

亮輔が一体何を考えているのか分からず、月波は困惑してしまふ。だが、このまま保健室に行くよう説得したところで亮輔が承諾するとは思えない。ならば和音がいるらしい生徒会室まで付き添い、話をさせてから保健室に行ってもらうのが良いのだろう。

「……………分かりました。でも、後から必ず保健室に行きましょうね？」
月波の言葉に、亮輔が苦しげな顔にも笑顔を浮かべて、こくりと頷いた。

（それに……………僕のお父さんが、先輩に会いに来たって……………、どうし

て、)

月波の父親が、亮輔に用事があるなんて思えない。関わりなんてない筈なのに……。

(それに、先輩はお父さんを何だか怖くて、と言った。……僕のお父さんは、怖いなんて言葉とは無縁な人なのに)

月波の父親は、いつだって穏やかに微笑んでいる人だった。怒るのは母さんの役目だとハッキリと言っていたのに……。

(……あれ……?)

不意に、言い知れぬ違和感に、月波は頭に手を遣った。何か、大切なことを忘れているような気がする。最近、両親のことで何か大きな事実を知ったような……。

「……い、おりくん？」

「……！あ、」

いつの間にか、亮輔のことも忘れて内省に走っていたらしい。悪い癖がまた出たようだ。

「……どうしたの？」

「な、何でもないです。じゃあ、生徒会室に行きましょうか」

「うん。迷惑、掛けてごめんね」

亮輔の謝罪に、月波は無言で首を左右に振るしか出来なかった。

月波の様子が急におかしくなり、亮輔は怪訝に思う。やはり、父親に対して亮輔と同じように恐怖を感じているのか……。

(だけど、“怖い”というのとは、違う気がする……。伊織くんは、怖がってるんじゃない……。なら、どうして?)

そっと見遣れば、月波の横顔はやはり固くて。

(伊織くんらしくない顔だ……)

「先輩、階段です。足元、気を付けて下さい」

亮輔を気遣う声も、固い。

「……先輩、もうすぐですからね。……！」

「？」

月波がびくりつと体を震わせて足を止めたから、亮輔も自然と足が止まることになる。

「伊織くん……？」

「あ、……っ、」

「やあ、おはよう。良い朝だね」

「！」

不意に聞こえてきた、覚えのあるハスキーボイス。

亮輔は顔を上げ、見た。そこに、昨日草薙本家に来た男が立っているのを。

父親（前書き）

今回は短いです

父親

……その人の姿を目にした瞬間、表現しようのない背筋の冷えを感じた。

知らない人の筈なのに、もう何年も前からずっと知っているような感覚。

……怖い。

……来ないで。話しかけないで。こっちを、見ないで……。

「伊織くん？」

自分と呼ぶ先輩の声も、どこか遠くに感じて。

「やあ、良い朝だね」

何の奇妙さもない、挨拶代わりの言葉。

しかしそれにすら、恐怖を感じて。

知らない人の筈なのに、どうして……？

……怖い、息がうまく出来ない……、

「伊織くん！しっかりしてっ」

「……」

ようやく、体の強張りが取れた。

でも、目の前の男の人を真正面から見ることもどうしても出来ない。

コツツと、男の革靴が立てる音がやけに耳につく。

「おはようございます。草薙当主……随分体調が悪いとお見受けしますが、大丈夫ですか？」

亮輔を気遣う声は、何処か芝居臭くて、違和が付き纏う。

「どうして、あなたが此処に……」

クスリ、と男が笑う。

「いえ、少し野暮用でね……」

「……」

亮輔は、再び月波を見遣る。

視線の先、少年は男から顔を逸らして一心不乱にリノリウムの床を

見下ろしている。

「もう用は済みましたので、私はこれで。・・・また、お会いしましょう」

それはどちらに対する挨拶なのか。

亮輔？二人に対して？それとも、月波だけに対して？

男は、コツコツと音を立てながら優雅な足取りで亮輔と月波の横を通り過ぎて行く。

しかし、月波の横を通るその刹那、男が何事かを囁いたのを亮輔は揺れる視界の中で、確かに見た。

「・・・・・・・・！！」

そして男の姿が廊下の角を曲がって二人からは視認出来なくなった瞬間、月波がいきなり倒れた。

「い、伊織くんっ！？」

月波からの返答はなかった。

『やっと、また会えたね』

その男の人が僕の耳元でそう囁いた瞬間、頭の中が真っ赤に染まった。

そして、急に息苦しくなった。

喉元を、真綿か何かで絞められているように。

僕は、この人を知っている。

それも、とてもとても深い部分で。

体が、覚えている。

自分の足を這う、気色の悪い指の感触。

それは、その男の人の指が僕の足を撫で擦っているのだと。

この人は、僕の本当の――

父、
親

怒り

（月波の奴、戻って来ないな）

朝のHRまで、あと五分もないのに月波はまだ戻って来ない。

（いきなり教室を出て行ったきりだ。・・・あの時は、何かにびっくりしていたみたいだが・・・）

一体何に驚き、教室を飛び出したのか。

「なあ、詠倉」

「何よ、馬鹿桜庭」

「・・・」

まだ朝のやり取りを根に持っているらしい月乃が、不満たらたらない声音で尚基の呼びかけに応じる。

「・・・月波がまだ戻らないんだけど、思い当たる節はあるか？」

月乃は予習中らしい英語の教科書から顔を上げると、教室の前側の壁に掛けられている時計に目をやる。

「嘘！もうこんな時間っ？」

時間も気にならないくらいに勉強に集中していたらしい。

珍しいな、と思う。月乃が月波を気にせずになんかに集中しているなんて・・・。

「月波、どうしたのかしらね・・・」

幼馴染みを案じる声も、何処か上の空に聞こえる。

「・・・詠倉、お前、月波と何かあったのか？」

「え？いや、別に？」

・・・確かに朝は普通だったけれど。

「俺、何か心配だからざっと学校の中、見て来る」

HRなら少々遅れても大丈夫だろうと勝手に自分を納得させながら、尚基は席を立つ。

そんな彼に、月乃はもう何の反応も返さなかった。

（と言って、考えられるのは図書室か保健室か・・・あとは、草薙の教室か）

だがHR前になっても戻らないということは、また体調を崩して保健室で厄介になっているというのが可能性が一番高いのだろう。

（よし、保健室へ行ってみるか）

保健室は特別棟の一階にある。教室などがある一般棟の二階から伸びる渡り廊下を通って行こうと決めて、尚基は小走りで保健室へ向かって走り出した。

「いつもの貧血だと思うわ。少し様子を見ましょう」

「はい」

「というより草薙君！あなた熱が38度もあるじゃないの。どうしてお休みしないの」

「す、すみません・・・」

運良く近くを通りかかった体育教師に月波を運んでもらうようお願いして、どうにか辿り着いた保健室。一年生のクラスの担任である体育教師はすでに保健室を辞退したので、HR前の保健室には養護教諭と亮輔、そしてベッドで眠る月波の姿しかない。

「ほら、草薙君もちゃんとベッドに横になって！」

「で、でも僕は行くところが・・・」

「そんな体で何処に行くって言うの！倒れて此処戻りになるんだから、絶対に！」

養護教諭は必死に亮輔を押し留めようとするが、押しが弱くあまり

自分の意思を出さない彼にしては珍しくなかなか頷こうとしない。

「用事が済んだら、早退しますから、だから・・・」

「駄目です！このまま君を行かせて倒れられたら困るの！生徒の健康を守るのが私の仕事なんだから！」

「・・・でも、」

二人の押し問答は永遠に続く・・・かと思われたが、

「失礼します！」

少年の声がして、保健室のドアががらりと開けられた。

「すみません、ここに二年の伊織月波は、」

入室して来た少年は、亮輔も養護教諭もよく知る顔だった。

「て、草薙・・・先輩」

亮輔を先輩扱いすることに抵抗があるのか、その少年――桜庭尚基は“先輩”という言葉を少し遅らせて発した。

「君は、桜庭くん・・・」

「お取り込み中・・・みたいすけど、月波知りません？HR始まるのに、教室に戻って来ないんで」

尚基の問いに、養護教諭が答える。

「伊織君なら、そこで休んでるわよ」

と、ベッドのあるスペースを指差す。

やっぱり、と尚基は軽く息を吐きながらそのスペースに寄って行く。

「月波、開けるぞ」

声を掛けてから、ベッドの周囲に巡らされている白い清潔なカーテンを開く。

やはり真っ白なシーツのかかったベッドの上、月波が眠りに就いていた。だが、その小さな顔は酷く蒼白で、何の手入れもされていない黒い眉毛が苦しげに歪んでいる。

（何で、こんな・・・。朝はあんなに元気そうだったのに・・・、）

「月波、」

尚基は二、三度だけ月波の髪を梳いてから、ベッドのそばを離れた。

「おい、草薙」

我知らず声に怒りが滲む。

呼ばれた亮輔は、養護教諭に支えられるようにして立っているが、その顔は真っ赤で瞳は潤んでいる。

熱があるな、と尚基は悟る。

しかし、そんなことは全く関係ない。少なくとも、尚基にとっては。「月波に何があったか、説明しろ。どうせお前と一緒に居たんだろっ！」

「こ、こら桜庭！乱暴は、」

「お前が此処にいるってことは、月波と一緒に居たってことなんだろう！？何で月波はあんなに苦しそうなんだ！月波に何をした！！」怒りと言いやうのない焦燥感のせいで、尚基の言葉はもはや支離滅裂になっていた。

風邪か何かで辛そうにしている亮輔の胸倉を掴み、矢継ぎ早に声を浴びせる。亮輔はじつと耐えるように唇を引き結んで、尚基を真っ直ぐな眼差しで見返している。

（こいつ、自分は何も悪くない、関係ないって言いてえのか・・・！）

月波はあんなに、先輩先輩と言って気遣っているのに、とうの先輩とやらは・・・！

「桜庭！止めなさい、彼は熱があるのよ！」

「うるさい！俺にはこいつなんかより、月波の方が何倍も大切なんだ、こいつの体調なんて知ったことか！！」

理不尽な怒りは養護教諭にまで及ぶ。

「草薙なんか、草薙の人間なんか信じられるか！！」

つい、本音が出た。

ハッと口を噤んだ時にはすでに遅く、亮輔が傷付いた色をその瞳に浮かべていた。

亮輔が草薙の人間だから——亮輔を個人ではなく、草薙という一族だからという色眼鏡で見ってしまったということ。

どんな人間でも、草薙の人間ならば同類だ。・・・尚基はそう言っ

てしまったようなものだ。

「・・・ごめんね、」

「・・・、」

「僕が、草薙の人間だから、君は僕を嫌いなんだよね。僕は・・・もう伊織くんには近づかないから、安心・・・して、」

亮輔は完全に俯いてしまい、その表情までは見えない。

だが、尚基は確かに見た。

パタパタと、数滴だけ透明な雫が亮輔の足元に落ちたのを。

「・・・、」

養護教諭も、生徒二人の修羅場に何も口出し手出し出来ずに固唾を呑んで見守るしか出来ないでいる。

「・・・伊織くんのほうから来ても、突っぱねるから、安心、してね」

苦しそうな口調でそう言っつて、亮輔は二人に背を向けた。

そしてそのまま保健室を出て行こうとする。

「せ・・・ぱい、待って・・・」

その背中を今にも途切れてしまいそうな掠れ声で呼び止めたのは。

「先輩、行っちゃ嫌だ・・・」

尚基の切羽詰った怒声で目を覚ました、後輩だった。

名前を呼ぶ

「月波、」

尚基が、躊躇いがちに親友の名を呼ぶ。しかし月波はそれには応えず、ふらふらな足取りで先輩へと歩み寄って行く。

月波に呼ばれ、背中を見せたまま固まっている人へと。

「せ……ぱ、」

「い、伊織くん、」

先輩——草薙亮輔も、躊躇いがちに後輩の名を呼んだ。

「せんぱ……先輩っ」

どうして、そんなに悲しげに、必死に、自分のことを呼ぶのだろう。どうしてそんなに、一生懸命自分の服の裾を掴むのだろう。

「伊織くん、ベッドに戻って……」

亮輔が月波の肩をそっと掴みながら言えば、月波が弱々しく首を左右に振る。

「伊織くん、」

「嫌だ、嫌……」

どうして嫌なのかを言ってくれず、亮輔は困惑する。

「月波。先輩が困ってるだろ？」

尚基が月波の横にしゃがみ込み、言い聞かせるように声を掛ける。それでも月波は、亮輔を放そうとしない。

「月波、」

「嫌だ、先輩……行っちゃ嫌だ……」

「伊織くん、どうしたの……」

「嫌だ、何処にも行かないで……下さい、」

「伊織くん……」

亮輔だけではなく、尚基も月波の様子に絶句している。

「伊織……」

「りょーすけ、」

「え？」

「りょーすけ、もう何処にも行かないで……」

急に、月波が亮輔を名字ではなしに名前で呼び始めた。しかも、妙に間延びした言い方で。月波の、涙に濡れた大きな瞳がじいっと食い入るように亮輔を上目遣いに見詰める。

「伊織くん、君は——」

そして、何故か懐かしく感じる、「りょーすけ」と呼ぶ月波の声。

「りょーすけ、りょーすけ、」

「……………」

何度も自分の名前を連呼する月波のことが急に不憫に感じられ、亮輔は思わず月波の背中に両腕を回していた。月波が嬉しそうに顔を綻ばせる。

「りょーすけ、大好き」

「伊織くん……」

「違う、りょーすけ、」

「え？」

「僕、伊織なんて名前じゃない」

「……………」

亮輔も尚基も耳を疑う。

「僕の、本当の名前は——」

しかし、その先の言葉が続けられることはなかった。いきなり月波が白目を剥いて亮輔にしなだれ掛かって来たからだ。

「い、伊織くん？」

「……………」

月波からの応答はない。

すうすうと、軽い寝息が聞こえて来て、月波が眠りに落ちたのだと知る。

『りょーすけ』

月波の、自分を呼ぶ間延びた声が甦る。
何故か、とても懐かしい感覚がした。

「……月波、寝たのか」

尚基が、拍子抜けしたような顔で呟く。

「そう……みたいだね……」

月波はそう重くはない筈だが、体調の芳しくない亮輔は重そうに身動く。

「なんか、よく分かんないけど、」

完全に茅の外だった養護教諭が、ぽつりと呟く。

「伊織君をベッドに寝かせてあげよう」

「あ、はい」

尚基は月波を抱き上げ、ベッドへと運ぶ。ゆっくり下ろせば、何か楽しい夢でも見ているのか、月波が「ふふ」と眠ったままで笑った。

「先生、俺、月波についてて良いか？」

「……今回だけよ」

「……はい。ありがとうございます」

尚基は近くに立て掛けてあった丸椅子を持って来て、それに座る。

「……月波、」

「……」

亮輔も月波のことが気がかりではあったが、彼ら二人の間には入ってはいけない気がして、声を掛けることすら出来なかった。

「草薙君」

「……伊織くんのこと、よろしくお願いします」

「……分かった。君も、しんどくなったら戻って来るんだよ？」

養護教諭の気遣いに頭を下げてから、亮輔はふらつく足取りで保健室を後にした。

（伊織くんは、初めて下の名前で呼ばれた。……ただ、それだけのことなのに）

この、胸の奥底から沸き上がって来る懐かしさは何なのか。

『りょーすけ、』

自分はずっとずっと前に、そういう風に呼ばれていた気がする。しかも、月波に、だ。

（まさか。伊織くんとは、この高校で初めて会ったんだから……）

亮輔は首を左右に振り、一度月波のことから離れることにした。

（もう、とつくに一時間目は始まっている。…和音ちゃんは、授業に出てるよね）

当然のことを考え、はあとため息を吐く。

そんな彼に、背後から掛かる声。

「亮輔、ここに居たのね」

どこか、悲しげな声音。

「！」

亮輔は、雷に撃たれてもしたかのように全身をビクリと震わせ、体を硬直させた。

「亮輔。探したのよ」

そんな亮輔の後ろから伸びてきた白くたおやかな腕が、彼の首に回る。

「和音、ちゃん……」

「私と話したいことがあると思って、待っていたのよ？でも、なかなか来ないから……探しに来たの」

悲しげな、しかし楽しげな声音。

そう感じた亮輔は、分かってしまった。自分の背中に埋められた和音の顔が、笑みの形になっていることを。

「亮輔。私の、大切な君」

「和音ちゃ……」

「生徒会室に行きましよう？亮輔の大好きなカフェオレを作ったのよ」

「……うん、」

「亮輔、熱いね。熱があるのね……」

和音の右手が、壊れ物に触れるかのように繊細な手付きで亮輔の額に宛がわれる。

「こんなに体調なのに、私に会うために頑張って登校して来たのね？——私、嬉しいわ……」

和音の口調に、喜悦の色が混じる。

「和音ちゃん、僕は……」

「良いから。早く、行きましよう」

亮輔から離れ、和音が生徒会室への道を先行する。嬉しさがはつきりと伝わって来るような、浮かれた足取りで。

「……………」

彼女を問い詰めることが出来るのだろうか、と憂鬱に感じながら、亮輔は彼女に続いた。

……生徒会室のソファに押し倒されることになるとも知らずに。

夢い願い

……生徒会室には、当然自分たち以外は誰の姿もない。熱に浮かされた体でどうにか辿り着いた亮輔は、和音に言われるままに革張りのソファに座っている。

（体が、熱い……。はあ、）

早く本題に入らなければと気ばかりが焦るものの、和音が世間話を矢継ぎ早に振って来るから、亮輔はなかなか口を挟めずにいた。

「どうぞ」

紙コップに注いだカフェオレを差し出され、亮輔はももごと礼を言いながらそれを受け取った。

「冷めないうちに、飲んで」

「う、うん……」

亮輔はコップを両手で持ち、ゆっくりと口に含んだ。

……甘くて、じんと体に染み渡る。素直に美味しい、と思える。

「美味しい？」

「うん……、美味しいよ」

良かった、と和音がにこりと笑う。

「あ、あの……和音ちゃん、」

「……速効性だから、もうすぐ、かな」

「え？」

何の話？と訊こうとして、亮輔は体の異変に気付く。

（……………何だか、眠……………い？）

その瞬間、

「……………え？」

天地がひっくり返ったような感覚とともに、ソファに横になっていた。

——いや、違う。

押し倒されたのだ。

和音に。

「亮輔」

「和……音ちゃ、何して……」

亮輔の上に跨がり、和音が恍惚とした表情を浮かべている。

「亮輔は、疲れてるの。だから、熱が出ちゃうのよ」

「……………っ、」

和音の顔が、目と鼻の先にあり、亮輔は息を呑んだ。しかも、やけに眠くて、瞼がびくびくと痙攣する。

「カフェオレにね、入ってたの」

「……………え？」

「睡眠薬」

「！？」

ぞつと、背筋に悪寒が走った。

「和音ちゃ、」

「ゆっくり休めば、熱も下がるから」

和音の手が、そつと亮輔の頬を撫でる。

「違う、僕は、話があるのに……」

「私には、ないわ」

「和音ちゃん……！」

「あなたは、私の言う通りにしていれば良いの。そうすれば、全て上手く行くのだから」

亮輔は、まっすぐ自分を見詰めて来る和音から目を逸らして、

「そんなの嫌だよっ」

反抗する。しかし睡魔の前では、それはなしのつぶてに過ぎなかった。

「……………っ」

「亮輔、口答えは駄目よ？」

ばやける視界の中、和音が泣いているように見え——（和音ちゃん……………）

唇に何かが当たる感触を感じながら、亮輔は完全に意識を手放した。

意識のない者の唇を貪る。背德的だとは思いつながら、和音はその行為をやめられずにいた。あまつさえ、口内に侵入させた舌で、亮輔の舌を絡め取った。

（亮輔――）

亮輔の意識のある時にこんなことをしたら、亮輔はどうするだろう。

嫌がるだろうか。

それとも――……。

「嫌がるに決まってる、か……」

ようやく亮輔から離れた和音は自嘲気味にそう呟く。

（自分のおじを殺せと命じた人間なんか、御免に決まっている……）
立ち上がって服を整えてから、和音は椅子に座った。疲れたように深いため息を吐いて、部屋の天井を見つめる。

（もう、覚悟は決めた筈なのに……やっぱり怖いんだ。……亮輔は、きっと私を許しはしないだろうから）

肉親を奪った和音を、亮輔は拒絶するだろう。そんなことは、疾うに分かっているはずだった。なのに、いざ本人を前にすると怖い。幼馴染みが、どんなふうに自分を糾弾するのか。

何と言って、拒絶されるのか。

それを受け入れる自信がない。

だから、先伸ばしにした。結果なんて、いつ出ても変わらないだろうに。

「亮輔、好きよ。本当に……愛してるの」

だから、捨てないで。

拒絶、しないで。

ずっとずっと、この先も永遠に、私と一緒に居て下さい。都合のよい願いだと分かつてはいるけれど……。

「亮輔」

和音の呼び掛けに、眠りのただ中にいる亮輔は応えることはなかった。

迷い

「……………」

お前の“本当の名前”は何なんだ？

俺に、教えてくれるのか？

「月波、」

お前は、“月波”ではないのか。綺麗な名前なのに。

「桜庭。ほら」

カーテンを開けて、養護教諭が内側に入って来た。右手に握ったマグカップを、尚基に差し出して。

「？」

「養護教諭特製の珈琲よ。砂糖とか、要るかしら？」

「あ……じゃあ、砂糖とミルクを」

ふうん、と意味深に言うから、尚基は眉を寄せる。

「……なんスカ」

「うっん。珈琲はブラック派だと思ってたから、意外だっただけ」

「……………よく言われます」

ふふ、と笑いながら養護教諭は珈琲メーカーのある場所へと歩いて行く。

（……………仕方ねえだろ。苦いの、苦手なんだから）

「なあ、月波」

そういえば、月波は珈琲を飲むのだろうかとふと思った。基本的に甘党のはずだが……………。

（月波は、珈琲好きか？）

すぐに答えが欲しい問いではないのに、何故かすごく気になった。どんな答えでも、月波の声を聞きたかった。

（月波……………）

こんなにも声を聞きたいと思うなんて。今は、ただ眠っているだけなのに。一生、声を聞けない訳じゃないのに。

（もし、本当の名前があるとしても、月波は月波だ。名前なんて関係ない）

尚基は、おずおずと眠る月波の手に触れてみた。少しだけひんやりしているが、ちゃんと血の通った人間の手だ。

（月波、お前は何を抱えてるんだ？）

亮輔に見せた、あの執着。あれは何だったのだろうか。やはり、月波は草薙の人間で、そのために亮輔を求めるのだろうか。

（草薙の……いや、草薙の“血の力”……か）

そんなものに囚われたくはないが、自分の体にも、その忌み血は流れているのだ。それを考えるだけで、背筋に冷たいものを感じる。

（……兄貴、）

こんなときに思い出すのは、兄の声。そして、温もり。

『尚』

優しい呼び声。

また、もう一度呼んで欲しい……。

「日曜日、か……」

やはり一人で行くべきなのだろうか。月波にこれ以上負担を掛けるべきではないのかも知れない。しかし、あの女に会うことで、自分が感じている月波に関する危惧がなくなるかも知れないと考えれば、是非一緒に来て貰いたいと思う。

ただ、

（その危惧が本物だと分かったなら、その時に俺は……どうするのだろうか……）

……正直、分からなかった。

……昼休憩の鐘が鳴った。

「……………」

添山和音は、亮輔の枕元から伏せていた顔を上げた。どうやら、亮輔の寝顔を眺めている内に自分も眠ってしまったらしい。

（亮輔、よく眠ってる……）

睡眠薬を飲み物に入れて亮輔を眠らせたのは自分なのに、と和音は自嘲する。

「お腹、すいたな……」

学食は面倒だから、購買に行こう。そう考えて、和音は立ち上がった。

「亮輔にも、何か買って来るからね」

母親が子供に対するようにそう言い、和音は生徒会室を出て行った。

一方、同時刻・保健室では。

（……………月波、よく寝るな。まさか、眠り病なんてないよな……………）
童話じゃあるまいし、と尚基は自分の考えに苦笑する。

（しかし、腹減ったな……。学食は面倒だし、購買で良いか……………）
和音と全く同じことを考えているなどとは露知らず、尚基は保健室を出た。

（何、食うかな……………）

購買のパン売り場は、昼休み開始五分が勝負であり、既に七分経過した今ではもう大したもの残っていないだろう。

ならばおにぎりか、カップ麺の類いか。

（俺はカップ麺で月波はおにぎりにするか）

保健室なら湯も調達しやすいし。そう思いながら、購買のカップ麺のコーナーへ向かう。購買はほどほどに混雑していたが、尚基の好きなカップ麺はまだ残っていた。

（しかも、ランキング一位の味噌味！）

よっしゃあ！とカップ麺に手を伸ばし――

「あ？」

「え？」

誰かの手と手が重なった。

「……君は、」

「お前……」

その、白くほっそりとした手の持ち主は、尚基が毛嫌いする人物だった。

「添山……和音……」

「……………」

尚基の呟きに、和音は口元を笑みの形に歪ませたのだった。

写真と執着

「相変わらず、過保護な番犬をしているの？」

「あ？」

言うに事欠いて、“番犬”だと？人間以下と言いたいのか。

「……悪いが、あんたの暇潰しに付き合ってる暇はないんだよ。用がないなら、戻らせてもらうぞ」

「待つて。君に、渡したいものがあるの」

「渡したいもの…？」

「今、ここにはなくて、生徒会室にあるのよ。一緒に来てくれるかしら？」

（……何を企んでる…、この女）

「すぐに済むわ。渡すだけだから」

「何をだ」

「それは、受け取ってからのお楽しみ…よ」

尚基は、しばらく睨むように目の前の女子生徒を見詰めていた。

「……本当にすぐ済むんだろうな」

「ええ」

結局、尚基は和音について生徒会室に向かった。

「！」

生徒会室に行った尚基の目に、ソファで横になる草薙亮輔の姿が映った。

気まずさに、尚基は唇を噛んだ。

「…亮輔なら今眠ってるから、気にしなくて良いわ。さ、掛けて」

別のソファに案内されたが、尚基はあっさりそれを無視した。

「……渡したいものって何だ」

和音が苦笑とともに、呆れたようなため息を溢す。

「せっかちは嫌われるわよ、女の子に」

「余計な御託は要らない。さつさと要件を済ませたいだけだ」

「ふふ」

和音は、デスクの引き出しを開けると、茶色の封筒を取り出した。それをデスクの上に置く。

「取りにいらっしやい」

「……………」

尚基は和音を睨みつけたままデスクに近づき、その封筒を手にとった。

「中を見て」

尚基は警戒心を露にしながらも、封筒を開け、

「っ!？」

その中身に絶句した。

「こ……これは、」

「どう?よく撮れているでしょう?」

和音の含んだような声にも、反応出来ない。

「あに……き?」

中身は、数枚の写真だった。その被写体は、全て同じ男性――。

「これは、兄貴だろ……?」

声が震える。

「そうよ。地下に幽閉されている、哀れな異形種――」

「兄貴、」

……写真の中の兄は、全て眠りに落ちていた。安らかでもなく、苦し気でもない。ただただ、眠っているだけ。まるで、息をすることすら忘れているような――「どうしてあんたが、兄貴の写真を」

「あら。喜んでくれると思ったのだけど」

「っ」

尚基は、ぎろりと今まで以上の眼光で和音を睨む。

「どうして兄貴の写真を持ってるのか訊いてるんだよっ!!」

「決まってるじゃない。撮ったからよ。君のために」

「俺のため…だと?」

「あなた、お兄さんのこと知りたいんでしょう? 違うの?」

和音の問い掛けに、尚基はグツと喉を詰まらせる。対して和音は、余裕綽々といったふうに微笑んでいる。

「……………俺は、」

「だから、近況というわけではないけど、お兄さんの姿を君に見せてあげたくてね」

「……………っ」

何もかもお前の為にしているんだ、と上目線で言われている気がして、尚基は更に怒りを込めた眼差しで和音を睨み付ける。

「……………本当は、あなたに見せてあげると伝えて撮影したかったのだけど。眠っている姿で申し訳なかったわね」

一体何がおかしいのか、和音はクスクスと笑い続ける。

「……………それで? 俺に兄貴の写真を見せてどうしたいんだ…?」

沸々と込み上げて来る怒りをどうにか押し殺しながら、尚基は和音に問う。

「どうしたもこうしたも無いわよ。ただ、あなたにお兄さんの姿を」

「嘘を吐くなっ!!」

「あら」

「見返りが欲しいくせにっ! 何が目的だっ!!」

和音が僅かに眉を顰める。

「大声を出さないでもらえる? 亮輔が起きてしまっわ」

「こんな奴が起きようが起きまいが、俺には関係ねえっ! 俺は、手前が何を企んでるのか知りてえだけなんだよ!」

「だから、企んでなんかないと言っているでしょう?」

「信用出来るか!!」

激昂する尚基に対して、和音は楽しそうな笑顔を崩さない。

「何がおかしいんだ……！」

「ふふ、意外なだけよ」

「何が！」

「……君が一生懸命な姿が、ね」

「……っ！」

顔が、カッと熱くなる。怒りのためか、羞恥のためか自分でも分からない。

「君って、何に対しても淡泊というか、執着しないように見えるから。お兄さんのことでこんなに動揺するなんて」

「……うるさい、」

「可愛いところもあるのね」

「うるさい、黙れっ！」

尚基が声を荒らげても、和音は笑ったまま。完全に馬鹿にされているようにしか見えなかった。

「人を馬鹿にするヤツに、用はない。…戻る」

尚基は、写真の入った封筒を、和音に突き返した。和音が目を丸くする。

その唇が何かを言いかける前に、先手を打ってやる。

「要らないから」

「……」

彼女に背を向け、尚基はドアに手を掛けた。

「そう。残念だわ」

何が残念なのかも、聞く気にならない。尚基は黙って、生徒会室を後にした。

やれやれ、と和音は肩を竦める。尚基が置いて行った写真入りの封

筒を、デスクの引き出しに戻す。

「素直に嬉しいって貰えば良いのに」

ねえ、亮輔？と和音は悪戯っ子のような笑みを浮かべた。

接近

（くそっ……！あの女、人を馬鹿にするのもいい加減にしるよっ！）
購買の袋を提げ、怒り心頭の表情で廊下を勢い良く歩く尚基に、皆が何事かと視線を寄越して来る。

その視線すら鬱陶しくて苛々が増すが、何も知らない第三者に当たることなど当然出来ず、

（くそっ！）

心中で歯噛みするしか出来ない。

「……………」

しかしその怒りも、月波のいる保健室が見えて来ると、徐々に萎んで来た。月波の困ったような顔が浮かび、尚基は唇を噛んで、切なげな眼差しで保健室と廊下を隔てるスライド式の扉を見詰めた。

（……月波）

何故だろう。目の前の扉が、自分と月波を永久に別つ崩れようのない壁に感じられる。

「何突っ立ってんのよ？桜庭」

「！」

いきなり背後から声を掛けられて、尚基は思い切り体を震わせてしまった。

「先生……」

「何よ、幽霊でも見たような顔して。あんたも体調不良？」

「いや、俺は……」

「購買に行つて来たんでしょ？伊織君もあるんでしょ？入りなよ」
「……………」

養護教諭に誘われ、尚基は保健室に足を踏み入れた。

「伊織君、まだ眠ってるんだよ。顔色は大分良くなったんだけどね」

「そっ……ですか。……先生、ラーメン食うから、お湯ちょうだい」

「ん。良いよ」

袋からカップラーメンを取り出して、電気ポットの湯を中に注ぐ。

「そういえば、さつき構内でダンディーな男前を見たわ」

静かなのが嫌なのか、ただの独り言なのか、養護教諭が不意にそんなことを漏らした。

「……ダンディーと男前って、かぶってないの？」

「……細かいことは気にしないの」

養護教諭は、珈琲を啜りながらうつとりと天井を見上げている。

「多分、歳は五十代半ばと見たわね。なかなかにすらりとしてて…

…」

「PTAか何かかな」

「うん。親御さんで感じでも無かったけどねえ。子供が居たとしても、隠し子とか」

「……………」

もしかしたらこの養護教諭は、酷い妄想癖があるのでは……と尚基はため息を吐く。そして、三分経過していることに気付いて、カップ麺の蓋を剥がした。

「で、その人はどうしたんですか？」

「何かねえ、女の子を連れて構内を散歩してるみたいだったのよ。本当、誰だったんだろ」

室内に、味噌の良い香りが漂う。尚基が大好きなカップ麺の香り。だが、今はその香りを楽しむ気にはなれない。

「……女の子？」

「と言っても、二十歳は越えてると思ったけど。黒いスーツで、凄く綺麗な足をしてた、」

「黒いスーツ？」

「うん。パンツスタイルの、黒いスーツ」

「！」

尚基の脳裏に、朝方寮の付近で見掛けた女の姿が過った。凍てつきそうなほどに冷たい瞳で月波を見つめていた、謎の女——。今の養護教諭の話の中に出てきた女の子というのは、そいつのことじゃ

ないのか。

「先生！」

「うわっ、何よ、いきなりっ」

一切手を着けていないカップ麺を養護教諭にいきなり押し付け、

「そのダンディーな男前をどこで見たんだ！」

必死の形相で詰問する。

「え……えっと、さっき、校長室から出て来たけど」

「校長室だな。分かった」

そして、保健室を飛び出して行ってしまった。

「……何、一体」

養護教諭は呆気にとられた表情で、ぼつりと呟いた。

……嫌な予感は、消えて無くなるどころか、どんどん膨張して行く。

（この感覚は、あの時の——……）

兄と自分を別つことになった、忌々しい事件。その事件が起きる前日も、今日のような嫌な予感を感じていた。

（くそっ！）

この嫌な予感に、養護教諭の言う男女が関係しているのかは分からない。けれど、何かが己に訴えているのだ。その男女を見つける。

そうすれば、何かが分かる筈だ……と。

「校長室……！」

校長室の前に着き、走ったせいで荒い息のまま、ドアをノックするが返答はない。ドアノブを回すが、開かない。どうやら、校長は不在らしい。男女と出掛けたのか？

「くそ！何処に行ったんだ」

酷く焦る。解けない謎を解明するために必要なパーツが、消えて無くなることを恐れるかのように。

とりあえず、まだ構内にいると仮定して、尚基は再び走り出そうとした。そんな彼に、掛かる声。

「誰か、お探しかな？」

少し鼻にかかった、甘くて深みのあるハスキーボイス。尚基は、勢い良く振り返った。

「！」

目の前に無表情な女の顔があり、尚基は驚いて息を呑んだ。反応が遅れる。

「ぐっ……」

女の容赦ない右ストレートが、尚基のから空きの腹部に打ち込まれる。その一発で動けなくなった尚基に、第二撃が襲い掛かる。女の長い足が、遠慮会釈なく尚基の側頭部を蹴り上げたのだ。

「がっ……！」

激しい衝撃に、尚基はその場に踞る。

「ぐ……うっ、」

女が、片手で尚基の利き腕を捻り上げる。

「はな……せっ」

廊下に這いつくばる羽目になった尚基の狭まった視界の中に、高級そうな革靴が入り込んで来た。

「……っ」

「……久しいな、桜庭の次男か」

その声に、ぶるりと体が震えた。俺は、この声を聞いたことがある。この声の持ち主を知っている。

ただ、何処で聞いたのが全く思い出せない。だから、どうしてこの声を聞いただけでこんなにも恐怖心が湧き上がるのかも、分からない。

「……私を探していたのか」

何の感情も浮かんでいない、平坦な声音。

「何の因果かな」

不意にこめられる、嘲笑の色。尚基は、痛みや恐怖心をどうにか堪

えながら、徐々に顔を上げて行く。

「私の息子にあんな目に遭わされたというのに……。愚かな」

（私の……息子……？）

何だ、今何かに脳が揺さぶられたように感じた。「私の息子」。

（……俺は、とてつもなく大切なことを忘れているような気が、する……）

内省に気も漫ろになり、尚基は女による戒めから逃れることを忘れてしまった。女が、微かに乱れた息を整える。

「……ふむ。君も、多少記憶の混乱や齟齬があるようだね……我が愛息のように」

「……………」

「まあ、無理もないか」

男の唇が、弧を描く。これから始まる“波乱”を楽しむかのように。

「何せあの“事件”のとき、」

言うな、黙れ。

「愛息と君は」

もう何も言うな！

「親友で」

やめろっ！！！！

「なのに愛息は、君の親友であつたはずの我が子は、」

「……………」

男が、弱々しい眼差しで自分を睨み付ける少年の耳元にその唇を近付け——厳かとも取れる口調で言った。

「君の愛するお兄さんを、殺そうとしたのだ」

対峙と、ひとときの安らぎ

さあ、どう出る。

相ヶ瀬月彦は、冷めた眼差しで這いつくばる少年を見下ろす。

「……………」

余程の衝撃を受けたらしき少年は、ぴくりとも動かない。もしや、シヨックが強過ぎて心が壊れたのではないだろうか、と月彦は眉を寄せる。

（それは、困る。貴様には、いや、貴様ら兄弟には、まだまだ踊つて貰わねば困るのだ）

「月彦様」

沖村莉伊佐が、月彦を呼ぶ。

「莉伊佐？」

「参りませんか？あまり長居はなさらない方が良いでしょう」

慎重な莉伊佐らしいな、と月彦は思う。

「しかし」

「ご子息には、近々必ずお会い出来る筈です。今は波風を立てられるべきではないかと」

「……………そう、だな」

本当なら、今すぐにでも息子に会いたい。

しかし、莉伊佐の言うことも最もだ。“余計な波風を立てて、息子と会えなくなってしまうのは、まずいから。”

「仕方ない。今の内に行こうか」

かなり残念そうにため息を吐きながら、月彦が踵を返す。

「はい」

頷き、莉伊佐も踵を返すと――

「ま……………てよ…っ！」

「！」

尚基の片手が、ガシツと月彦の靴の踵を掴んだ。

「ほう、まだ動く気力があるのか」

月彦は愉快そうに唇を吊り上げるが、横にいる莉伊佐の瞳には、冷たい色が過る。

「おま……えらの、言う……、息子って、誰だよ……」

「知りたいか？」

尚基は、顔は上げぬまま、苦しげな声で応える。

「……当たり前、前だ」

「ほう。……知ってどうする」

「……」

「もしも、お前の兄を殺そうとした我が息子の名前を知ったとして、一体どうするんだ」

揶揄するような口調で月彦が訊けば、尚基がどうにか顔を上げて、月彦を睨み上げた。

その彼の口から、憎しみのこもった言葉が進る。

「決まってる……！兄貴と同じ、兄貴と同じ痛みを味わわせてやるんだ……！」

熱くなる尚基を他所に、月彦は涼しげな表情になる。

「そうか。兄と同じ痛みを……な」

「な、にが……何が可笑しいっ……！！」

「いや、美しき兄弟愛だと思ってね」

「……っ、てめえっ……！」

ギリッ、と踵を掴む手に力を籠める。

「触るな」

不意に、低い女の声が尚基の耳元で囁く。怒りの中に、ひやりと冷たいものが芽吹く。

「その汚ならしい手を、早く、退ける」

本当に女性が出した声なのかと疑いたくなるくらいに、低く、暗く、地の底から響いているかのような声。

「早く、退ける。……さもなければ」

“来る”。何がかは分からないけれど、何かが“来る”。生存本能

にも似たその感覚に、尚基は思わず目を閉じた。

しかし、

「莉伊佐。止めなさい」

凜、とした声が響いて、尚基を襲っていたえもいわれぬ“恐怖”は、一気に霧散した。

「しかし」

「止めなさい。私は気にしていないから。無為に“力”を使ったりしては駄目だ」

莉伊佐はやや不満そうな色をその無表情な顔に浮かべていたが、やがてこくり、と一つ頷く。

「良い子だ」

莉伊佐の頭を数回撫で、月彦は尚基に向けて、言う。

「そろそろ手を放してもらおうか。私の可愛い秘書が、君を食い殺す前にね」

尚基は、喉を詰まらせながらも手を放そうとしない。兎に角、意地になっていた。

「これは困ったね。あまりゆっくりしているわけにもいかないからなあ」

「……やはり、ここは私が」

「だからそれは駄目だって」

再び莉伊佐の頭を撫でながら、月彦が苦笑する。

「……桜庭尚基君」

「……………」

「済まないけれど、君と仲良くしている暇はないんだよ。いい加減に、その手を放してくれないかな？」

穏やかなのに、何処か冷たい響きのある声音。

尚基は、体が固まるのを感じる。月彦の足を掴んだ手が、意思に反して徐々に開いて来る。

「……そう、そのまま、何も考えないで、ゆっくりと手を開いて——」

まるで暗示のように、月彦の命令に従ってしまう。

「そう。良い子だね…」

囁くような月彦のその言葉を最後に、尚基の意識は途切れた。

「桜庭、くん……？」

「ん。起きたね、」

目覚めた月波の目に一番に映ったのは、養護教諭の顔だった。

「先生、」

「桜庭でなくて悪かったね。どう？調子は」

月波は眠い目を擦りながら、ゆっくりと上体を起こした。

「……僕、」

「具合悪くして、倒れたんだよ。覚えてない？」

「……あまり、良くは……」

頭の中に靄が張ったかのように、ひどく記憶が曖昧で、月波はぼんやりとしてしまう。ひどく体がだるい。

「ちよつと熱、計ってみようか。頭が痛いとか、動悸がするとか、ない？」

体温計を用意しながら、養護教諭が問診をする。

「大丈夫……です。ただ、ぼんやりして、すっきりしなくて……」

「まあ、良く寝てたからね。そのせいじゃないかな」

「僕、そんなに寝てたんですか？」

月波に体温計を渡しながら、

「朝イチからだから……ね」

朝イチ？

「そんなに……」

壁掛け時計は既に一時前を差している。

「あ、あの…桜庭君は……」

「なんか、昼御飯を買って戻って来たと思ったら、また飛び出して行ったんだよ。私が構内で見掛けた人のこと話したら、怖い顔して」
「……見掛けた、人？」

その言葉に、胸がざわつく。

「あれから二十分は経ってるんだけど、まだ戻って来ないんだよね。どっか寄り道でもしてんのかねえ……あ、伊織君、喉渴いてない？飲み物、用意しようか？……て、トイレ？」

月波が切迫詰まったような顔でベッドから下りようとしているのを見て、養護教諭が訊いて来る。

「桜庭くん、」

「桜庭を探しにでも行くの？放つとけば戻って来るよ、」

「………っ」

床に両足を着けたが、力が入らないのだろう…月波がしんどそうに目を^{すが}眇める。

「何だか、心配だから、」

「だけど、伊織君自身がふらふらじゃないの。逆に桜庭に心配掛けるよ」

「でも、」

「……分かった。私が代わりに構内をざっと見て来るから、君はまだ休んでなさい。顔、真っ青だ」

月波は更に何か言い掛けるが、養護教諭に諭すように頷かれておらずと頷き返した。

「じゃあ、ちよつと行ってくるから、」

養護教諭がそう言った瞬間、がらりと保健室の扉が開いた。

「あら、お戻りだ」

「桜庭くんっ」

曇っていた月波の顔が、保健室に入ってきた人物の姿を見て、パツと明るくなる。

「……………」

しかし、月波の呼び掛けに対する反応はなかった。

「桜庭、くん……？」

尚基は、保健室の扉を閉めたあとはその場でぼんやりと立ち尽くしている。月波だけでなく、養護教諭の怪訝そうな視線にすら反応しない。口元には締まりがなく、全身がだらりと弛緩している。

「おい、桜庭」

尚基の横に移動した養護教諭が、軽く彼の頭を叩いた。

「っ！」

すると、尚基が全身をビクリと大袈裟に震わせてハッと息を呑んだ。

「大丈夫か？」

「え、……あ、俺……、」

「しっかりしろよ？桜庭。……お友達が心配そうに見てるぞ」

養護教諭が目線で示す先には、心配そうに、不安そうに自分を見詰める月波の姿があった。

「月波、」

「さ、くらば……くん、大丈夫？」

「……あ、ああ。月波は？」

問いを受けて、月波がおずおずと頷く。

「何よ、あんたたち。初対面でもあるまいに、すごく緊張しちゃって」

養護教諭の突っ込みに、二人同時に顔を赤くする。

「ほらほら、ぼんやりしないで早く昼飯にきな。で、桜庭は午後からの授業には出なさい。伊織君は、もう早退しなさい。昼飯はここで摂って行って良いから」

養護教諭は矢継ぎ早にそう言い、冷蔵庫へと向かう。

「……月波、おにぎり買ってるから」

「う、うん、ありがとう、」

「桜庭、さっきの袋は机の上だからね。あと、カップ麺も」

「はい」

尚基は、ぎこちない歩きで机まで向かうと、袋を掴んで月波のいる

ベッドのスペースへ行く。

月波はベッドに横向きに腰掛けた状態で尚基を待っていた。

「中身、何が好きか分からなかったから、定番の梅と昆布にしてみた。嫌いだったら……」

「好き、だよ」

「……なら、良かった、」

月波がえへへ、と照れたように笑って、尚基から袋を受け取る。

「こっちで、俺も食って良いか？」

「うんっ」

月波があまりにも嬉しそうに笑うので、尚基まで嬉しくなってきた。近くにあったパイプ椅子を月波のベッドの側で開き、机上のカップ麺を手にする。

「それ、お味噌味？」

先に梅のおにぎりをゆつくりと咀嚼していた月波が、小首を傾げて訊いて来る。

「ああ。俺、これ大好きなんだ」

「そうなんだ。美味しそうに食べてるから」

「うん、旨いよ。時間が経ちまって、かなり伸びてるけどな。…

…食うか？」

「…うん、食べてみたい」

尚基からカップ麺を受け取った月波は、中身を見て、破顔する。

「本当だ、伸びちゃってるね」

「だろ？」

それでも、月波は美味しそうに麺を啜る。

「……うん。美味しいね」

「だろ？」

同じ相槌を繰り返し、

「伸びてなかったら、もつと旨いんだけどな」

「うん、そうだね」

「あ、月波、ご飯粒が付いてるぞ」

「ふえ、どこ？」

月波は、米粒の付いたのとは反対側の頬を忙しなく触る。

「違う。こっちだよ」

「あ、ありがとう」

月波が、照れたように笑う。

「ねえ、あんたたちさあ」

不意に、養護教諭が声を上げる。

「ふえ？」

「ん？」

二人同時に、同じように不思議そうな顔を養護教諭に向ける。

養護教諭は、ごく真面目な表情でこう言った。

「あんたたちって、……付き合ってるの？」

養護教諭

…あまりの発言に、月波は思わず持っていたカップ麺を取り落としそうになった。

（い、いきなり何を言い出すんだろう……この先生、）

ドキドキしながら尚基を見れば、彼も呆氣に取られたように硬直していた。

「あれ、冗談で言ったんだけど……まさか、凶星だった？」

「ちっ、違いますよ！僕と桜庭くんはそんな関係じゃありませんからっ。さ、桜庭くんも何か言ってよっ」

「えっ、あ……当たり前だろ！月波と俺は、親友なの。付き合ってるとか、ねえからな！」

慌てる二人が可笑しいらしく、養護教諭はニヤニヤと楽しそうだ。

「まあ、そういうことにしといてあげるよ……さあ、さっさと食って、桜庭は授業に急いだ急いだ」

「だから違っつて……！」

「分かったって言ってるでしょ」

養護教諭は、やはりニヤニヤ笑いを崩さない。尚基の慌て具合と、顔を真っ赤にした月波が可笑しくて仕方ないようだ。

（桜庭は面白いが、伊織君がなあ……）

真っ赤な顔は、凶星の意か。養護教諭は男と男の恋愛に関しては、許容出来るから、尚基と月波が付き合っけていても、嫌悪感を抱いたりはしない。ある意味お似合いな気がするなあ、としたりもする。邪な想像を始めた養護教諭の視線に気付いたらしい月波が、慌てて顔を俯かせる。

（伊織君、可愛いなあ。女の私から見ても、守ってあげたいタイプだわ）

「月波、気分でも悪いのか？」

鈍感な男だ、と養護教諭は嘆息する。

「う、うん。大丈夫。」

「なら良いが……。おい、月波を弄るなよ」

後半の台詞は、明らかに養護教諭に向けられている。

「しないしない。ほら、あと五分だよ。急いだ急いだ」

養護教諭に再び急かされ、尚基は完全に延びきったカップ麺を慌てて掻き込むことになった。

慌ただしくカップ麺を食べきった尚基が、やはり慌ただしく保健室を出て行く。

「やれやれ。」

カップを綺麗に濯ぎ、ゴミ箱に捨てる。彼女のそんな所作を、月波は躊躇いがちな瞳で見上げている。

「伊織君、どしたの」

「！あ、い、いえ……」

明らかに挙動不審だ。養護教諭は苦笑しながら、尚基が座っていたパイプ椅子に座る。

「何かお悩みかな？今なら無料で相談にのってあげるよ？」

「……………」

「もしかして、桜庭のこと？もしかして、伊織君は、色恋の意味であいつのことが好きなの？」

「っ！」

月波がビクツと体を震わせて、布団の裾をギュツと握りしめた。

「……………よく、分からなくて……」

「ふむ」

「桜庭くんの手に触れたり、優しさに触れると、胸がドキドキして……顔が、熱くなって……」

「……………」

「でも、僕も桜庭くんも男だし、そんなわけないって……、」

「男が男を好きになることもあると思うわよ？桜庭という一個の人間性に惚れたのなら、性別なんて関係ないわけだし」

「……………」その、本当に、色恋の好きかどうかは分からないんですよ？でも、」

「桜庭に触れると、ドキドキしちゃう、と」

月波が、真っ赤な顔でこくりと頷く。

「……………」伊織君は、今まで恋をしたことがないのね？」

「……………」はい、」

本当に可愛い子だなあ、と思いながら養護教諭は月波の頭を撫でた。さらさらの黒髪が、手に心地よい。

「せ、先生……………」

「恋か友情か……。うん、青春だね」

「は、はあ……」

「どちらにせよ、君は桜庭のことが好きなんだよね？」

「……………」はい」

「なら、……………」手放してしまわないように、気を付けなよ」

「……………」先生？」

急に声のトーンが下がり、月波は不思議そうな顔で彼女を見上げた。養護教諭は、今までにないくらい落ち着いた穏やかな笑顔で、月波を見つめて、

「大切なものは、簡単に失ってしまうから、無くさないように、気を付けて」

彼女の真っ直ぐな瞳から、視線を剥がせない。

「……………」特に、自分から手放すことは絶対にしないで。必ず、後悔することになるから」

「先生、一体……、」

「今は分からなくても良い。だけど、そうなんだと心に留めておきなさい。…君には、絶対に後悔して欲しくないから」

月波は、気圧されるように数回ほど頷く。初めて、養護教諭を“力強い”と思った。

「……よろしい」

次の瞬間には、養護教諭は惚けたような笑顔になっていた。

「放課後まで、もう一眠りして行ったら？何だか、眠そうな顔してるよ」

「え…、は、はい」

彼女の変わり身に、月波は一瞬呆けてしまいが、ここは頷くべきなのだと慌てて首を縦に振った。

「じゃ、私は書き物があるから。何かあったら呼んでね」

「……はい」

満足そうに頷き、養護教諭は月波のベッドの周囲をクリーム色のカーテンで囲った。

（……………先生？）

真っ直ぐだった眼差しに、微かに感じられた悲しげな色。

気のせい、だったのだろうか。

月波は両手を胸の上で組み、ぼうと天井を見上げた。

染み一つない、綺麗な白い天井。

（僕の心は、僕という存在は……この天井のように白いのかな。それとも……）

桜庭くんは、どう思う？

心の中の尚基に語りかけながら、徐々に沸き起こってくる睡魔に、月波は身を任せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384g/>

絡まる血

2011年10月5日11時35分発行